



抱月全集 第八巻


FEB 16 1968



島村抱月氏（後列向つて右）
（島村氏の隣りは故尾崎紅葉、前列向
つて右後藤宙外氏、同左廣津柳浪氏）

『抱月全集』第八卷の編纂に就いて

第八卷は、各卷の凡例にもある通り『隨筆、日記、書簡』等の殆んどすべてを網羅した。

この中『隨筆』を假りに讀者諸氏の便を計り、「紀行」「小品」「滯歐通信」及び「隨筆」に大分し、「滯歐通信」を更に「文壇雜報」及び「風光」の二つに分けた。

「小品」の部に收めたのは、抱月氏がその著『雫』の中に、自ら收められたものを、そのまゝの順序に於て轉載したもの、「滯歐通信」に收めたものは、これも氏が其の著『滯歐文壇』に收められたものを、そのまゝに轉載したのである。（「滯歐通信」を「文壇雜報」「風光」の二つに分けたのも、すべて氏の分類によつた）そしてこの「小品」及「滯歐通信」の中には、年月、所載雜誌の不明なのが多いが、それらは編輯者において、調べられる範圍において插入し、其他はもとのまゝにして置いた。「隨筆」の中の「對墓庵漫筆」「覺えがき」「僕のページ」等は何れも夫々同じ題目の下に雜誌「早稻田文學」にその時々に連載されたものであるが、その發表された年月日は、何れも本文の中にある。

「雜俎」は第七卷、『文藝雜纂』に入れるべきものであつたが、頁の都合で、この第八卷に入れることゝした。

編纂者はこの八巻に收められた諸編を以て、特に、人としての島村抱月氏を知るに最も重要なるものであると信ずる。
尙「書簡」の蒐集に關して便宜を與へられた諸氏に對し、此機會に一言の謝意を表明する。

中村吉藏
本間久雄

凡例

一、本集は故島村抱月氏の文藝上の業績を永久に傳へるために編纂したものである。

二、本集はすべて八卷　第一卷及第二卷『文藝評論』第三卷『美學及歐洲文藝史』第四卷『新美辭學及文學概論』第五卷『飜譯』第六卷『創作』第七卷『文藝雜纂』第八卷『隨筆日記書簡』の順序である。

三、本集全體の編輯については金子馬治氏を顧問とし中村吉藏、片上伸、相馬昌治、中村星湖、本間久雄の五名各その勞を分つた。

但し第一卷所載の『抱月島村瀧太郎先生小傳』は相馬昌治の筆になつたものである。

又第八卷の編輯は中村吉藏、本間久雄主としてこれに當つた。

四、本集の出版については高田早苗、坪内雄藏兩先生を始め早稲田大學出版部、春陽堂、新潮社、金尾文淵堂、南北社、忠誠堂等の厚志を受けたところが多い。こゝに明記して謝意を表する。

抱月全集第八巻目次

紀行

小品

雜俎

書簡

紀行

沙翁の墓に詣づるの記

一

千五百八十六年の春、四月の央でもあつたらう、ウッドストック街道からオックスフォードの北の宿はづれに差しかゝつた、二十二三の旅人がある、疲れた足を停めて今宵の宿はと見廻はすと向ふに何某のインといふ、古風な、蔦なんどの這ひかゝつた旅籠屋の土壁が、今しも薄れ行く春の日影を一杯に浴びて、あか〳〵と照り榮えてゐる。北の都會からロンドンへの街道筋とて、此邊は殊に上り下りの人馬繁く、宿屋の門には朝夕の送り迎へが賑やかに見られる。インの狹い階子を昇つて、明りのついた取りつきの部屋に這入ると、玆は石入の厚い叩き壁に古色ゆたかな、天井の低い、小さな、穴倉の樣な室である。四月といつても北歐羅巴の夜陰はまだ薄寒ひ。ストーヴには新火が今丁度燃え上つて、マントルピースの上の燭臺の明りが却つて心細い。

椅子をストーヴに近く引き寄せ、手を拱いて、默然として燃え立つ火影を見つめゐる、旅人の面は赤く輝いて、額の廣いのが目立つ。

折から靜に扉を押して這入つて來たのは、此の家の娘であらうか、十八九ばかり。客は不悶瞳を擧げて其の方を見た。娘は面はゆげに顏を背けて無言のまゝに晩餐のテーブルを調へやがて出で行かんとする。

「姉さんは此の內のお娘御だね。」

「どうですか。」

「まあ、聞きたいことがあるから、お座んなさい。さあ此の椅子に。」

「有りがたう。何ですか聞きたい事つて。あなたはロンドンへお出でなさるのね。」

「さう。ロンドンへ行くのだが……。其のロンドンがね……。」

「結構ですわ。わたしも來年の誕生日は、ロンドンの伯母の處で爲る筈ですが、來年といへばねえ、隨分待ち遠いこと。」

「あゝあ、ロンドン！　そして何ぜさうロンドンへ行くのが嬉しいのだらう。」

「何ぜつて、それはロンドンですもの。わたしの從兄妹だけでも三人居りますし、其の中のフレッドといふのは、去年の暮も此處に來てゐました。男には珍しい程美しい眼を持つてゐて、そして唄が上手で……。それは善い聲ですよ。」

うつとりして、目のあたり其の唄に聞き惚れてゞもゐるかと思はれた時、入口の戶をコン〳〵と叩く音、メーリーと優しき呼び聲、イエスと輕く答えて、女は立ち去つた。

「あゝ！　戀だ！　戀を求めてロンドンへ行く。あれで人生が濟めば仕合せなものだ。自分は何を求めてロンドン三界へ迷ひ出るのであらう。自分だつて故鄕には戀もある、夢もある。その故鄕に住みかねて、行く手は雲のはる〳〵、是れから浮世の波風と戰はねばならぬ、前途の闇の明け方は、空に明星か、海に眞珠か、望みの的はあざやかに我が手に落ちやうか。そ

れともロンドンの大路の塵にまびれて、一代をすがれ行く荷馬の如く、死して跡なくなるであらうか。天使の様なあの乙女が身は、成程光明に包まれてゐる。それに照り合はせて、今さらのやうに我身の謎が目につく。此の謎の解き場はロンドン。あゝ、ロンドン！」

と獨り思ひに耽つた旅人は、翌朝オックスフオードの町を越して、重ねて南へ〳〵と旅を續けた。

我れには此の弱き旅客の名がウヰリアム、シエークスピーアであつたらしく思はれる。

二

山の懐、水の畔と、地上の住ゐは廣いが、こゝ英國のロンドンから西北へ百マイル許り、エヴン川の岸のさゞ波に夜毎の夢を洗はする、スツラツフーオドの片隅に、方五間には足るまじき一地を劃してそこを長しへに世界の眼目とし、そこに不滅の靈火を點じた、造化の寵兒シエークスピーアが家は、まことに人の世の譽れかな。大英國は縱し亡びても、シエークスピーアは亡びぬ。此の一地域ありしが爲に永劫不壞なる英國も亦た幸ひではないか。

ロンドンに出でしより後のシエークスピーア、殊にも其の著作ありてより後の彼れは、千の傳記、百の考證よりも、彼れみづからの書こそ最も明白に之れを傳へて居る、『ハムレット』『マクベス』の著者は『ハムレット』『マクベス』の著者として天日の輝くが如く遍く後昆を照してゐる。之れに想像を加へんには既に餘りに煌々たるに過ぐるであらう。唯我が最も想ふは、スツラツフオード、オン、エヴンの一青年たりしウヰリアム、が身の上である。

斯やうな思ひ出に導かれて、我が始めてスツラツフオード、オン、エヴンの土地を踏みしは過ぐる年の春、某月某日であ

つた。オツクスフオードから汽車で二時間が程、巴旦杏の花の暖に赤い家幾つかを過ぎて、停車場近く來れば、かしこに見える一群の樹立が、早やホーリー、ツリニチーの森といふに、何となく心ときめく、繁みの色はまだ調はぬながらの蒼さ、中央から蕭然として立ち上つたる尖塔は、げにも默して天をさす指の如く、其の深い意義をば、唯感涙あるものが測り得やう。停車場から新開の道を病院の前に出で町に取りかゝると、もうそこに行き當りがある。廣い四つ辻の眞中にしつらへた噴水はいま様ながら、町は何所ともなくさつぱりとして優雅の趣を具へてゐる。店の構へ看板の具合などまでどうも唯の町では無いやうだ。右手は商人宿で向ふに農作物の店が見える。あの店？　シエークスピーアの父の店も盛んな時はあんな風であつたらう。見れば店先に小供が遊んでゐる。ひよつとするとあの子の顔がシエークスピーアの幼な顔にでも似ては居まかい。と用もないに其の間近まで行きかけると、小供は外國人と見て逃げ出した。馬鹿らしいとは思つたが、いや併し、此のあたりは、古來交通が薄く、血統が單純であるため、面相がおのづから類似型を有してゐると聞いた。シエークスピーアの面相にはスツラツフオード型といふものが過たず現はれてゐるといふ。さすれば今の小供に彼れの幼な顔が寫つてゐまいにも限らぬ。も一度跡をつけて見やうか。

など忙しき空想に耽つてゐるあひだ、時は午に近くなつた。地圖によると、此處から向ふの角の小路を拔ければ、すぐ其所がヘンレー、スツリート。シエークスピーアの舊宅の殘つてゐる所である。と思ふと飛び立つやうには感ずるが、先づ宿を取つた上と、大橋通りのゴールドン。ホテルといふを探した。廣い通りを眞つ直ぐに辿ると、幾らもあるかぬ内に早や、橋が見える、其の下はエヴン川であらう。町は之れで盡きるのだから、誠に小さい可愛らしい都會である。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

三

旅行の季節とて、ホテルの客室は凡て約束濟、よつて是非なく近所の室內裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに來てすることゝなつた。晝食はひとり後れて調へたれば、食堂の模樣などはまだ見ず。兎も角もと、近まのヘンレー、スツリートへ先づ驅けつけた。

あれがシエークスピーアの生まれた家といふ、其の前には成程多勢の人が入場を許されるのを待ち合せてゐる。また此方の軒下には馬車の客待ちをしてゐるのもある。併し斯う見わたすと、さして長くもない通ながら、何となくからんとして、人の往來も少ない、如何にも田舍の小町といふ趣である。折しも空には薄雲が掛つて冷氣を含んだ風が町を吹き渡つて來た何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シエークスピーアがまだ腕白盛りの頃は、例のグラムマー、スクールに通ふ朝夕の途すがら、弟と肩を組んで、此の邊を行きつ戾りつしたものであらう。そして年よりも老せた彼れは、十六七にもなると、もう一廉の若い衆氣取りで、日本ならば湯歸りの手拭を肩に、つゝかけ下駄か何かでそこらをそゝりあるく方であつたらう。いや彼れは案外におとなしい質で、朋輩からは若年寄といふやうな綽名を附けられてゐたかも知れぬ。父が家產の傾くにつれ、生活の辛苦は早くもこの大天才が靑春の夢を蝕みそめて、弟と共に商品の買出しから偶には得意回りもする、稼業の手傳に追はれて好きな雜書にも讀み耽ける暇は無くなつた。夜遲く店を仕まつてから、僅かに自分の寢室で覺束ない蠟燭の光をたよりに昔の心ゆく唄の本などを讀んでゐると、其の明りが、あの今見える東北角の窓から微かに漏れる。

頃しも秋の末、月も無い霜夜の事であつた。シエークスピーアが優しい情を忘れかね、八つの姉でありながら、我れから戀をして、深くも彼れと契つたアン、ハサウエーは、三月の身重く、窶れた樣の目につく頬を風に吹かせつゝ、窓の明りを心あてに、そつと尋ね寄て呼び出せば、男は心得て忍び出づる。つれ立つて指して行つたはあの橋の袂、アンが身の始末と二人しみ〴〵泣きつ語りつしたであらう。

氣がさして、ふと橋ある方を見かへれば、二人の後姿にはあらぬ一群の男女が、アメリカ音に語り興じつゝ、此方を指して來かゝつた。

四

げに世界の如何なる處にも見がたい偉觀は、此の矯屋の一隅シエークスピーアの誕生室であらう。金字に雕られては、帝王の書架をも飾る文學史上の大名が、見よ、此の一室に來ては、如何に賤小に、如何に謙抑に、窓、壁、天井に其の跡を留めて居るかを。說明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子に當てゝ指し示す所を見れば、縱橫に切り込みたる名字の中に、鮮かにスコツトの名も見られる、カーライルの名も見られる。天井にはブラウニングの名が切つてある。そして此等の人々は、此の室の主人の前には、一切の地位階級を棄脫して、無名微賤の巡禮者として讃仰の意を主人に捧げてゐるらしい。

其の外に、いはゆる何人も一度は腰かけて見る紀念の椅子。我が其の側に立つて長々しい說明に耳を傾けてゐる間、傍にありし一老紳士と、そが娘とも見える妙齡の一婦人とは、先づ紳士から始めて試みに其の椅子に腰を托した。

「シエークスピーアは、さう太つた男であつたとも思はれんが、私のやうなものがしばしば腰をかけると、成程是れでは脚

も減りさうぢや。はつは。見物人が腰をかけるために椅子の脚が減るといふのは、丁度あのカンターベリーのお寺で、巡禮禮拜の膝を突くために石段の中程が凹んでゐるといふのと好一對の話ぢやな。さあお前の番ぢやぞ。」

娘は輕く周圍の人に會釋して、しとやかに身を落とした。

「お父つさま、似合ひまして？。」

と心持ちそり身になつて見せる。

「うむ、クヰンぢや。」

「ほゝゝ、文學の玉座に直つたのですもの。」

と父と我れとの方を等分に見て立ち上つたが、父の側に寄つて「日本の紳士を」とさゝやいた。すると老紳士は我が肩を叩いて、

「さあ、あなた、一つ腰をかけて御覽なさい。」

我れも同じ道に心を寄するもの、緣なればこそと、人のする通りを爲て見た。續いては、シエークスピーアの指輪、シークスピーアの印形、シエークスピーアの肖像と、確否は知らねど、斯かる場所には附き物の遺物の數々を巡覽して、再び町に出る。

五

大通りに沿うて、シーエクスピーアが專ら羅典の知識を得たといふグラムマー、スクールの前からホーリー、ツリニチー

の寺地まで、殆ど此の土地を縱斷しても、三十分とはかゝらぬ。

町の周圍に散在する、菅笠を伏せたやうな丘、其の間に廣がる牧場、畠。立木は楡柏、山毛欅、水松の類が多からう。總じて緑の廣い縁をつけたやうな瀟洒たる小都會、その東南を限つて流れるのが、可憐なエヴン川である。

春であつたからでもあらうが、打ち見た所、町の雅趣あるに對して、四圍の色調は青いといふよりも緑である。いかにも若々として、新鮮の氣は野に森に漲つてゐる。華やかな日光が青紗のやうに透ける靑葉の蔭には、水の乙女、空の乙女が踊つてゐる、あのコローの繪にでもありさうな趣。我は曾て、始めて鎌倉に勝を探つた時、先づ其山色のいかにも歴史と相呼應して蒼古の調を帶びてゐるのに魅せられた。其の土地が有してゐる內容と、之れを覆ひ包んだ色調との間に、自然の調和があるのを面白く思つた。然るに今ストラツフオード、オン、エヴンに來て見るに及んで、そこに一種の、意義ある對照を認める。鎌倉三代の歴史は、如何にドラマチツクであつたにもせよ、畢竟歴史である。其の調は蒼古老蒼を加ふるに從つて愈々妙を增す。ストラツフオードの內容は詩である、藝術である、シエークスピーアである。年時を忘れて常に清新に、常に快活にして、却つて回顧の情を深うするではないか。「歴史は老いよ、藝術は長しへに若くあれ。」

寺の門は、幾百年の菩提樹道の兩側に列を正し枝をわたして、靑葉の天蓋を引く。左右に、楡の葉蔭ひろく塵も留めざる一面の墓地は、凡ていはゆるホーリー、ツリニチーの神領である。その楡の木隱れから、遙に尖塔の頂のみを示して、人をして想望の情に堪えざらしめた聖院は、今や、菩提樹の若葉香る穹道の奥に扉を見はして來た。我より先に、遙か離れて行く小さい人影は、黒い外套と空色の絹服と、男女二人の後姿天國の門を叩きにでも行く人かと思はれる。

入口には黒き法衣の僧がゐて、出入を取締り、入場料も取れば、案内記、繪葉書、紀念印紙の類も賣る。之れも寺の維持

費と思へば故障はあるまい。

さて建立の由來、建築、窓、繪の說明はざつと聞いて、つか〳〵と香壇の前に進めば、此處である、欄を隔てゝ右より二つ目の床石の銘は、

善き友よ、耶蘇の願なり、止めよ、此處に納めたる塵を發くことを。幸ひあれ、此の石を庇ふものに、將た呪ひあれ、我が骨を移すものに。

三百年のあひだ、斯くの如き銘を負うて靜に眠つてゐる大詩人の骨は、今後といふとも、彼れが著作の亡びざる限り、永劫に亙つて動かさるゝことはあるまい。思ふに敢て此の願ひを亡みせんと企つるものがあつたら、世の憎み禍ひは必ず其の頭上に集まり來たるであらう。墓の主が遺したる呪咀の祈りは、夫の古の豫言の如く事實となつて功力を現はし來たつたと言はずばなるまい。

右手には、之と幷んで妻アンが墓、左には三ツ相續いて、娘スサンナ及び其の夫等一族の墓がある。回顧すれば我が始めて學窓にシェークスピーアを習讀して以來、殆ど十年、しば〳〵想像の間に出入してゐたスツラッフォード、オン、エヴンの地、別けても彼の銘を刻んだ詩人の墓を、今目のあたりに見て、我れは眞實我が身の此の境にあるかを疑ふの情に堪えなかつた。

けれども、斯やうにして墓前の欄に手をかけたまゝ、しばし茫然たる胸の底から湧いて來るものは、一種の喜悅光明の情であつた。伽藍の中は取りわけて空氣がひやひやとしてゐる。光線は色硝子に透けて明るさを減ずる。場所は人氣の少ない寺院の而も十字架像の前である。それにも拘らず、此の時の我れは、千古の詩人が冷に骨を橫たへてゐる傍に立つて、一種

の温さを感じた。嗚呼玆にこそシエークスピーアの靈は安まれと思ふに、おのづから、肅然として容を正しうするの氣は生ずれど、されども哀傷の心、寂寞凄愴の情は絕えて萠さぬ。むしろ愛慕の感、同悅の感、光明の感が身邊を圍繞するやうに思はれた。由來英雄の追懷は如何なる莊嚴美麗の形に於いてするも、畢竟生時の燦爛と死後の變易荒廢との對照に外ならぬ。玉壘浮雲、無主の江山、何れか廢墟を傷み荒殘を哀しむの情でなからう。所詮英雄を弔するの意は荒廢を弔するの意である。而して斯くの如きは亦實に現人生を弔するの意味ではないか。人生は到底其しりへに變易を豫想し廢滅しなければ、深切の感味を發しない。ひとり我は今、詩人シーヱクスピーアを弔せんと欲して此の以外のものに逢着した。彼れの追懷は繁榮である、光明である。而して夫の藝術の追懷もまた玆に歸するであらう。滅び行くは人生の姿、之を暫く天上不滅の光に照して示すものが藝術ではないか。さればいふ「人生は常に荒廢也、藝術は常に繁榮也」と。

六

後年巴里にナポレオンの墓を訪うた時は、其の構造の如何にも壯麗を極めてゐるに拘らず、金粉榮華の底に、堪へられぬ程の淋しさ物悲しさを感じ、愴然として寺を辭したが、シヱークスピーアの墓に詣でゝは、我れは覺えず笑みの眉を開き、和親の面を輝かして、周圍を見まはした。

ホーリー、ツリニチー、バストと言つて此の寺にある半身像は、世にあるシヱークスピーアの肖像中でも最も古いと信ぜられるものゝ一つである。是れからそれを一見しやうと、振りかへるはづみに後から聲をかけるものがある。誰れかと見れば最に誕生室で會つた老紳士親子であつた。

「あすこにあるバストを見落しちやいけませんぞ。」
成程像はすぐ香壇の横、我等の左手の壇龕に安座してゐる。床から數尺の上に、黒い大理石を彫り窪め、同じ石のコリンス式圓柱で左右を裝飾した龕中に、半身をあらはしてゐる石灰石像が卽ちそれで、本來は赤の上衣に黒の袖無しガウンと、粉塗の跡あざやかであつたといふ。その服裝は人のよく知る通りである。左に紙、右に鵞ペンを持つた手は臺の上にさゝへられて像の下には夫の「停まれ行人、何とて御身然は急いで行き過ぐるぞ」云々の文句を彫つた石が嵌めてある。
「お父つさま、此の像をよーつく見つめてゐますとね、笑つて來ますよ。そら御覧なさい、ね。」
と眼は我れの方を見ながら、娘がいふと、
「あ、それは此の像についての有名な話ぢや。是れはもと墓作りのジョンソンといふ土地の石工が刻んだもので、一つは据えやうが心持高過ぎるからでもあらうが、あの通り顎は二重顎のやうで、顔が總體下から見上げた形になつてゐる。御覧なさい、日本の紳士、唇が少し開いて歯でも見えさうではありませんか。あれが此像に特殊の表情を與へて、愛くるしい小供のやうな所が見えるのぢやと言ひます。」
「いかにもさうのやうですね。そしてあの眼と眉とがまた……」
「さうですよ。わたしもさう思ひますの。何か斯う向ふに見詰めてゐるものがあるやうですわね。」
「さうです。何か普通の人には見えないものを、はつきりと見据えて寫し取らうとでもしてゐるやうではありませんか。おもしろいですね。」
「いや私の考は少し違ふ。あれはアブスツラク、アイといつて、深く思想を一事に集中してゐる時の狀態ぢや。眼は明いて

居ても何も見當をつけて見てはゐない表情ぢやと思ふ。私には寧ろ何か我々には聞こえぬ靈妙の音樂どもを、耳で一心に聞いてゐる時の眼と見えますな。」

「それはお父つさま、考へやうですけれども、若しあれが耳の方に氣を取られてゐる眼なら、今少し上を向くか下を向くかして欲しいと思ひますわ。」

「私もどうも其の方の說に贊成したいですね。あれをアブスツラクトの眼としては、ちと意味があり過ぎるやうに思ひます。」

「さうかな。私にはどうもさうは思はれんが、併しこんなことは主觀的な所の多いものぢやから何とも言へん。」

と和して同ぜざる英國紳士のゆかしい氣質を見せた老人は、更に言葉をついで、

「それであなたは此の像に對して全體に何ういふイムプレツシヨンを得ましたか。」

「さうですね、それは、ちやうど今の前私が此の墓石を見てつく〴〵と感じてゐた所と一致した一つの感じですが、言はゞ藝術は如何なるものをもブライトにする、藝術の標徵はブライトネス、プロスペリチー、プレジユラブルネスといふやうなもので、シエークスピーアの此の像は、よく此の事實に結論を與へてゐるやうに思はれるのです。わたしのシエークスピーア觀及び藝術觀の一部が此の像によつて完結せられる、と云へば少し大層なやうですが、まあそんなものです。お孃さんのお考はどうです。」

意外の見識に驚いたといふ風で、我が方を見つめてゐた娘は、あわてゝ眼を外らすと共に、其の緣をさつと紅めて、

「わたし、あなたのお說にすつかり贊成ですわ。」

「ぢや多數決ぢや。しかたが無い。どうです是れから墓地を見やうではありませんか。」

紳士に導かれて戸外に出た。

七

川に沿ひ寺を圍んだ廣い墓地には、樅の大木が所々に蔭をなして、細工を凝らした造花の仰々しい新墓の脇を通りすぎれば、青苔に埋もれた古い墓、試に手で拂へば、木蔭の露がしとゞ滴れる。地は一面に掃き清められて、塵一すぢも落ちてはゐない。時々さらゝの音を立てるのは、エヴン川を渡る微風に、樅の葉の摺れるのであらう。川向ふの牧場からは、稀れに牛の鳴く聲が聞こえる。墓地を一巡して川に臨んだ小高い土手の上に出れば、木の下に共同椅子が据えてある。三人は之れに腰をおろした。見渡す限り、エヴン川は、水嵩ゆたかに牧場の草の根を浸して、漣波の果て遠くもとは一面の葦の繁みであつたといふ小島の跡に續く。別けてゆかりは此の川の白鳥である。ベン、ジョンソンがいはゆる「エヴンの美しき白鳥」こそは去つて繼ぐものも無けれど、まだ肌寒い川風に羽を掻く鳥の風情は、今も昔のまゝであらう。

「あすこにシエークスピーアが。」

といへば娘は崩れるやうに笑つて、

「スキート、スワン？」

「此の白鳥はスキートであるか、どうぢやらうか、わからんな。」

「わたし、向ふの牧場へ行つて見だいのですが……。」

「もう茶の時刻ぢやらう。一旦歸つて、茶でも呑んでからにしてはどうぢや。あなたも御一緒にお出でなされてはどうです。

まだ御名前も存ぜなかつたが、お名が伺はれませうか。」

我れも名刺の交換を乞うて宿所を聞くと奇縁か、同じホテルの相客であつた。されば論もなく同道して四時といふに、ホテルの食堂で茶を共にした。紳士は愛蘭土の者で身分ある人であるが、妻を失つて、娘一人をたよりの身であるといふ。血の冷熱の激しいアイヤリツシユの所は少く、却つて英蘭土の氣象を多く持つてゐる。

八

ホテルの客は二十人の上に出で〻食堂は中々の賑ひである。我等は今一人亞米利加に育つて、獨逸に長くゐたといふ、五十左右の元氣な婦人を加へて、四人片隅のテーブルに席を占めた。

今日の話題は、自然のこと、あちらでもこちらでもシエークスピーアで持ち切つてゐる。亞米利加の婦人は盛んに獨逸が文藝の國であることを說いて、シエークスピーアは本國たる英吉利よりも却つて獨逸に多くの眞知己を有してゐると主張したそして英國が此の大詩人を表彰するとの倘足らざるを慨した。彼方のテーブルで一際高くベーコンといふ聲がすると、それを捉らへて、この饒舌博識な婦人は、さらにベーコン、シエークスピーア論に移る。

「おゝ馬鹿々々しい。先達つても或る書物を見ると、二人の名を一つにしてシエーコン、ベークスピーアなんて書いてゐました。そして言ひやうが面白いぢやありませんか。一つ此の際に折衷案を立て〻名をベークスピーアと改めたら善からう、眞理はいつも中庸にあるから、ですとさ。人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。」

「ではあなたはシエークスピーアとベーコンとは全く別人といふお說なのですね。」

「勿論ですとも。まあ、考へても御覧なさい。『學問の進步』を產み出した頭が、どうして『ハムレット』や『キング、リア』を產み出しませう。『學問の進步』と『ハムレット』と、どれ程違つてゐるかといふことが分れば、跡は議論をするまでもないぢやありませんか。ベーコンのやうな、あんな雜與狂、活字引、論理機械が、どうして〳〵、シェークスピリアン、ソンネツの、唯の一句でも作れたら世界の不思議でせうよ。是ればつかしはわたしが……。」

と鼻息あらくテーブルの上から手を引くはづみに、飮みさしの茶をひつくりかへした。ミルク入りの灰色のものが白いテーブル掛を浸して、スカーツに流れかゝる。あわてゝ立ち上らうと椅子を後へ押せば、後の椅子とからみ合つて此所にも一騷ぎ、給仕人を呼ぶけたゝましい聲、あちらの方ではくす〳〵と笑ふ聲。我等は總立ちで、急いでハンカチーフを取り出し、婦人の前の洪水を防いでやつた。座が靜まると、日本のシェークスピーアは誰れであるかといふやうな話から、老紳士は、愛蘭士の人が往々人種上の偏見に驅られて英蘭士と反目せんとする結果、シェークスピーアにまでも冷淡なのを批難した。

「さうですね、今英國でシェークスピーア反對の旗頭はお國のバーナード、ショー氏だといふことですね。」

「耻ですね。わたし、あの人は大嫌ひ。書いたものを讀んで見ましても、何だか冷たくて、皮肉で。」

「あれは佛蘭西の系統ですよ。佛蘭西ではあの通りヴォルテヤの昔から、今のサードウに至るまでシェークスピーァ嫌ひが多いのですからね。なあに佛蘭西人なぞにシェークスピーァが分かるものですか。一體ケルト人種は……。」

といひかけて、婦人は氣が附いた風に、跡を引き込める。座の白けるを恐れてか、娘は先づ立ち上り、老紳士もつゞいて立つた。

九

夕暮前の一時間許りは、橋を渡つて、川向ふの牧場、近郊などをそゞろあるきした。娘が、持つて來た菓子をしきりに白鳥に與へてゐるあひだ、老紳士は岸づたひに水下へ下つて行く。我れは立木の幹に倚つて眺め飽かぬ川の景色を見てゐたが心は何時かまた空想に這入る。

此土地の風格の、何とはなく清らかで、情ありげなのは、畢竟この川あるが爲めであらう。シエークスピーアと、エヴンとは、土地の命である。若しあの白鳥がシピークスエーアの靈であつて、それがエヴンに浮んでゐるとすれば、其の關係はいよいよ面白くなる。

など考へてゐる間に娘はそこらで一つまみの櫻草を摘んで來て、笑ひながら、「之れを君に捧ぐるの名譽を許したまへ、」といつて我が胸の左の釦穴に挿んだ。

「何を考へて居らしつて？」

「今妙な事を考へました。あの白鳥がシエークスピーアの靈ではないかといふ……。」

「ほゝあなたも迷信家ですことね。」

一迷信といふ譯でもないのですが、今日午にも、あのシエークスピーアの家の窓を見てこんなことを考へた。夜遲くある窓から明りが漏れてゐると、アン、ハサウエーが村から尋ねて來て、そつとシエークスピーアを呼び出して、この牧場の邊から舟でも出して夜中月の下に身の振方の相談をしたのではないかといふのです。」

と言つて不圖見ると、娘は赤面して俯いてゐる。是れはしまつた。アンが身の振方といふ裡には、私通の懷胎といふ疑が籠つてゐる。デリケート、センスの淑女紳士の前では言ひ及ぶまじき事柄であつたと思つたが追つかぬ。話題を轉じやうとしてゐるうち、娘はポツケットから美しい袖珍本を取り出し、

「わたし、シエークスピーアのソンネッツを持つて來ました。二人で讀んで見やうぢやありませんか。さあ入らつしやい、此所がようござんす。」

みづから草を敷いて席を造つた。歌の中からは、所々肯心の章を引き出して、自分も誦し、我れにも讀めよと勸める。我れに朗讀を追つて抑揚の正しからぬ箇所をば一々直して呉れる。

はつきりしなかつた夕日が、ぱつと一時に榮えて沈みそめると、川づらも遠くから靄の幕を引いて來る。と思ふ途端に流れに沿うて一艘の端艇が下つて來た。漕いで居るは二十歲ばかりの若者、情人でもあらうか、一人の若い女を載せてゐる。我れは之れを見ると、何となく心とゞろいて立ち上つた。シエークスピーアとアン、ハサウヱーとが話の繼ぎめを、また思ひ合はせたのである。すると娘も同じ電氣にでも感じたかのやうに、まじろいて身を起した。端艇は過ぎて行く、そして遠靄の中に沒してしまふ、岸にはあゝとの嘆息のみが取り殘された。

しばらくして、娘は、

「シエークスピーアが此の土地に居られなくなつたのは、サー、トーマス、ルーシーの蓄づてる鹿を盜んだからだと言ひますが、わたしは何だかそれにはシエークスピーアに言ひ譯がありさうに思はれます。」

「さあ、それはどうとも言へないやうですね。」

といふとき、老紳士は後の畠道から歸つて來て、我等の傍から口を挿んだ。

「私の讀んだ範圍での傳記によると、よし盜んだにしても、それは半分は習慣、半分は徒戲ぐらゐのものでは無かつたか。「盜んだ」といふ語が餘り强いから、彼れを呪ふやうに聞こえるのぢやらう。そんな例は今でも田舍にはよくある事ぢや。それで私はシェークスピーアの此の事件に關しては、一種の哲學を立てゝゐますよ。」

「おもしろいですね。どんな哲學でせう。」

「倫理上では善と惡との中間に無善惡の事柄があるかどうかといふことは既に人も論じてゐる所ぢやらうが、私は其の外に半善惡といふやうなものがあると思ひます。シェークスピーアの場合が丁度それぢや。盜んだは盜んだがそれは普通の盜賊が夜陰に他人の家へ忍び入るといふたぐひとは、心持が違ひはせんか。土地の若い者等がよく自分の庭へ紛れ込んで來た鷄を締めて喰ふ。又は通りがけに葡萄園の葡萄の房を摘んで行く。是等は田舍の習はしによくある事ぢや。行る者は善い事とは思はぬが、さして惡い事とも思はぬ。徒戲をして叱られるくらゐの心持ちで行つて居るのです。シェークスピーアの鹿の事も事實なら恐らくはこんなものぢやつたらう。それをルーシーが意地わるく咎め立てをしたのでせう。あなたはどう思ひます。お前もどう思ふ。」

我等はちよつと答へかねたが、娘は滿足の體に見えた。

オックスフォードのインで見た時、直接に彼れに質して見れば好かつたと不圖考へて、思直せば、何の事、それは平生我が空想から造り上げてゐる夢に過ぎなかつたのである。

ホテルへ歸る途々も、娘は、かの舟の事が心にかゝると見えて、月の冴えた夜、自分等も、エヴン川に露墜ちるまで葦を

分けて、シェークスピーアの歌の本でも讀んで興をふかして見たいと繰り返して言つた。けれども今は生憎月が無い。明日は早や三人ともに此の地を去らねばならぬ。我れも月のエヴンの舟遊びは期してゐたのであるが、此の度は齟齬して了つた。明月の一夜を、露が骨身に冷え徹るまで此の流れに上下して、或時は牧場の岸に舟を寄せ、或時は寺に沿うて木蔭にしばし纜をかける。耳を澄ませば彼方の牧場には銀絃を彈くやうな蟲の聲、寺を周つてさゝやくものは、楡や菩提樹の葉に戯れる風。あゝ此の時、願はくは舟に樂手の乙女あれかし。樂器はヴイオリン、曲は戀、泣かずには已みがたい興趣であらう。而して東海の一後進が捧ぐる愛慕の歌に、詩人の夢も涼しめられやう。

十一

オックスフオードのアイシス川の月も美しい、來て見られよ、といへば、さらばバーミンガムよりロンドンへの途すがら必ず立ち寄ります。彼處で月の思ひは果たさせ給へと、言葉をつがへて、夕食の後、急に親子はバーミンガムへと出立した。我れも翌日は見殘したものを見て、此の靈地を辭した。

* * * * * * * *

越えて數日、一封の書狀によれば、彼の老紳士と娘とは、遂にオックスフオードへは立寄る機會がなくなつた、殘念との事である。そしてストラッフオート、オン、エヴンの一日の紀念は永く消えざるべしと書いて、末に當日讀んだソンネッツの一節が抄してある。

When to the sessions of sweet silent thought

I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
　　And with old woes new wail my dear time's waste:
……………………………………………………
　　……………………………………………
But if the while I think on thee, dear friend,
All losses are restored and sorrows end.

歌はおもしろいが、思ひ出は淋しい。噫「我れは記憶か、藝術は悦びか。」（明治三十九年四月）

奈良より

第一信

奈良に來て二日目の十一月六日、その暖かさはシャツや外套の冬仕度が恥かしいやうである。黄いろい光りに包まれた南都の秋を、自分はこれから何う受取るであらうか。

正倉院寶物の曝涼はこの十日頃までだといふ。もつとも之れは平民には見られないものである。それを無位無官の自分等が拜觀させて貰ひたいといふのだから、むづかしいのは當然である。けれども自分の專門學は美術に關したものでもあるし一方には例の文藝委員會などいふものもあるのだから、何とかしたら見られまいものでもない。そこで早達文部省へも御助勢を賴んで、願書を出して見た。そして奈良へ來てその返事を待つてゐると、やつぱりいけないといふ。少々氣ぬけの氣味である。日本といふ國では、雲上からさす直接の光榮はとこしなへに、平民の上を照さない仕掛に出來てゐる。しかたがない。行つて春日野の鹿に餌でも買つてやつて、羞かしさうな眼をする額でも撫でてやらう。

と思つてゐるうちに天氣模樣が變りかけて來た。少くも四五日はゆつくりと此の土地に親しんで見ようと思つたのが、何

だか荒んだ氣持になつて來る。今の自分には、一つところに長く留つてゐられるかどうかも問題である。二三日したら京都邊へでも行かう。或は二十年ぶりに故郷の石州へでも這入つて見ようか。體がぢつとしてゐれば頭が働く。西へ東へと休むひまのないほど飄泊してゐたら却つて心がやすまるかも知れない。受働的でしかも痛烈な刺戟を絶えず神經に受けてゐたい。それには奈良はあまりに穩和である。鈍角である。懷古の情味それみづから、自分には昔ほどの濃やかな心持を齎さない。十年以前、はじめて一度この地を訪うた時は、あの猿澤の池の邊まで來ると、何とは知らず感謝の涙が眼頭にゝじんだのをおぼえてゐる。自分の心が荒んだのか。あの時のナイーヴな情味を今いちど呼び返すことが出來るだらうか。少くともこゝ二三日は此の土地に居て見よう。十時、この原稿をポストに入れながら、雨の覺悟をして出かける。

第二信

自分は奈良の契點を嫩草山に置いて見る。此の山の氣分が奈良のシムボルである。此の土地で最も氣に入つたものは此の山である。

二月堂、三月堂の邊に小半日を過ごして、春日神社の方へ抜けようとすると、すぐ左手に明るく眼をあいたやうな嫩草山が坐つてゐる。右は春日山、左は手向山、いづれも欝蒼とした中に燃えるやうな紅葉の錦をかけてゐる。其のあひだに挾まつて、此の山一つが肌を脱いだやうに柔かである。山といふよりも丘である。かけ上ればすぐ頂に達せられさうに見える。圓みを持つた輪廓をのび〱と西南にひろげて、其の裾が自分の今通つてゐる道である。曇つてゐた空がちやうど此のころから晴れて來て、小春日の暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。中腹に殊さらゝしく松の大木が三四本立つてゐる

外、立木といふものは一本もない。秋草の黄いろに枯れたのが、しなやかな毛織物のやうに全山を蔽うてゐる。その勾配のなだらかな、廣々とした裾野には鹿が遊んでゐる、掛茶屋がある、白い手拭を姉さまかぶりにして手甲をかけた草の根掻の女がゐる。時たまに茶屋の女が客を呼ぶ聲の外物音一つも聞こえない。掛茶屋に腰をおろしてうつとりしてゐると、いつの間にか、うつら〳〵と眠くなるやうな氣分である。鹿は雌鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方へ向け、まぶしさうに眼を細めて、口をもぐ〳〵させてゐる。立つてゐるのは其の涙ぐんだ大きな黒い柔和な眼をぢつとさせて、物を考へるでもなく考へぬでもない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでも逃げないでもないといふ態度で寄つて來る。一皿二錢の餌を一つ〳〵つまんで口に含ませてやると、しまひにはみんな懐いて來る。前の一疋にやつてゐると、右の奴は外套の袖を喰へて引つぱる。後の奴は裾を喰へて引つぱる、自分等にも呉れといふ催促である。兒鹿は遠慮して離れてゐる。雄鹿も其のいかめしい角の手前、すまして後の方にゐる。やはり人なつこいのは雌鹿である。と思つてゐると、あとの方にゐた一疋の雄鹿が自分等の方へ餌の廻つて來ないのを憤つたと見えて、其の角の生際の瀆を振り立てゝ、傍にゐた雌鹿の横腹をどんと突き倒した。今まで靜であつた一群が忽ち動揺しはじめる。併し騒ぎはそれだけで、また元の平和に戻つてしまつたが、穏な彼等の世界にも、波瀾はあるのである。

茶屋の女が出した木熟しの柿の甘いのを一つ二つ剝いで食ふ。鹿が前へ來てしきりにお辭儀をしてゐる。皮やへたを投げてやると、みな喰つて了ふ。

山は一面に黄色な芝草を地として、草いでゝゐる草に薄がある草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする輕やかな穗を出して、かすかな風に搖れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のや

うに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戰つてゐるのが無殘である。

しばらく、草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の美女の尼が、、黄絹の袈裟ころもを着て端坐した心持である。

第三信

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣して立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは此の邊である。興福寺の五重塔は、偉觀には相違ないが人家に接しすぎてゐる。東大寺金堂の大佛殿は大きいは大きいが、唯の寺構である。ひとり二月堂三月堂四月堂等の一群がかけ離れて周圍との調和に特殊の意味を現はしてゐる。中でも三月堂が其の意味の中心を代表してゐる。眞に千年以上の古堂院に接するときの畏れと靜寂と神秘とは、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造營にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之に隣つて、半ば山に據り雄大の構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等に取つては、現在の榮と生との如何に殺風景にして、寂と死との如何に高貴なることよ。二月堂の觀音は今も諸人の信仰厚く、石段の兩側に立ち竝んだ夜燈の寄進者は多く藝妓である。本堂で御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度も踏む。お水取りの儀式もある。要するに眼をあいて生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍の平地に立つた儘千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ來て觀る寺は、

斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を綾どつた背景や翼景や圍まれて白く打ち開いた寺地には、折しもの薄れ日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。屋根瓦の苔、金物の銹、柱の朱の剝げの淋しさ、軒裏の胡粉は後朝に殘る女の頸白粉のやう。木材の朽ち黑み細つた木地の荒れ。薄暗い光の落ち込む堂内には、大香爐の上に積もる埃が冷たさうである。そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてゐると寂寞の氣が人を襲うて來る。二月堂との間に落ちる水の音も次第に消えて行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろがつて來る。千餘年の昔こんな大建築のプランを細かい一線一畫の末までも頭の中に描いた、其人の頭と今の吾々の頭との働らき工合など比べて考へて見る。斯うした茫然としてゐる十餘分間は貴い時間であつた。其内後の山で、手斧を擔いだ男と商人風の男とが、大きな立木を距てゝ調子はづれの聲で「五十錢や。三貫にしなはれ。飽かん。買ほか」といふやうな會話をはじめた。其の響が木だまを返してゐる。

第四信

奈良もう見飽たやうである。大佛の前は何度通つたか知れないが、昨日まで這入つて見る氣になれなかつた。あの境内は門の前から見るのが一番いゝ。本堂の前に來て見るのが其次にいゝ。中へ這入つて見るのが一番つまらない。それもたつた一人、陰影のやうな堂内の空氣の中で、あの時代の巨大趣味と妄想趣味との結合した怪物とも見るべき此の巨像のまはりを徘徊してゐたら、そこに特殊の心持も味へるであらうが、今は修繕中である。掛橋を上つて行つて、雜沓の中を正面から拜んで來たのでは愈々つまらぬ。此のほか塔にはたしかに面白いのがある。佛寺の塔はちやうどヨーロッパ中世のゴシック寺院の尖塔と同じく、人間が天に向つて高まらんとする心を現はしてゐる。古佛寺の一面の趣味たる靜寂、死滅に對して

は、むしろそれを裏切り、若しくはそれ以上を示してゐる氣味がある。之れに對して奈良最古の建築の一と言はれる唐招提寺金堂の全景のプロポーションは何といふ靜寂であらう。多くの寺院の屋根の如くむやみと上に向つて延びないでしつとりと下に落ちついて、心安らかに棟を横たへ、軒を伸べた感じは、靜止そのものである、安定そのものである、クラシカルデキグニチーそのものである。たゞ修繕したらしい瓦の色の生々しいのが僅に趣味の調和を破つてゐる。

唐招提寺と一緒に見たうちには、業平、菅家、横笛などのローマンスに富んだ舊蹟もあつたが、舊都大極殿の跡が一番心を惹いた。高田學長も來合はされ、久しく土地に在る岡本社長、高田教諭などが同道して案内して呉れられる。お蔭で地理的變遷などもよく分かつた。昔の宮城から眞正面、朱雀大路を下つた邊は、今の奈良の町から外れてゐたといふ。大極殿を中心にした宮城址は一面に打ち開いた田の中に點在してゐる。二三尺も土の盛り上つたままに、芝草、小笹、其の他の雑草の茂みが枯れ殘つて、野菊、提灯草などの黄や紫やの小さな花が秋の日を受け、つゝましやかに咲いてゐる。諸方の門や廻廊やの跡は小さな土饅頭に過ぎないが、大極殿跡は廣い長方形の土臺である。その上に立つて、底寒い秋の風に吹かれながら昔の事を想像して見ると、型の通りの懐古の情が起る。奈良朝式の風俗をした大宮人の洒落者等が、リファインされた綺麗な顏立の中に、どこか悧潑と陰忍の影を藏して、併しまだ平安の子女程には神經が細らないで、そこらをぶら〳〵してゐたらうと思はれる。そこが今はもう田の稲も大かた刈取られて、秋もさん〴〵に老けたといふ風情である。土地の言ひ傳へによると、古來此の地點に鍬を入れると屹度疫病にかゝるといふので、周圍は殘らず田になつて以來千年であるに拘らず、此の地點だけ農夫の破壊力から遁れて保存せられたといふ。よくある例であるが、ちやうど蟲類が毒粉やそれに連想するやうな色を身につけて、自己保存をやるのと似た自然の保存法である。此等の地域が迷信の宗教的威力を借りて自己の逆

保護色としたのである少くとも十九世紀以前の歴史にあつては、文明の最も永久な保存者は宗教力であつた例が、此地盤の上にまで見られるのである。けれどもマッスの中にすら斯うした宗教的威力の漸く消えて行く今後は、何が最も強い永久力になるのであらうか。

斯んな事を書き出しては果てしがない。奈良の事はこゝに止めて、少しく遠出をして見る。

第五信

今日は畝傍、多武峰、三輪、長谷寺を見るために同じく高田學長と岡本氏と三人で出かけ、時間の都合で三輪だけを省いて、順に初瀬の長谷寺まで來た時は、薄暮である。長い〳〵廻廊形の屋根で蔽うた急勾配の石段を登つて行くと、泊瀬山の山腹に據つた本堂及び舞臺の構へがまづ觀音だといふ輪廓を與へる。元來數ある御佛のうちでは、觀音が最も凡夫に親しい佛である。從つてまた最も繁榮するのも觀音である。俗といへば俗だが、そこに人情の味の豐な所がうれしい。迷信も願がけも、誠でさへあれば默つて聽いて下さる、温い血の通つた佛といふ感じがする。その觀音の寺院では、淺草の淺草寺や信州の善光寺のやうに雜沓の巷に降りて來てゐるのと、京都の清水やこの長谷寺のやうに、山の中腹に舞臺を構へたのと二通あるやうである。そして同じく山に臨んで舞臺を構へた中では、清水は華手で長谷寺はじみである。じみなだけに大和の山中に立つた觀音堂として、蒼古なところがよく纏つた氣分を持つてゐる。舞臺の上から見おろすと、下の谷合からかけて初瀬の旅籠屋町の屋根はもう夕暮の靄で黑ずんでゐるが、左右に迫つた山の側面は、今が紅葉の眞盛りである。峰を越して僅に殘つてゐた夕日が、見てゐるうちに消えて行く。欄干によつてしばらく無言のまゝに見送つてゐたものが、溜息をして向

き直ると、本堂の暗い中にはもう燈明が上つてゐる。本尊を拜した後こゝの管長某氏は早稲田の校友であるといふので、名刺を殘して山を下つた。長谷寺と淸水とは、恐らく此の式の觀音の雙璧であらう。それを寫したといふ鎌倉の長谷と上野の淸水とのおもちや式たるは言ふまでもない。

長谷寺へ行く前に廻つたのが多武峰の談山神社である。之れは關西の日光だと謂ふ。日光ほどの華麗豐富は無いが、德川氏の廟社に對する藤原氏の廟社といふ比較の興味がある。高山の奥にこれ程の莊麗な殿社を構へたのは、關西第一の名に負かないものであらう。日光ほど燦爛としてはゐないが、其の代り何處か上品な貴族的な落つきを見せてゐる。傍らに十三層塔の見事なのがある。所謂檜皮葺の厚い屋根が十三重に疊つてゐる角度と直線の調和が特殊の印象をおしつける。之れが我が邦に於ける此の種の塔の魁であるといふ。また此の社の奥に鎌足の墓があつて、事變のあるたびに破裂するといふので、御破裂山といふ、珍しい名前である。社殿までの山道、兩側すべて二三百年を經た大杉や大檜の立派なのが日も透さないほどに競ひ立つて、此の神社の威嚴を守つてゐる。兎も角も日本の文明に第一回の澤布巾をかけて之れを美しいものにして吳れた藤原氏の祖先が、斯うして靜に此の山の奥に鎭まつてゐるのだと思へば、感謝の念が湧かぬでもない。西洋ではマースよりもヴヰーナスの力で政權を張つたのが一頃のオーストリアだといふが、日本では藤原氏がちやうどそれである。當時の美人は凡て藤原氏の出であつたのだから堪らない。といふやうな高田學長の話を聞きながら山を出た。

第六信

畝傍の神武陵及び橿原神宮は、歷史の上から言へば名所舊蹟の中でも日本第一に位すべきものであるが、其の割には道

路等の設備も、所在地の構へも行屆いてゐない。あらゆる意味に於いてもつと壯大であつてよい譯だ。日本に於ける神話と歴史との分劃線はこゝである。古代にあつては、交通といふことよりも、先づ其の反對に阻隔的な地形が自家を衞るに便宜と考へられたであらう。從つて外との交通路となるべき海港などゝいふ觀念は國都を選ぶ上にさしたる要素とはならなかつた。寧ろ自然の大城壁を周らしたやうな山脈が三方を取り圍んで、一方に打ち開いた口がある。其の口は成るべく南面して日光の豐な所であつて欲しい。斯やうな條件に合ふものとして大和の山間の平地はおのづから古代の人の好みに適したらうと察せられる。勿論この好みたゞ一つが定都の條件であつたか否かは別問題であるが、少くとも之れが上代人の居都をトするサイコロジーに最も重大な一作用をなしてゐたことは想像せられる。而して此の好みの最も完全に大規模に現はれたのが大和では奈良の平野、山城では平安の平野であつた。彼等が先づ奈良に明白に其最大理想的居城を認めるまでは、其附近の山間に、其時代の程度に應じて比較的小規模の平野を見つけ、そこを彼れから是と移つてゐた。其最初のものが卽ち神武帝の畝傍附近である。

今の畝傍驛から橿原の帝都跡までは車を走らせる。途に飛鳥川を渡る。淵瀨常無しと詠ぜられた此の川も、此の邊は川幅二間にも足りない溝のやうな川である。細砂の川牀で、少しばかりの水が白ちやけてゐて、一向に歌の譬に引かれさうにも無い。それよりも此の邊の興味はやはり畝傍山を中心にした地勢の上にある。見わたすと遙に生駒、金剛、葛城の諸山脈が、一瞬間もぢつとして居ないやうな其の不安不規則の輪廓に高く靑空を限つてゐる。其の中の平野の一部にすぐ手近の畝傍、耳成、天香山の三山が鼎立して、さも人間と親しみ易い樣子をしてゐる。吾等の祖先が何ゆゑに山と特別な親しみを持つてゐたかは別として、彼等は朝夕此の愛らしい小山や彼の天空を限つて近づき難い大山脈やを仰ぎ見、めぐり見して、人間と

自然との間に一路の感應を通じてゐたに違ひない。今日我々の硬ばつた精神や感覺には、自然は多く死んだ外形の面が觸れて來る。併し古代人の新鮮な精神や感覺には自然の生きた方面が一層赤裸々に感觸せられたであらう。神話時代に近づくに從つて、山川も段々生物に近よつて來る。神話時代の人間には、山にも川にも靈があつて、彼等と相互に感應し行動するのが常である。我々の祖先と此の邊の山ともまた其の通りであつた。其の神話の遺物の最も著しいのが三山である。

畝傍と耳成と天香山とは其の小さい愛くるしい山で且つ箇々平野の中に孤立してゐる點が、いかにも人間に親しみ易いと共に、其山の意義は決して莊嚴とか強大とか神秘とかいふものでなく、優美な可憐な平明單純なものである。であるから此三山が神話に這入つて、彼の「耳成と女を爭つた」傳說となつた。すべて神話には多く人間以上の超越力が要素となるものであるが、三山の女爭ひの如きはむしろ人間的である、神話としては極めて平明單純な可憐な神話である、優しい神話、特色のある神話である。此點が面白いと思ふ。殊に三山の女爭ひといへば、直に近世の文藝の世界を想はせる。近代の社會悲劇の最好題目は所謂三角關係である。之をマーテルリンクで言へば、女一人に男二人の關係から生ずる「ペレアスとメリサンド」の悲劇か、さもなければ男一人に女二人の關係から生ずる「アグラヴェーンとセリセツト」の悲劇かである。啻に近代のみでなく、昔に溯つても、最も痛切な人間の悲劇は常に此三角關係から生ずる。「寂しき人々」「アンナ、カレニナ」から、「小春治兵衛」「パオロとフランチエスカ」に至るまで皆三角文藝で、而も已がたい人生悲劇の根柢に突入つたものである。玆まで來れば人生はたゞ涙と嘆息の外はない。此の見地から見た三角文藝の端緒がこの三山の神話にまで溯つてゐるのである。三山の三角關係は大様な古代の神話であるから喜劇的趣味であるが、其の同じ流れが文明の變化に從つて後世の三角悲劇（時としては三角喜劇）を成すに外ならない。此の意味から見て、三山はなつかしい山である。

こんな事を考へながら畝傍山の麓まで來ると、流石に此の山は三山の中でも最も威容に富んでゐる。東北(？)から見ればやゝ笠を伏せたやうな形になる、其の下が神武帝の御陵である。西南側は脚の開いた机を傾けて据えた形で、其下に橿原の宮がある。畝傍山には若い赤松などが茂つてゐて、要するに美しい山である。昔はどんな木が茂つてゐたか知いないが、此の山を目標にして神武帝が其の宮城地をトし給うたのは所以あることであらう。耳成山は小さく端麗である。天香山の形にはそれ程の特色が無いやうである。

「奈良より」の紀行はこゝに止めて、題をかへて其の後の事どもを書きつける。

京都より

その一

京都市の生活は、今が丁度新舊の混亂期なのではないか。東京はもう是れで新店を張り通したといふ氣味である。新しいなり、不秩序なりに、一定した所がある。京都は之れに反して纏つた感じの得難い所である。少くとも其の外形に於いて、雜然とし過ぎてゐる。靜なものと騷しいもの、のろいものとせづかちなもの、澄んだものと濁つたものとが、もつれ合つてごた／＼してゐる。だから若し昔からの京都といふ概念に合するやうな經驗を得ようとするには、此の外形的現實の京都生活を遁れて、電燈の影のさゝない邊へもぐるか、電車の音の聞こえない處へでも出なければ纏まつた感じには觸れられない。それかと言つて新京都といふものには、まだ是れといふ特色が出てゐないで、徒らにごた／＼してゐる。到るところに生々しい不調和の跡が見える。四條通りは京都第一の新式な町だといふが、なる程大丸をはじめ洋風の家並もある代りに、思ひ切つて古風な低い家造も殘つてゐる。同じ日本家屋でも、高貴な御殿風にせよ、くすんだ町家風にせよ、東京の大通りなどにある日本造りとは違つた味である。言はゞ一層純日本式だ、從つて西洋造りと不調和がはげしい。それに町をあるいてゐる

人間がいよ〳〵新式の町と調和しない。見わたした所帽子を頂いた人は群衆の二分か三分で、大多數はみな裸頭の人である。すでに帽子を被らないくらゐだから、風俗萬端がそれに準じて不揃で、且つあらゆる意味に於いて新式でない。

晴れた日の京都の空氣はいかにも透明なのであらう、山の色なども際だつて見える。所謂山紫水明の本場である。今自分のゐる宿なども、すぐ加茂川を隔てゝ比叡山から如意嶽一帶の山々を軒先のやうに見てゐる。併し其の實この邊にはもう諸種の製造場などが遠慮なく大きな煙突を竝べて、紫の山の中腹に灰墨色の煤煙を流しかけてゐる。町はづれの諸方角から、大きな古い寺で撞き出す鐘が夕暮の靄に漉されて此の大都市へ渦卷き込んで來る感じは、到底東京などで味はれないものであるし、加茂河原に夜風ふけて千鳥の聲を聞く心持も古い京都の特有のものである。けれどもすぐ其のあとから、一定の時刻が來ると度はづれな汽笛のうめき聲が耳の鼓膜をしびらせる。何が何だか分らない。要するに必然の大勢として、今に千鳥の聲も聞えなくなるだらう、鐘の音にもあんな餘韻はなくなるだらう、山紫水明も是迄のやうではなくなるかも知れない。さうなり切れば、それでまた新しい京都の特色が出て來る。新陳代謝は已むを得ない。たゞ現在の京都は中途半端である。古いものが新しいものに無殘に荒されてゐるといふ感じを人に與へる。東京でも土著の人などには、二十年三十年前まではまだ同じ感じが強かつたに違ひないが、今日では大勢に於いて新東京の勝利が定まつて了つた。丸の內に煉瓦の大通りが出來るのを誰れも不思議とは思はない。之れに反して京都のやうな歷史を持つた古都では、今日の狀態はむしろ慘ましいといふ感じを人に與へる。反抗的にも古いものゝ味方になりたくなる。けれども此の都市が生活を超越して國寶的都市にでもならない限り、斯うなるのは自然の勢である。生活は常に變ずる。生活を含んだ都市の變化は何うすることも出來ない。今のうちに、亡び行く古いものゝ味ひを、味ひたい人が味つて置くより外しかたが無い。

その二

京都の落ついた味を髣髴しようとするには、新しい破壞力の及んでゐない所にもぐり込むのがよいといふ。けれども人間の心がすでに荒んでゐるのだから、其の人間の出這入る限り、大抵のところは、旣に精神に於いて破壞せられてゐて、外形の幾分が殘つてゐるに過ぎない。吾はたゞ其の殘骸を見て、在りし昔を想像する外はない。瓢亭の料理も昔の味ではないといふ。一方は祇園の大通りを遠慮して橫に入口を改築するのだといふ、其の赤塀の中だつて、客が今樣で藝妓舞妓が今樣で、三百年の傳統なんぞは死んだ器具類に名殘を留めてゐる位のものである。でも、京極の裏を拔ければ、狸の穴のやうに曲りくねつた暗がり小路に、秘密そのものを私語いてゐると思はれる小さな軒燈が今もぼやけてゐる。祇園の茶屋が軍隊組織とでも言つた風に、圓い軒電燈を規律正しく掛けつらねたに拘らず、小座敷に電燈をよけて、蠟燭の火の眼ばたきに、陰影のゆたかな、赤いうるんだ明りを見せて呉れるといふ。島原の角屋に茶を飮んで太夫の引附を見て歸るだけでも、芝居や儀式を見るくらゐには昔の豪華の面影が忍ばれるといふ。

が、今一つの興味は京都の町全體を靄に包んで、正體の知れない距離から見てゐることである。それには夜三條の大橋邊に立つて裏から平たく見るのも一興であるが、夕暮に淸水の舞臺から大きく廣く見おろした景色が絕勝である。遙に西を限つた山脈が地平線に沈んで、其の上に痿きかけた夕日の光線が、薄雲の切れ目から眼もあやな貴い輝きを京外れの村々に射かけてゐる。其のあたりの村一帶は光榮に染つて光つてゐる。それが市都の市街に近づくに從つて次第に黑んで來る。そして此の光りの村から夕靄の都への移目あたりに東寺の五重の塔がふはりと浮んでゐる。塔の下半分はもう靄の中に溶け込んで、

見わたす限りの町と共に夕暮の神秘の中に沈んで了ふ。あとはたゞ一面に薄紫の海を展べて、少女の秘密のやうにひそやかに、靜に柔かである。それでゐて所々に圖ぬけて大きい寺の屋根が怪物の如く蒼白く光つて聳え立つてゐる。ちら〳〵と見えはじめた町の灯が、空氣のせゐか、其の醉つたやうに美しい赤の色や、神經的に鋭い白の色に特殊な光澤を持つて輝く。總體京都の裸灯は、遠くから見ると涙ぐんだ美しい眼のやうに艶な光澤を持つてゐる。――斯うして京の町は次第に暮れて行く。

舞臺からすぐ下はと見ると、灰色に乾いた一筋の路が紅葉の中を分けてゐる。紅葉は靑から橄欖に黄に紅に緋に、そして爛れて赤黒くなるまでの盛衰の色をすべて一目に集めて、更に其の色と色との間に重なる光線の明暗を無限に複雜にしてゐる。それが夕暮に近づくにつれて更に色調を變へて見せる。其紅葉の中にビール會社の宴遊會のやうな旗をかけた赤毛氈の茶店が竝んでゐてつい先程その一つから出た三人連の客は、商人風の三十男が一人と若い女が二人、其一人の女はぽつてりした肉附の色が際だつて白かつた。それが酒に醉つて眼の下を眞赤にしてゐる。よろけながら大聲で男に甘つたれ〳〵して紅葉の谷に隱れて了つた。はつきり見えた人顏は之を最後にして、淸水の山もまた暮れて行く。

何處か遠くでわつといふ聲は聞えるが、それはたゞ車馬の音やあらゆる人間の音響が一つに溶け合つた總高だけである。あたりも次第に靜になつて來る。御堂には蠟燭の灯や種油の灯が暗い蔭のなかにぽつり〳〵と赤い波紋を描いてゐる。夜風がさすがに寒い。

薄紫の海と見えた眼界がいつか黑い夕の影を深めて、市街は燈火の林に變る。そして夕暮の京都は夜の京都に移るのである。

更に京都の夕暮を豐富にするものは鐘の音である。圓く內に卷き込んで、無限に細く長く空氣の間を舞ひ行くあの響は、到底東京などで聞かれないものである。ぢつと眼をつむつて聞いてゐると、古來此の世を去つた幾千万の靈魂の秘密と惱みとを直ちに我々の靈魂に傳へるといふ、其の鐘の音である。それが一面の夕闇の中から、あちらに一筋、こちらに一筋と渦き上つて來る。其の音を本へと〳〵辿つて行つたら、皆何百年といふ由來を持つた寺の鐘樓に淋しく吊されてゐる、銘と銹とのゆかしい大梵鐘なのであらう。そしてそれらの鐘の後には、女人の恨み、若僧の淚といふやうな樣々のローマンスが餘韻を引いてゐるのではないか。

斯やうな光景が相寄つて、夕暮の京都はセンチメンタルなものになる。

その三

京都にせよ奈良にせよ、過去の生命が佛都として最も多く殘つてゐるのは言ふまでもない。凡ての遺跡の中心は寺院である。つまり後に傳はるべき精神文明の吸集點が佛敎にあつたからである。それと共に、江戶、大阪、鎌倉が覇者の遺跡であるのに對し、京都、奈良は王者の遺跡であるのも勿論である。其意味でおのづから今日に殘つてゐる空氣が違ふとも見られる。覇者の中で、德川の江戶、豐臣の大阪、源氏の鎌倉を除けば、京都には藤原、平家、足利等がゐたに拘らず、藤原氏はむしろ奈良が本家のやうに思はれ、平家は殆ど京都に深い足跡を留めないで亡びて了つた。勿論散布せられた文明の中に平家時代のものがあるのは當然であるが、纏まつた遺址といふやうなもので平家そのものをそこに集めて見ることの出來るものは殆ど無い。其の點から言へばまだ足利の遺跡は比較的多く保存せられてゐる。是は一つには政治上趣味上の關係からで

もあり、又藤原氏平氏はまだ準覇者たるに止まつて、多く王室の蔭に蔽はれる氣味であつたに拘らず、足利氏はすでに純然たる覇府をなして、却つて王室を其の蔭に蔽うてゐた爲でもあらうが、今一つは當時に於ける唯美趣味、デカダン趣味、世紀末趣味の中心が政權の中心點と結合して其の方面に强い足跡を印した爲である。足利義滿等の如き一種のデカダンの出現と共に、感覺方面趣味方面に耽溺的な、極端な鋭敏性を發展せしめた結果に外ならぬ。兎に角此等種々の理由からして、足利といふものゝ足跡は王都、佛都たる京都にも獨立して殘つた。例へば銀閣、金閣、乃至足利の菩提寺たる等持院等が其の主なるものである。此の意味で此等の舊跡は京都に特殊の地位を有してゐる。

金閣寺と等持院とは近いところにある。金閣寺には寶物、古畫の類も可なりあるし、金閣そのものゝ建築、箔の殘つた三階、楠の一枚天井、庭の茶の水、茶室の好みから其の所謂南天牀柱のたぐひに至るまで、案内者が喋り立てゝ呉れる材料は隨分ある。庭園の樹木は若いが、樣式は昔の面影を崩さない所があるのであらう。茶室までを含めた庭園美術の研究は京都に於いて殊に此の時代前後のものによい材料が多い。おもしろい新研究が出來るとおもふ。

金閣と等持院とを通じて一番强く心に殘つた印象の一つは、足利家の人々の彫像である。何れも木彫の等身に近い坐像であるが、はじめ金閣寺に義滿の像を見て其の顏に特色のあるのが面白いと思つた。殊に眼尻の下つた、頰から口のあたりにセンジュアル、タッチのある所に義滿らしい感じがあると思つた。けれども之れは或は義滿その人の寫實的特色といふよりも、彫刻者の手法の特色なのかも知れない、像としては昔の多くの場合の如く空想の中から理想化して捏つち上げたものに過ぎないのかも知れない。さう思つて等持院へ行くと、玆には夫の維新の際志士のために首を落されて、修復したのだといふ尊氏の像をはじめ、歷代の木像が大袈裟に竝んでゐる。其の中の初代尊氏と三代の義滿との間には顏相に遺傳とも見られ

る類似が著しくあらはれてゐて、それが曩に金閣で見た義滿のそれと同型である。是れだけ見て自分は何となく無意味な像でないやうな氣がした。よし後世の彫刻家が想像で大部分を作つたにせよ、顏だけには寫實的根據があるに違ひない。まだ其の邊の事實を突きとめるまでの研究の餘地はないが、若し全然何時代かの作者の想像であるとすれば、想像し得て義滿といふ人格の一面の眞實に到達したものである。像全體としては姿勢などに例の如く形式的虚僞が多く、顏面にも部分々々には眞實でない所もあらうが、前に述べた諸特色が際だつて初一見の印象を統一する所に、顏全體の生命が個性的に見はれて來る。

此の義滿を中心にして特殊の表情は、其の他の像にも一代おき二代おき位に影を見せて、何となく足利文明に貫流している片よつた意味を思はせる。

その四

奈良の正倉院の御物が有位者有官者の或者以外に拜觀が許されないことは、此の前も書いた通り、規則上の不備であるが、それを補正するのは、先頃の「讀賣」第一面に出てゐた黑田鵬心氏の意見の如く、極簡單な事である。條文は何とあるか知らないが、其の資格箇條の下へ、學藝の研究に資する目的のものは身分詮衡の上で許すといふ意味を追加すればよいのである。是れは是非來年から改良して貰ひたいと思ふ。實地に就いて聞くと、現行規則の結果に種々の滑稽となつて見はれてゐる。何でも許可證には同行者家族一名となつてゐるさうだ。そしてその家族といふのは西洋式に妻君の事であるといふので、同じ家族でも、親を連れることは許されない、子を連れること兄弟を連れることは許されない。妻君孝行は許されて、親孝

行は許されないのである。それが立法者の本意でないことは察せられる。それはまだよいとして、不心得の拜觀者は、妻君だと號して藝妓を同道したり宿屋の女中を同道したりする實例がしば〳〵あるといふ。門衞もそれをまで一々觀破する譯には行かない。また西洋人なら妻君はおろか親子兄弟ぞろ〳〵と引つれて行く。行くに不思議はないので、本來なら貴人も行き芻蕘の徒も行き得るのでありがたいのである。規則はたゞ中間に立つてそれを取扱ふ人々の便宜で設けられたのであらうから、改良の必要があつたら成るべく面倒な事にしないで改良して貰ひたい。規則の末がいろ〳〵滑稽な結果になるのも、多くの場合がそんなものだから、決して咎めはしない。

「讀賣」で私へ宛てた吉村繁俊氏の公開狀は、近頃やはらかな手ざはりの文章である。去年大阪の中座で、ハムレット公演の樂屋から「早稻田文學」へ寄せられたる文章以來、久しぶりで君特有の調子に接した氣がする。ウヰルキー一座のキャンデキダの批評は、あのあとを今少し精しく聞きたかつた。此二十九日から京都でも同じ一座が出演する。都合がつけば最終日のサロメだけは見ようかとも思つてゐる。見たら何かの批評にもならう。

一夜、京極の大正座といふ、有樂座式の新小劇場で女優中心の新劇を見た。一番目山崎紫紅氏の「島の女」の結末、榎本あい子といふ女優が幕を切る所から見て二番目「バンカラ」三番目「女心」とを見て歸つた。二番目三番目は中村春雨氏の「新歸朝者」「眞夏」の改題であるといふ。こゝでは花浦咲子といふ女優が中心である。白のアクセントが地方訛のせゐか舊劇の祟りか知らないが、まだ「眞」に歸つてゐない。あれを一度全くの自然に引き戻した上でなければ其れ以上の問題に這入るまい。

その五

ウヰリアム、アーチヤー氏の日本劇に對する意見は、其の歌舞伎劇を罵つた點に於いて反對論を呼び起こしてゐるやうである。「讀賣」に出た服部嘉香氏の說なども其一つと思ふが、尤も服部氏のは歌舞伎劇を日本劇の全部のやうに見ずして、むしろ新劇を主とした意見が聞きたかつたといふ趣意であらう。ちやうど書の分つた西洋人から日本の新書洋書の批評が聞きたいのと同じことである。ところが新劇となると、白劇に近づいて來るから言葉の通じない外人には批評が困難になつて來る、且つあまり多くその種の劇を見る機會が無かつた爲か、アーチヤー氏は此の方面の批評をあまり精しくしなかつた。是れから後に出るかも知らないが（氏は大阪で見た人形芝居に餘程多くの興味を持つたらしいが、其の意見なども未だ發表されてゐない）今までの所では、たゞ文藝協會で見た「運命の人」は上出來であつたとか、帝劇で見た現代喜劇は巧妙であつたとかいふ程度に止まつてゐる。是れは一つはお世辭もあらうが、一つは實際批評するのが困難だからである。殊に帝劇式の喜劇などになると、女優などは殆ど素で行くやうなシーア、リアリズムは、言語の通じない外國人に、其の微妙なアクセントから來る虛實の境目などが感じ分けられるものでない。たゞ一つらに巧みだと見られたに違ひない。恰も吾々が西洋人の演ずる西洋喜劇を見て、其の外形的寫實は西洋人が西洋人に扮するのだからどれもこれもうまいといふのと同じである。其の以上の鑑別はむづかしくなる。若し望むべくばそこからせめて脚本の批評に這入つてほしかつた。今の一般的な日本喜劇はちやうどイギリスでジョーンスの喜劇を中心にした時代、若しくはピネロが後期の眞面目な社會劇に移る以前までの劇壇、乃至現在でも、少數の純劇を除いた一般的な喜劇で劇壇の群衆趣味を繋いで行くのと同じ所を歩んでゐる。人生の上面

を愉快にふざけて通つて純劇の起らない時、若しくは一般公衆の娯樂機關を要する時に、其の穴を埋めるものは何處でも此の種の劇である。此の點から日本の現代喜劇を見ても一つの批評になつたであらう。

アーチャー氏の日本舊劇論に含まれてゐる眞理は音樂といふものに對する根本的疑問と過度の形式美に溺れた舊劇趣味の弊とである。一方から言へば歌舞伎劇のすぐれたものが吾々に生きた感興を傳へるのは、たゞそれが音樂としてである。音樂としてといふのは、必ずしも床の淨瑠璃のみといふのではない。衣裳も動作も言語も背景もみな一つに合して音樂的情調を形づくる。而してその基調音は床の淨瑠璃にあつて、時々其の特有な三味線樂や聲樂を投げ込んでは、基調を引きしめて行く。幕のあくそも〳〵から、たゞかりそめに太棹の音をしめる音が聞こえても、もうそれだけで吾々日本人の神經には一種の耽美的衝動を覺える。初めから醉つてかゝるのである。そして其の醉はす力は疑ひもなく音樂である。全體を通じて音樂の醉の醒めない限り、その音樂的情調にすべての荒誕と誇張と無智とを隱してゐる限り、歌舞伎劇には一種の感興が生き殘つてゐる。

けれども音樂の力には根本的疑問がある。日本の音樂趣味と西洋の音樂趣味とは種類の違ひであるか優劣の違ひであるか殆ど分らない程離れてゐる。西洋人並に西洋音樂をやつた日本人の多くには、日本音樂は概して音樂をなしてゐないと聞こえる。それが多數の日本人には魔醉劑のやうな魅力を持つてゐる。これはどちらも事實である。從つて西洋人は歌舞伎劇を音樂的統一の感じで鑑賞せよといつても、それは不可能の事に屬する。併し之れは西洋人か狹いのであつて、修養さへすれば日本人と同じくこゝにも美人に醉ふ力を感じ得べきであるが、それとも日本人の方がおくれてゐるのであつて、結局は必ず西洋音樂の今日の趣味に化せられ行くのであるか、疑問はこゝに殘るのである。

今一つの問題は舊劇が過度の形式美に溺れてゐるといふことである。

その六

過度の形式美に溺れてゐるといふ問題は啻に歌舞伎劇のみならず、其の姉妹藝術たる能にも舞踊にもある。けれども舞踊は言ふに及ばず、能にしても歌舞伎劇よりは遙に音樂に近いものであるから、音樂に合する約束の上からも一層多く形式を洗練する必要がある。だから形式過多といふことは、やはり主として劇の上に論ぜられるのが至當である。それと共に或點では能にも舞踊にも（特に舞踊に）通じた問題であるのも事實である。

劇の動作といへば、言ふまでもなく言語感想の意味に應じた表情であるから、是れには形式美の問題は伴はない、身體手足の動作に見はれる形式それみづからが內容精神から獨立して特殊の美を現はすことの不條理であることは言ふまでもない。ちやうど散文の文章が其の中の感想と無關係に辭句のみを華麗にすることを許さないのと同じである。けれども舊劇は散文以上であつて、むしろ詩になつてゐるのだから、勢ひ形式のみの洗練も加はつて來た。歌舞伎劇の動作が自然な散文的動作以上に詩的音樂的形式的な動作を多分に調合してゐることは言ふを待たない。而して今の問題は此の形式的動作の行き過ぎといふことである。

歌舞伎劇、能、舞踊に通じた形式的動作は、之れを四つの點から眺めてよい（玆には衣裳や光線から來る色彩上の形式美は這入つてゐない、專ら動作の上の形式論である）第一は音樂的運動、第二は線形の調整、第三は表情的姿態、第四は輕業的熟練、このうち第一は手足身體の運動が音樂に合して節奏的調和的に行はれるのであり、第二は其の手足身體の靜止した

時の輪郭が直線曲線の配合及び形態の釣合の上に形式上の快感を呼び起すのであるから、是等はむしろ舞踊、能等に重きをなして、劇には或る特殊な瞬間の外、問題になるほど用ひられてゐない。歌舞伎劇を中心として見るときの形式的動作は、主として第三第四にある。第三は俳優や舞手が、或る感情の高潮に達した瞬間を其のまゝぢつと彫刻的に留置せしめんとするもので、つまり感情に應じて姿態を作つて行くのである。ポスチュアリングである。所謂見え、その他種々の形式で、舞踊、能、歌舞伎に好んで用ひられる、最も重要な要素の一つである。

アーチヤー氏も文藝協會で舞踊を見た時には、第一にこの點を認めてゐた。然るに歌舞伎劇では之れを認めなかつた。歌舞伎劇でこの重要な表情的姿態を唯ロビンソン、クルーソーが海を見てゐるやうだといふ風に輕く見去つたのが、アーチヤー氏の評の一つの落度である。併し之れは無理のないことである。あんまりいゝ芝居を見たのでもなければ、いゝ俳優の藝を見たのでもないのだから、たゞ夫だけを見ての評なら、日本人だつて同じ感じを持つかも知れない。それに言語習慣の違ふため前後の意味や感情もしつくりと纒まつて領會せられてはゐなかつたらうから、其のポスチュアリングが十分の味を齎らさなかつたのは當然のことである。

斯んな風にして、いよ〳〵の問題は最後の一つ、すなはち輕業的熟練といふことに歸する。是れを明白に言ひ切つたのはアーチヤー氏の慧眼である。日本の歌舞伎劇にも舞踊にも、たしかに是れを濫用してゐる所がある。形式の美が段々行きすぎて、根本内容から離れて、終に枝先の邊で別の藝當をして喜ぶやうになる。その時が輕業である、舞臺の上の立廻りや舞扇の受渡しの類をはじめとし、輕業の分子が多分に侵入してゐることは、爭へない事實である。輕業師と俳優とが區別されてゐないといふ一語で之れを諷したのは適切といはざるを得ない。

勿論是れにも條件は附けられる。舞臺上の立廻りで、實際に撲りあつてはならないから、撲つやうに見せて實際は撲たないだけの豫備習練がいる。けれども其の豫備習練のおもしろみに釣り込まれて、二三合ですむところを十合も二十合も立ち廻らせて、立廻りそれみづからの滑かに進行することに興味を持たせようとするときに輕業師となるのである。問題は精神的內容を離れないと離れると、周圍に調和するとしないとにある。また舊來の舞踊や音樂は雜藝寄席藝といふ格式を脫しないために種々の手事や輕業を點綴して其の藝を花やかにして異まなかつたといふ理由もある。それが劇に入つて償ふべからざる累となつたのである。

すべて藝術は未熟といふことからも缺點を生ずるが、老熟といふことからも缺點を生ずる。未熟は下へぬけるし、老熟は上へ通りぬけて了ふ。老熟した藝術味は動もすれば細かい形式の味に耽けるやうになる。いろ〳〵の理由はつけて見るが、要するに藝術の眞生命から遠ざかるものたることは爭へない。過度の形式美に溺れるものである。歌舞伎其の他の舊藝術に浸入してゐる此の弊が外人の眼につくのは、もつとも事と思ふ。

其のほか純正な形式的要素たる表情的姿態、線形の調整、音樂的運動等が、其のグロテスクな誇張になつたり、無意味な形態や運動になつたりすると否とで是非の論は定まるのである。またそれらのものを劇に用ゐるの可否から言へは、歌舞伎劇と純劇との違同が問題になるのである。これらはおのづから別の論である。

その七

過去の京都には、實用でなく趣味の上から、加茂川が今よりも遙かに重大な關係を持つてゐたらうと思ふ。實用の上から

は氣候や水蒸氣の具合はどうか知らないが今では別に舟の便があるのでもなく、たゞ三條の橋下で大根を洗つたり、上の方で河原の砂利を掘つたり、洒し物をしたりする位のものである。昔も似たものであつたらう、加茂川はやはり實用を離れて京都の生命の一部をなしてゐる、東京の隅田川とは意味が違ふ。隅田川にも實用以外、趣味の方面は勿論あらうが、それすらあの通り、水量の多い濁川であるから、すべて複雜な大きい趣味に傾く、淺くとも清き流れのすみ田川とは、昔の江戸女の意氣にすぎないので、隅田川の事實と風趣とは之れに反してゐる、濁つた水がゆるく流れる情味は寧ろ耽溺的、頽廢的の調子に近い。清淺なのは却つて加茂川の特色である。

併し現今の加茂川は清淺を通り越して汚ない衰へた川になつてゐる。白河法皇が朕の意の如くならずといはれた昔の加茂川は、水量も今日より多かつたであらうが、今では水がいかにも涸れ〴〵である上に、川牀が汚ない、殊に河原の荒されてゐるさまは慘ましいやうである、水は少くとも、それが綺麗な河原に自然の瀨や淵をなして流れてゐるのだと美しいが實際はさうなつてゐない、砂利を取るために所きらはず穴を掘る、水勢が亂れる、堰をする、足場をつくる、埃がたまる、腐つた溜水が出來る。一つは今が京都の道普請橋普請の最中であるからかも知れないが、加茂川そのものは成るべく實用よりも趣味の立場から自然に則つて手入をしてやる必要がある、折角のこの美しい河をあゝして荒してやるのは可哀さうだ。

一丁の餘もあらうと思はれる川幅の大部分は河原になつてゐて、粒を揃へたやうな白、黑、靑の小石砂利が一杯に盛り上つてゐる、其あひだに所々草の生えた箇所が島の如く點在して、月見草などの咲く夕景色を思はせる。そのひろ〴〵とした河原を幾筋かの白い水が自然の凹みに從つて分れたり縺れたりして遙に下鴨の森の邊から流れて來る。そして橋の下あたりへ來ると、驚いたやうに列を亂して瀨の音を立てゝ、それが靜まると今度は鳥渡した淵になつて、悠々として下つて行く。

水は概して澄み切つてゐてちら〳〵する子バエの腸まで見え透くほどだが、所によつては青く薄濁りを帯びてゐる。日中はあちらこちらで乾す友禪の反物が赤やら黄やらの雲のやうに河原の風に動いてゐる。これから歳の暮へかけて最も盛んであるといふ。

三條の橋の欄干にもたれて見てゐるとやがて、夕暮の色が川下からも川上からも迫つて來て、水の上面だけが遠明の反射に光つて見える、同時に岸に臨んだ家の火影がちら〳〵と流れて落ちる。向ふの橋には車の灯ばかりが急がしげに駈る。橋は京都が本場である、四條大橋は洋式に改築中である、三條五條の兩大橋は新しいながら舊形を保存してゐる。殊に三條大橋がいゝ。擬寶珠欄干つきで、廣々と大様に反を打つたところは、横から見て美しく、橋の手前から見ても美しい。その上を心まかせに歩いて渡ることそれみづからが趣味であるやうな感じを與へる。忙がしく電車や自轉車で通りぬけるだけが目的の普通の鐵橋などゝは違つた意義を持つてゐる。

加茂川の夜は、夕涼みをはじめとし、螢に河鹿に夏の風情が主なのであらうが、冬の夜は月にも闇にも寂しい。つめたい風が川面から吹いて來て、暗い中に底光りのする水が、灯影をちか〳〵と顫はせる、川瀬の音が石を摺るやうに聞える。さういふ夜が更けて、夜半に近くなると、はじめて名物の千鳥の聲が「ちゝ」とも「ぴゝ」とも聞こえて來る。河原を飛んで行く姿は見られないが、風の寒くなるにつれて鳴く聲が澄んで來る、絃歌の聲と紅い燈火とを流し去つた後の、冬の夜の加茂川はやはり此鳥を主人公にした世界である。

その八

今日は嵐山を書いて見る。京都はもう北山に雪が見えて、時雨まじりの落葉が頻りに窓の障子を打つてゐる。冬の嵐山、殊に懐かしいあの大堰川の水も、今日あたりは此の暗い雲の色を映していかに淋しく光つてゐることか、自分がはじめて嵐山を見たのは十年前、春もまだ早い三月の初めであつたが、當時の記憶は今跡かたも無く消えてゐる。身は嵐山にをつても心は遠く海の外を望んでゐた十年前の自分が、今年は夏から冬にかけて三たび同じ山水のほとりにさまようて、我が世我が心の移りゆく姿を遠く薄暮の雲の行方にながめやうとは豫期しなかつたことである。

嵐山は勿論春がシーズンであらう。自分は不幸にしてまだ春の盛りの嵐山を見ない。けれども嵐山そのものよりも、お室から嵯峨へかけての野の景色がどうしても春の盛りを思はせる。春も梅や櫻ではない、黄いろい菜の花と赤い桃の花とぽか〳〵する春の日の永さとである。群青で塗り立てたやうな見事な竹籔を通り越すと、ぱつと打ち開いた畑からは、一面に黄色な陽炎が燃え立つかと見える。その向ふにあの際だつて影の深い嵐山が靜かに浮び出て、はじめて此の邊の景色が整ふのであらう。嵯峨、お室はどうしても菜の花桃の花の情調である。

嵐山は櫻もよからうが、夏もいゝ、秋もいゝ、そして冬枯の寂しさも捨てがたい風情である。此の山が、あの邊の連山に擁せられて、くつきりと豊な翠の盛を彫り上げてゐる趣は、乏しい赤毛頭の中に濡羽の光澤を持つた黒髪を捌いたやうに目に立つ。すく〳〵と延びた赤松の林の強い青色と濃い陰影との埋高い中へ、すべての光線を吸ひ込んで了つて、山はいつもしつとりと濡つたやうな味を持つてゐる。この濃かな色調だけは夏冬ともに變らないで、たゞそれが一日中の光線の具合で、紫がゝつたり、黒みがゝつたり、錆色にぼかされたりするのみである。此の山のおのづからにして秀る一徳はこゝにある。

翠の地色の中に雲の模様の如く織り込まれてゐるのは櫻と楓で、春と秋との調子を變へるのは、言ふまでもなく是らの樹

である。そして夏は彼等も一色の翠を捧げて、烈しい太陽の光りを和げることに協力するが、冬は我れから先に衰へて、力の無い枝を川風に戰かす。斯うして移り行く情合のゆかしさを見せるものは櫻と楓である。強い松を仕手にして、優しい櫻楓を脇にした嵐山は、役者から言つても名木ぞろひである。

嵐山といへば、裾を卷いてゐる大堰川は其の中に含まれてゐる。其の水の淸くて美しいことは加茂川、宇治川など〻同じであるが、加茂川のやうな淺瀨川でもなく、それかと言つて宇治川ほどの大河でもなく、ちやうど嵐山の麓に沿うて或時は大河の位を備へた淵ともなり、或時は山間の急流の趣を持つた瀨ともなり、巖があり、河原があり、曲折がありして、遊び舟を放つに恰好な大きさである。餘りに漫々とした川だと物凄くなるが、大堰川は手頃な麗はしい川だ。

夏のはじめに行つたときは同行三四人の者が若さにはしやぐ心も美に輝く眼も、一番がけにあの凉しさうな山蔭へ吸ひ寄せられて了つた。瀨の音をなつかしみながら渡月橋を渡つて山の裾へ出る。今の渡月橋は安普請の假橋といふ感じで、高雅もなければ野趣もない、極めて散文的な不似合なものである。橋を渡り切つて幾軒かの家の前を拔けると川に沿うた木の下道で、空氣が靑く染まつて濕つてゐると思はれるほど、冷々とする。寫眞機械を肩にした人などがちら〳〵ゐる。川にはボートも一つ二つ出てゐた。山の方へ來て見れば、今度は水の綺麗なのが其ま〻には置かれない氣がする。そこの舟宿から傳馬舟を出させて、婦人連が橋向ふの茶店からサイダー、團子、果物、天龍寺納豆の類を積み込む。流れの中央に出ると、舟は漸く川上に向つて、船頭の櫂さばきにつれ瀨を切り淵を分けて進む。山の香を含んだ凉しい風が川面から舟の上、掛屋根の下を吹き拔いて吳れる。木蔭の崖に躑躅が咲いてゐるといつては舟をつけさせ、岩の窪みに小魚がゐるといつては手拭を持つて降りて行く。舷に倚りか〻つて手を浸すと、水がしゆうと音を立て〻水晶の花のやうに散つて行く。美しかりし其の

手、冷たかりし其の手よ。半日を興にまかせて谷の奥、岩の蔭と舟の行くところまで行かせ、大悲閣の下では半時間ばかり舟をすてゝ山に親しみ、下り舟も飽かず同じやうな事をして、夕暮に此山水と別れた。その夏の記憶を尋ねて、十一月の中ころ秋の嵐山に來て見れば、人出で、まるでお祭のやうな騷ぎである。紅葉の色は念つた程赤くないが、醉つたやうな、熟したやうな調子を持つてゐる。くすんで古色を帶びた所に落ちついた重味がある。

暫く茶店に休んだのち、なつかしきものゝ形見と、橋の袂に立つてゐた楓の葉の赤いのと黄色なのとを摘取つて歸つた。此の行は、高田學長その他の人々と一緒であつた。

さらに十二月の差し入りに、冬の嵐山が見たくなつて、ひとりで、曇りがちな淋しい日の午後から出かけた。

その九

山も川も自然はいつも眞劍であるが、周圍の設備などは、季節が過ぎるともうすぐ見るかげもなく變つてしまふ。電車をおりると、渡月橋を前に見て、掛茶屋の店の閉ぢられたのが、そこらの通りを亡びた町のやうに感じさせる。開いてゐる店もがらんとして寒さうである、貸ボートの立看板が無殘に引き倒されて、空屋の壁に投げかけられてゐる。川端に出ると、茶店の緣臺はがら明きで、赤毛氈のけば〳〵しいのだけが目につく。そこらの別莊の二階も戸がしまつてゐて、橋の上には人影が杜絶えてゐる。此の前にくらべて何といふ荒凉の景色であらう。橋に立つて川下を見ると、山奥から切り出した材木の筏が、寒水に浸つたまゝ一杯に繋ぎとめてある。上を見れば、ちやうど嵐山の上あたりから時々弱い日光が黄いろな夢のやうに川面、川原、橋板と反射の强さうな所だけを明るくしてゐる。瀨の音も、川原の砂利も、堰の棒杭も、みな白ちやけ

てゐる、淵の水だけが微な濁りを帶びたやうに靑ずんで、のろく流れてゐる。この水の靑みは山の色が映るからであるが、夏は澄んだ空を見る如くすき通つてゐて、身も心も浸りたいと思ふ程であつた。それが今日見れば何所かに暗い影を沈めてゐて、何だかもの凄い。その上を寒い風が落として來ると、一時に小皺が立つて、ぞつとするやうである。けれども今斯うして橋の上に立つてゐる自分は、飽くまで此荒んだ光景に胸を抉ぐらせて、それに耽つてゐたいと思ふ氣分である。自分の心もこの名所の冬景色の荒涼たるが如くに荒しつくして見たいと思つた。

橋を渡つて、例の山の裾を川上へと辿る。小學校の兒どもが二三人私を追ひ越して歸つて行つた後は、誰れも通らない。道には朽たの、赤いの、黄なのゝ紅葉が、深く積つてゐて、踏むたびに吸つてる水がじと〱と滲み出る。右手の川には、枝を出した木の下にボートや小舟が二三艘つなぎすてゝある。その中にも松、楓が一杯の落葉をして、舟は竝んだまゝ水の搖れるなりに緩く軋り合つて動いてゐる。左は山の傾斜に添うてすらりと丈の揃つた松林を下から見上げて通る。楓はもう大抵焦げた葉をちゞらせてゐるが、でも松の下に隱れて、ところ〲日の射したやうに明るく黄な色を若やがせてゐるのがある。冬の衰への中にせめて秋だけの若さでも、こつそり身に留めて樂んでゐるのであらう。すぐそばの山と山との谷間に落ちる水の音も、今日は耳にしみついて、その奥から吹いて來る風は鋼のやうに冷たい。上の方では山がら、みそさゞえの鳴く聲が僅に冬の山の沈默を破る。そのうちに段々夕暮ぢかくなつて、眼の前の山までが黑く霞んで來た。想ひ出のある所では、五分間もぢつと佇んで暮れ行く水面を見てゐると、涙がにじんで來る。河原で鳴く鶺鴒の聲に驚かされては、また歩き出す。大悲閣下まで來た時は、もう五時近くであつた。そこからは丁度舟があつたので、それを出させ、茶店から正宗の瓶詰と嵐山土產の杯とを入れさせて、船頭と假りそめの醉を貰ひながら、寂しい川面を、山蔭の夕靄の中から橋の方へ漕ぎ

下らせた。途中から秋田の衆といふ夫婦ものも便乘させたが、話はない。膝を抱いてつくねんと夕雲の空をながめてゐると、舟はいつか山と反對の側の降場に著いた。寒い風の出た中を、自分も夫婦ものも、三人ながら默つて考へ込んだ顏をして河原道から往還の方へ拔けた。跡を見ると、嵐山も、もう暮れてゐる。舟宿の後の暗い松林の中で二人の男が差し向ひで焚火をしてゐる。其赤い火ばかりがとろ〳〵、とろ〳〵と動いて見えた。之れが自分の此の山に別れた最後である。さらは、嵐山よ。

その十

京都のこの頃は、殆ど毎日、二三十分おきに時雨たり晴れたりして、日によると、暗い霧が一日町を掩うてゐる。川向の岸の枯柳と片側町だけを殘して、あとは一ぱいに霧の幕が灰色の空と果てもなく續く。その中に東山の輪廓だけが薄く透けて見える。下手の欄干橋の上を、すらりとした姿の京女がコートの袖を重ね、蛇の目の傘をさして通るのが繪のやうだ。霙まじりの寒い〳〵雨がまた一しきり降つて來た。こんな日には外へ出る氣にもなれない。小さい部屋に置炬燵でもしてゐるのが一番いゝ、京都の冬はどう考へても炬燵式だ。この邊の古いしもたや町を見ると、紅殼塗のくすんだ細目格子を狹い間口に立てきつて、三尺を二つ割にした潛り戸から身を橫にして這入つて行く。奧へ〳〵と穴のやうに竝んだ室が多くて、二階や突當りの、加茂川原に面した部屋にでも通ると、もう表へ出るよりは、其の部屋の裏窓から世間を眺めて、炬燵にでもあたつてゐる方がよくなる。表はまるで生物の氣もないほど、薄暗く立てきつて、奧へ〳〵と明るくして行つてそこから一家團欒の氣合ひもすれは、低い三味の音の漏れて來る家もある。商家や花柳街以外、斯ういふしもたやの情味の多く殘つてゐ

るのは東三本木邊である。但しこの邊は今では衰退した京都の部類に屬する。ちやうど城下の士族屋敷の衰へたのを見るやうに、此のあたりは昔の榮華の荒んだ跡といふ、ひつそりした趣を持つてゐる。どこか寂しい、荒廢した空氣が漂つてゐる。

昔の東三本木の榮華は、今の木屋町よりも、もつと複雜なものであつたらう。艶であると共に雅であつた。絃歌の町であると共に文藝の町でもあり、また政治の町でもあつた。明治維新の際の若い志士連が、妓を擁し酒をあほつて天下の安危を論じたのは、多くこゝであつたといふ。思ふに戰爭と政權と酒と戀との間に放浪し得るものゝ生活は最も緊張した生活、最も幸福な生活の一つである。之れを歷史家が表面から型に入れて讃美する時に、國事に奔走し生死の間に出入した者といふ事になる。其多幸な人々のロマンチックな生活の舞臺が此の邊にあつたのである。木戶孝允の夫人となつた人の家、孝允が其の家の天井にかくまはれて一命を免れたといふ妓樓の跡もこゝにある。すぐ後の河原では宴席を襲はれた志士の一人が裏へ逃げた爲に待ち受けて見事に斬られた。今この附近でさゝやかな旅館や料理屋をしてゐる家の前身には、大抵斯ういふ歷史がついてゐる。また自分が今ゐる內の二三軒さきには、夫の山陽の遺跡がある。表は幾棟かの貸家になつて、やはり賴家の所有であるといふ、其奧庭の中に茶室式な一棟の庵が保存せられてゐて、山陽はそこで筆硯に親しんだのである。舊藩主淺野氏の當主が謙遜な態度で、山紫水明處の額を揭げてゐるのはいゝ感じである。前は加茂川を隔てゝ東山に對し、後は元の母屋の庭形を保存して、立木、石、谿の配置など、その頃のまゝであるといふ。不斷はしめ切つたまゝ、殆ど訪ふ人もなく、京都名所の數にも這入つてゐない。亭の掃除は借家人が引受けるのだといふ。自分等を案內して吳れたのも其の家の娘さんであらう、白い美しい顏が、山茶花か何かの淋しい青木の蔭から見えて、横手の枝折戶を明けて吳れた。山陽の硯の墨

汁でも啜つてゐさうな人だといふ感じが、同行の高田學長と自分との胸に期せずして起こつた。

山陽の家のちやうど眞向ふあたりに、川を隔てゝ梁川星巖夫妻の家もあつたが、今は取りこぼたれて跡もない、道普請の假小屋になつてゐる所ださうだ。よく夫婦喧嘩をしたものだといふことが、土地の老人の話に殘つてゐる。

斯んな風で、東三本木の今のさびれは言ふまでもないが、其のかはり、夜などは實に靜かである。今宵も、もう十時を過ぎた。橋を渡る人音も絕えて、さあ／＼といふ川瀨の音が、風につれ、遠く近く、空間を一ぱいに充たしてゐる。置炬燵の上にひとり頰杖をついてランプの火影を見つめてゐると、心は全く空になつてその跡へ悠久の淋しさといふやうなものが、微な愁を滲ませて來る。十一時少し前、いつもより稍おくれて、例の千鳥が鳴いて通つた。今夜の聲は川原の石に染み入るやうに銳い。昔の戀人等がやるせない「別れの夜」を想ひ出す。

ね。別れませうね。
どうせ添はれる仲ぢやないんだから、
……………………
別れてゐても、
お互の心は信じ合ひませうね、
……………………
ね、ね、もう私の言ふことが聞えませんか、
まだそんなに離れてはゐないでせう？、

私はね、
遠い〳〵向ふに、
かあすかに、
極かすかだけれど、
光るものを見てゐます、
それをたよつて行きますよ、
生きてる限りたよつて行きますよ、
道が怖い？　暗い？
かまひませんわ、
どんな事でも忍びますわ、
だから、だから、
ね、あなた、
あなたは其の光る所を動かずに居て下さい、
ぢつとしてゐて下さい、
ぢつとして、ね、
ぢつとして、ね、

幾百年の昔から「別れの女」が斯ういふ夜半に斯ういふ涙を幾度くり返したやら。

名古屋紀行

一

今度學校の用事で初て名古屋へ行つた。歸りは伊勢に廻はるといふので幾らか觀光の餘暇もあらうと、出發の前夜、吉田東伍氏の『地名辭書』や田山花袋氏の『新漫遊案內』やそれから近頃出た『東海道車窓名勝』とかいふ本、古い所で『東海道名所圖會』など手元にあり合はすものゝ拾ひ讀みをした。熱田神宮の由來から、名古屋城の草創、金の鯱は鱗の數が何枚あつて、加藤清正の献ずる所だといふ事まで記憶して、そして清正が斯んな事をした當時の心理まで想像して見た。

一方にはまだ明日名古屋でやる筈の講演の腹案がうまく纒まらないで居る。地方で土地の有力者といはれる實業家、官吏、教師、學生、商人などいふ雜多の人を集めて、さて文學の講話をする。今日の我が社會狀態では是れほどやりづらい仕事はたんとあるまい。一行の中には國際法の大家もゐれば、支那通の大家も圖書學の大家もゐる。此等の諸家の演じてゐられるのを聽くと、如何にも心安さうで羨ましい、例へば「今日の我が外交」と一言言つても聽衆は其の言葉の背景を理解して聽

耳を立てる。處が我々の發する言葉になると此等多數の聽衆には最初は唯空しい音に過ぎない。「文藝が」と言ふ前に先づ「文藝とは」と說き出して其の言葉の背景から說明してかゝらなくてはならない。骨が折れて折り栄のしないことである。是れを思ふと、東京がなつかしく、學校の講堂や周圍の人々がなつかしくなる。

二十四日朝八時三十分發の急行列車が名古屋に著いたのは四時何分かであつた。熱田の森の見える頃から夕立ともザァ〳〵降ともつかず、薄日の中に細い雨が斜に縞目のやうに一しきり通り過ぎた。何となく柔かいやうな雨だと思つた。やがて列車が止まつて、一行は名古屋停車場に著く。プラットフォームに降り立つと、今まで咽ぶやうな車中の暑さに醱酵させられてゐた頭腦が、一時人込の中に吸込まれて、自分も何がなし愉悅い氣持で、一緒になだれを打つて改札口へと流れ出る。重さうな大鞄を、赤帽も賴まず引きずるやうにして持栫へ〳〵行く若い婦人や、同車したドイツ人夫婦の漫遊者らしいのが、瘠せた通辯をつれて、男は思ひ切り大股に、女は輕く小走りに引き添うて行き過ぎる。ふと見ると自分の一行はもう柵の所にかゝつてゐる。あわてゝ追つかけるやうにして共の跡につゞいた。但し荷物萬端の世話は一行のガヴナーたる田中氏始め出迎の校友諸氏が燒いて與れられ、改札口を出ると、旅館の番頭が待ち受けて居て、用意の人力車で千秋樓へと送り込む。旅の面倒といふものゝ無い旅行だ。

此の度の用務といふのは名古屋及び津で開く早稻田大學の校友會及び巡回講話に出るためといふので、朝の列車には自分の外、市島氏、田中氏、また國府津迄は大隈伯も別莊行で同車せられ、有賀、靑柳の兩氏は夕の列車て出發の手筈であつた。

二

名古屋の人力車の幌の綾繻子張なのが目についた。是れは上方風なのだか何うだか知らないが、兎に角東京とは違つてゐる。宿へつくと、『名古屋新聞』の記者が見えて、何が一番目に留つたかと問はれたから、是れを眞つ先に擧げて置いたが、東京の護謨引布に比べて、著しく柔かに見える。圓くしなやかに見える。繻子張の蝙蝠傘といふ形だが、背後の垂の風にピラ〳〵する所などは優しい上方式を發揮してゐる。但し新しい內は善さゝうだが、古くなると如何にも薄ぎたなく、だらしなく、よぼ〳〵して見える、是れも上方式だか何うだかは知らない。

停車場の前から一直線に大通りを上つて行くと、兩側の建物が低いから、殊に町幅が廣く見えて、眞中の電車路、兩側の街樹の列、それを透して遙の行當りに日淸戰爭の紀念碑とかゞ立つてゐる所は、町の位取が頗る西洋めいて、東京といふよりも、ずつと飛んでベルリンあたりにでもありさうな構である。さうかと思ふと兩側の建物が、殊に停車場附近など、概して扁平な平たい疲れた家並で、強い盛んな色や線は一つもなく、灰色がゝつた舊日本の面影を留めたものであるから、何となく不調和に感ぜられた。戰捷紀念碑といふのが、たゞ大きな砲彈か何かを臺の上に立てた恰好なのは、藝術が無さ過ぎて是れはまたヨ！ロツパ式でも無いプロゼイックな日本の一面を現はしたものだ。

旅館は榮町の千秋樓と言つて、先年大隈伯が來名せられた折に復活した家だといふ、玄關であつたかに前島密氏揮毫の樓名の額が掛けてある。

奥まつた東南明の二室を打ち通した部屋に導かれて、何よりも先づ上著を脫ぎすて、額や頸ににじんだ煤まじりの油汗を

拭うて一休みと思ふ所へ、もう出迎へられた諸君や待受けられた校友が續々見えて、挨拶が一巡型の如く濟む、湯が沸いてゐるといふので、御免を蒙つて湯殿へ飛んで行く。湯船の檜の香のまだ失せないのに八分目の湯を湛へた中へジツと身を沈めると、痛快な新湯の刺戟が疲れた神經を蘇へらせる。一風呂浴びて、頭に石鹼の泡を思ふさま揉みつけ、水道栓の口金をねぢて、心ゆくばかり冷水に其の頭を打たせるときの樂みは又格別である。(其の實水道栓は水道でなくて井戸に水を汲み上げるのだといふ、水の出が吝くさい。湯槽の中なども肩まで入れゝば溢れるほどの湯が張てあつて欲しい、アバンダンスの味が無い、是れだけの大都市に水道が無いとは驚いた)是れで兎も角も惡夢に襲はれたやうな一日の汽車旅とあの咽るやうな隧道の重苦しさを洗ひ流し、廣袖の浴衣に團扇の風を含ませながら座敷に戻る。

座には氷の打碎にサイダー、平野水、生菓子、麥湯などが出てゐて、コツプの氷に葛饅頭を冷したのを突つきながら居住を崩して談笑するといふ有様、自分には殆んど凡て初對面であるが、一行の他の諸氏には永い懇意の人々が多いと見えて、如何にも親しさうで、傍で聞いて居る自分まで善い心持になる。同窓同學といふことも他の愛の力と同じく、時を隔て處を隔てゝ始めて其の覊絆力を現はして來るのだ。嫉妬もあれ、排斥もあれ、競爭もあれ、此等のあらゆる社會事情と對立して校友といふ一句が持ち來たす一種の平等的情味は、斯んな場合に最もよく顯はれる。地方に出て校友の世話になるといふ事の愉快な一面を自分は今度はじめて經驗した。座中に名古屋新聞の社長といふ一紳士があつて盛に談笑する、相變らず御盛でせうと市島氏が言ば、先へさう言はれると何とも早や御挨拶のしやうが無くなるとカラ〳〵と笑ふ。

其の顏をじつと見てゐると、今まで丸で記憶に無かつた面ざしがぼんやり心に浮んで來て、何うも見たやうな人だと思ふ名を聞て始めて小山松壽君といふ昔の暴れ者であつたと知れた。自分とは同年期頃の寄宿舍仲間で法料の人、賄征伐のチヤ

ムピオンであつたのだ。それから色々と其の頃の昔話が出て、十四五年前の若い夢を辿る、現に一行のガヴナーたる田中氏は、其頃すでに寄宿舍の舍監であつて、その人から屢々嚴責をも蒙り、箱辨當の申渡をも受けたのだといふ。自分はまた寄宿費の足り無い爲に此の人の役室へ何度行つて延期を嘆願したかも知れぬ。そして結局規則の表は枉げられぬとあつて表面一時退舍したことになる。自分の部屋へは錠をかけて置いて、必要な道具だけ持つて、金の屆くまで他所の下宿に引移る。斯んな事が二度や三度はあつた其の頃の事を思ひ出すのである。

三

着いた晩が商業會議所での校友會、夜の十一時頃宿に戻つて、市島田中の二氏は明日の要務の準備に忙しく、自分は電燈の下に腹這になつて、名古屋の地圖など取り寄せて見る。凡て地圖を見るといふ事は、自分には最も興味ある業の一つだが殊にそれが是れから遊覽しやうといふ市街の圖などである場合には、興味は一層實際的になつて來る。案內者を待たないで自分で地圖によつて、目ざす所を探し當てるのは愉快なものだ。ヨーロッパ旅行の際なども其の方針を取つて、根氣よく地圖と首つ引をするので同行の小山溫君を驚かした。名古屋も一つ同じ筆法で一見しやうと思ひ付たのである。所が見物案內の項目に擧てあるもので、是れは見たいといふやうなものは一つも無い。勿論縣廳だつて、紀念碑だつて、見やうによつて面白くないことも無からうが、自分には見る氣になれない。殊に此暑さと、飛脚のやうに忙しい旅行ではそんなものは丸で算中に入らない。第一に見たいと思ふのは大須觀音の夜町が千日前式だといふから覗いて見やう。次に例のお城が兎も角もある。それから此の邊は一帶に眞宗の土地だから本願寺の別院といふのを次手に見やう。あとは町の光景、人情風俗といふ

やうなものだが、是れは一瞥くらゐでは分りさうもない名古屋料理と西川流の踊りとは明晩の河文の懇親會で見られるのだらう。

斯んな事で寢についたのは十二時過であつた。有賀青柳の二氏は今夜一時過に着く筈だから、麥酒を冷して、湯を沸かして、停車場へ迎に行つて呉れ、忘れるなよと田中氏が女中に念を押す。大きな蚊帳の中へは市島氏と田中氏、自分は眠れない恐れがあるからと小さい蚊帳に一人、座敷を並べて寢たが、何うも眠れない電氣もすつかり消して見たが、寢苦しい。さうなると考へ出すのは明日の講演の腹案だ。是れがまだ一向に纏つてゐない。

日本在來の趣味が德川期に極まつて小化單化美化された經歴と、西洋のギリシヤ趣味キリスト教趣味などゝの對比から、今後の趣味を何う導くべきかといふやうな題で話すつもりにはなつてゐるが、一般聽衆に分かつて、面白くて、纏まりがつくやうに行くか何うだか、頗る疑はしい。あの例をあそこへ嵌めて、あの理論はあれ位に止めてなどゝ、工風して見るがうまく行かない。まあ是ただけの材料で、取捨長短は其の場に臨んで何うともするさ、自分の演説は何時もその流儀だと思つて諦める。其のうち表座敷の方で人聲がする、廊下を通ふ女中の足音が忙しげに聞える。着いたのだなと思ふ。田中氏もまだ眠らなかつたと見えて、起きて世話を焼きに行つたやうだ。幹事の役も容易ぢやない。何處かの部屋で二時の時計が鳴るのを聞いて、しばらくして眠つたと見える。

四

七時頃に眼を覺ますと、半ば繰つた戸の隙から朝日がさし込んで、暑苦しい。前後して皆起きた。顏を洗ふ廊下で青柳氏

有賀氏に會ふ。お疲れでせう、といふやうな挨拶を交はして、朝日の差さない横手の座敷に戻ると、庭の青葉が齎らす朝冷の氣が心地よい。全體に家の造りが例の奥深い細々として、密やかな風で、庭なども狭い地坪の向ふは直ぐ九尺の板塀で、其の上部一二尺許りが格子になつてゐる、其の前へ松、楓を始め大柄の樹木を軒に攻めつけて植ゑ込み、石を惜氣もなく置いた合間々々の地面は、苔を着て、濕氣の香ひを絶ないといふ誂へである。椽先へ座蒲團を持ち出して、團扇を使ひながら茶を啜つて東京及び此の地の新聞を讀む。不斷は何の興味をも覺えない地方新聞が、其の地に來ると不思議に好奇心を刺戟する、却つて東京の新聞よりも先にそれを讀む。論說から、市會の話から、東京のですらさして興味のない記事までが、皆意味を持つて其の地を說明して吳れるやうに思ふ。一行の事を書いた記事も無論讀んだ。そして其の書き振りの精粗確不確の上に其の新聞紙の性質技倆意志等をも揣摩して見る。

今朝はじめて名古屋の調膳に向ふ。茄子の味噌汁、茶碗盛はまづい。鮎の鹽卷に酢をかけて喰ふ、之れは自分には始めてゞちよつと變つた味だ。百合の甘煮、梅干の卷いたのに砂糖をかけた猪口。

今日の講演には暑中だから精を養つて置く必要があるといふので、生卵の要求が大分あつたが、自分は宅で手飼の鷄の卵を食ひ馴れてから、買ひ卵の黴くさいのを吸ふ氣になれなくなつたので止めた。其の代り晝食には名物の鱸を食はせられた。青柳君は更に其生肝をまで吸つて元氣をつけて居た。

八時半、市島、田中の二氏は基金募集方面の要務を辨ずるために外出、有賀氏は疲勞のため宿に殘り、青柳氏と自分とは此の半日の暇で名古屋を見物することにした。先づ電車で熱田へ行かうとの說もあつたが、時間の都合で止め、兎も角も城を一見しやうと思ふ。それには例の地圖主義で、徒歩しやう、とも思つたが、何にぜよ九十何度の大暑に燒けた地いきりが

恐ろしく、人力車で行くことになつた。浴衣がけで、久しぶりで寫眞機を肩にかけた。途中の店でフヰルムの手形十二枚卷を買ふと、一圓七十五錢だといふ。歸朝してからフヰルムは一度も用ひなかつた爲、相場は知らないが、馬鹿に高いと思つた。

途々車夫がうるさく說明をして吳れる。石垣の裾の空濠から、三の丸、二の丸、お天守、大手門と聞きつゝ、正面の、最も樓に近い所まで來て車が止まる。降り立つて見物した。遠見に見た金の鯱、名古屋人士の誇りとする城樓の棟は、稍近く見られたが、併し位置が極めて惡い。城全體のかゝりも見えなければ、それかと言つて鯱だけが鮮かに見えるほど近くもない。もう是れから內へは這入れない。城內を見物するには位階何等とか以上でなくては願つても駄目だといふ。例の通り無官のものは國民級にされてゐないので、つまらない氣持がして、引きかへさうかと思つたが、今少し離れて、全體の形勝でも見て置かうと、跡戾りして右手の練兵場へ廻つた。

玆からは、ちやうど日を負うて城を見る形になる。うんと踏ん張つた石垣の幾重かの上に、例のクラシカルな、冷え切つた色や線が、威壓力其のものゝ權化のやうに積み重ねられてゐる。如何にも靜で如何にも重い。面白味は此の全體の輪廓に存する。金の鯱の、日光に反射する賑な色が、果して城の印象に調和するか否かは疑問た。玆では靑柳氏を圖中に入れて寫眞を取る。

五

東本願寺も流石に大きな構へだ。履物を下足番に托して置いて恐ろしく汚ない階を上り、本堂の中に這入ると、寺に通有

な一種の重たい空氣が頭を押へつける。向ふの柱の根に、萎び切つた一人の婆さんが、尼のやうに禿た頭を垂れ、體を二重にして一心に拜み入つてゐる。間が廣いために豆ほどの大きさにしか見えないが、舊い誠の信仰の、是れらが最後の一粒なのだらうと思ふと、おもしろい光景だ。堂の右手の破風の下にあるのは左甚五郎の彫つた何だとか聞いたが、仰見るさへ目がぐら〳〵する此の炎天にそんな由緒が我等に何の刺戟を與へやう。瓦や土の照りかへしの烈しい門内を逃げるやうに出て車に飛び乘てもう何處へも寄るなと命じて、一直線に宿へ歸つた。十一時過ぎだつたらう。

名古屋見物はこれだけであつたが、その以上見たいと思ふ所もなかつた。たゞ町景色だけはと思つたが、それも其の夜は暇が無くて、翌朝はもう出發といふ事になつて了つた。是だけは惜かつた。

午後一時から縣會議事堂で講演會が開かれ、午後六時からは再び商業會議所で經濟會の招待といふのがあり、九時頃から此の地第一流の河文といふ料理店に懇親會が催された。斯う忙しいと、人間はたしかに思想の動物でなくなつて了ふ。

此の日午前に來訪せられた人々には『名古屋新聞』の記者、また二三年前早稻田の文科に居た中村孤月君（『新愛知』に居ろ）などがある。中村君は特に自分の講演を期待してゐる聽者の種類などを擧げて、察ろそれらの人々を滿足させるやうにと、親切な注意を與へられたが、この度の講演會の一般的な性質上、何うもそれが思ふやうに行かなかつた。

河文の記事で此の文を終らう。

入口は小さいが、奧へ行くに從つて、庭樹の生ひ茂つた間を殆ど迷宮的に廣がつてゐるのが此の有名な料理店の構造である。恐らく晝でも薄暗いやうな小座敷が幾つもあつて、淺酌低唱の聲がそこら中から聞えるといふ趣味なのであらう。

會は表の大廣間で開かれた。自分等一行を正座に据えて、市の有志、校友、何れも粒選りの紳士諸君が六十餘人の大一座

である。座中には早い頃慶應義塾を出て今は此の地の三井系に要地を占め、會話の中に巧に英語を挿む半禿頭の好紳士もあれば、早稻田を明治十八九年頃に出て現に市會議長の要職を帶びる上遠野氏などもゐる。其の他似たやうな人が大分ゐる。斯ういふ人々と一座するたびに、自分は一面に新代の誇りといふやうなものをも感ずると共に、一面、年處世故の上に弱輩であるといふ小さをも感ぜざるを得ない。二つの感じが混合した擽つたいやうな變な氣持になる。

今夜はくつろげといふので、禮服を貸浴衣にかへ、一風呂浴びて來た頃から膳が出て、酒が一巡めぐり、發起人側の挨拶それに對して、市島氏が、お禮に早稻田大學第二期計畫の要點を綯ひ交ぜて述べられる。辭令は中々老錬なものだ。それが終ると、もうそろ〳〵杯の交換がはじまる。座中に酒の氤氣が漲るにつれ、お客の野太いバス聲と藝妓の華奢なソプラノの聲とが一緒になつて潮のやうに湧き立つ。

大分上機嫌になつて來た一行中には、型の通り名古屋女のタイプに就いての議論も始まつた。現物を前に据えて置いての論だから間違つこはないが、概して關東の張のあるのと上方の人形式なのとの中間だらうといふこと、但しそれにしては七分まで上方式なのが純名古屋で、關東式の分子の加はるにつれ、近代化し若しくば雜種化したのだらうといふ說であつた。別に新しい說とも思はんが、そんな事かと謹聽して居た。すると側の方で名古屋特有のものを何か一つ聽かして吳れといふ注文が出る。「桑名の殿樣」々々々々々といふ聲がかゝる。侍つてゐた蝶吉とかいふ老妓、これがおのづから一同を率ゐて居て、踊は西川石松門下の名取、先達つて遙々有樂座へ上ぼつた中の一人であるといふ、それが傍の紳士と頻りに妥協をしてゐる。あれ一つだけ拔いてなら、やりますといふ事に話が纏まつて、蝶吉を始め、四人の舞妓、袖を連ねて、桑名の殿樣何うとやら、しぐれで茶漬を召上る、といふやうな四曲つゞきの手踊に大喝采を博した。實は五曲一續で、歌も曲も振りも大同

小異であるが、其の中の一つだけ因州因幡式の猥がはしい所がある爲に省いたといふ。跡の分で見ると、さう卑しい物ちやない。伊勢音頭、乃至普通の盆踊的な無細工なものでもなく、それかと言つて纖細巧緻な振事的なシンとしたものでもなく、或程度まで日本特有の舞踊の味が殘てゐて、それで全體には盆踊よりずつとリフアインされたもの、四人手を揃へて踊る趣は寧ろ西洋のバレーなどで見る活動的、統一的な所の加はつたものである。單純だけれども、それだけ東西折衷の味があつて一種中間的な手踊の好例と見られる。跡で友人に此の話をすると、友人は、大に笑つて、君も桑名の殿樣なんぞ捉まへて野暮な事を言ふものだと言つた。けれ共兎に角おもしろかつた、踊る方が先づ名手であつた爲もあらうが、自分は今度の名古屋見物の興味の中心を此の踊りに置く。

料理は成程うまい。自分の鈍い舌にも、東京の强い味でなく、京都の淡い味でなく、濃厚といふのも當るまいが、まづ婉佞な味、舌に媚びつく味といつたものだと思つた。

座の亂れた頃、小山氏が三味線彈を連れて來て、自慢の歌澤を聞かせた、賄征伐の撰手と歌澤、二つの點の間には餘程の距離がある。其の距離を此人は一足飛びに越したのだらうか、それとも一歩々々に埋めて行つたのだらうか。などと考へてる間に、片方では、年輩の上遠野氏が、胸毛の邊まで眞赤になつて、障子に寄りかゝたまゝ、お國名物の秋田甚句を二三番、さびた聲に蠻味を交へて聞かせた、是れには一同が喝采する。老武者が久しぶりに若返つての歡待ぶりだと思つた。

着物は先に送らせ借浴衣のまゝ、車に搖られて、醉つた肌を一杯に風に吹せつゝ、宿に歸つたのが十二時頃であつた。明日はもう伊勢へ立たねばならぬ。忙しいことだと思ひながら寢に就く。

繪團扇に鳴海絞の香かな

小品

風を追ふ

新たに濯いだ、糊の硬い浴衣を着て、籐枕一つ、團扇一本、眞晝の明放した八疊にごろりとなる。別に書物を讀むでもない。軒つゞきの空には雲の峰一つ立たうではなし、たゞかん〳〵と照つてゐるばかり。

我が家の地つゞきは寺の後の墓地である。其の向ふの高臺に槻の大木が一本、人間ならば智者、悟つた人とでもいふ風に突きぬけて立つてゐる。

すると風といふやつが、魔物か何ぞのやうに、何所からだか分からぬが、さあつと渡つて來た。まづ一番がけに此大きな木をためしてやらうと、形こそは見えぬが、小枝の股をも葉の附け根をもひた〳〵と取り卷く、くすぐつて居るらしい。神笑びとでもいふのか、蛭子樣の繪のやうな顔をして、槻の木は笑ひ出した。あゝたまらぬといつて、胴から上を搖ぶる、搖ぶつてゐる！　搖ぶつてゐる！　もういい頃と、風は取つちめにかゝつた。どうと音がする。大分手きびしくぶつかつたらしい。槻はどうするだらう？　と思ふと天邊の方の葉がきら〳〵と日を受けて光つた。併し木は依然として景色を變へない、笑つてどよんでゐる。見るからをかしさうだ。

魔物は、これではならぬと、槻を離れて、直ぐ下の杉の木に移つた。杉の木は二三本、意地づくで背競べをして、つうつと一夜の中にでも伸びたかのやうな姿をしてゐる。下の方には枝も何もない。百日鬘のやうにもや〳〵髪を伸ばしたもの毛剃九右衛門の幽靈はこんな風かと思はれる。隣のは、首のあたりからむしやむしやと短い枝が出初めて、一方は生え廣がつてまだ尖つて行く。ちやうど大きな青龍刀の碧血に銹び固まつたやうな形である。側に一本小さいのは、埃だらけの亂髮の乞食が、錢呉れぬ人を呪咀してゐる姿。風はさつと此の邊に落として來た。どうするかと見てゐると、毛剃はちよつと頭を振つたが、枝と枝との間がちらりとうけて、白い齒を出したやうに思はれた。冷笑してゐるらしい。青龍刀は身動きもしないで、反抗力の強いところを見せてゐる氣合、乞食は空を向いてはつたと睨んだ。

やがて風はこゝをも引き上げる。横手には栗と櫻とが、栗は綠り、櫻は青の葉を交へて立つてゐる。綠の葉は薄く光線を吸ひ込んで、優しい息にしてほつほつと吐き出してゐるやうだ、何所かの若後家であらう。櫻がいふやうは「前世のゐにし淺からず、つらい義理にてわかれ〳〵のおん身と我れが、またも墓場の土に栗よ櫻と生ひ交はす、夜半に墓吹くは業の風、業の風には葉も騷がすな。魔が點す灯の夜毎に懸けて、此の契り必ず渝るまい。」栗はつく〳〵聞いてうなだれる。その時ちやうど風は、兩個が中に割り入つた。枝と枝とは、離れまいと絡み合ふ。西から押せば、栗は弱いか、押されて櫻に取りすがる。北を押せば、櫻は遣らぬと大手を擴げて後を庇ふ。併し風の攻手の強いのには叶はぬ兩個一緒に、南へ東へと揉まれるままに靡いてゐる。とんと小舟で海上に乘り出した男女が、颶に煽られて取り亂してゐるやうである。世間の口の端がうるさいと、廣い大灘に漕ぎ出して、そしてこんな具合に溺れ死んだ二人の面影が、今も此の木に殘つてゐるのではないか。

風はこゝに凱歌を揚げて、さつと其の前の枝豆畑に落ちた。伸びて數寸に及んだ枝豆の莖や葉は、音もなく押し合ひてゐる

る。「我等は地に匍ふ賤しきもの也。」といつては、肩をすくめるやら、同列の者とつゝき合ふやらして、ひゝと忍び笑ひを漏す。之れには風も拍子抜けがして、すつと通り過ぎさまに、立ち丼んだ唐黍を一ゆすり、さら〳〵と爽な葉ずれの音につれて心に含んでゐた露の珠がはらりと落ちた。おやと思ふ間に、風は我が座敷へまつしぐら、浴衣の袖が膨らむ、肌がひやりとする、嗚呼、今しがた槻を渡り、杉を渡り、栗、櫻を渡り枝豆唐黍の葉を渡つた其の風が、今は我が身に這ひかゝつて來た。

我れはこれから晝寢の夢にでも入らうか。（三十九年八月）

幻滅の一日

一

奈良の大佛、奈良漬、奈良人形と名物の多い中には、今流行つてゐる浪花節の奈良丸も勿論土地の誇りの一つだと云ふ。こゝの雜誌店などを覗くと、奈良丸講演集といふのが目立ち易い場所に飾つてあつて、同人の語物を速記した活版刷の小冊子である、之れは京阪の書店にも折々出てゐる。そして店番の小僧などが、暇のときには、その中の一節を、いきみ聲を殺して朗誦してゐることがある。

奈良では之れも名物の刄物店が春日神社の横あたりに軒を並べてゐる。或日の午後であつた、その取りつきの一軒で、構へも可なり大きい家の近くまで來ると、ちやうど通行人の斷え間で、あたりは森閑としてゐるが、幹に秋の日の射し入つた店先から變な聲が聞えて來る。何の氣なしに覗き込んで通ると、店の手代らしいのが、下駄をつつかけたまゝ、店の框に腰をかけて一心に『奈良丸講演集』を朗讀してゐる。見れば當世風の若い男で、それが浪花節をやつたからと言つて、別に氣にとめる程の事でも無いから、其のまゝ通り過ぎやうとすると、私を見つけた其の男は、いきなり『講演集』を投げ出し、入

口に飛んで出て、くの字なりに腰を曲げ、右の手を伸べて自分の横手後の方を指しながら、底力のあるいかめしい口調で熱心に辯じはじめた。あとさきは忘れたが「えゝ手前は三條小鍛冶何近、刀劍及物類一切の御用を承ります。ちよつと寄つて御覽になるだけはお差支ございますまい。御覽だけを願います。手前ども祖先が打ちました名刀、殘らずあれに陳列してございます。新刀古刀、色々お目にかけます。切味のところも御覽に入れます。たゞ御覽になるだけでもよろしうございます。」

といふやうな趣意で、その滑な、型に入つたところは淺草の居合拔を連想するが、聲柄は若いに似ず錆のある、野太い響を持つて下品な、しかし人を脅す力のあるものであつた。

いかさま古い店と見えて、木柱も黑びかりがしてゐる。奧の薄暗い邊に刀掛などがあつて、一筋流れ込んだ秋の日光がそこに漂ふ陰影を僅に破つてゐる。むかし街道の上り下りに立よつた田舍の武家たちが、あの中に澄み切つた秋の水のやうな刀身を拔きそばめ、憧憬の眼を輝かしながら鍔元から見上げ見おろしてゐたかと思ふと、覺えず足が止まつて、其の家の前に立つた。すると手代は占めたといふ風に座敷へかけ上り、手早く奧から品物を持ち出して來たが、上り口に伏せてあつた『奈良丸講演集』を見事に二三間蹴飛ばした。書物は一直線に飛んで來て、私の立つてゐる足元に落ちた。今度は抱へてゐた品物を投げるやうに下に置いて、先とは別人かと思はれるほど優しい聲で、

「是はどうも」。

とあはてゝ降りて來た手代の白い額を見ると、私はぷッと吹き出したくなつたが、何だか氣の毒な氣がして、默つて其の書物を拾つてやつたまゝ、すた〳〵と逃げるやうに通りぬけて了つた。手代も、さすがに二度とは刀を見よと言はなかつた。

二

その先幾軒か同じやうな店の前を過ぎて、神社から三條の通りの方へ來ると、町の取りつきがだら〳〵とした降坂になる。其右手には高く興福寺の五重の塔が見えて、左手に降り込んだ所が猿澤の池である。猿澤の池は奈良でも感じのよい場所の一つだが併し大した景色があるのでもない。たゞ何となし、いゝ感じのする所である。はじめて此の土地へ這入つて來て殺風景な停車場通りを出はづれると、ぱつと開いたやうな明るい中に、一方高手に塔を見ながら、一方この池の水が柳の木の間から鈍色に光つて見える。むかし一人の采女が寵の衰へたのを嘆いて身を投げたといふ。その采女の寢くたれ髮に似た柳の枝が、時々ゆらり〳〵と物憂さうに搖れて半ば黄色になつた葉が一つ二つづゝ散つて行く。縁におり立つて見わたすと、三町ばかりの周圍はぐるりと道でかこまれて、其の側がすぐ人家である。それでゐて、じつと眺めてゐると日の永いやうなのびやかな氣持になる。この中で死んだ采女の死姿はどんなに美しかつたらうと思はれる。

そのうちに少し冷い風が吹いて通つた。柳の葉がばら〳〵と池の上に落ちて、鯉が浮いて來る。頭を撫でて垂れかゝる枝を、指先に絡んで引つぱつて見ると、今度はとめどもなく黄ばんだ葉が散つた。池の縁を一めぐりして、高手の往來へあがり、櫻の樹の並んだ間々に木の切株をいくつも据えてベンチの代りにしたのに腰をおろすと、池はすぐ眼の下に見える。そこからまた暫く眺めてゐた。柳の枝もやはり時々ゆらいでゐる。水の面にもかすかな漣波が走つてゐる。私の心にものどかな中にうつすりと物哀しい愁の影が滲んでゐる。

二つ三つ隔てた隣の切株を見ると、頬の白ちやけた、灰色の髮のそゝけた婆さんが一人、池の方に背を向けて腰をかけて

ゐる。何ともいへぬむづかしい顔をして窪んだ眼をじつとつぶり、口は時々つぶやくやうに動いてはまた固く結んでしまふ。うか〳〵と往來をあるいてゐる人々とはまるで違つて何かの暗示のためにぽつりと茲に据えられ彫像かと思はれる樣子をしてゐる。ちやうど吾々が田舍道をあるいてゐて、無名の彫刻師が刻んだ飄逸な石佛や神人獸の混合した奇怪な石像やを路傍に見たとき、まるで類のかはつた表情に打たれて不思議な驚きを感ずるのと同じ象徴的な婆さんである。

私は神秘なものをでも見る氣持で、つく〴〵其の方を見てゐると、婆さんはやがておもむろに目をあいて、袂から何か取り出した。そして端からかいては喰ひはじめた。見れば紙に包んだ握飯であつた。そこに私の幻想は破れてしまつた。

併し婆さんは其の握り飯を半分も喰べたころ、殘りをまた紙に包んで袂に入れた。そしてまた元のやうに眼をねむつて瞑想しはじめた。其の樣子があまりに物々しいので、私は傍へ行つて話しかけて見た。すると婆さんは、待つてゐたといふ風に愚痴をこぼしはじめた。すぐ下の町の料理店に奉公している娘に會ひに來たが、娘がろく〳〵口も利かないで冷遇したといふのである。あの特色のある表情がこれだけの愚痴ではつまらない。やつぱり象徴は象徴のまゝにして、手をつけないで置く方がよかつた。私はだまされたやうな氣がして、つまらなく町へ下つて行つた。

三

婆さんの話した料理店は此の大通りにある。料理店とは言ひながら、安旅籠兼帶で、かしはも天ぷらも料理も一緒にやる店である。其の前まで來て私はふと上つて見る氣になつた。遲れた晝食をそこで濟さうと思つたからである。

安普譜の二階で、天井の低い、廣告びらで裝飾せられた一室に通ると、案内して來た女中が、斯ういふ家に特有なはすは

な調子で誂を聞いて行つた。私は直覺的にその女中がさきの婆さんの娘だと思つた。まだ二十にはなつてゐないだらう、顏はちよつと愛くるしいが、小柄のちよび〳〵とした女である。入口の戸の蔭から顏を出して、ぼんやり外を眺めながら心は遠くにあるやうな眼つきをしてゐたのが、客と見てあはてゝ二階へ駈けあがつたのである。

誂への品を運んで、瓦斯の火に鍋をかけて、かしはを煮たり酒の酌をしたりしながら、女はぞんざいな言葉つきで私が問ふだけの事を答へた。

生れは能登のもので、今こそこんな見すぼらしい身になつてゐるが、國では舞妓で賣つた事もあるといふ。言つて過去の華やかな夢を追ふやうな目附をした。それが十六の歳に大阪へ出た。どうして大阪へ出たかと問ふと、女は笑つて首を傾げたまゝ答へをしない。他の事を言つてごまかして了ふ。大阪へ出てからは□□病院といふ可なり名の知れた病院に這入つて看護婦見習になつて一年ばかり居たといふ。それが或る春の夜、いつも二人づゝ寢る筈の宿直部屋に自分一人、電燈を消して寢てゐると、仕切のカーテンをまくつて、すうつと忍び込んだものがある。女はびつくりして刎ね起きると、一番に電燈をねぢた。すると自分の床のすぐそばに、黑い上着を被た、色の白い、髯の濃い副院長がちよこりとかしこまつてゐた。副院長は何か勝手の違つた樣子で、眼をぱち〳〵させながら見まはしてゐたが

「やあ、寢ぼろけてとんだ所へ這入つて來た」

と言ひながらこそ〳〵と出て行つてしまつた。副院長でさへあんな樣をするのだものと、それきり其の病院がいやになつて、とう〳〵此の土地へ來ることになつたのである。では此の土地へはどうして流れて來た？　と聞くと、それも答へないで、首をかしげて笑つて見せた。

「さつきおつ母さんが來たらう？　あれはどうしたのだ？　お前が親不孝だといつて怒つてゐたよ」

と最後の閾をかけると、女は不思議さうに私を見つめて、心持顏を赤め、

「どうして？　あれがおつ母さんなものか。あれはほんとのおつ母さんぢやない。うるさいから追ひ返してやつた」

はははと笑ひすてゝ立つて行つて了つた。そしてそれきり上つて來なかつた。手をたゝいて茶の催促をすると、十三四の小娘があがつて來る。

四

其のうち、明け放した一間を隔てゝ、あちらの方には、もう立ちかゝつてゐるらしい二人づれの客があつて、話が大分聲高になつてゐる。

「な、君、あの佐川を知つてお出でせう？　縣會議員の」

「〇〇郡の佐川さんですか、知つてをりますよ、どうして、あれは中々の利者です」

「さうとも、どうして〳〵。佐川がうんと言へば、あんた、〇〇一郡はみんなついて來るにきまつてゐます。あれはゑらい勢力なものです。それがあんた、俺の親類ですが！　俺の妻の里と緣つゞきになつてをるが！

「さうですか、それは〳〵」

「だから君のやうな着實な資本家が、あれをうまく抱き込んで利用さへすれば、どんな仕事でも出來るのですよ」

「なるほど〳〵」

「俺もこの前の選擧にはうんとあれを助けてやるしな、それで、もう、今では俺の言ふことなら何でも聞くといふて居ます。俺とは利害をすべて一にして、協同一致しやうといふ約束がちやんと出來てをります」

「結構な事ですな」

「それから、それ、△△郡の川井な、あれがまた大へんな勢力です。△△郡の川井、御存じでせう？」

「知つてをりますとも、副議長で」

「それは、あんた、あれ一人で縣會は掻きまはしてゐるやうなものですぞ。あれを副議長にするには隨分骨を居つて、殆んど私ひとりで奔走しましたよ。それ以來、あれも、もうすつかり私には參つてしまつてな、私のためなら何でもしやうといふ。まあ、さう何でもして呉れいでもよいから、今に私が大に君に賴むから其のときうんと骨を折つて呉れい。さうすれば君にもつまり儲けさせてやるし、私も儲けるのだから、誰の爲めといふことはない、みんな自分のためになるのだと、さう言うて別れたのですよ」

「なるほどね」

「そんな風でな、あれとも將來は全く利害を一にして、協同一致で行動しやうといふ約束が結んであります。君も今度の事業には是非川井を贊成させないと噓ですぞ。あれがうんとさへ言へば縣會はどうにでもなる。」

「いかにも〳〵」

「川井と私とは、極もう、ほんの親友でな、兄弟よりも仲よしですぞ」

階段口へ立ちあらはれた二人を見ると、先に立つたのは五十恰好の太つた洋服男で、一人はやゝ年下の二重マントを着た

地主風の男である。洋服の方がちよつと下りかけてまた立ちもどり、一方の肩に手をかけて、

「でな、川井と私とは斯うい ふ約束までしたのさ。それ、私の家の母が、もう長いこと患うてをりますぢやろ？ もう、いつ死ぬかも知れませんでな、其の時は新聞の廣告に、黒枠で母何々儀さ、養生相叶はず何月何日死去仕候間、此段辱知諸君に謹告仕候以上さ、追て葬送の儀は、何日午前第何時自宅出棺云々としてさ、其のあとへ持つて來て、男、初瀬英十、親戚佐川新十郎、其のほかずつと幷べて、其の次へは、友人として、川井正義と書かうといふことに、ちやんと極めてあるのですぞ。それは、もう、川井と私とはそれくらゐ親密な友人でな。君もいよ〳〵今度の事業で懇親を結ぶことになれば、其の次の名を幷べることにして下さい」

「それはもう、勿論――」

言ひながら二人はおりて行つた。私も勘定をすませて、二人の跡を追ふやうにして店を出た。さつきの女は、また戸口の柱にもたれて、同じ目つきで、當もない空を眺めて居た。

書卓の上

今朝もテーブルに向つて腰かけたまゝ懐手をして二時間以上ぼんやりしてゐた。何をする氣も出ない。かたはらの臺の上に取り散してある新刊の雜誌や書籍を、一つ二つ抽き出して明けて見たが、一向に面白くない。またもとの所へ投げ戻してまじ〳〵としてゐると、手は自然とまた懐に這入る。内懐で組み合はせた其の手が、シャツの上から汗ばんで來て、いやな氣持がする。片手だけまた出して、テーブルの上に載せて見た。他人のやうに煙草でも吹かすのだつたら、成程こんな時に此の手一つぐらゐ持てあつかはずに濟むだらうと思つた。

テーブルの板の冷たさが、熱した掌に快よく感じる。じツと其の手を見てゐると、窓に曇り日の薄らさむい風が、かすかな氣合に觸れて通る。やるせないやうに降り灑いだ昨夜の雨を、今日につなぐ知らせかと思つた。あゝと言つて手を引くと輕い身顫が一つ出た。

自分の使つてゐるテーブルは可なり大きい方だが、それがもう手元のところ方一尺四五寸位しか明いてゐないまで、色々の書物や書いた物やで押し詰められて來た。つい二三日前までは、まだ餘程明いてゐたのが、何時の間にか一列に積まれた

書物は二列に、二列は三列にと殖えて、四方から主人を包圍して來る。それが讀まなくてはならないで讀む書物、書かなくてはならないで書く原稿、みんな義務の塊である。

本箱から拔き出された書物、棚から取り下された書物、圖書館から借りて來た書物、その中には、もはや用務を果たして腦を拔かれた蛙のやうに靜まり返つて横はつてゐるのもあるし、次の何曜日にはまた用がある筈だと待ち構へてゐる風なのや、取り出されて以來一度も開かれないで怖氣てゐる風なのもある。が、何れに眼をとめて見ても、今の自分の心には何等の交渉も起こらない。何等の活きた興味も刺戟されない。たゞ其等のものゝ後に繫がつてゐる義務——囚人の脚に附いてゐる鎖のやうな義務が、鈍角な重い刺戟を誘うて來る。

左手に堆く積んであるのは、重に學校の講義に必要な參考書である。用のある箇所だけインデックスで拔き讀みをした哲學書を見ると、著者に對して相濟まんと思ふ。此の作だけは全部細讀してと思つたのが、時間の都合か何かで下半分は飛び讀みで間に合せて了つた文學書を見ると、あれで果たして遺憾のない批評が下されるかと自分ながら面目ない心になる。

其の前の列の上の所を見ると、英國の學會や俱樂部の綱領などを書いた書物が載つてゐる。其の下にはアメリカの演劇學校の規則書、其の下はロンドン劇場史、是等は皆二三日前に某協會の規則書を英譯する必要があつて、參考に引つぱり出したものである、用が濟んで了へば、もはや其の表題を讀むのさへ懶いと思ふ。まして手に取り上げて元の所へ納めに行かうといふ勇氣などは全く無い。そこへ抛り出したまゝである。

正面のところを見ると、近世英文學史の古い講義草稿で今は不用になつてゐるのと、ロンドンの圖書館で書き拔いた拔萃帖の、所々に紙きれを挿んだのとが、一緒に重なつてゐる。是れは英國劇の歷史と、劇に關する英語のテクニカル、ターム

スとの講義をする必要があつて、其の下調のために取り出したのが、其のまゝになつてゐるのだ。
其のすぐ側には、原稿の疊んだのや廣げたのが、十二三も積んである。手紙、葉書、印刷物などの古いの、新しいのが、それと伍して堆をなしてゐる。此の原稿の中には別に期限の無いのもある。期限と言つた所で、もと〳〵先方が賴み手で此方は好意で讀んで見やうといふのだから、是非何時までと嚴しくは言はない。じわ〳〵と迫つて來る。淡い義務の苦味である。併し中には學生の論文などで、疾くに見てやらなくてはならないのがある。學校の研究もので、三四回やつたきり、何うしても跡をつゞける氣力の出ないうち、今年も、もうまた學年の終りに近づいて來たのが此等の原稿を見ると、鉛を胸にあてられるやうに心苦しく思ひ出される。
手紙にも返事を出さなくては濟まないのが、一二箇月もたつと束になるほど積もる。甚だしいのは一年も二年も打ち棄てゝあるのがある。それでも何時かは義務を果たさうと思ふ心から、裂きすてもし得ない。斯んな手紙が五通や八通や何時でも殘つてゐる。ビジネスライクに三錢切手を封入して、禮を盡して、賴ない事情を打ちあけて、種々の事を問うたり、賴んだりして來る。然いふ未見の田舍人の手紙杯には是非返事をやりたいと思ふのがある。それでゐて容易に書けない。愈々思ひ立つて、五通三通と古いのから片づけて行くと、其のうちまた妨げられる事があつて、それなり、當分は中絕して了ふ。其のあひだにはまた次が支へて來る。往復葉書などの、期限をすぎて空しく討死をしてゐるのも幾枚あるか知れない。不義理だなと思ふと、堪えられぬ不快の感が胸を衝く。一體少し氣を張つて筆まめにすれば、斯んな事は何んでもない。西洋人などには、朝起きて一時間なり半時間なりを、きちんと其の日の通信應答に宛てる習慣がある。それは自分も千万承知だから、他人に說法する場合には其の通りの事も言つて聽かする。併し今の自分には、たゞそれだけの實行が容易な事でない。たゞ

それだけのきつかけを作るのが大事なのである。是れを思ふと、世の中の事は必ずしも思想が一々實行に伴はなくとも、思想だけでも意味を成す場合がある。あるどころではない、多數はそれで運轉して行く。ちやうど紙幣と金貨の關係のやうなものだ。大藏省か日本銀行か何處かに準備金塊が積んであるとさへ極れば、それを當にして、しまひには其の當も忘れて、たゞ空な紙切が、それみづから實價のあるやうに取扱はれて、次から次へと運轉されて行く。紙幣を握つた奴が一々それを銀行へ金貨と換算しに行つた日には騷ぎである。世間の思想家が、兎に角善いと思つた思想を思想だけで廣げて行く。當人は必ずしも實行家でなくとも、必ず何處かで何等かの條件の下に實行されると信じさへすれば、其の信念が準備金貨になる。勿論時としてはこの準備金貨の無い濫發紙幣も思想界には交る。それが世間である。それでゐて、我々は一方世間なみに空な思想を運轉しながら、一方にはそれが一々自分の手で實行の黃金にならぬと言つてもどかしがつてゐる。

玆まで考へてゐると、取次のものが來客だといふ。ぼんやりとして書卓を立つた。立ち際に今一度見廻すと、そこら中一面に漲つた頽廢の空氣——義務に疲れ、義務に老ひ行くものゝ頽廢の空氣が、書册の香ひに交つて漂つてゐる。

故郷の父

私の故郷は石州であるが、東京に出てから彼れ是れもう二十餘年になる。其のあひだ、母の死んだ時の外は、一度もしみ〴〵と歸省したことが無い。從つて故郷の記憶も、大かたは遠い淡い夢のやうになつて了つた。たゞ所々馬鹿に際立つてはつきり想ひ出せる部分がある。

私の十ばかりの頃は、一家が久佐といふ田舍に住んでゐた。家は、四五十坪ばかりの前庭を取つて、藝州境への小街道に沿うた瓦葺の一軒家で、後は深い谿谷になり、そこから可なり水嵩のある小川が横手をめぐつて流れてゐる。街道といつても人通りは極めて稀であるが、其の道を挾んで、向ふには青田が廣がり、其の向ふは又山になつてゐる。

或る夏の夕暮であつた。夕食を濟ませた後、家内中前の縁側に出て涼んでゐると、何處からか蝙蝠が一疋飛んで來て、軒のあたりを高く低く飛び廻はる。私や二人の弟やは總立になつて騷ぎ出した。すると、今まで晩酌の微醉顏をわざとむづかしさうにして煙草盆を前に控へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上つて、長押に懸けてあつた樫の丸拔の一間棒を小腋にかゝへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びつくりして見てゐると、父は擊劍をやるやうな身構へと、氣合をかけるやう

な掛聲とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくる〳〵廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。棒と擊劍とは父がこんなに零落して以後の、唯一の自慢藝であつたのだ。

上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尙盛んに空に向つて獨りで棒を使つてゐる。其のうち日は段々暮れて、夕月の光が一杯にそこらを浸して來た。其の月影の下で、磨いた樫の棒が、稻妻のやうにきら〳〵と光る。母はほゝ笑みながらじつと見て居た。私は强い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな氣持を覺えた。

父はやがて棒の手を收めて、汗を拭きに小川の緣へ降りて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遙かの筋向ふに二軒幷んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つて居た。

今から考へると、父はあの時、心に佐々木巖柳の燕返しや、寶藏院の水月の槍の傳說なぞを繰り返して居たのだらう。其の父が故鄕で不慮の死を遂げてから　今年は七年である。

宅地

君、三四年見えない間に、私の宅ももう以前のやうでは無くなつたよ。君の言ふ墓地は、去年から今年へかけて、すつかり取り拂はれて了つた。今は其跡が立派な宅地になつて、貸地の札が立つて居る。墓の跡では、鳥渡借り手があるまいと思つて居ると、早速此の春から一軒の住居を普請し始めたものがある。一二ケ月のあひだに、それがすつかり出來上つて、髯のある主人と、妻君に子供二三人の一家が越して來た。墓地が何だといふ氣勢で、續いて隣地へ二軒ばかりも貸家を建て始めた。昨今その工事中で、毎日亂調子な金槌の音が騷しい。

此の勢ひなら、殘つてゐる明地も、一年たゝぬ内に塞がつて了ふだらう。万一よい借り手が附かなければ、地主の方で、そこら一面に粗末な棟割長屋を建て、二年か三年、たゞのやうな家賃で細民に貸して置く。さうすると段々人氣が染みて來て墓跡だといふ感じが薄くなる。其のあとで上等の宅地に直すのだといふ。

斯んな次第で、君が氣にして居た、墓地の杉の樹は、一本殘らず切り倒され、其の中から吐き出してゐた重い、濕つた空氣は、最早感じられなくなつた。あの空氣の中に居ると、全く凡てのものが靜止して了つて、身動きをするのも懶くなる。

ちやうど今日此の頃のやうに、梅雨名殘の雨が根よく降り注ぐ午後など、書齋の窓から、ぼんやり向ふを眺めてゐると、一番高い杉の茂みに、烏の雨宿りをしてゐるのが見えて來る。其の姿が如何にも物ぐさゝうであつた。そして私も共のまゝ三十分でも一時間でもじつとして居ることがあつた。

墓地の樹を切り始めたのは一昨年の暮からで、去年の今頃は、盛に墓を掘り起してゐた。墓石を引き倒す、臺石を崩す、穴を發きにかゝる。屈強な人足どもが多勢かゝつてやるのだから、見る間に一間や二間は掘り下げる。棺に屆くと、小さい嵩口と蜜柑箱の明いたのとを持ち込み、骨を嵩口に引つかけて明箱に詰めかへ新墓地へ送るのである。時としては瓶に這入つたのを掘り出すことがあつて、明瓶の赤く黑ずんだのが、十五六も、片端によせて水瓶を伏せたやうに幷べてある。其の側には、瓶の缺らだの、頭骸骨の一部だの、脛の片割だのが、搔き集めてある。人足どもはいつも伏さつた瓶に腰をかけて辨當をつかつて居た。

君、今では私の書齋から覗くと、高臺の崖が新しい煉瓦や白い房州石の築垣になつて、寺の跡から墓地にかけては、新しい開墾地のやうに、ひろ〴〵と地ならしが出來、乾いた明るい空氣が夏の日光を顫はせて居る。君の氣にかゝるものは無くなつた。併し私はまた共の內何處かへ引き移らうと思つて居る。

一夜

此の頃の癖で、毎朝三時ごろから眼がさめて眠られない。

蚊帳越しに電燈をともして、枕元に置いた『諸時代の藝術』といふ書物を開いた。早稲田の圖書館から持つて來て、暫く抛つて置いたものである。著者はメーリー、ガルシエといふ婦人で、昨年の著である。第一卷であるから、まだあとが出るのであらう。紀元前四千年頃のエヂプトの藝術からローマ藝術の少し後のところ迄を歴史的に叙したものだが、要するに教科書程度から餘り多くは脱出してゐない。

事實の備忘錄として鳥渡便利なといふ書物である。ところ〴〵に挿んである論斷も先づ平穩無事と言つてよい。昔ギリシアの繪畫は線と形とを主とした。色彩の味は極めて幼稚であつた。此の理はギリシア瓶の繪を見ても分かる。色彩のフユージヨン、ブレンデキングを解し始めた以後と以前とで古代と近世との區別がつく、といふやうな議論でつないであるのだ。少し讀むと興が薄くなつて、始めの方の序文などをめくつて見ると、餘白のカツト代りにラスキンの語を抄したのが目についた。「大なる國民は彼等の自傳を三種の原稿に書く。彼等が功業の書、彼等が言語の書、彼等が藝術の書、この三書は、何

れの一つを讀むにしても、他の二つを讀まなければ領會することは出來ない。けれ共三者の中で全然信用するに足る唯一のものは第三の書である。一國民の事業は好運で成功することもある。一國民の言語は其の子孫中少數の天才者によつて偉大なるを得ることもある。たゞ其の藝術のみは、其民族の一般的才能と共通的同感とによつて成立する」といふのである。例によつて面白い言ひ表はし方である。メーリー、ガルシェ孃の一卷の書物よりも、此一節の方が印銘が深い。藝術上の最大眞理も最大疑問もラスキンの此語で包有することが出來る。斯んな事を考へながら書物を投出して、眼を眠つてゐると、眼蓋を透して電燈の影の見えるのが邪魔になつて堪えられない。また明りを消した。じつとしてゐると、家の隅々から、色々な微な物音が聞こえて來る。

今朝また出かけて行く文藝協會の『人形の家』の稽古の事を思ひ出す。舞臺面の細かい事までが、ありくと眼前に浮ぶ。男主人公のあの臺詞の間が何分あつたらう。あれを測つて置かなければ女主人公が衣裳を替へる時間が定まらない。實際の舞臺はあの椅子と椅子との距離がずつと狹い筈だから、あの動作は出來にくからう。今日は本當の寸法だけに綱でも張つてやらねば駄目だ。前から來る光線といふ事も今日は一つ實地に研究させて置くことを忘れちやならない。あの事も忘れてゐた、此の事も忘れてゐたと思ひ出すと氣ばかり急いて來る。兎かくする内に夜が明けた。

起きて見ると冷い雨が降つてゐる。例によつて八時頃から研究所へ出かけた。稽古は大體に於いてもう固まりかけてゐるのだから、全體の味といふ事の研究と、部分々々の機械的な點などを一歩々々實演的に定めて行く事とが此の頃の重な課業である。今朝寢てゐて考へた通り、舞臺の寸法を道具係の人から決めて貰つて、臺灣糸で區劃をして見ることから始めた、舞臺係も技藝員も總がゝりである。

今日は午後から特に兒役の練習がある、衣裳屋も來るといふ。一日がゝりと腰を据ゑて晝食をしやうとすると、〇〇〇雜誌のY君が原稿の事でやつて來る。玄關で立話をして用をすますと、今度は〇〇新聞のT君が約束通り尋ねて來る。應接室で二十分許り談話をして分かれた。晝食に取り寄せた辨當がはりのライス、カレーがもう冷たく固まつてゐる。それを無意味に掻き込みながら心は限りなく先の仕事を〳〵と走づてゐると、隣りの事務室ではひつきり無しに電話のベルが鳴る、事務員が驅け廻る。坪内會長が見えて東儀幹事と接待の事で打合せが始まる。土肥君が池田君と道具衣裳の事で話しをしてゐる。

あはたゞしかつた半日の事を思ふと、總しめ高は藝術プラス事務の味である。靜プラス動の味である。其の中に私の執着もある。

心の影

心の影に情の眞實はあつても事實の眞實はない。此の集の中の二三の歌が世間の一部から事實の記載であるかのやうに批難せられたのを私はかなしむ。

○

窓の外は、たゞ眞つくらな
夏の夜の八時すぎ。
雨のさんざとそゝぐ音、
その闇の中から
ひらりと拔けて來た一羽の蝶が
わびしく照す電燈の笠に、
すがりつき、すがりつき

濡れた羽を顫はす、
やるせない夏の夜の八時すぎ。

○

通り雨、通り雨、
戀の邪魔して通る雨、
それで思ひ切られる仲ぢやなし、
晴れて行け、晴れて行け
跡には濡れた青桐の
夕日の蔭のつばくらめ。

○

部屋の隅に据ゑた石膏像、
その上からふはりと
白い薄絹が襲うてある、
薄絹の襞のいろ〳〵、
青い瓦斯の光がそれを傳つて
流れたり淀んだり、

あるか無いかの夜風が
窓から手を出してなぶる、
柔かな髮の搖れ、
かすかに揉める光線の戲れ、
音もない書齋の夜の心。

○

眞つ白な綿雲と青い空とを遮つて
まがつみのやうに垂れ下つた灰色雲、
じつと澱んで動かず、
下には憂欝の森が黑く、
夏の薄日に蒸されてゐる
森から吐き出す重い息は
鈍い空氣に流れ込んで
私の心臟を壓して來る。
あゝ眞夏の午の沈默、
いつまで續く沈默。

○

どんよりとした薄曇り、
靄に包まれた目白の森を
今日も夢のやうに見てゐる。
森の輪廓を破つて、
一本立つた煙突、
つぎ／＼に吐き出す煙の
いつまでも盡きぬ想ひ。

○

名も知らぬ信越線の停車場に小娘ひとり立つ雨の暮。
河原あれて月見草咲く夕ぐれを汽車の窓より見る漂泊の人。
上野を去る數驛にして眼に涙あり何とも知らぬ今日の心よ。
頬を打つ大粒の雨ひやゝかに我が魂を貫くと見し。
青田煙り遠山黑く限りなく雨に籠りて憂き日暮れ行く。
旅にありし一筋町の夜を想ふたゞ赤かりし祭禮の灯よ。
なつかしき城下町なり衰へし軒にたゞしくあかり掛けたる。

廢滅の香ひを秘めて古濠に濁みたる水のゆるく漂ふ。

痩畑に雜木林のつゞきたる其蔭に立つ頬の蒼き人。

旅人の秋に感じてうなだれし襟元さむし信濃路の風。

桔梗咲き女郎花咲き百合咲いて空淺黄なる信濃高原。

或時は二十の心或時は四十の心われ狂ほしく。

いたづらに此世を過ごすまでもなし我が身亡びよ天地崩れよ。

ともすればかたくなゝりし我心四十二にして微塵となりしか。

いつまでも斯くてあらんと願ふなり敗れたるわれ傷つける我。

われ強しわれ大なりと思ふ時我が詩まことの詩を成さゞりき。

くれなゐに黄金に燃えて水色にさめてはまたも燃ゆる君かな。

その花に香ありあらずと爭ひて君まづ折りし河原撫子。

かりそめに結びし紙の誓ひにも末をかけたり住吉の宮。

住吉の塔の東の窓に倚り人の世狹しと君かこちしか。

住吉の赤き社と白き砂君がパラソル水色にして。

むらさきの空いつとなく薄れ來て月しろ〴〵の秋の朝たち。

長岡のいでゆの旅よござんなれ江馬の小四郎天野遠景。

こしかたの三十年は長かりき沙漠を行きてオアシスを見ず。

秋風のさら〱渡りばつた飛ぶ野にひとり立てば人の戀しき。

ペレアスがメリサンド戀ふそも〱の不思議を思ひ思ひ寢たる夜。

セリセツト死にぬ哀れの妻なれど妻に代へたる戀もたふとし。

こしかたの幕はとぢたり美しき夢のはじめのモンナヴンナよ。

滯歐通信

文壇雜報

取あつめて

夏と申すに、おのづから心のゆるみて纒まれるもの書くが懶く候。約束のダンテ編今一回延し申す可候。

去る七月半ば、俳優協會維持費募集の爲右ダンテの坐で、『マーチャント・オブ・ベニス』を一回限りの晝興行に出たアーキングのシャイロック。エレン・テリーのポーシア。是は申すまでもなき天下一品にて、其の他倫敦中の座頭株あらかたを一黨に集め、英國劇壇の偉觀をつくり申候。評は申すも管なれど、其の人氣の殷なること、殆んど想像の外に候。殊にアーキング。エレン・テリーの初めての出、及び二人が顏を合す法廷の場の如きは、歡呼喝采の聲、大地のどよみを作るが如く、四五分間は俳優も手を止めて見物の方を眺め居り候。

最後に幕が下り候てよりも、凡そ七八回は幕外に俳優を呼び出だし、尙ほ際限もなく見えしかば、遂に劇場の方にて電燈を消しにかゝり、其れにて漸く見物が退散致候。勿論これは例によつてアーキングの收場演說を求むる、見物の心なりしこと明かに候へど、幹事が代ツて挨拶をなし其のまゝに仕まひ申候。

日本にても川上が慈善演劇に同じ物をやり候とか、因縁に候べし。『マーチヤント、オブ、ヹニス』は、前にはオクスフオード大學演劇會が彼の地にて演じたるものを一見致候。此は申すまでも無く學生芝居なれど、併しながら、何れも行く〳〵は俳優たらんとする程の熱心家なり。且つ年々夏期一回づゝの本興行に場數を踏み來たりたる功の者多く、なまなかの田舍芝居や、倫敦の場末芝居よりは遙かに立派に候。勿論此の興行は、劇場を借り、見物料も取り、すべて本式にやるものに候。シヤイロツクを勤めしは、クライスト、チヤーチ、カレツヂの三年生なりしが、卒業後は直ちに斯道に入る筈と聞き及び候。

俳優學校としては、從來沙翁劇を以て有名なるベンソン一座が、其の田舍廻りの組に見習生を入れて、教育し來たり、已に幾多の立派なる俳優をも出だし候が、來年よりは、ツリーも亦た同じ組織を立つる由に候。是れは今春同人が沙翁の生地ストラツフオード、オン、エヴンにて、紀念祭の席上演說に、始めて發表したる計畫に候。

先頃米國より歸りし女優ミセス、カムペル、藝風地位より申すも、略ぼ源之助など申す所に候はんが、ズーデルマンの『エス、レーペ、ダス、レーベン』英譯『ジヨイ、オブ、リヸング』及び數年前此の女優が依りて以て名を成せし『セカンド、ミセス、タンカレー』（當時脚本家の筆頭ピネロの作）の二つを引きつゞき演じて好評。二つながら似たる節ありて、所謂ウーマンス、パストの悲劇、又此の地にても一時はやりし例のプロブレム、プレーの部に屬すべきものに候が、我等には、日本の小說界の趣味などを思ひ比べて、至極興深く候ひき。

ストラツフオド、オン、エヴンと申せば、其處の名物は彼の女小說家の豪の者、メリ、コレリーに候が、カーネギー寄附の公衆圖書館を沙翁の生まれし家の裏手に建つるといふ議に反對して、盛んに氣焰を擧げ居り候。犬と猿ほど仲の惡き、ホール、ケインが、其のうち何とか口を入るれば面白からんになど申居るもの有之候。

一時評壇の噂は、彼のカーライルの家庭一件、及び彼れが某レデーに對する干係についての、フラウド黨と反對黨との爭ひなりしが、目下やゝ下火のやうに候。併し今後いかに發展し行くやは分らず。或は此の爭ひを以て苦々しきことゝし、折角美しき文學史上の飾りとして保存し來たりし人物に、汚點を加ふるものとする評家も候へど、我等思ふに、苦々しく口惜しき出來事たるは勿論たり、されどかゝるが故に今日事を起こせるもの非なりとは申すべからず。斯くの如く成り行くの事實もし存するに於ては、縱ひ今日之れを蔽ふものあるも、明日焉んぞ其の再び顯はるゝ無きを保せんや。是れ實に理數の然らしむる所に候へばなり。時と申す最上審判の前には、一切のもの皆赤裸々なるべし。毫末の陰翳といへども、之れを剝ぐに百年を睹し、千年を賭して斉まざるは、大法の威嚴に候ふべし、斯くの如く信ずる所に、我等が日常安立の半面は立脚するに候はずや。糊塗して以て一時の喜びを竊まんとするは、愚かなるかなと存候。

ローヤル、オペラ座に於ける大陸オペラの季節は先日了り申候。今年の勝觀は『リング』の連演に候ひしが、今月末よりは更らにムーデヰー、マンナーの英國オペラの季節相はじまり申候。

外に音樂界にて昨年來の二大人氣は、リヒヤード、ストラウスと、メーリー、ホールとに候ふべし。前者は獨の作樂家として、彼のニーチエが『ザラツーストラ』をも樂に也る人、一派の評家よりは、ワグネル以來の大才と稱せられ、是れが一時倫敦の音樂界、樂評界を騷がせしことは昨年に於ける特殊の現象に候。卽ち昨年は英國が始めて眞にストラウスを認識せし年ど申すべし。またメリー、ホールは當年十八歲の妙齡なれど、近年罕に見るヴイオリンの名手にて、是れまた昨年より今年にかけて、はじめて倫敦に其の天才を認識せられ、一時倫敦の人氣を沸騰せしめしこと、ルービンスタイン以來絕えて無き所と稱せられ候。是は一は此の女性音樂家の經歷の極めてロマンチックなるにも因り申すべく、十三四歲の頃は一張のヴ

イオリンに市街を流しあるきて、修業とも命の綱ともせりと申候。此等の事が廣く世に知るゝと共に、人氣は益々高まりて同じ經歷を慕ひ、ヴイオリン一つに家を迷ひ出でたる少女なども有之候。

畫界にては、今年のローヤル、アカデミーも去月限り閉場いたし候が、依然サーゼントは世界一の肖像家に候。今年の出來は善くなしとの評なれど、善惡ともに、評判は此の人を中心と致すべし。また畫界の奇傑、ラフアエル前派の一角、而かもラスキンと一代の大喧嘩をなして名を轟したるホイッスラーは先日物故いたし候。當國にて最も多く日本畫の影響を受けたるもの、此の人其の隨一に候べし。

尙ほダンテを濟ませ候次には、當國畫界の現代を論じて貴意を得べく候。平尾不孤君の懷抱に對する愚見は、登張竹風君に復するの書と共に、其の後あたりに物したく存じ居り候。（明治三十六年八月七日稿）

文壇雜報

クリスマス

當英國文壇の雜事どもを拾ひあつめて申上ぐべく候。來る二十五日はクリスマスの事とて、市中一般の景氣は申す迄もなく、文壇までが賑やかになりたるやうに候。もつとも著書の方面にては、新刊の大髙なるものは、却りて當月に入りてより減じだりとの事に候へど、クリスマスの贈り物を當て込みたるヂツケンス物の飜刻や少年物など盛んに書肆雜誌店の舖頭を賑はし居り候。また雜誌もクリスマス、ナムバーと稱して多くは附錄を刷り候事、我が新年附錄夏期附錄などいふものに異らず。內容も多くは文壇名家の名を並べ候。

雜誌の事

當國にてひろく雜誌と申せば、やはり『エヂンバラ、レヱー』を第一に數へ候ふべし。是等は新聞紙の『タイムス』哲學者のスペンサー、銀行のバンク、オブ、イングランド、哲學雜誌の『マンイド』俳優のアーヰング、詩人のスヰンバーン、小說家

のメレヂス、政治家のチェーンバレン、滑稽雜誌の『ポンチ』と申す具合に、おのづから株と相成り居り候。但しこゝに株と申すは必ずしも相傳の謂ひに非ず、また此等のうち目下なほ盛んに活動しつゝあるものも候へば、已に老朽(?)の域に入れるものもあるべきこと勿論に候。たゞ其の社會々々の筆頭と申す義に候。斯くの如き『エヂンバラ、レヹー』は先達つて其の第百年號を出だし、過去百年間に於ける諸方面の變遷を簡叙したるものを載せ候。就中軍事實業の方面にて新進の獨逸が着々新科學思想を應用して規律的に進み行くに對し、英國の將來を警戒したる文など、嶄新の見といふにあらねど、時務に當たれるものとして、稱讃を得たるやうに候。次いでは一時『エヂンバラ、レヹー』の敵と見られし『クオタリー、レヹー』。また例のマガと稱して一時は毛蟲の如く思はれしも、終に成功して今は一個の大雜誌たる『ブラックウッドス、マガヂーン』其の他『マクミランス、マガヂーン』『コンテンポラリー、レヹー』『ポールモール、ガゼット』以下數へ盡されぬ程に候へど、大なるものは、大抵社會の諸方面にわたりて、それも日本の如く片々たる雜感集には無之、研究あり主張ある評論に候。併し此の國にても、雜誌の論文が政界を動かすといふが如きことは、今は稀れなりとのことに候。

昔し『エヂンバラ、レヹー』全盛の頃は、内閣も是れが鼻息を伺ひしこと、人の知る所に候。文壇に取りても、スコット、ワーヅワース。バイロン。シエレー。キーツ。悉く當時の文星は一度『エヂンバラ、レヹー』や『クオタリー、レヹー』の手にかゝりて、後に其の光りを放ちしものなること、是れまた人の熟知する所に候。先頃『エヂンバラ、レヹー』の開祖ジエフレーが評傳の出でしとき、文界の一部に、彼れを眞の批評家たりしマシユー、アーノードなど、同列に論ずるは當を得たるものに非ずとの批難あり。是は畢竟彼れが文學に門外の人たりしのみならず、文學を單に戲作文字のみと輕視するの傾きありしと其の批評のために當時の文星が悉く傷げられて反抗せりと云ふ一種の文壇的反感にも因り候はんか。事實ジエフレーを始め

當時の所謂エヂンバラ、メン等が態度氣風は、我等文壇の人には餘り慕はしからぬやうに候。

專門雜誌にては、文學雜誌は、やはり『アセニアム』と『アカデミー』に限り候ふべし。此等は週刊にて、雜誌と申すよりも新聞に近く、其の記事また長き論文よりも新書の批評、文壇の時事等を主とせるものに候へど、文壇の機關として重きをなせるは是れ等に候。『アカデミー』は稍々わか〱しく、我が多くの文學雜誌と似たる節あれど、『アセニアム』は老實にして重に、專門家向と稱せられ居り候。美術雜誌にては『スチュヂオ』『マガヂーン、オブ、アート』など、其他數々あるべく、哲學雜誌にては、『マインド』の外、『フヰロソフヰカル、レヹー』『サイコロジカル、レヹー』『インターナショナル、ジアーナル、オブ、エシックス』また今秋第一號を出だせし『ヒッバート、ジアーナル』は重もに宗教の方面より哲學に入るものとして、至つて評判よく候。其の他婦人雜誌、少年雜誌等の事は今は省き申すべく、其の月々の大なる出來事のみを繪入りにて纏めたるは、『スフヰアー』。『グラフヰック』など廣く家庭に讀まれ候。例へばカイザー來たれば其の肖像やヤッチの寫眞、ピゴット基督と宣言すれば其の肖像や教會、といふさまに、此の種の雜誌も數多く、田舍などへ送るには至つて重寶とのことに候。また一錢雜誌と申して、短き小說や歌、珍聞の類（勿論ヴルガー、テーストをあてにしたるもの）を載せたるもの、幾種もあり、シチーの銀行會社などへ通ふ男女の若者や一般の勞働者等がポッケットの中に多く忍び居るものに候。販途の大なるものなりとか。新聞にては『タイムス』を首として、『デーリー、ニウス』『デーリー、テレグラフ』以下朝刊のものは申すに及ばず、夕刊にては『グローブ』を最といたし候。政治は知らず、文藝の方面にては、依然『タイムス』の評論は重きをなし居り候。『デーリー、テレグラフ』の實業的なるに對して、『デーリー、ニウス』は文學的と申すべく、此の邊また文壇の勢力に候。固より勢力と申して、人に由ることに候へば、他新聞にも皆それ〲に略ぼ定まりたる專門知名の寄書家を有

し候。新聞紙の事は茲に悉くすべくも候はねど、概して如何なる方面の社會も平等の地位を保ちて紙面にあらはれ候こと我が國と趣きを異にするは、社會其のものゝ然らしむる所か、新聞紙の然らしむる所かなど疑ひ居り候。

新刊書

今年中の新刊書については、既に亞米利加あたりの雜誌に、何か輕便なる統計樣のもの出で居るべしと存じ候。『アカデミー』が先きに諸名家に對して最も目ぼしき今年の新著二種を指摘せんことを乞ひし結果も、誌上に出で居り候が、人々の好尙によりて區々のやうに候。茲には小生が記臆の中より重もなるものを擧げ候はんに、小說類にては、新作の數は相變らず非常の高にて、六シリングス物、三シリングス半物、さては六ペンス物に至るまで、迚も日本などの比べらるべきものには無之候へど、併し是れは強ち皆賣るゝがためと申すには無之、賣れざるものは五百部の初版も覺束なきこと、日本と大差なきやうに候へど、書肆がそれをも厭はず出版するは、中には著者みづからが費用一切を負擔する類のもの多きが故と聞き及び候。日本にも罕には此の類の事ありと記臆致し候が、此は單に無名の作家が其の才を世に問はんとして社會に拂ふ試驗料と申すのみに非ず、此の國の富豪、貴族などの子弟の道樂方面が、日本のよりも多く文藝に向かへるためとも申すべく、此の意味よりいへば、善き事と存じ候。

斯く新刊の數は多く候へど、大作としては泰西文壇の水平を拔けるものといふが如きは、一も無かりしやうに候。水平にすら達せしもの幾ばくも有之まじく、寧ろ亞米利加に屬するヘンリー、ゼームスが The Wings of the Dove を說ものあれどたゞ他の無味なるに比してといふまでなるべく、バーリーが The Admirable Critchton は舞臺にて成功せるものなれば、讀み

物として其の舊作『スラムスの窓』にだも比すべきものには非ざるべし。亞米利加のブレツト、ハートが Condensed Novels もまた昔の面影なしと評せられ、キプリングが白書人りの Just so Stories はたゞお伽話たるに止まり、且つ其の空想の範圍やゝ單調の嫌ひあり。ゼロームやコンラッドや、はたまた同じと申すべく、數へ來たれば、是れと申すもの殆んど無之候。終りに亞米利加黑人種中の詩人と稱せられ、先年詩集 Lylics of Lowly Life を出して、此の詩集不景氣の世の中に、優に五千部を賣りたりと謂はるゝダンバーが小說 The Jest of Fate も今年の新刊中に入るべきものに候。白人が黑人に對する待遇の偏頗を動機としたる筋なれど、人種的義憤を漏らすものとしては、事柄の平凡卑賤に過ぎて、同感するものも唯憐むべしと思ふに過ぎず。威嚴足らずと申すべきか。但し叙事の筆力だけは世の評家に認められしやうに候。

詩壇また、、新著徒らに多くして、大なるもの無し。現詩宗の詩集彼れが如く、其の南亞平和の詩も、人の顧みるもの無し。スキンバーンがチユーマを憶ふの詩は『ナインチーンス、センチユリー』の卷頭に出で候へど、極めて短きものに候。恰もアルフレツド、オースチンの南亞平和の詩と前後して出で候ため、彼れ此れを比して言ふものは、矢張り短きながらもスキンバーンの方は詩なりなど申し居り候へど、所詮以て詩壇の落寞を破るには足らず候。キプリング歌はず、ワトソン僅かに其の詩集を再刊すと申せば、それにて詩壇の事は盡き申すべし。序でに詩人の世評を申さば、此の國の人が知るも知らぬも先づ指を屈するはシエークスピアとミルトン、是れにワーヅワースを配して、此の三人は第一流の詩人たるに疑ひ無きこと、天に日月の懸るが如しと考へ居るものゝ如くに候。但しシエークスピアは姑く措き、ミルトンを讀みたるものが所謂一般世俗の側に幾くばくなるかは存ぜず候。ワーヅワースは語は俗なれども想の高き所に至りては、我等もなほ解し得ざることありとは、專門家も往々口にする所に候。バイロン。シエレーは一まはり小さく、ロゼチ。モリスは更に一まはり小さ

しと認められ、テニスン。ブラウニングは今人氣の盛りなれど、申さば之れを第一の組に配するか第二の組に配するか研究どいふ態度に候。ブラウニングに關しては、先頃ブルークの評論出でゝ、なか〳〵の大冊れなど、評判あまり善からず、我等が讀みても、無理に評論したるが如き嫌ひあり、理窟すぎ、若しくはくど過ぎたる節多し。併し兎に角聲望ある批評家の手により、堂々たる書册として出でたるものなれば、ブラウニングの研究を鼓吹するには此の上なき書と申すべく、著者みづからも、ブラウニングの想は極めて難解のものなれば、我れはたゞ世の注意を是れに呼べば足ると申し居りし由に候。其の他蘇格蘭人のバーンスを說くは其の筈なるべく、詩人らしき詩人はシエレーなりと、人々之れを喜ぶさまに候。殊にオクスフオードの人は其の昔例の無神論に驚かされて彼れを追放せしにも拘らず、今はなか〳〵のシエレー贔負にて、ユニヷーシチーカレツヂには彼れが裸體のまゝに横はり居る大理石像有之候。彼れとても溺死するとき裸體にては非ざりしならんをなど冷評する人も有之候へど、そこは美術の權能とも申すべく、兎に角うつくしく候。但しシエレーを說くものといへども流石に其の作に對し若しくは其の生涯に對する同感を取りて、直ちに現在生活の規範を論じ去らんとするものは無之候。道德は詩を壓し、詩は道德を壓するを事として、眞に其の間に挾まれる人生の難事を研究し解決せんとするもの無き我が思想界に思ひ比べては、ジヨンブンの重さ萬鈞と申すべし。さて現代にありては、前便にも申せし如く、スヰンバーンを唯一の飾りとし、若手にては兎も角もキプリングの聲望なほ遙かに他を壓し居り候。つゞいてはワトソンに指を屈するもの多し。フヰリツプスを說きミセス、マーガレツト、ウツヅの詩才の方面を說くときは、候補者は尚ほ際限もなく出で來たるべく、結局此等はみな未定案にして將來によりて其の眞地位定まるものと存じ候。斯く述べ來たらは以て如何に英國詩壇の現狀の心細きものなるかは察せらるべく候。流行歌、子守歌等についても、尚申すべき事有之候へど、他日を期し候。

評論の方面にては、夫のマクミラン會社の『英國文人傳』叢書の大抵評判よき(テニズン論不評)外、前に申せしブルークの『ブラウニング論』など、大なる評論物と申すべく、ラスキンに關するもの、ダンテに關するものなども一二有之、專ら理論に渉れるものにては、セーンツベリーの批評史の第二卷、前人の未だ到らざりし領域に接し候ため、强く人の注目を惹き、一派の人は其の難解にして奇語多き文章にも、其の快樂的審美說の主義にも其の傲岸にして冷に過ぐる態度にも批難を入るれど、嚴然たる大著なることは否むべからずと存じ候。丁度十八世紀まで進み居り候。此の著者は今エヂンバラに文學修辭の教授を致し居り候へば、其内尋ねて見たしと存じ候。倫理の方面にては故シジウキックが遺著 The Ethics of Green, Spencer and Martineau を最とすべし。三家の倫理觀に對する批評と自家の Methods of Ethics に見はれたる主義の辯護とを含める講義集にして、以て最近に於ける英國倫理界の四傑を一堂に見るを得べし。倫理的快樂說と心理的快樂說との關係は如何。快樂的倫理觀と社會的乃至博愛的倫理觀との結局の調和は如何。此の書一冊を繙くも、優にかの人心の倫理的事實を沒却して、背理論を超理論と心得る僞惡者流をさとすに足るべし。吾人も寧ろ根本に於いては快樂觀、個人觀を取るべし。されども、今日歐洲思潮の深き部面に流るゝ快樂觀個人觀は豈彼れが如く單純幼稚のものならんや。吾人いま暇を得ず。此の書を梁川君の座右に進めて、病ひ平かなるの時其の評を公けにし給はんことを望むものに候。尙ジエームス、マーチノーに關しては、其の詳傳も二卷の大冊となりて今夏出で、是れまた好評たれど、我等には趣味薄く候。次にはウキリアム、ゼームスの The Varieties of Religious Experience は其の書名の示す如く人心の宗教的事實の研究にて、蓋し今年の出版物中最も價値あるものゝ一に候ふべく、其の後に出でたるマロックの Religion as a Credible Doctrine また其の教義結論よりも其の前驅として著者が現時のあらゆる教義を破したる所に痛快の知識ありとの稱讚を得たるもの、是れに亞米利加ハーヴードの神學教

授、故エヴレットが The Psychological Elements of Religious Faith（此の書は極めて初歩なるもの）を合せて最近英國に於ける宗教心の心理的研究を觀るは最も趣味あることゝ存じ候まゝ、是れは細論を後に期し申候。勿論是れは眞研究の方面のみを取れるにて、此等とむしろ反對の側に立ち、初めより宗教を研究の外に置き哲學の外に置き科學の外に置かんとして、己れ却りて一種の研究者となり哲學者となれる類の書は多く有之候へども取るに足らずとして度外に置き候。此等の書多くは彼の說教者の口吻を學びて、宗教は超自然の感情に基づくが故に知識の外なりといふ一案を、語を換へ人を換へて反覆するに過ぎず。超自然を說いては皆自然と混雜するも此の種の書に候。一世の科學的知識が不可有と斷ずる所に迷信の境あり、一世の科學的知識が不可知と斷ずる所に宗教の境あるを思はず、哲學を斥くるの筆鋒を以てまた科學的知識を斥けんとするは此の種の書に候。其の他ボールドヰンが Dictionary of Philosophy and Psychology も續々出でゝ手數のかゝりし有益の書の一に候。

また亞米利加のリツデルが An Introduction to the Study of Poetry は英詩の句法を分解的に研究したるものにて、我れ等には少なからず興味を覺え候。キツドの Principles of Western Civilization は、是れまた今年中の大著の一にて世評も固より申分なく、史家、思想家の必ず讀むべき書と申候。後より細評いたすべく候。

譯讀物にては、トルストイ。ゴルギー。モーパツサンなど見受け候。但し是等固より日本の如く。我が家を空にして之れに走るわけにはさら〳〵無之、日本にゴルギー入りニーチエ入るといふとは、全然意義を異に致し候。過般の一新聞に、イプセンの我が邦に譯せられしことを記して、此の諾威詩人の心理研究が果たしてよく日本に適するか、はた日本人も The things to read といふが如き讀物の流行を有するか、そも〳〵彼等が盛んに泰西の文明を味はんとするの結果なるか、といふ

やうの事を書き居り候。日本人は寧ろ如何なる心理にも餘りに早く適し過ぐると申すべし。

嘗て在獨の學友箕水君は、日本人の弊所を顧みて、巾着切の如しとの事なりしが、是はむしろ其の卑くして小ざかしき智識の上よりのことなるべく、情の上より申さば、六七歳の少女の如し。それすら動ゝもすれば四十度以上の熱を持ちて、神經の高じたる形と申すべし。泣くも笑ふも法外也。他年若し佛蘭西が所謂文明進歩の犧牲となりて、第二の革命に狂ふことあらば（されども事實は然らざるべし。歴史は繰り返すものに非ず、佛蘭西は日本よりも賢なり。經驗の意義を知れり）其の後へに妄奔してダントン。ロベスピールが餌食となるものは日本人なるかも未だ知るべからず。吾人の學ぶべき經驗は寧ろ英獨にあらずや。

話題本に歸りて、雜著とも見るべき新刊の中にては、彼の杜國のクルーゲルが Memoir とデウエットが Three Years War とが最も歡迎せられ、クリスマスの贈物用として、多くの書店が店頭に推薦し居るものに候。其の他 Encyclopedia Britanica 第十版增補の部も續々出で、Oxford English Dictionary も既にQの部まで進み候。是れ等は何れも世に定評あるものとて、許する迄もなく候。（明治三十七年八月六日稿）

偶感

七月八日、國にあらば、露の朝顔曉の風やいかになど。書中にして想を東方の諸君子に致す。

倫敦はいま、苺の都、芝居の都、繪畫音樂の都なり。世界の西より、南より、此の大都の塵と煙とを浴びんが爲に集ひ來るもの、日に萬人と稱す。豈また盛ならずや。

されば擾々の物、一念の風に從ひて、煙の如く揚り、塵の如く泯す。それ天に快樂の星あり、地に快樂の泉あり、人間俯仰の際、一念の眼子每に是れを視る。是れを視て營々として往き且つ復るものは人の世か。手して掬べば甘泉おのづから掌にあり、天上の星華、偏へに此の時に會すべし。我等はたゞ靜かに此の理を思はんことを要す。我等もと、生まれて地上の物たり。其の思ふや境の俗たると仙たるとを問はず、理と事と、等しく可、要は味ッて其の情趣に達するにあり、涙こぼるゝまでに深く思ふにあり。此義を示すものは文藝なり。想ふに一切の人生は、割ッて二つとすべし。道德其の一側にして、他の一側は文藝なり。道德は勤勞を意味し、文藝は快樂を意味す。人生は只この二途のみ。

二途といふ。然れども造物のもの豈二つあらんや。之れを分かつものは一心の觀方なり。我れ若し勤勞の窓より望むとき

は、山河星辰、有情と非情と、悉く道徳の意義を帶し來たらずんばあらず。萬法何ゆゑに孜々として流轉し行くか。鳥の歌ひ獸の奔る、なほ且つ孜々の姿あるは何ぞ。そも〳〵我等が心を勞して如是の考察に耽る所以のものは何の意ぞ。總べて是れ道徳也。斯くの如くして、小は衣食住の事より、大は政治、學術、宗教の遠きに及ぶまで、之れを勤勞と見るときは、すべて道徳の範圍を出でず。文藝も亦た此の窓の前には道徳の衣冠を着す。

然れども心眼の旋轉は一瞬なり、一たび情趣の門に入り、快樂の窓を開くときは、是等のもの、忽然として其の姿を變ず山川禽獸はいふを須たず。衣食、政法、すべて一面の文藝也。科學、哲學も文藝なり。宗教も文藝の一科に過ぎず。道徳も其まゝにして文藝の觀を成すべし。天地は展べたる一大文藝のみ。

私におもへらく、造物の義、もと二つ無し。人生の至極はそれ文藝にあるか。然れども人は時間と差別との囚虜なり。今遽に道徳を滅し勤勞を滅して文藝の一味にのみ住せんとするは迷ひにあらずや。迷へりといふまでも無し、斯の如く將欲するの刹那は、やがて勤勞に非ずや。道徳に非ずや勤勞絶つべからず、道徳滅すべからざるなり。

かるが故に達人は常に道徳に住して而かも之れを文藝と見んとす。一念の工風とは此の謂ひにあらずや。安立もこれのみ宗教もこれのみ。古の達人が、あら面白の世と歌へるは正に第一勝境に居るの覺悟なり。

我等若し未熟にして、達人の境に居ること能はずんば暫く現在を以て修業地と觀ぜんか。少なくとも日に一たび二たびは其の道徳心を忘れんことを思ふ。神、斯くの如くにして寛に、體、斯くの如くにして健かなり。之れを第二段境といふ。

然れども、此れと相忘るゝは彼れと相執するの謂にあらず、偏執あれば玆に排斥無きを得ず。排斥あるは是れ勤勞の始めなり。道徳の始めなり。文藝は一切の物を排せず、一切の物をもしろく味ひありと觀ずるの心に、文藝の詮義あり。されば

強いて文藝の心に參して精進の緣を作せと說く。文藝の心はげに大自在なり、あらゆる思想、學說、主義、道德を情化して厭はず、あらゆる感情を快樂にして厭はざるべし。

話頭を轉じて以爲へらく、西歐の文藝に觸るゝの機多きと共に、却つて想ふは故國の文藝なり。近世日耳曼の文學を說くものは、更に足利僧院の文學に許多の回顧を寄するの情に堪えざるべし。伊如利の文藝を說き、自然を說き、バオロ。フランチエスカが夢の如き戀を說くものは、また元祿の櫻の雲に小袖幕、西鶴、近松が心中物語を忘るゝこと能はざるべし。殊に近松は大いなるかな。若し詩的といふの點を以てせば、ダンテが幻想中の一曲、沙翁が傑作の一つを以て之れと同架せしむるも、何の異議かあらんや。不幸、東海の端に生まれて、言語懸絕、西歐文華の鼓吹となり、源泉となることダンテ沙翁の如くなるを得ざりしは、近松がために憾みとすべし。日本の文藝は、なほ長く彼れに參して、神徠の露に霑ふべきなり。

（明治三十六年七月稿）

風光

新嘉坡より

別來二旬、御左右如何、例の滯歐文談と銘打ち候もの、船中にて直ちに序開きをと存じ候へど、思ふに任せず、讀者に對しては、約に背くの罪淺からず、貴兄並びに編輯局の御迷惑嘸と存じ申し候、次便よりは、せめて有りのまゝなる日記中のふしぶしをも、取りまとめて、責を塞がんと心がけ居り候、今朝當シンガポールに着、赤道を去ること一度何分と申す土地の割には、凌ぎよきやうに候、公園とはいはず、市街といはず、人間といはず、すべて天地の色彩形式が太陽の猛熱烈光を中心として、之れに苦鬪し、之れに虐げらるゝの標現を有し、强く、濃く、逞しく、日もさむるばかりなる一面と、傷き、疲れ倒れて、夢の如く眠れる一面との、奇異なる調和を感じ候こと、今さらながら、初見の眼には新らしう存ぜられ候、人生の意義は苦鬪か、そもそも其の終局は敗殘か、遙にかの印度の古美術古思想が由來するところなど思ひやりて、今夜は甲板の上に例よりも夜を更かし申し候、ソーフアーに凭りて海峽の微凉を送るに任すれば、伏し待ちごろの月、檣頭にかゝりて、夜は一時をも過ぎ、對岸に點々する燈影の赤きのみ、我が世さまざまの夢をさゝやくとおぼへ候、三等に乘り組みし五

十人許りの出稼ぎと見ゆる男女、當地より上陸致し候ため、甲板のあたりは一段の靜けさを加へ候、月の下に三々五々、若き、老ひたる、男女の打ちむれて興じ更かすさま、色々なる人の身のうへ行く末など聞きては、其れも興あることに覺へ居り候ところ、今日限りと相成り候、小話どもは追つての事、この書面認め了り候とき午前二時、食堂の電燈下にて寒暖計九十度に有之候、諸君ハよろしく御傳へ下されたく、上海香港と一覧し來たりて、未だ航程の半ばにも達せず、倫敦に着致し候は五月上旬の豫定に御座候、三月二十八日、宙外兄の几右へ、抱月生。（明治三十五年三月稿）

海上日記

明治三十五年三月八日　わが横濱を出で立つは今日なり。朝早ければとて、三時半といふに夜着より出づ。嗽がんとて、椽の戸一枚くれば、うれしくも晴れたる空に、星影はなやかなり、新しき水にて身内を拭ひなどすること例の如し。タウエルに含める冷水の、體溫と觸れて、簇々たる白氣我れを包むの際は、神氣旺發、まことに咳唾も詩を成し、千卷の經典も聲にしたがひて說くべしとおぼゆ。八時五分前新橋にて人々に別かる。今はなほ行くもの丶悲しき時にあらず。横濱にては汽船問屋に少憩して、十時本船に乘り込む。別を齎らせるの諸氏なほ三十人を剩して小蒸汽の通ひ路もいとにぎやかなり。

我が乘り組めるは早きかたなりき。後幾杯かの小蒸汽に人の乘り込むたび〱、我れは、却りて甲板の上より人の別れを見る身となれるも可笑し。いざ是れが最後の通ひ船なりと、人々を促したつる聲す。惜しき別れもこ丶に斷つべし。留まるものは征衣の人、みな舷に倚りて望む。梯子づたひに小蒸汽に降りゆく中には年わかき細君の、人目つらきが中を今一たびとそと振りかへりて夫と顏見あはせたる。あ丶我れは、斯かること書きて、涙無き者と人に譏られやせん。次は頬ゆ

たかにして半白なれども、さして身分ありとは見えぬ老女の、十ばかりなる女兒の泣きくづれたるを、かい抱きて端舟にかへれる。乳母にやあらん。母はこなたの人にて、父なる外人の歸國するに、この兒、血に泣く別れすといふなるべし。御身そも何の宿因ありて、斯かる際には生を享けし。長からん生ひさきも哀しいかな、涙多からずば止まざるの命運、そが血に肉に彫られたらずや。これを想へば、滿船の別離多しといへども、未だこの薄命の一女兒より慘たるはあらざるなり。

既にして汽笛鳴り、山の如き船體は、一反ばかりも斜めにめぐりて、小蒸汽と別れを惜むこなしさま〴〵あり、打ちふるハンケチ、帽子の類、海風になびきて、漸く遠く、白く、小さく、消えもて行けば、あゝといひて、人々はじめて我れにかへれるが多し。この時正午を過ぐること半。同乘の新しき友、さては事務の人々などゝ、名のりかはして懇意を頼むも斯かる旅路はことさらに頼まるゝ心地することそ、をかしけれ。

夜は食堂にて二つ三つ雜談ののち、ケビンに歸りて、八時半床に就く。スチームに暖を取りたれば、暑くして汗出づ。

三月九日　細雨午後三時半、神戸港に入る。遠州灘、紀州灘、ともに平穩なりき。

三月十二日　晴、朝十時半出帆。こゝにて乘りこめる人多し。

三月十三日　雨、朝早く門司に着く。夜甲板に上りて、門司と馬關と、兩岸の燈火星の如く輝くを見るとき、却りて情多し。

三月十四日　半晴、七時四十分、左に近く六連の燈臺を見、右に遙に長州の地角を望みて走る。人々、本土の見納めなりとて、甲板の上より指顧す。この邊海少しく荒る。正午神戸にて合せし時計に三十分餘の差あるを見たり。午後六時、甲板に上れば、始めて四方陸を見ず、渾圓のたゞ中に、我が船一つ泛然として、弦月檣頭にかゝり、星光かすかなり。空の色

淺黃にして、裾のかた次第に灰がゝりゆく。水黑く、波浪長大なれども、舐め過ぐるが如く靜かに、たゞ我が船脚のさへぐを聞くのみ。

三月十五日　朝、霧あり。夕かた黃海に入りて海水黃なり。

三月十六日　霧深く、船揚子江口にありて進むを得ず。霧中所々に鐘聲を聞く。繫留して晴を待つ船の相警むるなり。

我等がこの頃の生活、朝餐の卓を撤すれば、食堂に留まりて雜談に耽けるもの、圍碁、將棊、トランプの思ひ〳〵を戰はすもの、講談小說雜書のたぐひに見入るもの、出でゝ甲板に立ちて望むもの、舷に倚りて語るもの、輪投げ、球つきのたぐひより、遊步、運動、倦めば寢ね、時來れば食ふ。たとへば海水浴などいふものに四五十日を過ごすべき一大合宿所の如し。

三等室にスマトラ島とやらんを志す一群の老幼男女あり。苗字は何れ洋名なるべき一婦人の率ゆる所、人々の眉目おのづから淋しきは、故鄕の風の荒きに堪えかねし身なればなるべし。中に容すぐれし十二三の一女兒あり、父なるは世にいふ善人らしく、母はありやなしや、よくも知らねど、父の側にてじやれ居るさまは無心と見えぬ。されど早くも主人の眼鏡にやかなひて、扱ひのこの兒のみ別格なるは、あはれ、如何なる身の行く末となるらん。二等客の三五人こなたに立てるが、無遠慮に其を指さして噂しあへるを、彼の兒いかにか見けん、つと走りて船室に入りしまゝ、扉を閉ぢて出で來ず、人々なほも惡しざまに評し合ふ。されど今の彼の兒罪なし、戶を閉づるとき、振りかへりて人々を見し眼には、必ずや怨みの淚にじみたるべし。あゝ醜きの雜種の女、彼れは或は財貨の中に泣いて一代を送るの人となるべし。此の女は豈、煩惱の前に笑諂を鬻いで身を立つるの憂なからんや。しかも共にこれ差別の世の犧牲なり。あはれならざらんや。

三月十七日　十時頃霧晴る。上海沖にあり。上陸して見物す。舟より望むところ、春河盈々、春帆遙々、砂の色せる沿岸の平地限りなく、楊柳烟るが如し。人家あり、畑青く、桃花點綴して一輪車のその中を走るが見ゆ。午後急ぎて錨を抜きたれど、霧また至りて進むべからず。夜月痕朦朧として甲板の上を照す。

三月十八日　濃霧、船依然として動かず。例の鐘の音のみ賑はし。人々つぶやくことしきりなれども是非なし。

三月十九日　船出づ、霧稍晴れたれど、風强し、婦人など船暈の氣あるものあり。

三月二十日　風すさむ夜半、月檣頭にかゝりて荒凉の景いふべからず。

三月二十一日　晴、暑氣漸く加はる。昨日荷物庫を開きたれば夏着の用意などす。臺灣の沖も過ぎて無事なり。人々航海の安全を喜ぶ。薄暮汕頭の燈臺を望む。夕陽團々として、眞紅の色燃ゆるが如く、橄欖の雲の末、灰色に褪せて黒き水の面と綴ぢ合はさるゝあたり、切れたる雲のさま〴〵の形して赤日の前を馳せかふ景趣見事なり。三等室に尺八を吹くものあり旅情を惹くこと多し。

三月二十三日　曇、香港着。上陸。見物。支那人の人足ども先を爭ひて端艇に來たり、仕事を求む。人々うるさしとて大喝すると共にステツキ、傘の類を打ちふりて毆打すれば、四十男が泣顔して手を合はせ容赦を乞ふ。意氣地なしとも言はばいふべけれど、國民としての彼等が立脚地も悲しきものなり、おのづから斯くもなるべし。さるにても家には彼れを夫と賴り父と縋るものもあらんを、其れらを見なば、如何に心外にや思はん。我れも未だ野蠻人を打ちしことなければ、好き折りと背中をこづき試みたりなど誇り顔に說くものある、我れは與みせず。總じて上海以西、數に於いて、また恐らく富みに於いて、帶色人種は未だ白色人種に劣らずといへども、ひとり位に於いては、哀しいかな、彼れ常に主人たり、此れ

常に奴僕たり、彼れは使役動詞に屬し、此れは被役動詞に屬す。こゝに至つて金には換へがたき我等のプライドの、少なからず害せらるゝを感ずるなり。若し夫れ地中海よりあなたにありては、帶色人種はあらゆる意味に於いて、零なり。これ恐らくは我れの之れをいふすら既にあまりに幼しと見ゆるの事實なるべきも、世上何ぞ驚嘆の聲のみ多くして、悲憤の聲の小なるや。追摸の人はあれども並行の人なく、並行の人はあれども壓倒の人なし、意氣なし。

夜香港の町に色さまぐの電燈の燦爛たる、赤きはルーピーか、青きはオーパル、白きはダイヤモンド、寶石の數をつくして掲げたるに異ならず。

三月二十三日　午後出帆、西洋人の乘り込み多し。

三月二十四日　今日よりプロメナード、デッキに天幕を張りたれば、冷し。夜長椅子に倚りて月の東天に浮ぶを見る。一望眞に縹緲として、潮の流るゝかたに銀光落ち、さながら濃き油の湧くが如し。東北遙かに雲のたゞよふあたり、日本にやなど、人々語り合ふ。夜更くると共に風稍々寒ければ、毛布をまとひて月に對す。下には例の三等室の兒女壯丁等幼きは唱歌をうたひ連れて室の周圍を馳せめぐり、若きは、三々五々、月下に群して語り興ず。既にして興つき人散じ、滿船の夜涼水の如し。寢に就きし頃は半夜を過ぎたり。

三月二十六日　暑氣ますく加はる。海上はるかに飛魚の群を成して跳ること銀鳥の如きを見ること、漸く繁し。海風の裡なほ寒暖計九十度の上にあり。正午北緯八度餘、新嘉坡を去ること三百七十一海里、昨日正午より二十四時間の船脚約三百里といふ。夜は例の如く甲板に群れて話しふかす。

三月二十七日　晴、今日始めて携へたるケーンの『イーターナル、シチー』を取り出だす。夜十一時半、一道の光り物頭を

掠めて飛ぶ。或は流星なりといひ、或は電光なりといふ。

明日は新嘉坡に上陸すとて、三等室の人々壯なるは帝造りに、婦女は髪など結ひあひて忙し。

三月二十八日　新嘉坡着。上陸、見物。某旅館に日本料理の晝食を呼びたり。胡瓜もみのうまかりしこと、今に忘れず。例の馬來街といふを過ぎる。怪しげなる洋服して、髪は佛蘭西卷といふにかぶりたる日本婦人の、三人五人、店頭に卓を擁して、頬杖せるものあり、居眠りせるものあり。一行の人々車上より指顧して、國辱なりと罵るもあれば、國益なりと笑ふもあり。さすがに得堪えでや、顏を背くる女ありき。彼等が一代を思ふに、戀にあらず、慾にあらず、頬に血あり、顏に嬌羞あるあひだは、彼等たゞ、怨みに熱き涙をや命としけん。其の涙涸れはてゝこそ、眼元に浮ぶ今の笑ひは死よりも冷かに、泣くべき故郷を雲と見て、身は浪枕の、搖れつ流れつ、をかしう暮らす月日なり。さるにてもこの地に上陸せる女兒等が、やがて讀むべき身の因果經かと哀し。

三月二十九日　晴、バナナとパイナップルとを買ふ。味よし、七歳の幼年が通學のため倫敦なる親戚の家に寄寓するなりとて一人乘り込む。外に此の地よりの乘り組み中、サイアムのプリンスなりといふ十三歳の少年あり。英人一人扈從す、稻垣滿次郎君を御存じかといへば、然り、菊石のある人にて、ビリヤードが上手なりと、覺束なき英語にて答ふ。

夜、出帆。

三月三十一日　晴、早朝ペナン着。上陸見物如例。新嘉坡は土の色、赤煉瓦を碎きし如くなりしが、此の地のは白く光れり寒暖計九十七八度に上りしも、夜猛雨雷鳴ありて凉氣到る。

四月一日　晴、暑氣甚し。灣内に黑鯛に似たる魚多し。人々鈎に麪麭を加へて之れを釣る。午後出帆、夜雷鳴しきりにして

海風颼々、劇電さかんに潮を射て、黒漫々の天地、光明倏忽、壯觀言はんかたなし。

四月二日　印度洋に出づ。早旦朝暾の瞳々として海を離るゝを見る。初めは朱の沸くが如く、中ごろ黄金の燃ゆるが如し。海波の光を浴ぶるさま、歡呼してどよめくに似たり。

四月六日　朝、錫倫島のコロンボに着く。翌日上陸、釋迦の靈地といへるカンヂーに遊ぶ。

四月八日　若狭丸の歸航するに逢ふ。今夜出帆。總じて印度地方の語音には、我等が毒蟲などの鳴く音に連想すべき一種の音あり。ゲリ〳〵〳〵と響きて、石を磨するが如し。

四月十一日　晴、兩三日來腕に小瘡を生じて痒きこと限りなし。同船の人この患にかかるもの多し。或は南京蟲の害なりといひ、或は潮かぶれなりといひ、或は船荷の中なる菓物の蟲の螫すなりといひて定かならず。今夜檣頭に弦月を見る。船のコロンボを出でしよりスエズに着かんまでは、日を要すること二週間餘、途に紅海の熱風あり、歐洲航路中最難の處なりといふ。且つ海上にありて單調の生活に倦むこと既に四十日、人情誰れかこのときに於いて征衣の重きを思はざらんや。夕月の下、椅子を并べて相對するもの、話頭すでに盡きて、默々として海水の走るを眺む。たま〳〵遽然として船員の肩を打つありホーム、シックと叫ぶ。

船中の二つのウオツチ、ワーヅあり。ホーム、シックと、シー、シックとなり。種々の人によりて、種々の場合に繰りかへさる。然かも言ふもの常に一種の笑ひを帶びて、言はるゝもの多くは否と答ふ。蓋し二つのシックに批難の意あればなり。シー、シックはしばらく措くもホーム、シックは男の恥として批難せらるゝの意義に存すればなり。されど思ふ、此の批難あるがために、ホーム、シックは味ひあるものとなるに非ずや。船中に、外國なる夫の許へ行くといふ一夫人あ

り。他のホーム、シックと言はるゝ人を評して「そりや其の筈ですわね。奥さんをお迎へになつて、間も無いといふではありませんか。それでホーム、シックにお成りなさらなければ、人ぢやありませんわ」と。一結痛切なりといふべし。されども、四十年來洋行の人何ぞ限らん。彼等概ね一たびは此の痛切の事實に觸れながら、我れホーム、シックにかゝれりと公言するものゝ極めて稀れなるは、豈彼等のすべて僞善者なるがためならんや。齒をくひしばりて泣かぬ涙に腸を斷つもの、妻を棄て、兒を捨てて國に命を捧ぐるもの世に謂ふ義理と人情とは、二つながら眞にして二つながら相容れさるの矛盾なり。是れ造化が與へて以て最後の宿意とせし所以、人生の波瀾と趣味とは、一に之れより湧く。遠征の丈夫、家鄕の想ひを人目に包むとき、詩人はじめて泣くに堪えたり。さもあらばあれ、今の世、洋行の一語はたゞ名と利との一面のみより測られて、羨望の的となれども、絕えて同感の的となることなし。ああ豈啻にホーム、シックのみならんや。

四月十六日　曇、紅海に入る。却りて暑氣漸く降るを覺えたり。翌日より初秋の如し。

四月二十日　晴、衣服を重ぬ。午後スエズに着き、夕暮より運河に向かふ。難事業とはいへ、運河はなほ未成工事たるを免れず。

雙岸の荒野、平砂茫々として、オアシスの形ちせる所には、樹木の間よりかすかに燈光の點々たるを見る。彼所にも人生あるよなど思ふに、淋しく物悲し。遙かなる砂山の麓より蒼然たる暮色蔭の如く蔽ひ來て、悲風何れよりともなく吹きすさみ、天地剖闢の曉、人間太古の廓寥も斯くやと感ぜらる。原人其の中をさまよふの記錄は、やがて聖書にあらずや。

四月二十一日　朝ポート、セッドに着く午後拔錨。

四月二十二日　晴、地中海に入りてより總じて浪高し。寒暖計日中六七十度の間にあり。今夜八時過ぐる頃より月蝕皆旣。

四月二十六日　晴、此の日體量を計るに百十一磅半あり。依然たる瘠男兒たるをば免れざれど、肉食を常としてより、氣の餒ゆること少なきが如し。是れ固より後日の斷定に須つべきものなれども、文學者に懶癖多きは、精力の過勞に由らざらんや。他の體育と共に肉食は正しく精力持續の一法たるに似たり。物心一致を說かんか、そも〳〵文學者肉食論を草せんか。呵々。

四月二十七日　朝、マルセイユ着、上陸、見物、如例。同船の邦人は大抵この地より去りて獨と佛とに向かふ。殘れるものは我れと他の一人とのみ。他は皆外人なり。

此の地の畫堂に裸體畫を見る。市街の光景も上調子なり。總じて此の地の一瞥が描ける佛蘭西は、なまめいたり浮氣なりといふをもて足れり。今はた他を言はんや。

四月二十九日　晴、音樂を載せたる小船來たる。樂器はヴイオリンと立琴。樂手は二人の壯漢と少年一人少女一人。少女の十六七なるが、衣服の襤れたるに、帽は固より頂かず。白面の少年と相對して、心中の樂を彈ずと聞けば、興深し。舟を寄せ一曲彈じ了りては、少羞を帶びて錢を乞ふ。久しく樂音に飢えし我れは、之れをすら可憐と見ぬ。

午後出帆、風浪險し、船暈の氣あり。

五月一日　夜、香港より乘りし亞米利加の宣教師といふもの夫婦、我れに基督教を信ぜよといひて聖書の全然信ずべき由と奇蹟は卽ち超自然なる由とを論ず。夜半ジブラルタルの海峽を過ぎたりといへど見ざりき。

五月二日　船首漸く北に向かふ。

五月五日　日本ならば端午なり、この朝風に嘸な鯉幟の飜へるらんなど、人々噂し合ふ。午後英吉利海峽に入る。

五月七日　曇、昨夜テームス河口にあり。今朝六時過ぐる頃、ヂルベリー、ドックに入る。倫敦市までは汽車一時間程なり十時半安着。

此の航海に同船せし人々、日本人にては醫界の留學者殊に多かりき。ベナンより乘りし洋人夫婦に一人の醫師といふ洋人同行せり。妻君が夫をば全く忘れたらん如く終日、醫師と散歩を共にし、午眠を共にし、會話を共にするを見て、衆評紛々たり。マルセイユより乘りし婦人四人の一行中、主人と見ゆる若き二人は姉妹なるべし。妹なるは十八九にや、色蒼く眼つりて。はげしき神經質と見ゆ。これがつのりし癇癖か、失戀の病などいふものを治せんため、世界漫遊なるべしと、人々いふ、猿、小馬、車など携へたり。姉なるは色は同じく蒼白なれど、眉殊に秀でて、鼻高くたとへば希臘の女神像などを活かしたらん如し、淋しけれども氣高きところあるが、常に愛馬を引きて散歩するさま、大百姓の娘なるべしなど評したるものあれど、我れはスコットが作中の女姓など思ひ比べぬ。スコットランドのものなりといへば殊、に山水秀靈の氣を帶べるが如く思はれたり。我が同室にはフレーザー君と呼ぶ英人あり。性諧謔にして肖像畫を巧みにす。(明治三十五年五月稿)

旅中旅行

一

八月十四日にかしま立して、初めの二週間は北の田舎に、後の二週間は南の田舎に、倫敦の夏を避けた旅中旅行記の一節が是れである。バング、ホリデーの季節と云ふので、同行すべて十二人、にぎやかな、多趣味な旅行隊であつた。勿論一行の十一人までは此の國の人で、彼等が呼んで極東の友といふ日本人は吾れ一人。更に之を品別けすれば、牧師が一人、其の妻君、女教師をしてゐる姉妹のミス、意匠業の人、其の細君、幾棟かの大家で、家屋賣買の世話もするといふ男、石油會社の役員、小蒸汽の持主、其の妻君、建築受負業者が一人、風來の吾れを加へて、締めて十二人である。

此等はすべて、吾が假寓してゐる、牧師の家を中心として、其の懇親な關係から集まつたものたることは、言ふまでも無い。されば牧師は一行の長老、ガヷナー、チエヤマン、世話役といふ格あでる。當年五十九歲、半白の、でつぷりとした、何所かに稚氣のある、舊のマンチエスター、カレッヂに學んだといふ好人物、今は倫敦某區にユニテリアン教會を持つてゐる。發音の正しいのが自慢で、歌も昔しは得意であつたらしく、若い者等が客間のピアノの傍で『ホネーサックル、ビー』や

『ピコース、アイ、ラヴ、ユー』を謡ふ時には、出かけて來て『ビスケー、オー』を謡つたり『レデー、オブ、ライオンス(リヨン)』のレシテーションをやる。自作の讃美歌集もあれば、宗教雜誌に小話や雜錄の寄稿もする。

此の人が先發として倫敦を立つたのは、十日の夜、日曜の教務を了へての夜汽車で、指すかたは例のレーキ、ヂスツリクへ。ワーヅワースの名と共に、人の得忘れぬ湖畔詩人の根據地である。倫敦を北に走ること汽車にて約七時間程、スコツトランドとは山つゞきで、アイルランドとは島一つ隔てて相接してゐる。

此の地の形勢をざつと言つて見れば、蜜柑を輪切にした體である。一簇の山脈恰も車輪の輻の如く蔓こつて、其の凹み〳〵が深藍を湛えた湖水になつてゐる。湖畔の名は之から來て、此の水と此の山とが相寄つて、當國第一の景勝地を成す英國の瑞西といふ稱呼で、概觀は想像せらるゝであらう。

數ある湖水の中、最も大なるがが取りつきのウヰンドミアで、長さ十哩、幅一哩、湖畔には小町村點在して、湖頭にある、さゝやかた町をアンブルサイドといふ。我等一行の宿は茲の靴屋の二階と定まつた。しめて八間、其の中には食堂も座敷もこもつてゐる。との先發隊からの便りであつた。

二

されば八月十四日、十時半の汽車に間に合はせやうと、家を出たのは九時少し前、ウツドのハンド、カメラを肩に、鞄の中には、着替一着と、小道具一袋、無くてはならぬものがワーヅワース集とベデカーの案内記であらう。讀みかけの書物も外に一二冊。登山用の金剛杖は家の人々が先年瑞西に遊んだ時の紀念といふのを其のまゝ、何れも四輪馬車の屋根に積んで

同乘は宅の細君と近所に住む例の二人のミスと、都合四人、ユーストンの停車場さして急がした。ユーストンは倫敦から北に向かふ線路の重もなる發着點で、假りに之れを上野の停車場と見たてれば、吾が寓居はやはり牛込の奥あたりである、勿論方角はちがへど。

車中一時間ばかり、三人寄つて姦ましいレデー等の喋べり競べには、吾が廻らぬ舌を挿む餘地も無く、片隅に小さくなつて聽てゐれば、姉娘は二十二三であらう、女教師で小供の世話に氣をつかへばか、年よりはふけて見え、器量も二の町なれど、氣立ては至つてよし。全體が質素に、じみなる好み、スツロー、ハツトは黒のレースにグリーン、リーヴスといふ取りあはせで、鼻眼鏡をかけてゐる。姉のあとから鈴生りといふ形ちで、きやつ〳〵と言ひながら車に飛び込んだのが妹で、十七八、色もずつと白く、、小造りの十人並のヤング、レデーと見えたれど、、顎のあたり少ししやくみて、横顔に婆さんめいた所あり。細君の紹介やら、さも〳〵懷かしさうな挨拶やら、形の如くあつて、、馬丁は靴を揚げる。やがて姉娘は袴のかくしから二通の手紙を取り出し、封を切つてざつと眼を通して、ほゝ笑んだ。

「グウド、ニウス?、スキート、ニウス?」

と細君が打ち込むと、一通は握つたまゝ、一通を細君の眼先きに突き出して、

「ミス、エーからですよ。フレンチなんかでねえ。こちらはミス、ビーからですが、フヰアンシーと一緒に南海岸の方へ出かけたのですと。」

「ミス、ビーの今度のエンゲージメントについては、面白い話しがあるぢやありませんか。お聞きで?」

「どんな話し?、聞かして頂戴ね。ね。」

とせき込んで、向き合つてゐる細君の膝を搖すつたのは妹娘である。

「まあ、急つかちな。待つてゐらつしやい。忍耐は德なり!。教訓になる話しですよ。之れはミセス、ビーから聞いたのだから事實でせう。ミスター、シーが今度の申込みをしたのは、先月の初めの日曜日で、教會の歸りであつたさうですが、ミス、ビーの方では、全く突然なので、何とも返事をしかねたさうです。併しあの通りしつかりした女ですから、返事を次ぎの日曜まで待つて呉れと言ひ延して、其の晩はそれなり別かれたさうです。それから家へ歸つて、一週間のあひだ、誰れにも話さないで、一人で考へて、考へて、到頭承諾することに決めたのですと。そして次の日曜の晩、また教會の戻りに一緒になつて、約束をしたのださうですが、是れからがお話しですよ。其のエンゲーヂメントの發表のしかたが面白いぢやありませんか、月曜のお饗に、家中のものが、みんなテーブルに集まつた時に、だしぬけにミス、ビーが「わたしや或る重大なニュースを持つてゐる、」と、斯う言つたさうです。するとみんなが「何だ〳〵」といふ。ミス、ビーが「ミスター、シーの一家に關して」といふと豫て知り合ひの仲ではあるし、みんながびつくりして、フオークもナイフも投げ出してミスビーの顏を見てゐると、ミス、ビーは落ちつき拂つて、「ミスター、シーが結婚約束をしたさうです」と言つたのですとさ。みんな吹き出して、「何のことだとは言つたが、ミス、ビーの顏があんまり眞面目なので、シスターが「誰れと?姉さん」と問ふと、ミス、ビーが眞面目くさつて「ミス、ビーとです」と言つたので、皆な二度びつくりして、「まあ、此の人は」と言つた限りで、跡は大笑ひになつたさうです。」

「だが若い思ひつきね。」

と例の妹娘は言つた。細君は言葉をついで、

「其の午から直ぐミスター、シーは自分の家の帳面をすつかり持つて來て、家の收入が是れ〳〵、自分の所得が是れ〳〵と立派に財產の勘定をして見せて、ミスター、ビーとミセス、ビーの同意を求めたのですと。」

ミス、ビーといふのは吾れも知てゐる。寧ろ瓜核顏の、あどけない物の言ひぶりをする、優しい東洋趣味の美人である。速記やタイプ、ライターが上手で、月給の貯蓄も少なからず、全體が思慮ある女といへば、是等はいかにも思慮ある結婚約束である。併し吾はつく〳〵思ふ、此の夫婦の行末は果して幸福と極まつてゐやうか。思慮選擇は大事であらうが、併しそればかりで夫婦といふ緣が圓滿になるかは疑問である。

と、斯んなことを考へてゐるうち、馬車は停車場に着いた。こゝで、落ち合ふべき他の一連が一汽車後れたので、借切りの一室に吾等四人、列車が動き出すと話しの緒が切れて例の妹娘が機械のやうに喋べり出して、細君が「チヤター、ボックス。チヤター、ボックス」といふので、一寸一場の言ひ合ひがあつて、倦んで。疲れて、細君がコナン、ドイルの『デユエツト』を讀んで獨り笑ひをすれば、妹娘は六片本（シクスペスぼん）の『秘密の家』といふやうな物を讀みかけて、居眠りを始める。姉娘は熱心に刺繡をしてゐる。

日本のレデーの噂が出ると屹度藝者ガールが引き合ひに出る。着物や髮のことを聞きたがる女の人情は何所も同じだ。妹娘の問ふには、

「日本のレデーはフエヤーの方がよいのですか、ダークの方がよいのですか。」

姉娘が側から、

「わたしはダークの方がよいのだと聞きましたが、さうですか。」

といふ。髮の毛の話なら無論日本ではダークの方がよいのだが、肌の色なら兩方であらうと吾は答へた。勿論日本人本來の皮膚の色は白いものでもダーク側の白味で、どちらかといへば、西班牙、佛蘭西の肌に屬するのであるから、美人の肌の形容にも雪の肌といふことがある。自分の思ふには、雪にたとへた所が、寧ろ冷い白さ、蒼につらなる白さといふ心をあらはして、ダーク、レデーを尊ぶ意味になる。併しまた美人の肌の形容に、櫻色とかルビーを薄絹に包んだやうなとかいふこともあつて、之れは明らかに溫かい白さ、紅につらなる白さを意味したもの、即ちフェヤー、レデーのことである。と說明した。但し之れが當つてゐるか否かは知らぬ。そこで此方のはと問ふと、細君が、

「やはり兩方ですけれど、わたしはダークの方を好きます。」

と答へた。恰かも列車がとある停車場に着くと、茶の廣告か何かに、大幅の日本婦人の繪が無樣に畫かれてゐるのを見て、一人が、

「イエロー、レデーも善いのですか。」

と問ふ。あんな繪ではといふと、例の細君が、

「イエロー、レデーでも善いことがありますとも。ホール、ケインの『イーターナル、シチー』をお讀なすつて？」

といふ。蓋し『イーターナル、シチー』の女主人公ローマは伊太利一の美人で、イエロー、コムプレキションともゴールデン、コムプレキションとも、さうしてヴイオレツト、アイスにレーヴン、ブラツク、ヘアーと作者が書いてゐる。即ち黃金の肌に、菫の眼、濡羽鳥の髮の毛といふので、細君が之れを想ひ出したのは、時に取つての頓智である。

さて汽車は倫敦を離れてより、ノーサンプトンからスタツフオード。マンチエスターとリヴープールの間を拔け、プレス

トン。ランカスターと、蜘蛛手のやうな線路の中を潛り潛つて、ウキンドミアに着いたのが五時過ぎ、車上の眺めは、ことさらに書くがものも無い。玆より乘り合ひ馬車でアンブルサイドの宿に向かふ途すがら、山色水隈は之れより愈々非凡となるのである。

ワーヅワースの眼には羊飼ひも羊も百姓も山も水も溶け合つて一つの自然に沒してゐたといふが、更に此の邊の山水とワーヅワースの間にも區別は無い。此の詩人はやがて此の山水の眼目となり生命となつてゐる。土橋の石垣にもたれて、夕ぐれの風淋しい金髮の少女も問へばワーヅワースが遺跡を語る。『ウキ、アー、セヴン』の熱き涙は、この少女にこそと思はれる。羊逐ふ老夫が諄々としてライドール、マウントの夢のあとを說くのも、『ゼ、ラスト、オブ、ゼ、フロツク』に、彼れと詩人と同じ生命に活きたればであらう。されば此の地の景色に筆を染める吾れは、ワーヅワースを外にすることは出來ぬ。

三

煩瑣な紀行は略して、この地、ウキンドミア湖のつぎがライドール。グラミスア、何れもワーヅワース集で人の知つてゐる名水で、コニストンに沿ふては、ラスキンの舊跡がある。山はヘルヹリン。スカフエル、バイク。ラングデール、パーク。瀧はライドール。ダンジョンギル。ストツクギル。舊跡にはワーヅワースがグラスミアの舊宅、ライドール、マウントの舊宅、彼れが墓、彼れが學びし學校彼れが宿りし家、彼れがいたづらせし刻み目の壁や卓子や、ラスキンが墓も、ハートレー、コールリツヂが墓もデクキンシーが住みし所、ハリエツト、マルチノーが住みし所、數へ來たれば限りもない。

ヘルヹリンを此の地第一の名山とすれば、登臨俯仰の感は之れに止めてもよい。ウキンドミアを最大最多趣の湖水と見れ

ば、明月の夜、露落ちて艣聲靜かなるの興も、之れに止めることが出來る。其の前に、一夜は晩餐後の食堂の會話をも聞くがよい。

護謨管仕掛で卓子の皿を動かしたり、催眠術の眞似をして人を驚かしたりパーミノロジー。フレノロジーから骨牌の手品までしつくして、今宵は人々唯卓子に肱杖ついて話しに耽けるといふ、土曜の雨の夜、隅の安樂椅子で小説を讀み始めた夫の姉娘を見かへつて、

「レデーシップ!。何を讀んでゐますか。ちよつとまあゐらつしやい。あなたに聞たいことがある。小說?。う、う、小說が、其事だ。家の娘が、いや家の妹が、その、むやみと小說を讀んで困る。わつしや、さう思ふが、若い娘が小說ばかり讀むのは善くないと思ふね。どうでせう。」

是れは建築請負業の、六十左右の赤ら顏で、金は持つてゐるといへど、敎育は無いらしい、卑しげに肩をゆすぶり、盛んに手眞似をする、一行中最も道化た、元氣のよい男である。一人の娘を遺して妻君に先立たれ、內々若い後添を探してゐるといふ形であらう。其れが、むやみと件の姉娘にぢやれては、一行のからかはれ者となつてゐる。是等は日本で見なれた光景だ。姉娘は閉口の體で、

「そこをお除なさいよ。暗いぢやありませんか。あなたに若いお妹さんがあつて?。あはゝ、若いお妹さんが?。あなたお幾つ?。」

「アンクル!。グランド、パー!。」

と呼びかけたのは牧師の妻君である。是れは既にしばしば出て來て讀者とも近づきであるが、五十近い、鋭くて心得のよい

聞かぬ氣のしつかりものである。自らは、ミス、ナイチンゲールの跡を慕ひ、政治はむしろチエーンバレン贔負で、ミスチシズム。スピリチュアリスムといふやうなものも好き。女は女の社會、家庭の社會にはたらけば、其でよいといふのは、穩和な女權論で、男は結婚後妻に對して薄情になるもの、男は女よりも常にセルフキッシュなものといふのが其の男子觀、自分は如何樣の男をもマネージする力を有してゐるといふが其のプライドで、一週に二回づゝ母に手紙を書くのが何よりの樂しみだといつてゐる。されば好人物の老牧師とは、正さに兩極性の和合で、家庭も美しい。十二支の日本の話しで、牧師の歲を辰だと言つてからは、夫を呼ぶに「マイ、リツツル、ドラゴン」といふやうなことを言つてゐる。其れで夫婦議論でも始めると「ルツク、ヒアー。マイ、フレンド」といふ勢ひである。同じ筆法で右の建築業者を嘲けるには常に「アンクル」「グランド、パー」の稱呼を以てする。「あなたのお娘御が小說を讀めばなぜ惡い。あなたは何を讀めば善いと思ひます。」

「さうさ、僕は歷史が善いと思ひますな。わつしあ雜馬の歷史が好きだ。だが奥さん、今日のアメリカン、レデーは奇麗でしたね。ゑゝ?、さうは思ひませんか。」

「駄目ですよ。もうエンゲージして居るといふにねえ。わたしがリングを見たのですよ。諦めて、レデーシツプの御機嫌でも伺ひなさい。」

「ひゝゝ。お!、レデーシツプ何處へ行つた。お!、お隣りか。是れはしたり、有り難い。」

とぴたり額を叩くと直ぐ向かふの意匠家の方を見て、

「併しどうでせう、小說は唯想像を書くばかりで、教訓に少しもならんでせう。事實で無いから。」

話しかけられたのは三十許りの、舌たるい口の利きやうをする好男子である。

「わたしはさうは思ひませんね。小説は快樂を與へれば、それが卽ち目的で、敎訓も同じことです。それに事實でないとおつしやるけれども、有り得ることですから事實も同じでせう。」

と末の方はやゝ怪しくなつたれども、日本でそこらの雜誌でも拜見してゐるといふ氣味。次ぎは細君の番で、

「そこが小説の善いのと惡いのとある所以ですよ。快樂はあつても害になるやうな小説は世の中に必要は無いでせう。快樂もあり敎訓もあるのでなくては、善い小説とはわたしや思ひません。」

　何處までも英國氣質である。默つてにこ〳〵としてゐた牧師は口を挿んで、

「害があつては惡いが、害さへ無ければ、小説は快樂のために讀むがよい。わたしはさう思ふ。わたしはさう思ふ。」

と「思ふ」の「ふ」に力の入つた調子でおだやかに言つた。

「オー、ノー。」

と反對したのは細君で、牧師はやはりにこ〳〵しながら、

「オー、イエス。」

「オー、ノー。」

「イエース。」

「ノー。」

「イエス。」

「ノー。」

としばらくは「イエス」「ノー」の太刀打をしてゐた。

「奥さんは小說は何んなのが好きですか。」

と意匠家が尋ねると

「わたしは寧ろローマンスが好きですけれど、ミセス、ハンフレー、ウオードも好きです。『ロバト、エルスミア』ですか、勿論ですとも。一番の傑作でせう。ライダー、ハガードも好きです。」

「ライダー、ハガートですか、丁度『ビアトレス』を妻が今讀んでゐます。」かたへを振り向くと若い、ダークな、華奢な細君が、ちよつと會釋をした。是は、父は猶太人とかいふので、極めて靜かなレデーであるが、病身で疳持ちといふ趣である。人の見ぬ間にはちよい／＼と亭主を睨んで、何か一言二言さゝやいては泣き顏をして見せる。素性の上のひがみもあるか、或る時散歩連の一人が五六尺向かふから、「さすらひの猶太人のやうに、皆な何を愚圖々々してゐるのだ」と怒鳴ると、此の妻君の額に忽ち靑筋の走るのを吾れは見た。見てむしろ哀れに感じた。閑話はさて置いて其の妻君が會釋ばかりで俯いたので、意匠家は更に、

「わたしは古い所ではスコットも善いのですが、チッケンスが一番好きです。おホ、思ひ出しても可笑しいのがある。近頃のではホール、ケインも善うござゐます。

『ゼ、クリスチアン』ですか。はあ、あれがあの人の名を成した作でせう。『ジ、イターナル、シチー』も善うござゐますね。それからコナン、ドイルですか。やはり「アドヱンチユアス、オブ、シアーロツク、ホームス』が面白いと思ひます。わたしはガイ、ブースビーも好きです。『ドクトル、ニコラ』お讀みですか。」

傍らの妹ミスがだしぬけに、

「わたし、ガイ、ブースビーの『ラヴ、メード、マニフエスト』を讀んでほんとうに泣きましたわ。」

「おゝ馬鹿らしい。イングリッシュ、レデーがあんな物を讀んで泣くといふことがありますか。」

一行の取締りといふ權威を具へた、例の牧師の細君が言ふと、牧師は小供をあやすやうな調子で、

「オール、ライト。グード、シング。」

妹ミスの身方をしてゐる。

「オー、ノー。」

「イエース。」

「ノー。」

と、またも押し問答が始まりかけた時、倅で會社に出てゐるのが口を出した。因みに言ふが、此の細君等論爭は好きでも、あとは誠に奇麗なもので、思想の自由。フリー、カンツリー。ブロード、マインデッドは紳士淑女の誇りだと言つてゐる。

「僕は『ビアトレス』を三度讀んだ。」

こゝらが日本ならば浪六物の愛讀者であらう。細君は「わたしはシヤーロット、ブロンテの『ゼーン、エヤ』を三度。父がやかましかつたので內證で、友達から借りて讀んだものですよ。」

其の外、ジョージ、メレヂスはむづかしい、キップリングは好かぬ、トルストイはショッキングであるといふやうな說もぼつ〳〵出かけた頃、話題は他に轉じた。

簡單に今一席つゞけると、次ぎは結婚の事である。是れはむしろ吾れが聞き手で、細君が説明者、起こりは、誰れかの金蘭簿の、「今の青年觀」といふ項の下に「カラーとネクタイ」と記入し、「今のヤング、レデー觀」の項下に「金のある夫」と記入しあつたのに基づいて夫の馬車中での結婚問題が、ふと吾が胸に浮んだので、レデーの前でぶしつけかは知らぬが、英國のヤング、レデーやヤング、ゼントルマンは、何を結婚の標準にするかと問ふと、細君は造作なく答へた。答へる前に日本では何うかと反問した。吾れの答へに、自分の理想は別として、普通には今玆にあつた通り、金や地位を標準にするもの、又は容貌ばかりで結婚するのも隨分あるが、本當の所はやはり性質、敎育といふやうなものであらう。細君の曰はく、性質敎育の上に今一つ貴いものがある、其れは戀愛である。戀愛が一番で、性質、敎育、財産は其上の附けたり、何れが一つあつてもよいと自分は思ふ。結婚はやはりラヴ、マッチのこと。と色々クキンやプリンセスの例など引いて辯じた。こゝが概して東西思想の違ふ一點でもあらうが、味ひある問題だ。夫の極端を好むものに言はせたら、戀愛だにあれば、思慮選擇は結婚の面にゼロだともいふであらう。吾が本心はさうは言はぬ。唯しかし戀愛あつての後の結婚と、結婚の後に生ずる戀愛とどちらが人生の幸福であるかは考へ物だ。

北英山水の概観

英國でも就中イングランドの景色は、南と北と全く趣きを異にすると稱せられてゐる。南は概して圓く、滑に、穩かに、平かで、北は山水奇拔、ちやうど我が中國邊の或る部分と東北地方との差の如きものである。併し是れは英國内での比較に過ぎぬ。今若し我等の目から概觀すれば、イングランドの景色全體に一つの調子がある、假りに之れを最もサズゼスチヴな言葉で言へば、牧場的とでも名づけんか。南英は言ふに及ばず、山水奇絶と稱せらるゝ北英、湖水地方ですらも、我等日本の風光に慣れた目には、穩やかなり柔らかなりといふ感を惹く。

假りに例を我が往時登臨の記憶に取れば、日本の高山といふもの、概ね數千尺の上に出でざれば奇と稱するに足らず、山中また嶄巖多く、樹木繁く、奔湍飛瀑あるを厭はず、溪谷の勝に富み、風雲の變を藏する所に趣味の中心がある。

翻つて北英の景色を想ふに、決して山が少いではない。スキドウ。ヘルベリンの山々連亘して、大なるもの少なるもの、圓きもの尖れるもの、曲折離合の調和に言ふべからざる面白みのあるは、他國の山嶽にも稀れなる程と稱せられる。併しながら其の山が三千尺に上るのは甚だ稀れである。また山間に飛瀑の懸かるといふ景色も多少はあれどこれはた遠く山腹に曳

ける銀糸の如く、所謂Y字形W形に全山の平面を象嵌するところに最も趣味がある。樹木も山麓などには生ひ茂つた所もあれど到底千年の檜杉に日暗く風吼へるといふ趣は見られない。稀れに石青く水澄んだる谷川があれば、兩岸見わたす限りの牧場で馬が悠々と水を飮みに下りてくる。

蓋し北英の景色は、山にして牧場、水にして湖水、この二大ノートに由つて調子を定められてゐる。平地や丘はいふに及はず、高山の斜面一體に水分に富んで青草茂り、頃しも八月の盛ながら、草の綠り殊の外淺く黄に近づいて、我が春の野、菜の花頃の醉ふが如き情を持つてゐる。其の中を幾群數知れぬ羊のさまよふ趣き其の靜けさ、のどけさと言つたら無い。春の日、南窓の晝寢といふ心地である。

更らに之れが夕ぐれとなれば、今まで綠りであつた山々も、裾の方から青くなり黑くなつて、暮烟の中を遠くから羊の鳴き交はす聲がさも〳〵悲しげに腸に泌むやうである。振り仰げば所謂イングリシュ、サンセツト。黄金の入日の眩ゆさもこの時に見られる。半ば春きかけた太陽の周に漂ひ來た雜多の雲、さては山の頂巓だけが、醉つたやうに染まつて、光つて、後を向くと後の丘が牧場の一區域だけ、黄がゝつた綠りから、全く柑子色の毛氈のやうに變つて、光澤を持つてゐる。そして自分の立つてゐるあたりは段々灰色に變つて行く。今まで景色の中に入らなかつた羊飼ひの家も、窓に燈火が見えて、初めてあたりの靜けさを照すかと思はれる。

山が以上の如き調子であるから、水も是れに調和せざるを得ぬ。流るゝ水よりも溜れる水、淺く白き水よりも、深く蒼き水、さゝやく水よりも沈默せる水の方が、一層よく此景色にかなふ。則ち湖水の無かるべからざる所以である。總じて此の地方の湖水はあまりに大きくはなけれど、周囘の曲折甚だ豊かに、水隈の趣きに富んでゐる。またターンと言つて、遙かに

平地を離れた山脈の窪みに小湖水を成してゐるものが多い。殆んど人間と相絶た山あひに、青玉を展べたやうな水を湛へ、路踏み迷つた羊の來り飲ふに任せてゐる樣は、得も言はれぬ平和さである。

之れを要するに、湖水、澤、草原一面の連山、牧場、柔和を代表する羊、凡そ此れらのものが支配してゐる湖水地方の自然の中に、夫のワーヅワースは極めて平和な家庭生活をしとげたのである。

世の評論家の云ふ如く、ワーヅワースの詩には佛蘭西革命の最後が多少の影響を與へてゐるのも事實であらう。また所謂十八世紀文學の反動の籠もつてゐるのも明かである、恐らく溫厚正直にして情に篤い天禀の性も其の作にあらはれてゐるに相違ない。さりながら、彼れの詩を讀んで最も思ふのは其の調子の正しく湖水地方の自然と律呂を同じくしてゐることである。卽ち其の詩に存する音樂が周圍の自然と誠によく調和してゐる。此の意味よりいふときはワーヅワースはげに湖畔詩人である、自然詩人である。湖畔の自然が彼れを作り、彼れの詩によりて其の美なる生氣を呼吸し、彼れの詩によりて其美なる調子を吹奏してゐる。

されど若し自然詩人といふを以て、單に花鳥風露といふが如き自然的對象と之れに對する我が感情とをのみ咏ずるものと解する人があつたら、それは大なる間違ひである。いや單に斯くの如き自然詩人もあり得るであらう。また單に斯くの如き自然詩も美なるを得るは事實である。併しながら一層大なる趣味欲を有するものは到底自然の景象を受けるの喜びのみに滿足して、之れに留まることを得ず、振りかへつて更に廣大豐饒の天地に入り、こゝに無限の情趣を味はんとする。夫の自然の景趣を通じて更に冥想の新天地に入るもの是れである。少なくともワーヅワースの場合が是れである。且つ湖水の風光が我等の情に觸れるの樣は、之れを激して撼かすに非ず、撫でゝ搖かすなり。是れ其の一層容易に人をして內省に入らしめ冥

想に入らしめ得る所以、ワーヅワースは實に湖畔の靜な自然に抱かれて、斷えず冥想の天地に彷徨してゐたのである。自然を歌ふよりも寧ろ冥想を歌つたものと言つてよい。所謂ミユージングの樂しみは彼れの唯一の詩源である。彼れの陶然として美なる山水に對するが如きとき、其の心は却つて內に向つて冥想の天地を辿つてゐる。而して冥想の天地はやがて彼れみづからの天地である、否な自然に對する人間の天地である。さればワーヅワースの詩また、他の人生詩人と同じく、作者の人間作者の冥想を味ふに至つて、趣味はじめて湧く。夫のたゞ自然詩人といふ名によつて、彼れを乾燥といひ平凡といふが如きは如きは、彼れが集の幾ばくをも讀まず、また讀んで味ふの力無き徒が盲言のみ。ワーヅワースの眞價は其の冥想の內容特色を檢するによつて、始めて斷定するを得られやう。予輩は是れを以て恰好なる別の論題とするものである。

詮ずる所湖畔の風光とワーヅワースの詩とは互に相負うてゐる。山水は彼れに調子を與へ、彼れは更らに翻へつて其の山水に生命を附し人間を添へ、以て自然の內容を展開し豐富にしてゐる。(明治三十五年八月稿)

基督の再來

其の後は御無沙汰、益御盛んのことゝ存じ候何がなおたよりもとは存じながら、例の通りの疎懶、丁度紙上に迷信云々の記事を拜見候より思ひつきて、唯今當市にて大騷ぎの最中なる、アガペモニー（愛敎）のこと一二申上ぐべく候。恰も去る七日の日勤行の砌り、此の宗の敎會にて、敎師のピゴツトと申す人、突然我れこそは基督の再び此世に來たれるなれ」との宣言をなし、此事世に知るゝと同時に市中衆俗の人氣一時は沸騰して非常の騷ぎに有之候。

當ト は御承知の如く、歐米各國中にて、少なくとも外形だけは、最も宗敎に篤き國柄に候へば、それだけ基督生まれたりなど申す事は、人氣を惹くこと强く、到る所此の噂さならぬは無之有樣に候、また實際我等の眼より見るときは、夫の戴冠式など申すものよりも、餘程面白き現象と存じ候、一方には敎育案が議會の大問題となりて、敎育宗敎の關係論を生ずると共に、一方にはユニテリアズムなどいふ際どき完敎すらある世界文明の眞中に、更に此の奇現象を加へて、我等觀風の人として轉た興の深きを覺えしめ候、本國のことなど思ひ起こしては、ほゝ笑まれ候。ことも多く候まことに宗敎といふものゝ前途は如何、此種の問題に關しては、寧ろ當國こそ研究の便宜多かるべしと存じ候、何れ其の內例の滯歐文談にてなりとも見

聞相つくし申すべく候。

アガペモナイッの教會はクラプトンと申して北倫敦の町はづれに有之、恰も小生が寓居より數丁の處に候まゝ、去る十四日の日曜には、物ずきにも見物に出かけ申し候が非常の人出にて、容易に這入ること出來ず、數千の群衆教會前に押し寄せて、時々鯨波の聲をあげ候さま、凄まじき光景に候ひき。

そも此のアガペモニーと申す宗派は、今より六十年許り前に、プリンスと申す牧師の開きしものにて、其の名の示す如く愛を中心とすと號し、其の教會、宗宅をば、愛の住居と唱へ候、唯これだけにては無難のやうなれど、併し無暗に愛とのみ申し居り候うちには、隨分危險の分子も入り來たらざるに非ず、聖天のためしなど想ひ起させ候。

聖天樣、天理王などゝの比較は存ぜず候へど、例へば、教會の柱の形ちに或る如何はしき意味を含むと云ひ、または勤行のうち、全く燈火を滅して、暗黑中に行ふの儀式ありといひ、其の他怪しからぬ噂すら世に立てるを見れば、此の宗派は大凡そは推し測られ候。

宗祖プリンスと申すは、不思議に一種の魅力を有したる人にて、初め唯の牧師補など勤めし際にも、其の非常の熱力に感化せられて、婦人など往々に精神に變態を來たすまでなりきと申せば、一種の人格なりしことは事實と見え候。

されど果して彼れが聖者なりしかは疑はしき次第に候、勿論此種の宗派の常として、相手は多く婦人にあり、就中三十四十以上と云ふ、年頃すぎしスピンスター、すなはち老令嬢が最も多く其の歸依者なりといふ、プリンスは最も此の種の信者を引き入るゝには妙を得、また信者の手より金錢を取り出すに長じたりと申す、彼れは專ら富める婦人の感化に注目せし由に候、されば彼れが生前に集めし財貨は何十萬と申す高に上り、其の教會は勿論、自宅にありても榮耀榮華をつくし、信者

の名を以て、また神の愛、基督の愛といふ名を以て、美女の信者を左右に侍らせ、または財貨を得んがためには、富める老令嬢に若き夫を妹ちして、其の歡心を繫ぐなどのこともあり、場合によりては、輕はづみなる日本にも歡迎されかねまじき主義と存ぜられ候。

プリンスまづ、基督は再び我が上に來たるべしと豫言し、世界の終極は近づけりと呼號して、幾多の信者を得しが、此の時は場所の地方なりしためと宣言の今回ほど仰山ならざりしため非常の騷ぎとまではならざりしものか、されど其の常に都會に疎き所をのみ選び、世の攻擊と迫害とを避けたりといへば、反抗を呼びしは明かに候、玆に迫害といひ反抗といへば、プリンスなり、ビゴットなりの側より申せば、如何やうにも解釋はありて、時勢に先だつものは反抗せられ、豫言者は迫害せらるなど申すべく候へども、是れは斯かる場合の紋切形にて、一向異しむに足らず、善くも惡しくも、口眞似の出來る重寶語に候、現に日本などにころがり居る、生まわかき豫言者や、時勢の先達を御覽ぜらるべく候。

さてプリンスは自ら、我等は凡て兄弟たり姉妹たれば、結婚してみづから縛し自ら限るの要なし、自ら限るは罪の始めなりと主張しながら、再婚まで致し、我は不朽不死にして汝等を濟ふべしと唱へながら、千八百九十九年八十九歲を一期として死し候。

次いで此の宗派を率ゐたるはビゴツド氏なり、之れより先き不死と公言せしプリンスは死し、やがて來るべしと豫言せし救ひの神は來まさざるより、宗內やうやく動搖を生じ、さしも凝り固まりの信者すら、一人二人と減じ行きて、殘るものはひたすら今年は神の來迎ましますか、來年はメサァイの約、事實となるかと、待ち居り、玆兩三年が間に何とかせでは、宗門の前途にも拘はる大事となるべき形勢に立ち至りたるものと見え候、ビゴッドは斯くの如き機會に乘じて立ちしものに候、

此の人もとは救世軍、英國教會等を渉りあるき、終に愛教に投じたるもの〻由にて、意志强く、野心的に、且つ不思議に人を動かす力を有する人物と申せば、宗祖プリンスに似たる人らしく見え候。

去る七日の夜、クラプトンの教會に於いて例規の勤め終ると共に、長身痩軀の一紳士、肅然として傍への椅子より身を起こし、說教壇に立ちあらはれて、其の深く沁み入るが如き口調もて說き出だすやう「第二の救ひは必ず來たるべし、プリンスの豫言は僞りならず、彼れは其の準備のために神の御前に送られたり、而して今こ〻に神は來迎ましましたり、人々の目前に立つ、此の我れこそは基督の再來なれ、見よ我れは神なり、人々を濟はんがために玆にメサイァは現はれたり」と、倘ほ數々斯やうのつらね、基督の口眞似ありて、席に復し頭を兩手に埋めて默禱の形ちせるあひだ、一堂森として水を打ちしが如く、やがて、兩眼に感涙をにじませたる信者等、かはる〳〵立ちて、之れに見證を與へ「見よ、神は我等の前に現はれ玉へり」、「嗚呼神よ、基督よ」「神を祝せよ、救濟主を祝せよ」など叫ぶものあり、人々狂喜感激のさまなりきと申す、斯かるためしは我が佛教史には珍らしからざるべく、其のかみ十字軍が初めてゼルサレムの地を踏みし當時の心根も想ひやられて、一派の人より申せば、箇中に眞理ありとも申すべけれど、所詮は外形の論也、感激は眞理なるを得べけれど、稚き感激、稚き信仰は到底稚き眞理たるを免れず、夫の信仰を說き感情を說くものが、自重してさながら傍らに信仰感情を拒絕せんとするの敵あるが如く驚愕し、ひたすら信仰感情の名に拘らひて、其の內容の必然の變遷進步を思はず、內發の破壞、進步の楷梯たるべき破壞をば、外形の回復によりて保障せんとす、愚の極、笑ふべきの至りに候はずや、世に進步あり、進步は必ず知識の媒介を要し、知識は必ず事理の兩面より作用す、此の根本の一案を外にして、信仰感情を喋々するも何の用をか爲さんや、彼等そも〳〵知識は事の一面のみにして成就すと信ずるか、はた進步は知識を介せずして成ると斷言し得るか

更に進みて一切の進歩を否定し、今を捨てゝ古生活に復歸するの眞心あるか、彼等若し正氣にして斯くの如しと言はゞ、速かに之れを躬行すべし、我が徒見物に出かくべき也。

さて議論が枝葉にわたり候へども、七日の夕は右の如くにて了はり、此の事翌日の新聞にあらはれ候より、忽ち倫敦中の評判と相成りたるものに候、其れよりと申すもの、さしも閑靜なりしクラプトン界隈は、徒步に自轉車に、物ずきの見物引きも切らず、去る十四日の日曜に、二回目の宣言式あるべしとのことにて、前に申せしが如き騷ぎと相成りし次第に候。

此の日は午前十時半よりの開始にて、公衆にも參席を許すとのことに、九時頃には、早や滿員となり、他は皆門外に群衆せしものに候、數名の警官非常を戒め、二名は教會の入口に立ちて、一人の聽聞者出づれば一人を入るゝと申す有樣に、戶の開く都度、門外の群衆は鯨波の聲を揚げて押し寄せ、後ちには馬上の警官も見受け候。

されど說教は先づ事無く終はり申候、唯間々に、うしろの方の聽聞者より「馬鹿を言ふな」「嘘つき」などの妨害起こりしのみ、宣言の要旨は前回と同一にて「我が愛する人々よ、我れは人々を愛するなり、我れに來たれ、斯く言ひつゝある我れに、此の口をもて言ひ、此の眼を以て見、此の心を擧げて人々を愛する我れに來たれ、人々のために死したる我れ、人々を救はんがために再來せる我れ、神來まさんの約を果たせる我れに來たれかし、人々を見るにつけ、人々の世のさまを思ふにつけ、哀れさよ、闇黑、虛洞の現世より汝等を救ひ出したき立願に、我が心は溶くるばかりぞ、されば玆に、人々は神に會向して、死より、悲しみより、失望より、救ひ出ださるべし、人々たゞ知れかし、我れは人々を愛するなり、神は人々を愛するなり、神の愛とは是れなるぞ、汝等の中には熱き眞心もてるもの多し、知れよ我れは汝等を愛するを、何所に見ゆるも我れは常に愛なるを、さてはこゝに眞心もて我れを迎ふる者に、我れ永劫の平和を與ふべし、嗚呼平和、平和、平和、人々と

共にあれ、平和をして汝等の上に來たらしめよ。」

式の了ると共に聽聞者は騷ぎ立ちて出でけるが、ピゴット氏の立ち出づるを待ち居たる見物は大浪の如く馬車の周圍に寄せ來たり、罵るもの嘲るもの混雜いふべからず、忽ち杖をあげ傘をあげて頭上めがけ打ち込みしものあり、怪我は無かりしならんも、隨分の野蠻騷ぎと見受け候、アガペモナイツに取りては、是れやがて外道どもの眞の敎を迫害するにて、昔し基督も猶太人のため、石をもて擊たれんとしきと申すべく、また何時までも此の辭柄によりて、世の非難に對すべしと存じ候へど、反對者の側にては、所謂識者と申す際は、鼻であしらふといふ樣、宗派氣質の强き人々と多數の下層社會とが、色々の動機より斯く騷ぎもし、亂暴もするなれど、兎に角全體に大人しく秩序を重んずる當國人に斯かる亂暴をなさしむるに至りしは、以て其の如何に人心に撞觸せしかを見るに足るべく候。

昨十七日の夜も教會に祈禱などありとのことにて、例の如く見物押しかけしが、今回は前例に懲りて、警官の保護非常に嚴に、幸に何事も無くして散ぜりと申し候。

尙のちくの事は此の地の新聞にて御覽ありたく、小生よりもまた其の內とは存じ居り候早々。（明治三十五年九月十八日稿、讀賣新聞へ）

英米の同情

風騷ぎ雲騖く故國の空を眺め候ては、我等飄遊の身も、流石に夢安からぬ夜半多く候、此書面編輯机上に着し候頃は、二月も末、定めて和戰の事すでに定まりての後と存候へど、他日の御參考とも相成るべしと存じ、小生が見聞の上より歸納したる當國人目下の日露觀といふもの、一二申上ぐべく候。

固より新聞、雜誌、個人、團體、百人百樣の見解は有之べきも、總じて彼等が中心に滿幅の好意と同情とを日本に寄せ居り候事は、申すまでもなく、殊に新聞紙の如きは『タイムス』を先鋒として『デーリー、テレグラフ』『スタンダード』『モーニング、ポスト』、『デーリー、メール』など、保守黨の新聞はいふに及ばず、反對黨のものといへども、殆んど凡て、及ばん限りの力を日本の辯護に盡し吳れ候こと、當國にある我等に取りては如何にも嬉しく、時としては覺えず讀みながら、紙上に感激の涙にじますことも有之候、好辭を喜ぶの心と笑ひ給ふな、感激相應の刹那は、人生これに過ぐるの眞實あるべしともおぼえず候。

事實、日露が砲火の上に相戰ふの前、歐洲に於ては、大陸の諸新聞を通じたる露國の外交政策に對峙して、英米の新聞紙

殊に『タイムス』などの有力なるものが、盛に日本の爲に奮戰しつゝあるの狀、そゞろに人をして頼みある友誼に感泣せしめ候。

當初露國が半面東亞に對して威嚇と壓迫とを其の政策とせしと共に、他面、歐洲に對しては、己れ平和の味方と號して、日本をあらゆる惡稱の下に歐洲、殊に英米人衆の同感より孤立せしめんとせしこと、隱れも無き事實に候はずや、而して此の外交策の根據となれる觀念は下の如く候べし、第一、人道の觀念よりして、平和を貴び、戰亂、殺傷、腕力を厭惡するの情が深く其の文明に根ざし居ることは、意想の外なること、即ち是れを利用して、日本を好戰の民、血を見て抃舞するの民、精神的文明の敵となるべき國民と強いんとする也、第二、日本は支那朝鮮を連ねて、所謂黃色同盟の下に白人と戰はんとする者也と強い、以て人種的反感を煽動する也、第三、宗教的偏頗人に訴へて、日露の爭は直ちに基督教文明と非基督教文明との爭也と強辯する也、第四、英國が近く南阿戰爭の爲に蒙りし手疵は、容易に癒ゆべくもあらず、所謂平和を樂むの念は目下の英國に於て最も旺盛なりとす、則ち其の再び戰渦中に卷き入れられんを恐るゝの情は、自然に強く當國人の心底に潜まざるを得ず、敵すなはち此の弱點を利用して、支那の態度、朝鮮の態度みな以て日露の戰を日英對露佛の戰に變ずるの恐あることを說き、英國をして日英同盟を悔るの地に立たしめんとする也。

凡そ以上の諸理由に對して、日本が幸に其中傷する所となるを免れし所以のものは、主として英米の新聞紙が、一々辯駁爭議の勞を吝まずして、民衆を惑はしめざりしに由るものと存じ候、此の點より申さば、此等の新聞紙は我が國光榮の爲に奮鬪せし勇者也、國民は事局定まるの後に於いて必ず意氣相酬ゆるの道を講ぜざるべからずと存じ候。

日本政府の施爲の跡にも、右の如き露の外交策に陷いれられざらんと力めたるの影は歷々たりと申すべし、内面の事は小

生等の與り知る所に非ず、少なくとも當國の人々が惡を見ずして善を見んとするの心より、日本の施爲を解釋する所によれば、日本が冷靜の態度を以て、交渉遷延の間、殆んど日本に一利無くして、露國に百利あるの二三箇月を耐へ來たりし心事、ひとへに血に渴き徒に狂ふの惡名を避けんとせるに外ならず、則ち英國民が是非を言はずして先づ此の事眞に滿腔の讃意を呈せるは、敵の前、我が友の弱みを見せじとする、誠の友愛に候はずや。

然れども、事局の將來に對する判斷は、此の一事實より來たるものゝ如く候、思慮ある者は以爲へらく結局の事、和にあるべし、何となれば日本の方針始めより和にあればなりと、露國みづから戰を宣せんとまで豪語する今日、なほ解決の一刹那は平和にあらんと信ずるものあるは、實に日本の施爲方針の當然の結果、しかあらざるべからずと考ふるが故に候べし、其の理路は簡單に下の如く候べし。

第一、露國の滿洲に費せる有形無形の勞力は如何に大なるかをだに知らば、結局如何なる事情に於いても、滿洲還附の一事のみは、兵火の外、露國をして之れを承諾せしむるの途なきこと、初より明白也。

第二、日本政府が交讓折衝によりて此の一件をも成就し得べしと考へゞきとは、全く不可有の事なり。

第三、此の一件だに露の面目を立てなば、他は露に於いて兵火にまで訴ふるの勇氣斷じて無し。

第四、故に和戰の決は初より日本にありて露にあらず、言ひかふれば、和戰の岐頭は滿洲撤兵の一點にありて他にあらず、「如何なる形に於いてか、滿洲の領有を露に許すことあるべし」と思はゞ、是れ「和すべし」と言ふと同一也、「滿洲撤兵は必ず期すべし」と言ふは、「必ず戰ふべし」と言ふに等し、是れ初より日本政府の當さに覺悟したるべき所也。

第五、然るに戰はゞ二三箇月の前に於いてすべく、一日の遷延は一日、日本の不利となるべきこと、何人も異議なかるべ

し。

第六、日本は不利の途に就いて、遷延彌久を敢てし來たれり。

第七、或は是れ歐洲に對する好戰の訕を恐れたるなりといへど、斯の如きは、美なるべきも、愚なる策なり、今日國際の間は猶多く原始社會の態狀を離れず、個人の道德と事情を異にするものあるを忘る可からず。

第八、以上の理によりて、日本は結局平和に到るの途を步めるものと斷ず、即ち交讓によりて滿洲を露の勢力下に置くを許し、他一切の條件を日本の提案に同意せしむ。

第九、途すでに斯くの如くなる以上は、到達する所また必ず斯くの如くならざるべからず、若し日本にして途と達する所とを矛盾せしむるが如きことあらば、吾人は其の結果を豫想して、一片の憂なき能はず。

第十、即ち斷じて以爲へらく、日本は和すべし、戰ふべからずと。

以上は勿論、今日にありて露と戰ふは日本に取りて非常の冒險且難戰なるべしとの根底を有しての見に候へど。是は歐洲人に取りては無理ならぬ事にて、日本の力をば認めながらも、尙心の底には「露の强力に對しては」との懼無きを得ず、我等邦人の心より申さば、何時戰ふも我れに悔なしとも申したけれど、事實は唯時をして語らしむるの外なく候。

此の地の新聞にても、稀れに日本の爲に惡聲をなすもの無きに非ず、勿論多くは好意よりするの苦言なるべければ、我等は是れをも喜んで聞くべく候、先頃の『ペン、メル、ガゼット』は日本の朝鮮經營の亂暴なりしことを責めて、日本人の來たる所、逆まに美風は敗れ、幸福は殺がる、何所に一つ日本の勢力の爲に朝鮮みづからの經營よりも一層文明の福利を增進せりと見ゆる點ありや、朝鮮を賫して日本に利すといふ外、日本は遂に朝鮮扶掖の理由を失ふに至らんを恐ると論じ候、又

同じ文には之れより延いて、日本人は西歐文明を研究したりといへど、我等歐洲文明の精神たるレファインメントの眞味、何處にあらはれたりや、日本の政治家などいふものゝ品性に見るも、能く我等の紳士社會に伍せしむべきもの幾人ありや、といふが如き言をなし居り候。

また日外の『デーリー、ニウス』に近頃まで日本の海軍兵學校とかの教師なりきとか申すノーマン君とか申すが、我が陸軍の缺點を論じて、全體に日本人の體力の小きこと、騎兵の極めて粗なることなど重なる弱所なりと論じ候外、重大の一點として、萬一日本が戰ひ敗るゝことあらば、下層と上層との反目、藩閥と閥外との軋轢、士族の餘流などよりして、內亂の起こる憂なきか、此は恐らく日本人みづからも、其の期に臨まざれば夢想だもせざるべけれど、是れ實に恐るべき禍根なりと申居り候、如何候べきか。

芝居などにて「大きな態めが、いとしい日本を引ツくはへ、いや、引ツくはへやうとて、さうさせやうか、ジョン、ブルがついて居る」と申すやうなる歌を聞き申候早々。(明治三十七年二月四日稿、讀賣新聞へ)

英國で見る日本

丁度開戰前兩三日までの此の地の模様一斑は、去る頃の『讀賣新聞』に書いたれば、玆には直ぐ其の後からの見聞をしるす。こまかい事に渉る前に、當英國全體の人氣を言へば、此のたびの大戰が、多數の人の注意を惹いてゐることは、南亞戰爭の時にも劣らぬと言つてよい。殆んど英國みづから戰つてゞもゐるやうである。隨つて其の一勝一敗、根も無き善惡の流說までが、其の日〳〵の人心に影響する趣は、ちやうど、日々の陰晴が風雨計に感觸する如くである。新聞紙などの神經の過敏になツてゐること、驚くの外はない。

開戰以來の經過を顧みるに、此の人心の晴れつ、曇りつする次第が餘程おもしろい。蓋し最近の歐羅巴で、我が日本を眞に知つて吳れやうとし、また知つたと信じてゐる國は、いふまでもなく英國であるが、それですら、歐羅巴の最大最强國の一なる露西亞と比べて何うだと言はるれば、頗る返答に躊躇する。是れは誠に無理ならぬ次第であらう。則ち表面如何に日本の肩は持つても、どうも心の奧には、「露西亞が強いから」といふ感が拔き去り難い、此の感から、日々の大氣が晴れたり曇つたりする。而して兎角戰爭などがとぎれると、忽ち此の感が強くなつて、人心がグルーミー（陰鬱）になる。少しでも之

れを散らすやうな報道があれば、隨つて世間が冴え冴えする。日本でならば、勝てば勿論喜ぶ、負けと聞かない限りは、息を殺して結果を待つといふのが人情であるが、英國人から見ると、勝ちと聞かない限りは、凡ての事が兎角日本の負けのやうに思はれて、危險でならぬ、心配でならぬ、卽ち一寸戰地の模樣が分らなくなると、忽ち例の「露西亞は大國」といふ黑雲がむら〳〵と湧き上がつて來る、人氣が陰鬱になつて來る。其所へ具合よく日軍勝利の吉報などが來ると、忽ちからりと晴れて、一時夕立の後のやうになる。併しそれが二三日も續くうち、跡が途ぎれると、忽ちまた例の黑雲が、そろ〳〵と、のしあげて來る。そこへまた吉報が來る、晴れる、とぎれる、曇る、といふのが今までの狀況であつた。

されば愈々戰爭と定まつた當時は、勿論陰氣で、人道論者、平和論者ならぬものでも、大抵の人、殊に婦人などが我々日本人に對しての挨拶は、「アイ、アム、ソーリー」(お氣の毒さま)といふのであッた。細君が「何とかねー、戰爭にならないで納まる法は無かッたのでせうか」といへば、主人は分別ありげの調子で、「でも仕方がありますかい。二つのパワース(强國)が、兩方から同じ方向に廣がらうとしてゐるのだもの、衝突するより外どうなるものですか」といふものもあつた。

それが旅順仁川の捷報で、人心を一時狂喜の度にまで沸騰せしめ、やがてまた沈みまた昂りして今日に及んだ。此の通信を書いてゐる今五月十二日は、恰も鴨綠江の大勝。遼東半島の上陸、旅順の閉塞及包圍、牛莊の露兵撤退の噂等で、大景氣であつた跡、例の心理的反動がと氣づかつてゐる矢先へ、昨日あたりから、旅順の鐵道再び通じたりとの報道に引きつゞいて、色々不安の噂が湧いて來て、再び人心の晴雨計の沈みかけてゐる際である。

もッとも今度の心配は、少し今までのよりも調子が違つてゐるかと思はれる。始めは海陸ともに露西亞を非常の强敵と積つてゐたのが、先づ海戰だけではと、片安心になッて、次が陸戰の心配となッた。其の心配が餘程久しいあひだ續いて、殊に

鴨綠江の戰のあるまでといふもの、殆んど世間は氣疲れして、最早日本はとても露西亞の陸軍に面と向かふ勇氣は無いのであらう、朝鮮を守るので滿足してゐるのではないか、とまで人をしてつぶやかしめた。是れは例の、露西亞は陸軍の國といふ先入見から來る危惧であつた。然るに決戰の結果はあの通りの始末であるから、是れでまた露の陸軍といふ心配は半ば崩れて、此の後の陸戰は、少なくとも五分々々の戰場、否日本が分がよさゝうだといふことになつた。唯、今一つこゝに殘ツてゐる此方の人の疑團は、クロパトキンといふ名將に對しては何うあらうかといふ事である。是れも此の通信の日本に達する頃は既に昔の事となツてゐるであらうが、目下の晴雨計は、此の低氣壓に觸れてゐる。是れが即ち以前の曇り具合と違ツてゐるといふ所以である。

其の他今少し奥の方には、露西亞の人數で勝ちはすまいか、經濟で勝ちはすまいか、根氣で勝ちはすまいかといふやうな心配も普通に存してゐる。此等の點は、所詮結局に近づくまで、打ちやつて置く外に仕方はあるまい。海で止めを刺せば、「陸では」と心配し、陸で勝てば、「クロパトキンには」と案じる。其のうちクロパトキンの軍を破れば「でも新手を加へたら露西亞は頭數が多いから」といふ。さう自在に頭數ばかり送り出せるものでないとなれば「それなら若し露西亞が遠く引込んで、降りもせず急に出もしなかつたら何うする」といふ。是れでは際限がない。或は實際斯やうな事の出來得るものかも知れぬが、そこは我が國の其れ專門の人に成算あることゝ、我々日本人は信賴してゐる。唯しかし斯やうな信賴の出來ぬ外國人に取ツては、此の心配は當然であらう。隨ツて前言ツたやうな好意の人に對しては、其の心根は有りがたい。それと同時に、プロ、ラシアン卽ち露西亞黨の人々が日本を嚇し英國に水をさゝんとする時の言ひ草も是れである。此の言ひ草の存してゐる限り、日本は勝つても〳〵、けちを附けられる恐れがある。つまり一方に日本の大勝利を祝ふ聲の中にも、何所か

一點不安の濁りがさしてゐるといふのが、此の國に於ける眞實の人心であらう。

書生などで今回の戰爭に注意してゐる者等が、折々いろ／＼の事を聞く中には、屹度右の二問、すなはち「頭數でしうねく來たら」「遠く退いて幾年でも和を入れぬといつたら」といふ箇條である。

或時二人の書生が、僕の寓所で、此の點から英國政府の政策について盛んに議論をやつた。卽ち彼等の常識では、すぐ英國の仲裁といふことに思ひ及ぶ。大抵の所で英國が口を挿み、露をして和を納れしめるといふのである。併し一方は是れを以てあり得べからず、また爲すべからざることゝして以爲へらく、それでは露國に取ッては英國が手を日本に貸して露國の敗を全くせしむるものとより外思はれまい。隨つて必ず聽くまい。達ッて聽かせやうとすれば戰爭になる、世界中の戰爭になるから、そんな事は斷じて出來ない、といふのであつた。僕はそれを取り鎭めて、第一露西亞にそんな事が出來るか出來ぬかゞ問題であるし、出來るとしても、此方ではまた、支那滿洲を利用して持久の策を立てるとか、ウラジボストック邊から進んで取り押へにかゝるとか、そこは幾らも日本の政府に計畫があらうから安心したまへと言ッて置いた。以て人心の一斑が推し測られる。

戰捷の第一報が倫敦についた時の模樣は目擊しなかッたが、當オクスフオードでは、二月九日火曜の午後、すでに露艦三艘沈めりとの報がぱッとしてゐた。此の地の夕刊新聞もあるが、多く大學に關係ある人は、ユニオンといふ會の倶樂部に取り寄せて電報で承知する。右の報も第一に是れから廣まり、つゞいて倫敦からも夕刊新聞が來、當地の夕刊新聞にも出たのである。

僕等當地在留の日本人三四人は、この日ちやうど或る寄宿舍の友人の催せる茶會で、落ち合つた。其の時一人が、途すが

の斬髮店で髭を剃ッてゐると、あはたゞしく飛び込んだ一人の男が、餘程興奮の態で、主人に軍艦三艘沈沒の噂をしてゐた。併し友人はたゞちらと聞いた許りであるから、何所の軍艦であるかは分からぬとの話に、始めて開戰の事を知ると共に、吉凶いづれなりしかと、言ふべからざる待遠しさを感じた。其のうちにまた他の一友が一葉の夕刊新聞をポケットにしながら這入つて來た。當人はまだ何も知らないから、それと右の新聞を引き出さすや否、其の留置欄を見ると、露艦三艘日本の水雷のために沈められたりとの電報が載つてゐる。ほつと息づいて、覺えず萬歳と呼びかはしたのは、四時少し前であッた。

つゞいて這入つて來た亞米利加の男に之れを話すと、此の男は大分年嵩であるだけ、眉をしはめ、つくぐ〵と右の新聞を見てゐたが、夕刊新聞の記事であるから浮とは信じられぬと、考へ込んでゐた。其のあとに來た若い男に話すと、是れは飛び上るやうにして、「さうか本當に？　そいつは目出たい」と握手を求めた。茶の後僕は或る講義を聽きに行つたが、歸りには其處の門番が、威勢よく驅け寄ッて、「日本の海軍が露西亞の軍艦を沈めました」とさも嬉しさうに他の夕刊新聞を差しつけた。

さて翌十日の新聞は、露西亞の公報を掲げて、事の眞相が世間に知れると共に、到る處、たゞ此の噂ならぬは無き樣となつた。朝鐵道馬車に乘ッてゐると、商店か何かへの勤め人と見える五十恰好の男が、外套の襟を高くした間から、白い息を吹きながら飛び込んで來て、腰を下すや否、向ふ側にゐた同じ風體の男に「や、お早う。何うです！　日本がやりますぜ。ゑゝ！」といふ調子。

開戰後の新聞には、日々流説百端、例の上海あたりから來る電報には、隨分思ひ切ッたのもある。併し最も盛んに日本の不利な噂を出すのはセント、ピータースバーグで、確報の切れ目、前言つた晴雨計の奨りになりかゝる頃を見計らつては、

あらゆる言ひがゝりを拵らへ、あらゆる實らしい噓を拵らへて、蜚語を放つ、日本の名譽を傷けやうとする、日本に向かふ人氣を腐らせやうとする。若しこんな事も外交といふものゝ一部なら、露西亞の外交はゑらいのかも知れぬ。

露西亞の日常政略に對照して、日本は不言實行主義だとは、まづ一般に認められてゐるらしい。殊に其の軍略方面に於いては、日本の秘密嚴といふことは、一の驚嘆となつてゐる。唯しかしそれが必ずしも軍機に關しない所まで行き過ぎはせぬかといふ批難が一部にある。

オーヴー、レチセンス（無用の隱し立て）といふ批難が聞こえる。現に當國の某日本通の如きは、僕に書を寄せて、餘り報道の出し吝みをすると、それが爲め却ツて何か其の裏に非常の不幸が横はツてゐるのでは無いかと、一時たりとも、人心に不安を與へる、其の結果は瞑々のうち恐るべきものとなりはしまいか。且つ外國に對しては、何だか水臭いといふ感じ、いやな振舞といふ感じから、其の同感を冷却せしむる傾きがある、といつて來た。

新聞なぞでも、一方に十分、日本が秘密を貴ぶ所以を諒として、日本は何も見物に覩せるため戰爭をしてゐるのでは無い、非常の大國に對して生死の勝負をしてゐるのであるから、とは言ツてゐながら、他方には何となく、餘り隱されると氣まづいといふ口吻か時々見える。我等の素人考から言ツても、一方に大いに隱すと共に、他方に大いに打ち明けた所を見せるのが、政略としても賢い遣り口のやうに思はれるが、どんなものか。殊に英米人のやうな、獨逸露西亞などと違つて、何でも衆と共にするといふ主義の國民を相手にしては、一層此の注意が必要かと思はれる。

從來歐羅巴のものが、東洋人——亞細亞人——未開人といふ勝手な評價から、東洋人の惡特性として數へるもの、陰險、狡猾、酷薄、卑屈といふやうな箇條が最も普通で、オリエンタル、ツリーチエリー（東洋的奸黠）オリエンタル、クルエルチ

ー(東洋的殘忍)オリエンタル、サーギリチー(東洋的奴隷心)といふ語は、種々の場合に用ひられてゐる。而して其の標本は支那人と見られ、非常の輕侮を受けてゐる。日本人が常に貧民町などで小供に跡から囃されなどするのは、大抵この支那人と見られるからで、彼の『ゲイシヤ』と題する芝居に使つてある「チン、チャン、チャイナマン」といふ唄を唄ふ。此の唄は三ッ子でも知ッてゐる。つまり從來の日本人は支那人と不名譽を分かつてゐた。日清戰爭以來、一部の人には、日本といふ國の支那と別であることが分かッたれど、今回の戰爭までは到底普通一般に我が國の地位を認められることは出來なかつた。現に僕など、日本は何時から獨立したかなどいふ問に、屢々接した。

そこで今回の戰爭以常、露西亞及び露黨のもの等が、種々の口實で日本の國民性に疵をつけんとする場合には、右の東洋的惡特性に照合する。何か言ひ係りを捉らへては、是れだから矢張り東洋未開の人種は仕方が無い、といふやうな筆法を用ふる、夫の露西亞の公文が日本の水雷夜襲を呼んで、ツリーチェラス、アッタック(奸黠なる襲撃)、ツリーチェラス、フオー(奸黠なる敵)、と卑怯な言ひがゝりをつけたのも、卽ち右の理由に基るたのである。當時英國の新聞紙が、如何に此のツリーチェラスといふ一語を氣にして、之れが反駁に全力を盡したかを見れば、此の語が英國人の神經に觸れた銳さが分かる、此れに味を占めた露西亞は、其の後機會さへあれば、此の語を繰りかへす、英國の新聞また其のたび每に之れを反駁する。斯くして此の語は一種の流行語になつた。勿論露黨にあらざる限り、誰れも眞面目に斯んな訴訟に同意するものは無いから、此の語も多く嘲弄の場合に用ひられる。

右の外今回の戰爭以來出來た流行語は數あるが、夫の第一回旅順口閉塞の際、我が石舟を軍艦と間違へた有名な露報の中に、レトヴヰザン艦であつたかゞ傷いてゐながら、右の海戰に功をしたといふので「レトウヰザン」は光榮をもて自らを飾れ

り」といふ句があつた。然るに其の沈めた舟は沈まんが爲に來た石舟であつたと知れてより、此の「光榮をもて自らを飾れり」といふ句は、色々の場合に滑稽の材料として使はれる。其の他普通の論文などに戰爭上の言葉の用ひられるのも時節柄の流行である。ボンバードメント(砲擊)ブロッケーディング(港灣封鎖)ボットリング、アップ(港口に栓をする)リーアリング、オーヴー、ゼ、マイン、フォールド(水雷區域に誘ふ)等が其の例である。

誰れしも外國人の名の長いのは覺えにくいものであるが、今度の日本の將軍には、短い名の人が多いので、記憶し易いと言つてゐる。東郷、瓜生、黑木、奧など、皆さうである。殊に東郷といふ名は、英語に綴つて、ツー、ゴー即ち「行く」といふ意であるため、色々の地口の種子にもなつてゐる。「東郷司令官はなぜ勝つか、ツー、ゴー司令官(進行司令官)だからさ」といふやうな謎もある。

今までの我が戰跡の、あまりに花々しいので、世間一般の態度は、褒める、喜ぶといふよりも、驚嘆に近づいてゐる。新聞紙などは、あらゆる激賞の言葉を用ひ盡くして、最早言ふことが無いといふ氣味である。蓋し英國が日本の戰捷を自分の事のやうにして喜ぶといふには、政治上の外、いろ〳〵の意味があらう。例へば海軍が勝つたといへば、其の海軍は自國を模範としたもので、自國海軍の勝れてゐるのを證するに當たること。自分の弟子の手柄をするやうなものであること。また陸軍が勝つたと言へば、お前が海軍で世界一なら、おれは陸軍で世界一だと角つきあひでゐた、露西亞が、其の世界一といふ估券を失ふこと。また今まで日英同盟を、旦那が下女の手でも引いてあるくかのやうに笑つてゐた、大陸諸國に對し、同盟國の誠に立派なものであつたことを示して、面を起こすといふこと。此等は隱さんとしても隱されさる英國人の喜悅の源であらう。

日本兵の全く死を恐れざる勇氣は、西洋の人をして殆んど不思議の念を起こさする樣であるが、其の紀律を維持する力、軍略の精妙等は、延いて日本人の腦力の從來普通に解せられてゐたよりも遙に秀拔であることを證據立てたもの丶如く、また其の武器、火藥等の發明によつて、更らに日本人は單なる模倣者應用者たるに止まらず、發明創作の力に於いても歐米に何の遜色あるものならずといふことが一般に認められんとしてゐる。

されば今回の戰爭は種々の方面からして、歐米人をして、日本を知らんとするの念を一層切ならしむるの結果となる。精神上にも何か新しい非常なものを此の不思議な東洋の島國から見出ださうといふ豫期となる。是れが我が國の自覺と相待つて、將來の我が國をあらゆる方面から向上せしむるの緣となることは疑ひあるまい。

めでたく此の戰爭に勝ち了すれば、其れが爲め我が國民的自覺を呼び起こすの大なること、日清戰爭の比ではあるまいが、それと共に、ジンゴイズムの增上慢も、恐るべき弊であらうとは、此の國の人々が心配する所と見える。敵黨の覘つてゐる隙も此の邊にあるらしい。先頃倫敦で日本の柔術家の谷君とかいふのが、英國の有名な角力家の某と賭の大勝負を試み、見事に勝つて、世界で何人といふチヤムピオンになつたが、時節柄ではあり、日本の柔術といふものは疾くから西洋人間に評判のものであるため、何れの新聞もこのたびの戰爭に因みを持たせて盛んに書き立てた。中に某新聞は、其の記事の末に斯ういふ事を附加した「白國のチヤムピオンが負けたのに對し、勝つた方の日本人を見物が狂氣のやうになつて、あれ程までに喝采するといふことは、此の英國人より外出來ない業であらう。それを何ぞや、おれの勝つのは初手から分かつてゐる、とでもいふ風に、ろく〳〵頭も下げなかつた。」是れは勿論此の國で凡ての演技者が公衆の喝采を受納する方式から言つたので、事實も針小棒大の中傷なることは明らかであるが、つまり何かに寄せて日本にけちをつけんとする露黨の筆法など思ひ

比べて、谷君の人氣を毒せんとする此の讒誣が、時節柄ちよつと注意を惹いた。

英國新聞の外國に對する開戰以來の調子を顧みるに、初めは隨分思ひ切つて露西亞の負け方などを嘲罵し、併せて其の同盟國たる佛蘭西にも、とばしりを及ぼす氣味であつが、段々時局の進むと共に國際の神經が過敏になるにつれ、戰渦が歐洲にまで廣がりはすまいかといふ恐れから、佛と英との仲は申し合せたやうに調子がおとなしくなり、續いて夫の埃及事件の條約など取り結ばれるに及び、玆に全く此の兩國だけは、綺麗事を言ひ合ふ關係となり、互に痛い物に障るやうな態度で、所謂歐洲平和の擔保者といふ地位を持ち固めてゐる。

露西亞に對する英國民の態度も始めは右の如く烈しかつたが、中程から一二度變つた。其の理由は微妙な國際上の事であるから、斷言は出來ぬが、我等門外からの見によると、露西亞が、當初こそ鬼百合の天日に傲る勢ひで強がつてゐたが、段々不幸の續くため、心細く感じて、英國に對し幾らかしほらしくなつて來たのが一理由であらう。日本に傷けられた口惜さの毒炎を、おとなしい英國の上に吹きかけ〳〵して、自から慰めてゐた露國が、夫の仁川負傷者保護の禮などを、きつかけに、哀訴的、調和的の氣配を見せはじめた。さうなると英國人の事であるからぐつと料簡して此方も無用の喧嘩は賣らぬ。而して此の傾向の頂上は、一時盛んであつた英露接近の噂となり、英皇仲裁の噂となつた。尤も英皇仲裁の噂については、獨逸が拵へたのだとか、露國贔負の二三の英國政治家が目論だのだとか、種々說はあれど、兎に角之れが右の傾向に關連して世に行はれてゐたことは明かである、然るに何ういふ動機からか、露國は過般かの激烈な通牒を發して、如何なる事情ありとも日露事件に第三國の容喙は許さぬと斷言した。是れが英國の一派には少からぬ不快の感を與へて、引きつゞき鴨緑江の大敗以後、露國を譏る調子が跡もどりの樣子である。

最近はまた更らに日露の接近といふことが稍や人の注意を惹きかけてゐる。古來戰爭は國と國とを敵對せしめずして却つて相親しましむる緣となつてゐる。日露の間も、近時露國が漸く日本を知つて來ると共に、一種の通路が開けかゝつて來た。戰後の日本は却つて同盟しはすまいか、といふやうな豫測を下すものもある。

英國とても、場合によつては、露國と近づくのはたやすいやうに見える。英國が目下最も遠ざかつてゐるのは、獨逸であらう。此の兩國民は妙に仲が惡い。併し外交などいふものは、門外の我等から見れば、丸で娘ッ子のせり合ひを見たやうなものだ。何時どんな變が起こるか分かつたものでは無い。

開戰後の露黨の立ち場は、專ら白人と黃人との爭ひといふ點に存してゐる。歐洲國中の歐洲國たる此の佛蘭西などが、何で黃人などの肩を持てるものか、といふやうな事を放言してゐるのは佛である。彼等が英國に對して皮肉をいふのも此の筆法である。英國をして、白人中の裏切り者、いぢ惡者といふ地位に立たしめ、みづから顧みてきまりわるくいや氣のさすやうな境遇に陷いらしめんとするのが、敵黨の手であらう。併し英國人みづからは、文明進步の身方が常に自分等の身方で、黃色白色といふ如き感情ばかりでは、自分等を動かすに足らぬと言つてゐる。

たゞ併し支那が目を醒まし、印度が目を醒まして、其所の英領が危くなるといふやうな事があつたら何うすると、問はれると、彼等の心の底に一種言ふべからざる矛盾を感ずる、即ち今日英國の政治問題の中央點たる殖民地政策に感觸して來るから、彼等は成るべく之れを論ずることをすら避けんとする。要するに「黃禍」といふ中に、此の一點だに含まれてゐなかつたならば、英國人が容易に黃禍說に動かされる恐れはあるまい。

英國人が露西亞を批難する中には、普通露の滿洲撤兵に關する食言、滿洲を世界の商業より封鎖せんとする不都合等の外、

露國の政體其のものに對する厭惡が一つの理由となつてゐる。是れは露國の膨脹的野心其のものを、根本から是認せんとする一派の論に對して、彼等の主張する所である、此の露國の野心、すなはち强大の國が弱小の隣地に膨脹するのは、歷史の發展上まことに已むを得ぬことで、露國が不凍港を亞細亞海岸に求めに出たのは當然であるといふ議論は、しばしば耳にする。

ユニオンと言つて、當牛津大學の書生教職員など相寄つて組織してゐる政治上の討論會がある。古來有名の政治家に玆で腕をねつた者も多いが。さる第一海戰のすぐ後、「露西亞の東洋政策は是認すべし」といふ動議が此の會に提出せられた。時が時であるから、結果は勿論百票に對する二十幾票といふ相違で、否定の方が勝ちを制したれど、是認黨の重なる理由は右の「當然の野心」といふことで、それなら、日本も當然の野心で之れを拒ぎ止めるのだといふと、併し露西亞は文明擴張のために其の權利を有してゐるが、日本はさうでない。といふことで双方とも隨分皮肉なことを言つて、日本と露西亞との惡口競べをしたが、結局、露西亞の膨脹はやがてオートクラシー（專制政治）ビューロクラシー（官僚政治）の膨脹であるから、英國人は之れを文明の擴張として同感することは出來ぬといふに歸した。是れ蓋し一般の世論を代表したものであらう。

保守黨が日本贔負で自由黨が露西亞贔負と一概には決して言へぬが、たゞ目下此の國での重だつた露西亞贔負の個人や新聞は多く自由黨側であるとはいへる。普通の社會では色々複雜の感情や關係からして、日本贔負ともなれば露西亞贔負ともなる。但し數の上から言つて、非日本の傾向を持つたものゝ遙かに少ないことは明かである、社交の間などでも、それと見える人に逢ふことは極めて稀れである。（勿論たまには日本人と見てお世辭に本性を隱してゐるものもあらうが）。海戰のはじめ頃、さる茶會の席で、日本の戰捷の噂が出ると、一人の中年增の婦人が、「陸軍はさうは行きますまいよ」と言つてフン

とした。恐らく此れなどが優しいプロ、ルシアンの例であらう。それかと思ふと、一方では「宅ではあの晩父の發議で日本のために祝杯を擧げました」など話してゐる娘もあつた。

政客で有名な露國黨は、『評論之評論』主筆ウヰリアム、トーマス、ステツド及び國會議員のヘンリー、ノーマン、此の二人は共に今回も露帝に謁見などして、平和會議とか英皇の干渉とか、色々の自論見をやつてゐた。兩人とも現政府反對側で、以前『ペル、メル、ガゼツト』『デーリー、クロニクル』等、自由黨の新聞に關係してゐたことなども似てゐる。南亞戰爭の時はツランスブールに同感して、プロ、ボア卽ちボア贔負の賞を得、今回は露國に同感してプロ、ルシアンの稱を得た。而して今や更らに西藏に同感するプロ、ラマといふ名が生ぜんとしてゐる。是れも同じ傾向の人々に屬する。勿論共れが一貫の主義信仰であるなら、是非の斷ばおのづから或る他の標準に待つべきであらうが保守黨側の固い家などでは、「如何なる場合にも自國の敵に組せよ」といふのが此の派の人の信條であらう、と、苦い顏をする。問題は動機に歸することだ。

英國の新聞で目下最も著しく露臭を帶びてゐるのは、朝刊で『モーニング、リーダー』夕刊で『ペル、メル、ガゼツト』次ぎに政見上といふよりは、むしろ廣く平和を貴んで戰亂そのものを惡むといふ態度で共の實偏狹な見解から折々日本に冷い手を觸れるのは『デーリー、ニウス』、また『デーリー、クロニクル』は近來、調子が日本に近くなつて來たが、まだ何ちらとも言へない。尤も是等は却つて公平なのかも知れぬ。而して以上は何れも現政府反對の自由黨側である。序にいふが、右の『ニウス』と『クロニクル』とはつい近頃紙幅を縮めて一片賣を半片に値下げした。日露事件から離れていへば、『ニウス』は稍文學新聞の氣味で、『クロニクル』はしまつた新聞である。

倫敦の大新聞は『タイムス』の三片及び他の一片(四錢位)の新聞である。併し前言つた『ニウス』と『クロニクル』との値下げ

のため、『タイムス』は言ふに及ばず、目下の一片新聞は殘らず政府方で日本贔負である。『デーリー、テレグラフ』は中でも殊に際立つた日本黨で、先頃死んたサー、エドウキン、アーノードも此の新聞に關係してゐた。方面は猶太人及び廣く實業界に行きわたる新聞である。此の社の戰爭通信員で今東京にゐるバーレー君といふのは、最も當地で評判のよい人である。また『モーニング、ポスト』は上流社會に廣く讀まるゝ新聞で、是れには戰爭評論記者として高評のウヰルキンソン君といふのがゐる。日本人の意見をも日々載せてゐる。『スタンダード』は中流の讀者を多く持つてゐて、他の保守黨新聞に比して公平といふことを稍や餘計に持たんとしてゐるらしい。隨つて活氣が少ないと不平をいふ讀者もある。無論戰爭に關して日本の爲に盡くす。以上が一片の大新聞である。また『タイムス』には無線電信の黄海通信が出て、評判である。

半片新聞では保守派の『デーリー、メール』折々浮と信じられぬ種子もあるといふ話だが、併し一方に非常に機敏な所のある、且つ面白みのある新聞である。社會の下層から中層にかけてひろく行きわたる、或る人がこの『メール』を評して、「大底の人がセンセーショナル(刺戟的)だと惡くいふが、併し大抵の人が讀んでゐる」といつたのは、蓋し適評であらう。今戰地にゐるマツケンジー君といふ此の社の通信員はなか〳〵敏腕との世評である。夫の仁川沖で英艦長が他の佛伊艦長と連署して瓜生氏の軍艦處分に威嚇がましい抗議を申込んだといふ噂を論説で評して、事實なら同盟國たる日本に氣の毒であるから、右の艦長を取調べて是非を明かにすべしと論じたのは此の新聞一つしかない。論の當否は如らずとするも、こゝまで肩を入れてゐることが分かる。次には『デーリー、エキスプレッス』是れは『メール』と兄弟の如き體裁を具へて、おのづから競爭してゐる。政見は反對であるが、日本に力を入れることは同じである。是れに前言つた露西亞贔負の『モーニング、リーダー』を加へて、半片新聞の三幅對と見てよい。

日本軍の爲めに歌ふものは無いか、キプリングは何うしてゐる、などいふものもあるが、まだ文學といふほどのものに此戰爭のはいつたのは見受けぬ、但し通俗雜誌の續物小說などには屢々之れを見る、其のほか單に日本に關した記事、繪畫等が、種々の雜誌類に出てゐることは夥しい。殆んど如何なる雜誌にも一つ二つづゝ此の類のものゝ載つてゐぬことは無い。例のドーグラス、スレーヅン君などいふ、恐縮の日本通なども、なかなかの流行つ兒になつた。書葉書にも日露事件のポンチ畫、藝妓の化粧、文身を見せだ裸體、アイヌ風俗等より將校、政治家の肖像に至るまで、さまぐ\のが出來た。日露戰爭記の定期刊行も二三種ある。各種の書報雜誌は大半戰爭で持ち切つてゐる。日本に關した書物が再版になつて新たに店頭に並ぶ。錦畫張などの華手な日本の日傘を、若い美しい女が盛んにさす。夕刊新聞の、ぴらに、『旅順陷落』と大きく書いて、下に小さく「の噂さ」と書けば、日たゝく間に其の新聞が賣り切れてしまふ。夫の「日本軍艦四艘旅順沖に沈沒」と夜間に呼んであるいた時などは、騷ぎであつた。

終りに臨んで、日本の軍略をナポレオンに近づくと激賞し、今回の戰爭を、新國民の將さに興らんとする歷史上の壯觀なりとするたぐひ、皆以て自家が反省の料となるのは言ふまでもないが、他に精神的にも、自家を知るに足るべき反射をしばく\此等の通信員や記者が我等の上に投げかける。たとへば、通信員の或者が日本に來て第一に感じたのは日本人の性格の不思議といふこと。尤も東洋人の性は西洋人の解すべからずとは、前からも言ふことであるが、是れは疑ひも無く感情を隱す場合多きを特長とする東洋道德の表面に觸れたものである。苦しいときに笑ふ、若し其の一重奧にある綜合點を摑むことが出來なかつたら、日本人の性格は凡て矛盾とも見えやう。日本人不可解說は此の矛盾點まで達した見かたである、我等は何で此の矛盾を綜合してゐるか。また或る者は、日本人の性格に於いて甚しいエーンシェント(古代)とモダーン(近世)との

結合を見るといふ。或は或は中世のロマンチック（小說的）と現代のプロゼイック（平板的）とが不思議に共同してゐるといふ。日本人の前には歷史といふことが無くなるやうに感ずる。筏に火を點して水雷艇が曳いて行くといふことは、西洋人の頭には美しい矛盾である。日本人はたしかに斯かる矛盾性をも有してゐる。元來我等日本人が平生から行つてゐること、考へてゐることを總括したら、何といふ言葉になるであらうか。是が疑問だ。（明治三十七年五月十二日稿）

凱歌

冒頭第一に申上置候、此の手紙は適宜、紙上に御出し被下候て、差支無之候。

さて小劍兄足下、先般は日本繪葉書の見本とも申すべきものゝ由、御惠送を辱うし、多謝、本場の獨逸にても、繪葉書の意匠は目下ちよつと種子切と申して宜しかるべく候、是れ一つは、餘りに多く出過ぎて、最早何れを見ても目馴れて面白からぬが故にも候べし、日本も繪葉書流行と申せば、今年の正月あたりは、例の恭賀新年に住所姓名のみを黑々と活字にて植ゑ込みたる、智慧の無き、無用無趣味の葉書の取り遣りは、餘程減じ候事と察し上げ候。

此の地の事どもは、行く〳〵例の『新小說』にて御意を得べく候、來伯以來已に半年、多少は材料も集り候へど、歸朝の漸く迫ると共に心忙しきことのみ多く候、英國の事も、まだあれ丈にて物足らずと申越す友人あり、勿論にて、あれ等は序にも足らず、尙ほ〳〵大いに書く所存に候、只當夏より中休み致し居るのみに候。

獨逸は獨逸は感心なる國なれど、いやな國たるを免れざるやうに候。

目下の戰爭に關する、獨逸の中下層の同感は日本に向かひ居れりとは、其の國のもの自らも申す事に候へど、是れは只俗

に人氣ありと申す、其れだけの意味に過ぎず候、勿論事情も異なれど、是れを英國人の同感と申すことゝ同一に見たらば大間違と存候、併し兎も角も、日本人々々々と囃し立て候だけの範圍にて申さば、それも憎からぬ人情に候べし。

旅順陷落の報は、何と申しても、大變の騷ぎにて候ひき、天下を震動せしむるとは、先づあれらの事に候べし、一月二日の正午には、早や新聞紙の號外にて、市中殘らず此の噂さに埋もれ居り候ひき。

一月十日は旅順にも凱陣の宴ありと申すに、此の地在留の野田貞、川名兼四郎、鈴木梅太郎の諸君發起人となり、同日城西サボニー、ブラックの一亭に、在伯林日本人有志の祝賀會開かれ申候、會する者四十人に垂んとして、人々が中心より國の爲に歡喜するの情は、おのづから其の會の模樣に見はれ、非常の盛況と見うけられ候、一同陸海兩軍に送るべき賀表の末に署名したる後、杯を擧げ萬歲を唱ふる等、かたの如くありて、終りに、小島少佐の興味ある軍話あり、會は散じ申候、尙當日小生が席上吟唱の料にとて、筆を走らせ候もの、詩とも文とも申兼ね候へて、小修を加へて、一粲を博し候。

旅順陷落朗吟歌

（上）將軍之詞

夕陽に　馬を立てつゝ　見かへれば
あはれ痩せたり　我が影の
髮に吹く風　痛ましく
三軍の　將士半ばは　傷つきて
眼を擧ぐれば　西のかた

新塚廢山　限り無し
嗚呼一萬の　子弟斃れて　旅順落つ
此の城取つて　國のため
今ぞ報ゆる　こゝろざし
されば人々　月の十日は　許せかし
陣に宴の　夜もすがら
凱歌の樂は　奏づとも

（下）凱歌之樂

見よ東海の　曙に
民今興こる　大八洲
八重の若潮　湧きたちて
大風拂ふ　雲の色
晴るゝや亞細亞の　群霧に
朝日子昇る　姿して
國あり二千　五百年

初めて今日の　歡びや
兵士は銃の　臺尻に
打つよ鼓の　亂拍子
將軍起つて　舞ふときは
劍に風雨の　響あり

嗚呼國興こる　東天の
君が御威を　ことほぎて
山嶽北に　走るもの
來つて玆に　ひれ伏せや
波濤歡呼の　聲を揚げ
天地とゞろと　どよむ也

目下伯林の氣候、攝氏零下を下ること往々八九度、遙に滿洲の風雪を思ひやり申候。
小生頑健、貴兄並に諸君子の盛大を祈り上候不宜。（明治三十八年一月十五日稿、讀賣新聞）

零墨

甲板文學

歐羅巴より歸航の途次、船コロンボに着かんとするの前一夜、我が乘れる獨逸船ローン號の食堂には、あすの別れを留めんとて、給仕長が心を添へたる料理のかず〳〵に、シヤンパン、ウヰスキー、コンニヤク、ワインの杯しきりに擧げられぬ。戰捷の餘澤とて、萬歲の聲其處此處に起こるも快かりき。終りて、音樂會、舞踏會などの催しあり。各國人の藝づくしには、サイアムの弱き男のハイ、カラーしたるが、マンドリンを彈ける、和蘭陀の弱き女の、ジヤワに行きて女教師たらんといへるが、歌をうたへる、香港に行くといふ亞米利加のミス何某、背高く首の殊さらに長きが、美音のラヴ、サングは、當夜第一の喝采なりき。給仕人等が片手間仕事なる、船附の樂團は、數番の演奏中、ワグナーがターンホイザーの中にても名譽の曲の一つなるアインライツングなどを奏して其の大膽さに人々を驚かしぬ。而して日本人として何をか爲すべき役目は、我

れに當たれり。或る獨逸人は、純粹の日本の歌を聞かせたまへといふ、或る英人はレシテーションよからんといふ。固より無藝の我れなれば、工風に盡きて、何ともつかぬものを綴り出で、讀み上げたるが次の甲板文學なり。

船客に、一人ボーランドの醫師あり、好人物にて、種々日本に關するをかしき事どもを語る、蓋し書籍などより集めたる智識なり。其の口調また特色ありてをかし。

LOSS AND GAIN.

Scene : a Japanese Park.

A Japanese young lady sits on a bench ; on the opposite bench, two European gentlemen discussing the Japanese females.

ELDER GENTLEMAN.

O Yes, I know such a lot of queer things about them. Japanese girls are really funny little things.

YOUNG GENTLEMAN.

But .... No, of course not. But you know I have read it in books, and studied especially all about the female sex in this country.

YOUNGER.

I dare say; but your stories sound too queer. Japanese girls have no sense of jealousy, no sense of anger, ...!

ELDER.

And they will never lose their temper nor their head.

YOUNGER.

(Ironically)

I hope so.

ELDER.

And they never look at a gentleman out of the corner of their eye.

YOUNGER.

Do not they?

Just at this moment, the lady on the opposite bench casts a glance at the younger gentleman through the corner of her eye.

YOUNGER.

Put there: what a nice glance out of the corner of her eye: what is that?

ELDER.

I think it very peculier. I suppose that in Japan this sort of glance always means a challenge to a duel by "jujutsu:

YOUNGER.

A challenge to duel by "jujutsu"? absurd: Japanese ladies will never lose their temper nor their head:

LADY.

(Bursting into a Laugh)

ほゝゝ、分かりますよ、

Both gentlemen astonished, look at each other.

YOUNGER.

What does she say?

ELDER.

She says, she understands English!

YOUNGER.

Good gracious!

LADY.

たんとわたし達の噂なんか爲さいよ。色目づかひで決鬪を申し込むなんて、馬鹿らしい。日本の女學生はそんな事ぐらゐで temPen や heal は取り失はなくてよ。けれどもわたしはすつかり、あなた方にしてやられたわ。ほゝ、御一緒に散歩しませう、入らつしやいな。

YOUNGER.

What does she say?

ELDER.

She says, she heard all we said, but she is not angry with us at all; she will never challenge a duel by looking through the corner of her eye; on the coutrary, she wishes to go for a walk with us, because her heart is won by us, although she has not lost her temper nor head.

YOUNGER.

A very good idea:

ELDER.

Excellent!

LADY.

さあ御一緒に?

They stand up. Curtain.

亡友パーカー

オクスフォードの我が友に、バーカー君とて明を失へるエム、エーあり。天稟穎悟、文學を修めて、音學に堪能なり、母なる人と同住して、交友間の敬愛深かりしが、一とせの夏、母の病に侍して北海に浴を取り、ふと浪に誘はれて此の世を去りぬ。當時われ伯林にあり、オクスフォード新聞紙にその挽歌を讀みて、覺えず落涙したり。あはれ薄倖の人、今は何處の海底にか得意のショーパンを奏づる。

次なるは、亡友が死に先だつ一ヶ月ばかりの便りなり。彼れは最期に至るまでも音樂を説いて休まざりしか。

書中平田君とあるは平田禿木君なり。ミス、ソラスとあるは地文學教授ソラス氏の一女なり。

19 Bradmore Road, Oxford.

July 29, 04.

Dear Shimamura San,

I'm very sorry for not having answered your card before ; I've been rather full up with some letters concerning a society of which, alas, I've been made president ; and I am quite in arears with two or three letters of a more human description. I'm beginning to study counterpoint a bit ; it is one of the two great

divisions of music: music can be written from two different points of view; for, in the sequence of chords, either one of the parts, e, g, treble, is the melody, and all the other parts are arranged merely so as to from a suitable sequence of related harmonies,——or else all the parts are each a distinct melody by itself, but so written as all to harmonise together according to some stricter rules; the latter method is called counterpoint the former, harmony: counterpoint is the older method: it is harder, because in harmony one need not think of the melody of any of the parts except the treble; that is, one a need not think of counterpoint at all; but in counterpoint one must also think about the parts harmoni-ing and harmonising to from the right sequence of chords, as in harmony; therefore I have long felt that I should not be happy in music till I had mastered counterpoint; and at last my slow mind has begun to put thought into action. I hope you find Germany to your liking; please don't write German in your letter to me; but write and tell me all about what you are doing in the land of music and philosophy and beer. By the way, Miss Sollas is going to Germany, that is, to Heidelberg, in September. At Buxton mother and I found the air very much more bracing than here; the lower classes there seem to me to be quite as kind and less intrusive and less sentimental than here; the water in the naturalheart swimming baths is at 82 degrees; but mother had the heated baths and also electric baths; she is better but not well, we met a variety of curious people; and I think I got to know a bit more

about life, somewhat to my amusement; though, of course, my mother knew all about that before. A cousin, of mine, Miss Wallis, was with us; and she and I talked over things and people with as much wisdom as she had and I pretended to have: I found my powers of pretension much greater than I supposed, on one occasion; for a man there thought I was twentynine years of age; he said I had a man of the world air about me; I've hardly travelled anywhere, and a man of the world is the last thing I could manage to be: so after that I think I might go on the stage. I havn't seen any of your compatriots since we came back; is Mr. Hirata here still? I must go and find out.

I hope this letter will reach you: for I don't know your adress; if it doesn't, please let me know, and give me your address: – excuse this Irish bull; I couldn't resist it.

Yours sincerely,

G. Barker.

雜俎

文學入門者に

一

如何にして文學者たるべきか、此の問題を解くには先づ從來の文學者は如何にして文學者に成つたかを考ふるが第一である。ところが從來の文學者で十人十色であつて、殊に文學者と云つても詩人になる人があり、小說家になる人があり、批評家になる人があつて種々樣々だから人に依つて皆その逕路を異にして居ると思はれる。或る人は始は政治家にならうと思つて來た、從つて自分の修養時代は專らその方面の學問をし、世間の事柄をもその方面の眼を以て注意したのであるが、それが何かの機會で小說家になつて了つた。而して相應に成功したといふ人が西洋にも澤山あり、現代の日本の小說家中にも見受ける。又或る人は同じ文學者の中でも作者にならと思つて居たのが後になつて批評家になつたなどいふ人をも屢々見掛ける。特に最初は文學者にならうなどゝいふ心掛けがあつたのではなくして、然も後に立派な文學者になり了せたといふ人は極めて多い。或は多數の文學者が皆多少然ういふ經歷を持つて居ると云つても差支ない位である。旁々以て始めから文學者にならうと志し、さて如何にして文學者たるべきかと工夫する例は寧ろ稀であらう、是れ一方より言へば自然の境遇が文學者を造るのであつて、最初の志が必らずしも文學者を造るものではないといふことを證明するのである。又今一つ他の方面から見ると既に世に言ひ古るされた、詩人は生るゝものであつて造らるゝものでないといふ言葉にも半面の眞理がある。是れは又人間の天分が文學者を造るのであつて最初の志が文學者を造るのでもなければ境遇が文學者を造るのでもないといふ事實を證明するものである。恁う考へて見ると如何にして文學者たるべきかと問題は餘程困難な問題である。自分はたゞ

玆に普通に如何なる文學者にも必要であらうと思はれる條件を取り出して見ることゝする。

先づ第一に、古今は勿論、東西に亙つてあらゆる文學者が、其の文學者になつた後にぶつかる困難は何時も生活問題である。即ち先づ第一に如何にして活く可きかといふ問題が何時でも隨いて廻る。だから若し始めから文學に志して將來の行く道路をも用心深く考へて行くものに取つては、此の問題は必らず忘れてはならぬものである。

文學者になるものは生活上の餘裕があつて、財產があるとか、遊んで暮らせるとかいふのが最も必要であると唱へる人もあるが、是れも一方に偏した論であつて、兎角左樣な身分の人は古來大文學者にはなれない。前に言つた自然の境遇が文學者を作るのと反對に、自然の境遇が文學者たらしめざる傾向を持つて居るのである。つまり生涯に於て、最も痛切な利害を感ずるものは第一生活問題、次ぎに生殖上の色欲問題乃至名譽問題といふやうなものであるが、此の第一の重大問題たる生活問題に打當(ぶつ)つて、それと激烈な爭鬪(ストラッグル)をやつた人でなければ境遇上如何(どう)しても活人生の表裏兩面の複雜した有樣に身自ら觸れる機會が少ない、呑氣に鷹揚に單純に育つて行く。箇樣な經歷の人はあまり大文學者になれぬやうである。此の點からして我々は文學者たるべき眞の必要條件として、寧ろあらゆる生活難と鬪ふこと惹いてその結果としてさま〴〵な境遇の變化に出會ふこと、從つて曲折限なき人生の情味を實驗すること、一言にして掩へば活社會に浮沈するといふことが、文學者に取つて非常に必要な條件であらうと思ふ。雖然(けれども)かやうな條件を提出する時は必ずその半面に多くの犧牲者を提供せねばならぬ。即ち嵐に逢ふときは弱い植物が吹き折られると同樣、幾多の負傷者中絕者あるを免れぬ極めて危險な道であるから、若し人道とか、社會經營とかいふ方面の眼から見たら、箇樣なことは青年者に向つ勸めるに忍びぬことであるかも知れぬ。勿論社會が逼迫して行くに從ひ何れの方面にも生活上の問題は伴ふけれど、文學に於いて特に其の傾向が甚しく、殆んど文學と生活

難とは必然關係とでも云ふべき程の性質を持つて居る、箇様な狀態であるから一種の折衷策、又は安全策として前述の生活上に餘裕あることを必要條件とする說も出たのであらうが、然しそれは到底完全なる文學者を造る道ではなからうと思ふ。以上總括すれば文學者たらんとするものは場合に依つては餓死と戰ふをも厭はぬといふ決心が必要であらう。

二

箇樣な第一の決心が付いた上、文學者にならうとするものは如何なる方法を取るべきか、最初に考ふべきは前に言つた詩人は生るゝものといふ問題と干繋して、本來文學者たるに適する天分を有するか否かを硏究すること卽ち自己を硏究するの必要がある。何れの職にも適不適はあるが、文學程特別に天分を要するものはない、修業さへすれば、或る程度まで進み得る、商人や學者などゝは趣を異にして居るから、先づ何よりも天分を見ることが必要である。けれども自己硏究は必要なるに拘はらず頗る困難で中々自己を知るといふことは容易に出來ることではない。分明らねばこそ古來の文學者にして全然違つた方面から入り込んだ人も多く、又現に成り了せて外からは天晴れな文學者と見られる人ですらも、自分の心の底には依然として他の職業が適して居るのではないかと思ひ惑ふやうなこともあるのである。眞の自己は死ぬまではつきり分明らぬものであるかも知れぬ。けれども大凡の見當は注意してやれば付くものである。たとへば自己の生れつき、情熱的の傾向を有して居るとか、推理の力に富んで居るとか、或は又見聞したものが具體して記憶に殘るとか、抽象された理窟の關係でなければ頭に殘らぬとか云ふことは注意して見れば分かるし、又先輩や友人に聞いて見ても大略分かる、少なくともそれ位な用意を以て始めねばならぬ。若い時には何人も一度も情も想像も豐かな時代があるもので、その時代に文學がゝつたものを喜ぶと

いふことは多數者にあることであるが、それ等の若い時分の好き嫌ひは餘り當てになるものではない、今少し立ち入つて自己を深く考へて見なければならぬ。

昔は人の性質を心理學上から多血質とか、膽汁質とかいふ風に分けて、何の性質が何の方面に適すると云つたものであるけれど、然う鮮明と區別の付くものではない故、寧ろ事實的に漠然と言つて置く方が適切と思はれる。たとへば頭の工合の偏した傾きのある、言ひ換ふれば性癖の特色の非常に鋭く出る人、從つて多くは肉體上の發達、顏の表情等にも自ら特色の表れ來る人、一言にして云へば、友人から那の男かと直ぐ顏かたちのありありと思ひ出される樣な強い特性を持つた傾向の人は作者になり得るやうな傾きがある。近代の文學は一面に於いて如何しても作者の個人性の發現であるから、同じ客觀の天地を見るにつけても如何してもその作者のにほひといふものが出て來る、隨分むき出しに赤裸のまゝで作者全體が出て來る、それが何も作者が作者として出て來るのではないが、作者の頭の中に成り立てる天地人生として出て來るのであるから、最後の優劣はその天地人生を映して居る主觀の鏡の比べくらといふことになつて了ふ傾きがある。だから文學者として最後の勝利を得るものははつきりと自己の特色を持つて他の何人も模することを得ざる個　的(インデヒヂアル)、の性格である作家の個性の優劣即ち文學の優劣となる傾向を有して居るのである、此の點から見ても文學者たらんとする人はかつきりとして他の周圍のものから違つた天性を持つて居るといふ自信を作つて貰ひ度い。又自信でないまでも然うなり度いといふ志望を有つて貰ひ度い。そして自分一個の特別たる點を何處まで保護して太膽に表白して貰ひ度い者である。人間は一面絶えず先入見に支配されるものであるから、動もすれば自分の特性と全く反對な方角等を、只習慣で教へ込まれた等の理由で殆んど盲目的に守つて行き、それに對して本來の性特を却つて罪惡か何かのやうに心得て押し隱し矯め直すといふ傾きがある者である。此の性を矯める

といふ傾向は道德の社會には必要かは知らぬが、今少し廣い深い意味で文學者は寧ろ此の習慣を潜り拔けねばならぬ。今まで は理なくして人の言ふことを眞とし、習慣を眞とし、心の底より頻りに出で來らんとするものを却つて罪惡として撲滅せんと考へて居た。然し是れは決して撲滅すべきではない、却つて是れを自覺して特性として擴張すべきものである。大膽な眞面目な態度を以て發展せしむることが必要である。と言つたからとて何も野獸性を發展せしめよといふのではない、今少し廣い意味で持つて生れた特性をば大切のものとして保護せねばならぬといふのである。人の眞似をして似寄つたものを作つたとて何にならう。他と違つたものを作つて呉れゝばこそ、新らしい文學者も存在の意義を有して居るのである。

是れはその特性の一面から見た議論であるが、世間には又不思議に頭の調和の取れた性を持つて居る人がある。聰明の鋭敏人、才子、英雄などいふ人には或る程度まで是れがあり、聖人君子といふ側も多くは此の種の人である。偏つた特色はあまり持つて居ないが、其の代りあらゆる方面に發達して頭の平均が取れ、何となく人格が確固して間違つたことをせず、何を相談しても賴み甲斐があり、依賴するに足る傾きを示して居る。此れは寧ろ圓滿性平等性の發達した人であつて、此の方面の人は作家としては往々にして不適當な場合が多いと思ふ。かゝる傾向の人で特に情方面の傾きを有する人、或は境遇上文學者たるべき地位に在つた人は却つて批評家といふ側に行く方が適當な場合が多い。然しながら批評家といふ方面に行くには所謂才子的に何でも早わかりがする、そつがないと云ふ丈けでは無論足らぬ。文藝の批評家といふものは作者と同じ性質を分けまへしなければ成り立つまい。場合に依つては批評即ち一種の創作である。然らざるまでも批評の根柢には基礎として必らず作品の鑑識がなければならぬ。鑑識を誤つた批評なら千萬言を重ねても空である、效は無い。而して誤らざる鑑識は作者と同じ氣持でなければ出來ぬものであつて、只之れを前へ突き出して發表する所に作者が出來、鑑識を頭の中に蓄

へて、推理の力說明の方法を以て發表する所に批評が成立するものである。圓滿性とはいへ、批評家たるべき人の要する圓滿性は、作家たるべき人の要する特性と同意味に於いて所謂聖人君子が有する圓滿性とは一寸違つた所がある。その點でいふと批評家もやはり作家と同じく、物の根本を直觀する力があり、情を以て物を溫めるといふ如き力を有することを必要とする。けれども作家と異るところはその上に理解性が加はらねばならぬといふ點である。理解性の加はらざる批評は面白いことがないでもなけれど、時としては全く批評を成さゞる場合がある。批評と云へば必らず我々が作品の價値について疑ひを抱いた場合にその疑ひを解くだけの說明力を持つて吳れなくてはならぬ。その最後の判斷力のない批評は只の印象記にはなるが批評には物足らぬ。かゝる最後の判斷力卽ち人をして理解せしむる力は、その批評家の說明力、理解力に待つ外はない。感じて而して證明するといふ二性が備はならねばならぬ。これやがて二者の異る以所、批評家は作家に比して兩面を具備すべきこと、卽ち圓滿性に近かるべしといふことである。

三

次ぎに此の研究の次第は修養といふことに及ぶ、文學者たるべき人は如何なる修養をなすべきか。

文學の研究、文學の修養といふことは何時でも矛盾した意味を伴ふ。研究修養といふものは兎角知識上の活動を多分に含む、然るに文學は感納するものであつて、理窟を知つたからとて、文學者にはなれぬ。其の點から見ると文學の研究修養には專らその材料とする所の活人生を經驗する又活自然を見るといふことが必要であるは云ふまでもない。けれど他の一面としては他の人が既に經驗した、觀た人生、自然をば今一度經驗することも必要で且つ最も容易な、多數に用ゐらるゝ研究法修

養法である。卽ち他人の作物を讀むといふこと、理窟よりも先づ作物を讀むといふことが一番手つ取り早い研究法修養法である。然らば如何なるものを讀むべきか、これ我々が、よく尋ねらるゝ問題である。然し詩人たるべき人、小說家たるべき人等皆夫々違ふのだから書名を名指す譯には行かぬが。自分の考へでは現在から讀み始めたが宜からう。研究の是れも容易な方法でもあるしするから、先づ周圍卽ち同時代の作品を盛んに讀むべきである。之れに次いでは西洋ならば前代に進むところであるが日本では過去に歸るよりも西洋のものを讀んだが宜い、これは日本現代の作物と同時に讀んでも差支ない。然しなるべくは日本現代が大抵わかつた後、西洋の者を逆まに讀んだが宜い。それが十分に纒まつたらば、過去の古い所まで一度は溯つて貰ひ度い。けれども現代より讀み初めると、流石に現代のものだけは我々の血と肉とに密接で面白いけれど、遠ざかるに從つて面白さが薄らいで讀む氣もせぬやうになつてつい讀まずに濟んで了ふ人が多い。然し、かというて必らずしもそれが累ひするとも云へない。から强ふる必要はないかも知れぬが然し少なくとも批評家側の人にあつては溯つて貰ひ度いものである。あらゆる趣　を解する力を持つて居らねば批評の比較判斷が缺けて來る。その上で自分々々の主張として如何なる傾向を有しやうとも差支ない。要は背後に文學の全景がなくてはならぬといふのである。つまり作家たり、批評家たる第一項は作品を盛んに讀むこと、讀むるものゝ選擇はと云つたら殘らず讀むと答へるほどの見識で讀むが宜い。讀めば自づと判斷がつく。厄介だと思つたら友人なり指導者なりを得て讀めば宜い。然し片端から讀んでやらうといふ人には、その必要もあるまい。

作を讀むことに聯つての難問は理論上の研究は如何するかといふことである。古來理論の研究は却つて創作の邪魔になるといふ說と、邪魔にはならぬといふ說との二があつて、未解決であるが、近代文學の傾向より考ふるに、或る程度迄の理論の修

養は必要であると思ふ。科學者たり、哲學者たる必要もなければ、又他の一切の修養を抛つてやる必要もなからうけれど、或る程度迄といふ條件付で必らずやゝつて置くを可とする。元來理論の研究はその理論若くはその結論がさう有難いのではない。理論的にものを考へるその中の味ひに價値があるので、結論は甲の哲學者と乙の哲學者とまるで違つて居ても差支ないのだ。唯甲の哲學者は如何にしてその結論に達したるか、といふその逕路に値打があるのである。文學者にあつてはその逕路を明らかにするといふが目的ではない故、哲學者の場合とは違ふけれど、ものを深く見、深く考へる――頭を造るのは一種の滋養分となるのである。

結論は作者一個の直觀、一個の人生觀、天地觀で差支ないが、その人生觀、天地觀が深さを有して來るには一分の哲學的傾向があつて欲しい。哲學者にはならずとも宜いが、哲學者的の深さはあつて欲しい。只問題は其の哲學的考察に囚へられて了つて、折角の創作心を破壞する恐れは無いといふ所に存する。併し結局は其の人の天分と覺悟とに由ることであつて、ヘーゲルはこんな立場からこんな順序に進んで行つた、カントは此んな立場から恁ういふ風に進んだ、併し自分はそれ等を通り越して、彼等以上の所に到達して居るといふ程の見識さへあればよい。從來の哲學者の言に對して自己の不明を恥づるやうでは自ら作品にいじけた色が付く。あらゆる哲學を見下し、それ以上のことを言ふぞといふ抱負あつて然るべしである。これが特に作者の役に立つたといふ理論の研究はないかも知れぬが、一度此れを頭に入れた人であると、深さが付き、根柢が出來る。長い競爭の間にはそれだけの基礎根柢のある個性の方が如何しても勝つて行く。初めは一寸巧いことを云ひ、素晴らしい所を見せるけれど、人工で修養した基礎が足らねば直ぐ色が褪せ、動いて行くことが出來なくなり、限りなく奥から取り出す力が衰へる。これは現今の作者間にも表はれて來る傾向である。無限に自己を發展させるだけの自覺、基礎を造る

には一通り學問上の修養が必要であることは言ふまでもない。理論が邪魔になるとよく言ふけれども、邪魔になるまでやる必要はない。又理論の研究をやつたが爲めに冷却して了ふといふやうな人は心細い人、作者たり得ざる人である。持つて生れた本性は中々それくらゐの事で變ずるものではない。以上を總括していふと、以後の文學者には如何にして人生自然を深く見るべきか、といふ工風が最要の條件でその助けには哲學的の修養が大なる效果を齎らすといふことになる。

四

次ぎに活自然、活人生を見るに、自ら實驗するといふことは容易のことではない。他のやつてるのを傍觀するので澤山だ。又それしか出來ぬといふ人がある。是れは一應尤もではあるが、然し事實に照らして見るに、作品には何處かに自己の經歷した味がなければならぬと言つても宜い、近代の作品に至りては特に然りである。自ら經驗せよと云つたとて何も形をその通り經驗せよといふのではない。中の情味を最も痛切に利害生死と聯ねて感じた者であつて欲しいと云ふのである。以前は文學は所謂戲作の範圍を脫せざると同時に、人生若くは人情の研究といへば何時でも花柳狹斜の事情に通ずることゝ思ひ、德川文學の餘流に漂つて居るに外ならなかつたが、そんな意味でなく今少し廣く眞面目な人生の研究、千變萬化する世態に出入するのが必要である。なるべく多く全人生を閱歷して來ること、而してその足らざるを傳聞若くは傍見によつて補ふといふこと而して此等を凡て痛切に思ひ廻らすといふことが必要であらうと思ふ。

以上の外數へ上げたら尙他にもあるであらむが、要するに大略先づこんなものであらう。而してこれ等のものはすべてその修養し得た所を直ちに模し、追隨するといふが目的でも何でもない。一度自己といふものゝ中に消化させて了ひ、全く新らし

いものとして新らたに出立すべきものであつて、是等の修養の要目となるべき點は他の何人とも異る自己を如何にして發展せしむべきかといふ同題に歸するのである。而して斯く此の如何にして自己を發展せしむべきかとの考へは是れを必らずしも作する時の瞬間の心持とする必要はないかも知れぬ。あまりに此の心持ちを出し過ぎると却つて囚はれて了ひ、その反對の、如何にして他を摸倣すべきかといふことゝ同じ結果になつて了ふ。共に藝術の邪路である。その瞬間の氣持ちは只自己が描かんとするものを如何に眞面目に如何に忠實に寫さんかと心掛れば足る。その代り平生の修養として自己獨特の天地を造るといふ覺悟がなければならぬのである。（明治四十一年九月談話筆記）

新らたに文學に之く者に與ふ

近來つく〴〵思ふのは、將來我が邦の文學者とならうとする者は、必らず强い大きな性格な人でなくては駄目だといふ事である。强い大きな性格とは、文人必須の一要件たる感情の豐富銳敏といふことゝ共に、冷やかな知識、强烈な意志は、それで以てすべての實務を果たし得る要件である。結局實務の人たり得ると共に文學の人たり得る資質を要求する。二重人格である。

斯ういふ意味で二重人格の人は、文學をやりながら他の全く方面の違つた事もやれる。此の一事が、やがて其の人をして文學に常に新鮮の氣持と迫らざる餘裕とを以て對せしめ得る。今の我が文壇の實狀を見ると、全く家を成した中年以上の作家にあつては、少なくとも小說家だけは、それで一身一家を支へ得る人が多少ある。併し其の以下に於いては純粹に自己の作品だけで口を糊し得るものが幾人あるか。强ひてこれだけでやつて行かうとすれば、需要のある限り、濫作もしなくてはならぬ。若いうちから濫作を餘議なくされると、限りある材料や經驗が荒れて來る。作風が單調貧弱になつて、中途で頓挫する。世間には斯ういふ道を知らず〳〵歩んでゐる少壯作家が幾らもある。是れは恐らく日本の社會狀態がわるいのであらう。文學といふやうな精神事業には、まだ拂ふべき富の餘裕がない。また之れを味ひ得る範圍も極めて狹い。此の狀態ではまだ容易に文學が一事業として獨立して行く時機には達しない。事業として獨立しないものは、職業として糊口の術としても極めて不適當のものであることは言を待たぬ。それが爲め日本現時の文學は、概して片手間になつた。極めて少數の人々を除くの外、大抵は何等かの形で他に職業を有してゐる。教師、新聞雜誌記者、會社員、官吏といふ風の人がやつてゐる文

學である。

けれども之れはあながち非難の意味にはならない。事實の上から言つても、必ずしも純粹にそれのみをやつてゐる者のみが凡て優等であつて、傍らにやつてゐる人の作が劣等であるとは限らない。さういふ傾向すらも無い。作家の高下は全く其の人にありて、事情には無いやうである。たゞ副業正業と言つても其の程度や關係は雜多であつて、文學と他の事業と、何れが事業であるか分らないやうなのもある。まだ同じ文學以外の事業といふ中にも、文學と緣の遠いのもあれば近いのもある。要するに事情はさまぐであるが、此のさまぐの事情の中に生れ出づる文學が現時の我が邦に多數であることは否まれない。而して此等の困難な事業を切り拔け得た人々が結局文壇に最後の足跡を印する人々である。

純一に文學のみに從事し得る人は、それに全身を委ね得る、從つて感興の動くまゝにして、心を他に散らさない利益がある。之れが文人に取つては大切な事である。けれ共他に職業を有する人にも、特殊の利益が無いとは限らぬ。何時も其の事に專念にこそなり得ないが、時々それを離れる爲め、却つて平板單調の氣持を轉換させて、常に新鮮の心で之れに對し得る。また心內の閱歷境遇を變化させ豐富にする上から言つても、此の方に多分の便宜があり得る。また無理な濫作を避け得る。少壯作者の濫作は、必らずしも金錢上の必要のみから來るものではないが、併し之れが重大な一誘因であることは爭はれぬ。

文學者が文學以外の職業に携はる時の最大迷惑は、感興の充溢して來た時にそれを妨げられる事と、平生動もすれば精神感情の深く細かい方面が荒んで粗硬になりうる事とである。感情の充溢を妨げない爲めには、職業や時間の配置の上に何等かの考案があるべく、平生感情の銳敏幽微を鈍らさない爲めには、讀書瞑想等の精神修養を忘れぬやうにする。就中此の根本の第一事を疎にしないのが必要であることは言ふまでもない。

以上を我が現時の新出文人の殆んど免れ得ない運命であるとすれば、之れに處するの途は、其の性格を強大にして、二重の人格を優に一身に統括し運轉し得るやうな修養が、其の第一歩に於いて必須のことである。初めから文學的素養の無いものは、幾ら世故閲歴を重ねても、事物を深く觀照し、細かく味索する自覺の修養が足りないから、駄目である。それかと言つて餘りに感情一方に偏した、纎弱貧小な性格でも成長が覺束ない。文學者もまた強大な性格によつて自立する工風が必要である。深く細かい精神、鋭く豐かな感情の修養、自個性の保護涵養その發表に於いて虚飾、模倣、誇大、誇小の何物にも累せられざる直截摯性の熟錬、閲歴實務の尊重、就中實務に行いて實務の人たることを辭せざる覺悟と技倆の尊重、その爲あの二重人格、二重の人格經驗を精神化して蓄ふる沃潜性の統一此等が新らしく文學に赴くものゝ最も忘るべからざる事と信ずる。（明治四十三年十月）

文學志望者の覺悟

今日の青年——中學生諸君等——の中には中々能く筆の立つ人がある。一寸した美文位は立派に書ける。時には文壇の宿持の壘を摩する樣な文章も出來る。是等此の事は、甚だ感服の至りではあるが、扨てどうも其の筆と云ふものが、悲しかな所謂上つ走りの、たゞ無暗に、綺麗に、なだらかに書いてあると言ふ丈けの話で、一向其の內容の如きは兎角貧弱である。

少なくとも十九世紀後半以後の世界の文壇は、一回轉を爲して居る。根柢あり、深さある、眞卒なる文學、言はゞ人生最後の眞理と言つた樣なものに、肉迫せんとして居るのが、其の特殊の意義である。さればどうしても、是れから先きは、從來の如く筆の先きや、技巧ばかりで製造する文學では、其の成功は極めて六ケしいと思はれる。成る程今日の澤山の青年文學者の中には、非常な乃至普通な天才が、あるだらう。其等の人は自然生のまゝで甘く行つたら、或ひは文壇に一席を占めることが出來るであらうが、迚も凡を拔いたものには容易くは成れまい。却つて修養で叩き上げた凡人的文學者追ひに扱かれるかも知れない。

要するに、思想に深さがあつて、その作品は悉く深沈なる根柢から起つて書かれて居るもので無ければならぬ。彼の才筆を行るに此の修養したる思想を以てしたら、始めて大なる文學が出來るに至るのであらう。玆に所謂青年文學者は、皆常人以上に文學趣味を有し、また文學者として起つ丈けの要素は持つて居るのであるから、大いに修養して思想をこしらへ、而して大なるものを製造しなければならぬ。

かう言ふと、詩人は感情でやる者であると、言ふ者があるかも知れないが、其の感情も必ず鍛錬されたる感情でなければ

ならんのである。

修養と言つても、一から十まで的確に、どうしたが宜いと、ハツキリ言ふ譯には行かないけれども、兎に角帝國大學の文科とか早稻田大學の文科とかで、勉强するのが、先づ普通でまた溫健な方法らしい。併し或ひは此の外にどんな適當な宜いやり方があるか、其れはわからん。

此の頃は大分煩悶するの、せんのとの聲が高い樣であるが、煩悶も起る場合になると當然起こる者であるから余輩は大いに同情の意を表する。併し其の煩悶は多く、意志薄弱たるを免かれない樣である。てんで哲學の思想の無い者は、無い丈けにて煩悶してるし、哲學をやつた事のある者はまた有る者だけに、相當な所で煩悶して居る。概して言ふと、先人は既に一尺進んでをるのに、同じい道を行きあつて、五寸位な所で煩悶してるのが多いらしい。少なくとも、先人一尺の發明までは探究した上で、其の邊で煩悶を始めん事を望むのである。

何にしても、大いに修養を要する。

近頃は非常に懸賞が流行り出したが青年文學者が、自己の作品の價値を知らんが爲めに、多數の競爭者を押し退けて月桂冠を得るべく懸賞物に走せ向ふのは、悪くは無からうが、其の結果徒らに區々たる金錢を欲しがつたり、一時の空名に醉ふては駄目である。然すれば、文學者としても個人として最も大切な品性を傷ふに至るであらう。作者品性に下劣臭味が附いて來ると、其れか知らず識らずの間に作品の上にも流れ出で、如何に能く出來てる作物でも一種厭ふべき、劣等の汚い臭味を帶びて居るを發見するのである。

生なかに筆の立つ青年は、餘程覺悟を堅くして居ないと、種々の誘惑に乘せられて行く事がある。誠に危險である。空名

と金錢上に誘惑されて居ると、後には飛んでも無い方向に進んで了ふのである。一寸世間體も可いひ、自分も得意になつて、却つて墮落するのは珍らしくない。惜むべし、是れで一生を失敗る所謂天才は決して少なくはあるまいと思ふ。修養と覺悟とは、大いに文學志望者の心すべき所であらう。（明治三十九年八月談話筆記）

女學生、批評、戰記

予の宅へ出入る者の近くに圍はれて居る女學生風の二婦人は、支那留學生の妾となつて、傍ら某校に通學してゐる。予の嘗て住んだ家の近くに一家を借り受けてゐた女學生態の一二の婦人は、朝夕學生風の男子の幾人かを、吳郎越客とでもいふ趣に送り迎へして、それで何か修學でもしてゐるらしく見えた。此の類の事は、思ふに今の東京に數限りも無く行はれてゐるであらう、立派な目的のためには、手段は如何なるものでも構はぬといふ、一種のマキヤベリデムである。現在社會の脆弱な方面が色々の意義で此の中に現はれてゐると思へば、覺えず悵然たらざるを得ない。

今の批評壇に蔓つてゐるものは、趣味に對する好惡か、人に對する愛憎かである。好惡は或ひは已むを得ぬかも知れぬが、愛憎は嚴に斥くべきや勿論。少しく眼識あるものが、其の文を取つて一閱するときは、直ちに文學の底に横たはる個人的愛憎の息に觸れて、不快の念禁じがたきもの、數ふるに遑ありず。疑ふらくは此等の筆者が其の筆を舐めるとき、自己の心内には何ものゝ恥らはしさをも感じなかつたであらうか。

文章に感情の眞實を要することは既に論じた通りであるが、過ぐる戰爭中、予は諸種の新聞紙上の戰報を讀んで、文の能く人を泣かしめ驚かしめ戰慄せしむるに足るものに遭ふこと甚だ稀れであつた。獨り海軍省あたりの當局者が新聞記者に頒つたかと見える、所謂某佐官談などいふものに、事の急所を押へた、如何にも力ある戰記を見た。當時ひそかに思へらく戰爭記は軍人にして始めて眞に血の香ひ、砲の轟きあるものを作り得るかと。（明治三十九年五月）

ウエルドン氏の演説

過日の高等商業學校講堂に於けるウエルドン氏の演説は、多くの斯かる演説と同じく、さして我等に興あるものとも覺えなかつた。ウエストミンスター、アベーのカノンで、久しくハーローの校長でもあり、且つ其の近著中には「我れ信ず」「聖靈の示現」などいふ著もあるといへば、成る程牧野文相の紹介の言葉の如く、英國紳士教育の問題に關しては、最も權威あるオーソリチースの一人であるに相違なからうが、如何せん、其の内容のあまりに貧弱平凡であるために、我等はさしたる權威の我れに迫るをも感じ得なかつた。

遠來の客に對しては、苦言は隱して諛辭を呈するのが或ひは普通の道かも知れぬが、我等は想ふに、近時我が邦に來遊する多國の名士漸く多きを加ふると共に、之れを請じて一席の演説を乞ふ例も漸く頻繁となり、而して斯かる場合には、大抵演説者の名譽のため、地位ある人を招いて聽衆の首位に置くを習とする。然るに其の演説するところを聞けば、意外に淺近にして、中學の上級生に聞かしむる程度より幾くも以上には出でぬ。それも演説者の力量が其れ一杯とでもいふのなら、致方も無からうが、そんな望は無いのであるから、結局其の人は聽衆の種類を誤解するか、然らずんば聽衆の識見の程度を劣等視した爲め遂に斯かる過ちを敢えてするに至つたものと見ずばなるまい。

曩にはブラウン氏の早稻田大學に於ける演説に於いて、今はウエルドン氏の高等商業學校に於ける演説に於いて、如上の憾みあるを免れる。

ウエルドン氏の演説の大旨は、要するに眞妄の甄別力と人性の修養とを教育の大綱とするといひ、紳士教育の本義は知識

に非ず人格を目的とするといふに盡きる。而して其の細目に渉つては、曰はく義務の念、曰はく名譽の念、曰はく敎育の氣象、單に辭を強めて之れを繰り返すのみでは幾ばくの效果を人に與へやうとも思はれぬ。平凡は眞理かも知れぬ。併しながら其は權威の無い眞理である。

たゞ實際に十年を訓戒する方法を說くに及んで、或は少數優秀の子弟に殊さらに或る特權を附與すると共に、之れに應ずる義務を明確に負擔せしめ、權義の對照を學生間に明らかに認諾せしむるといふが如き、若しくは學生を制御するに直接の體罰を以てせずして責任の念を以てするといふが如き、事必らずしも新らたならずといへども、我が普通敎育の上には、尙ほ幾分の興味を以て聞かるべき說であらう。併し是れとても、ウエルドン氏を煩はして始めて聞くべきものではない。

末に至つて、ウエルドン氏は一言英國敎育の根柢が宗敎にあることを言はれた。此れらこそ我等が氏の如き人から最も精しく與り聞かんことを欲する點であつたにも拘らず、演說者は之れに恰も自明の理なるかの如く輕く述べ去つて了つた。切に言へば、此の現在基督敎と現在英國敎育若しくは英國民性乃至其の修養法との關係こそ、本論の最後最緊要の疑問でまた最も興味ある硏究點であらう。之れを逸し去つて、英人の性格修養問題に我が進むる思想界をして耳傾けしめんとするのは、迂な話しである。

要するにウエルドン氏は、其の眞率無邪氣の態といひ、其の熱心敬虔の氣といひ、いかにも好個の英國宗敎家兼敎育家ではあるが、惜しいかな、先日の演說は卽ち、一般凡庸の牧師敎員などいふものゝ說くところと同じく、一味英靈のところを缺いてゐた。（明治三十九年四月）

手紙と手紙小說とに就いて

拜啓、陳者度々の御催促狀にて恐縮、手紙書き候ことが嫌ひなるは、小生も其の一人にて、是れは嫌ひと申すよりも、ただ何なく卷紙を展べ候ことがおッくうなるに候いし、されば時によりては一箇月も手紙を書かず、狀挿に狼藉たる不義理の死に殼、書債の山を眺め候ては、あゝ濟まぬ〳〵を口の中にて繰りかへし候こと日に幾たびぞ。さればと申して筆とれば、嬾氣むら〳〵と心頭を塞いで、文味熟せず、机の引出しを探りてたま〳〵卷紙繼かず、封筒盡きたるに會へば、之れを良心への口實にほッと蘇生の思ひをなして筆を捨つる、我れながら己が心のあさましきにあきれ申候

其具のかはり、いよ〳〵となりて磨り流したる墨のにほひゆたかに、筆を稍妻の如く走らせ候瞬間は、また別樣の置趣無きにしもあらず、我れ生來の惡筆ながら、太く毛の剛さものを役として、塗抹縱橫、大字小字亂れ走るときは、字の巧拙に拘らずして一種の愉快を覺え候。殊にも、何某樣硯北を書き了へて、からりと筆を啣くとそのまゝ、三尺四尺の手紙を讀みかへすことなくして一氣に卷き收め、封筒に入るゝときの豪快は、忘れ難きものゝ一つに御座候。

手紙は通例一氣呵哉なるがよろしく、讀みかへさぬが妙と存じ候。然らざれば啻に書簡文の生命たる眞情直露の態を失ふの恐れあるのみならず、我等惡筆の徒にありては、其の亂塗したる手蹟の醜きが今さらの如く目につきて、折角の興懷を傷け申候。

書債に責めらるゝ心苦しさを思ふにつけても、すでに日曜安息、面會日指定とまで機械的になりたる我等は、また西洋人のなす如く、日々一定の時間を割いて、消息應答の用に充つるこそ至當に候ふべけ、斯くして始めて義務は滯りなく果され申

すべし。所詮義務は人を機械的にせざれば已まじと存じ候。

書簡體に書きたる小說のことをとの御求めに候ひしが、さやうの事たゞ今取りしらべ居り申さず。勿論英國にてはリチャードソンのそもく以來、小說に書簡體を藉りしもの限りも候はず。近くは兩三年前の英の讀書社會を騷がしゝものに『一英國婦人の戀文』と題する同じ體の戀愛小說ありて、一時非常の人氣にて候ひき。著者はじめ匿名にて、後に某女流作家なりしこと發表せられ候。また略ぼ同じ頃獨逸にて同じく人氣を博せし小說が、同じく書簡體にて、同じ女流作家の手になりしものなるは奇と申すべし。そは『屆かざりし手紙』と題するものにて、舞臺は支那に關したるもの、作者はフラウ、フォン、ハイキングと申す婦人にて候。

尙ほ何か前の文中には認めしやう存じ候へど、更に思ひ出さず、一度途中にて後半紛失の厄に逢ひしものを、書き繼いで貴答まで斯くの通りに候。匆々。（明治三十九年九月）

心理學者ラッド氏を迎ふ

隣邦米國の碩學ラッド氏再び來たらる。氏が心理學者としての浩瀚なる著述のかづ〳〵は、我が學界の早くから熟讀した所である。凡そ哲學方面の知識を有するものにして、一度は氏の心理學を繙かないものはなからう。氏の學說そのものに就いては、勿論異存あるものも少なくはあるまい。また氏みづからの思想の傾向も、むしろ博涉にして穩當公平といふが如き態度にあるを本領とするかも知れぬ。また歐洲の學者にして氏の斯くの如き性質を帶びたる著述によつて手引せられたことは決して僅少でない。我等未見のものも、其の溫容を想望して遠來の師を迎ふるの情に堪へぬ。

聞くが如くんば、氏は今回はや、長く我が邦に滯在すべしとの事、從つて、京都大學、早稻田大學等で幾回かの講義を囑すべく、氏も之れを快諾するであらうと傳へられる。固より如何なる題目について講義を請ふべきかは、當事者がそれ〴〵の考案に俟つべきであらうが、氏が心理學の系統について今さらの講義を聽くが如きは、策の得たるものとも思はれぬ。それは多少の新意見に時々に發するのが學者の常であるとしても、旣に彼れが如き完備した著述のある以上、多分は書中の結論と同一の學說に歸するに違ひない。さすれば今さらに廣く讀まれた著書中の事を講壇で繰り返さすが如きは、雙方に取つて損の多い事といはねばならぬ。

我等の思ふところでは、此の遠來の學者をして、本國亞米利加の學者のサークルで、日常聞睹のあひだに觸接した思想界の、現當活在の狀態を語らしめ論ぜしめるのが最も有益有趣味の事と信ずる。縱し專門の心理學について講義を請ふとしても、其の題は成るべく新らしい、例へはサイキカル、レサーチの學者が近年に發表したものについての批評とか、獨逸派心理

學者中の新らしいものについての評論とか、感情中心、意志中心、注意力中心、靈魂中心等の、むしろラッド氏が在來多く言はなかつた方面の心理學說についての論とかいふのを聽くのが、ラッド氏の人格を深く我が學界に印する上に於いても、また我が思想界のために見ても、遙かに有效であらうと信ずる。（明治三十九年九月）

文藝座談

小說全體に涉つて、新運動が起こつてから以來、文學と作者自身、若しくは作者の實感とが、遙かに密接して來た。事實と文學、恐らく此の二の境は益々接近せんとする。これが又やがて、新運動が重要なる生命である。こんな風にして、文學と實經驗、卽ち實感とを、全く距離のないものとしやうとすることゝ、其の實感を實行しやうといふことは、全く意味の違つてゐる事で、よく文學の中身を、實經驗と一にしても、それを味ふと、行ふとの區別は、どこまでも存して行かねばならぬ。實行と實感とには區別がある。觀照すること、味ふことは文學、實行は道德の事に屬する。この區分はいつまでも殘るのである。今日の新文學が狹い、偏してゐると言はれる非難は、新文學が、吾々の實感、實經驗と益々肉薄し、密着せんとする事實から來るので、成るほど、昔の作者は、確かに廣い、複雜な人生を物語つた。が、それは其の筈、彼等は、多くは書籍なり、他人の作物なりを見て、修得した人生の知識、若しくは自ら經驗したにしても、唯うはの空で經驗し、唯知識上に知るのみ、所謂通人的知識であつて、切に生死に關して感じ得た痛切な人生でないから、勝手に複雜な材料を、胸中から索り出すことが出來るが、それが活きたものになつてゐない。のみならず、空想を多分に加へて、一見如何にも複雜な廣い人生が描かれたやうに見えるけれども、其の實、それ等は僞物で、死んでゐる、死んだ人生なら、いくら複雜に、廣く出て來ても役に立たぬ。それに比べると、新進作家等の描く人生は狹い。それも其の筈で、自分に痛切に感じた卽ち活きたものしか取り出せぬ。またそれがよく廣く得らるゝ道理がない。狹くとも活きてゐる、眞實である人生が遙かに勝つてゐる。換言すれば、多くは描けないが、描く限りは實であり眞であると言ふのが近時の作物である。であるから、この態度を以て進んで行

げば、新進作家も、年を積むに從ふて、經驗も廣くなり、其の描く人生も廣く複雜になる。唯殘る問題は、世故經驗に長けて、或る程度に達すると、頭に妙にバランスが取れて、鋭い實感が出て來なくなる。廣くはなれど、さて以前の鋭い、活きた物が書けなくなると言ふ弊が起こりはしないか。若い作家等が、果して、この難關を、如何に切り拔けるかといふことが、向ふ十年、二十年をかけて見物すべきことである。

當今、文壇のデカダンと言へば、善惡の意味をぬきにして、まづ德田秋江君などだらうといふ噂があつた。この人と正宗白鳥君とは、前から幷んで文壇に立つて來たが、或る意味からいふと、所謂近代人の特性（モーダンキャラクター）を、違つた方面から、この二人が分け前にしてゐられる趣がありはしないが。卽ち秋江君は、寧ろその弱い方、感情的の方、若しくは一口に言つて、デカダン的の方面を有つてゐる、すべてあの人の作物に、さう言ふ香がつきまはる、そこが、やがて面白い所以にもなつてをる。之れと對照して、白鳥君は、其の强い方、筋張つた方、若しくは知力的な方面を代表して、一種の際立つた性格を持つてゐる、この性格が、やがて其の作に現はれて、面白味の源となる。勿論、新文人には皆それぞれ特性がある、其の特性の多い程面白いものが出來てゐる。中に就いても、白鳥君は最も特色があつて、向ひあつて話してゐても、まるで違つた手障りがある人のやうに見える。やがて、今の文壇に於ける一種の調子を一身に權化したやうに見える所以であらう。要するに此等の人の性格は、性格そのものがコンヹンショナルでない。近頃の人が、變つてゐるといふ點が、面白く見えるのである。

國語假名遣問題で、文部省の官人が代る每に、右だ、左だと大騷ぎをやるが、これは妙なものだ。細かい點に就いては、異

存があるとしても、大體の主義に於ては、前のやり口に贊成する。唯今度のやうな醜體が演出せられる根本の一理由は、あれを役人の手一つで、其の手の屆く小學校から、押しつけて行くといふ根本のやり方が間違つてゐるのではなからうか。小學校の兒童から敎へ込んで行つたとて、世間に既に存在し、成長した人々を支配するものは文學の世界であつて、文學中心となつてゐる。この成立した文學の上から、この文學のやり口を、小學校の兒童に否應なしに行ふのは容易なこと、前のやり方と比べて、强弱からいへば全然倒である。よし一歩を讓るとしても、少くとも兩方から相助けてやつたらよからう。文學は其のまゝ据置き、而して小學兒童だけ改良して行かうとしたのが、失敗の大原因である。例へば、新聞紙、雜誌、其の外人心を支配する色々の讀み物、此等が新方針に變らなければ、いくら文部省の努力も、小中學に强ふる位では、到底負けるに定まつてゐる。この點から言ふと、國語改良問題、假名遣問題どは、宜しく文壇の贊成を求めて、こゝより手をつけるか、或ひは少なくと、もこれと同時にやつて行かねば成就するものではない。今度、新文部省が、古い方針をやめるといふ理由を發表したのを見るに、眞先きに、世間では之れを實地行つて居ない、といつてゐる。これに依つて見ても從來の方針が違つてゐたこと、やり方の惡いことがわかる。

芝居の改良といふことに就いては、俳優の改良、脚本の改良、興行法の改良、それに續いて、見物の改良、劇評家の改良といふことまでも唱へられてゐる。其の中で、見物の改良といふことは、往々、俳優の方から出ることであるが、口はゞつたい言ひ分である。好いものを見せずして、見物を改良をしやうとしたところが、出來るものぢやない。又ちつとやそつとの見物を改良したとて、後からだん〳〵新らしい見物が出て來る。そして實際、社會にはこの方の見物の方が多い。所謂大向連が多いのであるから、その隅々までも改良が出來るものでない。かくの如くして結局、西洋と同じやうに多數と、小數と

の見物に見せるものが、分かれて來る。日本の現在の社會でも、好いものを好いと見る見物は決して少なくない。或る程度まで
は、之れを認める見物が立派にある。俳優側から、見物改良といふことは、言ふべきことでない。唯一つ局外から見て、見物改良が、いくらか出來るとすれば、其の唯一の方法は、劇評殊に新聞劇評が、其の廣く讀まれるといふことから、こゝ等に力を用ふれば少なからず便宜である。新聞の劇評は、今までは俳優を敎ふる方が主であつたが、今後は寧ろ、見物を敎へ、面白い、面白いと思はせるやら、見物の判斷を進ませるやら、努められたい。行く／＼は、この新劇評が出來るだらうと思ふ。例へば、「讀賣」の小山内薫君、又、「早稻田文學」の赤とんぼ、あそこらいは、若い、そして素養ある將來の劇評家たるべき技倆を顯はしてゐる。かゝる人々は役者、作者に氣を兼ねず、道樂氣を離れ、眞面目に批評方面に開拓せられるから餘程面白い、要するに新聞紙の劇評は、餘り黑人くさくないものを書くやうに力めたらよからうと思ふ。（明治四十一年十月）

都會の力

此の頃の新聞に、地方大學の不振といふ事が書いてあつた、そして學生がみな東京にのみ行きたがつて、已むを得ない劣等生のみが地方へ來るから困るといふ話しである。大學の事は兎も角もとして、學生が東京に集るといふ、其の一事に吾々は深い興味を持つ。よく世人は東京の學校が立身に便宜だとか、學校がよいからとかいふ理由で、此の事實を説明しやうとするが、根本の理由はもつと深いものでなくてはならぬ。是れは直ちに、都會と地方との對照といふ問題である。人間、ことに青年が都會に對するパッションといふ問題である。一歩を進めて言へば、都會といふ怪物の魔力の論である。

元來單に知識や富やを地方に分配する爲め青年を地方に留めるといふ理由は、人間本來の傾向に對して、極めて薄弱且つ不自然なものである。恐らく永久に互つて學生を服させることの出來ない論であらう。學生はおのづからにして都會を慕ふやうに出來てゐる。之れを他の方便の爲めに打ち破らると言つたつて、それは無理である。結局は必ず無益に了るに違ひない。學生みづからの爲めに、都會は誘惑が多いの、都會は不健康であるの、都會は冗費を要するのといふ論に至つては、最とも不精確の考へである。地方の小都會は果たして明白に中央首都よりも誘惑が少ないが、地方に居る青年は凡て人格高潔、品行方正と定まつてゐるが、決してそんな事はない。却つて往々反對の現象を呈してゐる。健康論にした所が、費用論にした所が似たものである。殊に誘惑論に至つてはたとひ地方に其の恐れが少ないと假定しても、誘惑の少ないのが果たして其の學生の幸福であるか否かは大なる疑問である。誘惑はすなはち刺戟である。刺戟等を避けて安全な室の中に育たうといふ消極的思想は少なくとも高等教育以上の學生には禍であるかも知れぬ。眞の人格は決して室の中では育たない。青年がみづから好んで刺

戟の多い都會に身を投じやうとするのは、それで强い人格を鍛へさせやうとする自然の配剤と見られる。靑年が都會にあこがれる心は實に强烈なものである。是れは何人も自家の經驗に顧みれば直ちに會得せられる事實である。併しながら或る人はそれが爲めに失敗に陷り、或る人は其の刺戟に堪へないで終に隱遁の志を起こした。そこで都會は必らずしも慕ふべきものでは無いといふ敎訓を若い者に說法するやうになつた。疑問はこゝにある。斯やうな敎訓は果たして有りがたいものであらうか、世の成功者と目さるゝ大多數は、むしろ却つて都會黨から出て居るではないか、此の生證據を前に据ゑて置いて、時としては生證據みづからが反對を唱へる。如何に其の口吻はもつともらしくとも、銳い眼を持つたものゝ冷な一笑を免れることは出來ない。

都會に育つものは幸福である。殊に成年期て於いて都會に育つものは幸福である。都會は人生のエッセンスである。あらゆるローマンス、あらゆるアドヴエンチュアは都會を中心として湧いて來る。此の中を泳ぎ拔け得る人にして、始めに眞に成功者となるのであらう。初めから地方に留まる人、乃至都會に疲れ、都會に敗れ、都會に空席を見出し得なかつた人は別である。自ら都會に對するパッションと準備とを有する靑年を、强ひて地方に留めんが爲めに、都會の誘惑を說き都會の不健康を說くことが、果たして其の人の爲めであらうか。抑々斯やうな說法が如何なる程度まで有效であり得やうか。都會は魔力ある人生の怪物である。(明治四十年九月)

早稻田大學教室より

○

私は元來心臟の弱い方で、自分は早晩心臟病で斃れるだらうと云ふ一種の信仰さへもつて居た程である。けれども肺や胃腸などは、人並以上に丈夫だと固く信じて居た。殊に胃の腑の如きは、困窮に育つたお蔭に、どんな物でも食べ得る、あまり食物の選擇好みなどしない。實用的に出來て居る。其のせいか何うか知らぬが、舌の感覺が鈍い方で、所謂食道樂通など云ふ方には頗る不向である。

そんな風だから氣管の病氣に罹ると云ふやうな事は、今まで自分では豫期して居ない事であつた。此の度が始めての經驗である。尤も二月の初旬頃は隨分忙しくて諸方の會に行つたり、夜分用達しに出かけたり、今から考へると、大分無理をした。其れが障つて發病したものと思はれる。最初は又例の心臟だと云ふので、氣にも止めなかつたが、どうも熱や咳の工合が常の經驗とはちがつて居る。少々不安になつて今度は更めて、早稻田の校醫である酒井醫學士に診察して貰つた。すると意外にも肋膜炎だと云ふ。其れは大變だと云ふので——大分嚇かされ氣味ではあつたが——兎に角轉地する事にしたので、茅ヶ崎へと云ふ話しもあつたが、彼所はどうも聯想が惡い。彼所へ行つたものは生きて歸らぬ例が多い。强ちそればかりでも無いが、暖かで、そして幸ひ酒井君の知り合ひの能勢醫學博士が居るから、それに診て貰ふといふので、小田原へ行つたのである。初めの一箇月は熱も定まらず、氣分もすぐれなかつたが、月の終頃からダン〳〵平温に復し、次ぎの一箇月で咳も除れ、喉もをさまつて了つた。今では全く健康體に歸つたつもりである。

私の病氣も輕かつたし、よくは經驗する事も出來なかつたが、凡て此の種の病氣に罹ると何等か腦組織に變化を來すのではないか、少なくとも精神狀態に異變を及ぼすものではないかと思はれる節がある。

嘗て新聞でも報ぜられた宮坂芙蓉君の事なども思ひ出される。宮坂君はもと早稻田中學の教師をして居たが、元來聰明な精神上にバランスのとれた人であつた。其れが夫の西田君といふ無我宣教傳の悟道家の說教を聽いた。一度二度は別に其の說教に對して特別の信仰も起こらなかつたが、何度目頃からか、ふと大いに感悟する所あり、其の人の言葉が一々體達した人の力ある語と聞かれるやうになつて、今までの知識の反抗などが消えると共に飜然大悟して道に入り、一念已み難くして終に新聞に出た通り、妻字を棄てゝ出家するに到つた。

其の少し前に私の宅へも訪ねて來て、いろ〳〵右の次第の精神上の話しなどして歸られたが、其の時には別に出家など云ふ樣子はなかつた。然し、宮坂君は以前から氣管病の傾向があつたと云ふ事である。此の間聞けば一度京都へ行つて居たのが、先き頃迄は其の病氣の爲めに東京へ歸つて居られたさうで、最近小田原へ轉地した筈であるが、肺病が餘程ひどくなつて仕事は勿論出來ず、妻子もある身だから生活問題の上から非常な悲慘な狀態に陷りつゝあるとの事である。

綱島梁川君などもインテレクトの逞しい非常に固い人であつた。けれどもあの病氣が重るにつれて思想上に變化を起こした氣味がありはしないか。無論其れまでには、インテレクトの勝つて居た人だけ餘計に且つ長い間、內面の煩悶は激しかつたに相違ないが、兎に角最後には情の生活に入つて、あの華やかな宗教上の火花を散らして死んだ。又、高山樗牛君が後年其

の思想上に變化を來たしたのも、矢張り何等か此の病氣と關係があつたのではないか。
私は今度病床に横はつてゐる中、つくぐ〳〵既往の事共を考へてゐると、樣々の事が心に浮ぶ。たとへば此れまで私がやつて來た事を考へて見ると、何だか空虛なやうな氣がする。
此れからはもつとサブスタンシアルな事をしなくてはならぬ。今までは全く口の先き、筆の先きで、取りとめもない事ばかりして居た。人間生れた甲斐には何等か實質ある事業をしなくては慊らぬなどゝいふやうな考へが出る。が、一旦病氣が平癒して見ると、此れまでの事も別に空虛だとも思はず、矢張り自分は自分の道を大手を振つて歩いてよいと云ふやうな强い考へが出て來る。
其れから病中には、とりとめはないが、何んだか一種の博愛的な心持ちになり、一方、差別とかインデビデュアリテーと云ふやうな考へが遠ざかり、平等とか永遠とかを思ひ、自己をデボートするやうな氣持が强くなつて來る。從つて心がなだらかになり、ゆつたりとして來る。
けれども平癒後はさうでもない、矢張り個人的、差別的の考へも跋扈する。我と云ふものが强く働く。

○

私の居た小田原は、歷史的に興味あるべき土地である。卽ち鎌倉以後は少なくとも關東の文明は一時此の地に集まつた。云はゞ江戸文明の根源地である。で、私は此の歷史的興味を味はうと思つて、地圖を繙いたり、名所案內記を讀んだり、歷史や偉記のやうなものを調べたり、いろ〳〵興味を刺激しておいて、さて舊蹟めぐりなどをやつて見たが、どうも私には歷史的興

とか、懷古の情といふやうなものが淡くなつて了つたのを感じた。

思ふに之れは、一つは境遇時勢の力でもあらうが、一つは年齢のせいであらう。もう私も今年は數へ年四十になつた。坪内さんなどの話しでも、四十とか五十とか云ふエポツクを劃する時代には生理上の變化と共に、精神上にも少なからず變化のあるものださうだ。私が小田原と云ふ歷史的興味に富んだ土地を見て淡い興味しか覺え得なかつたのも、矢張り此等の意で、段々ローマンスが消えて行くのであらう。自然は知らぬ間に人間のローマンスを一つ〳〵壞しく行く。

（明治四十三年六日談話筆記）

讀書と記憶

讀書をするに當つて、ある書は全部を通じて成るべく精讀し、またある書は目錄により、或は索引などに依つて、最も緊要の部分のみを精讀するやうにして、他を飛ばす。かう云ふ方法は慥かに必要である。

然らば精讀素讀は如何なる書籍に對してなすべきかと云ふに、概して、理論でないもの、創作特のやうなものは全篇通讀する必要がある。殊に近代卽ち十九世紀後半以後の散文物の文學――觀念を多く含蓄してゐる文藝製作物は是非共通讀して全體を味はねばならぬ。これに反して、舊い文藝書類のうちには、抄讀のみでも毫も吾人の鑑賞に障碍を及ぼさぬものが多い。我が國の文學で云へば、西鶴の長篇は必ずしも、通讀の必要のないものがある。或は馬琴の作の如き、自分の面白いと思ふ箇所にとめても差支がない。

理論的の文章になると、結論だけを見ても、論者の議論の大體を察することの出來るものがある。或は結論よりも、寧ろその材料として借りて來た他の文の引證、引例、若しくは他を批判評論する部分に參考すべきものが有ることも往々ある。併し、多くの場合、結論よりは、結論に到達すべき論理的順序が大切であるから、拔讀のみでは、議論の順序を知ることが出來ない。

それから、こゝに或る書籍を研究せんとする時には、著者の周圍を知る必要がある。これは案外閑却する人が多いやうだが、緒言は必らず見落してはならぬ。殊に內容の充實してゐるものは、精讀索讀の標準となることもあるし、本文以外に著者の主義主張を察し得られることもある。今一つは著者の周圍が序文中に說中せられて居るものがある。こゝに周圍と云ふの

は、その人の學說及びその立脚地が同時代の學問の趨勢、時代の傾向に對する關係を云ふのである。どんな書籍でも、舊容の時間的關係、卽ち前からの系統を溯つて究めてゆく歷史的關係を見ることが必要であると同時に、空間的、平面的に同時代、卽ち作者の周圍を知ることが肝心である。如何なる作物と雖も、過去に亙つて引いてゐる連鎖から斷絕することが出來ぬやうに、その周圍から全く孤立して存するものはない。殊に生ける周圍、少なくとも直接關係のある周圍を知らなかつたら、殆んど解することは不可能であらう。たとへば、玆に或る一人の哲學者を硏究するにしても、彼はその時代と如何なる關係を有してゐるか、時代を導いて居つたか。或は逆行して居つたか、それを見ないうちは眞に解することは出來ないのである。

さて、かうして硏究の方法はたつたとしても、これを讀んで記憶する必要がある、記憶力は僅かに二色に分れる、一般の意味の記憶は腦力に理論的の傾向を帶びて來るに從つて衰へてゆく。が、これは一方から見れば、記憶力の發達である。何故なれば、論理の連絡によつて事物を記留するからである。理論を主とすれば非論理的のものに對して記憶力を減ずるが、理論の連絡に因つて事特を記留する。事物の表現には二樣あるが、吾人の注意にも二樣の關係がある。卽ち「論理的或は哲學的」と「歷史的」の二樣である。吾人の注意が論理的になればなる程、歷史的にはいよ〳〵緣遠くなるすべてのものを論理的にして腦中にとめておく記憶は、一方から云へば文藝の創作の方面には不幸である。自家觀照の感銘をそのまゝ、ありのまゝに論理的ならず、腦裡に所することは、文藝創作家にとつては極めて緊要のことである。創作家の注意が理論に傾いたらば、その利害はどうであるか、尤も十九世紀の文藝中には理論の脉が多く導き入れられて居ても、毫も文藝の作品に累を及ぼすのでないのだから、理論的の腦力を有することは作家にとつては必ずしも惡いとは云へないが、切れ〳〵となつた

印象や、記憶が之れが爲めに妨げられる恐れがある、理論にのみ多くの注意をすると云ふことは、文藝作家にとつてどうであらうかと思ふ。

これは一例であるが、嘗て外國を旅行した時に種々の見聞をして歸つて來てから他の觀光客は明らかに詳細によく記憶してゐて、種々の物語もするけれども、私の記憶に存してゐるものは、最も印象を深く與へられたものに限つて、その他は盡く忘却してゐる。漸くはつきりと印象の殘つてゐる所を中心として、他は夢のやうに浮んで來る。これらは一方から云へば非常に記憶が惡いと云はればならぬ。要するに、自分にとつては最も興味ある事物が、最も重大で、また意味のあることなのである。だから、興味のあることが忘れない。この興味によつて注意が索がれ、さうして、腦裡に印象され、その記憶に存する事物がだん〴〵に多く積つて、遂に自己なるものが儼として築き上げられるのである。だから自己に必要なるものは、興味が最上の選擇者といふことになる。例へば數學的の頭腦を有する人は何者をも數學的興味を以て見る。かうして見たところは、その人の智能のうちに一段の益を加ふるのである。

近頃の青年には音讀をする者は少ないやうだが、昔は孝經の素讀だとか、何だとか云つて聲を張り上げて讀んだのである。然し、今日でも韻文はある程度迄は音讀の必要があらう。朗々と吟じない迄も、低聲に吟誦することは必要である。初めは只眼に訴へて讀んでゐても不知不識のうちに吟誦するを禁じ得ざらしめるのである。一体詩そのものゝ要件は見るものをして我を忘れて吟誦せしめる樣にならねば眞に生命あるものとは云はれない。

讀者の時間は、心に餘裕ある時に限つて讀むことが必要であらうと思ふ。人には心の餘裕ある人と、ない人とがある。心に餘裕のある人は如何なる多忙な時でも、書籍に對して心の轉換を行つて、斷片的の時間を巧みに利用することが出來るも

のである、この注意力を一點に集注するといふこと、或は注意力の集散を自在ならしめるといふことが讀者の修養である。一書を讀んでゐる際にこの注意が全自己になつてゐるといふ所、卽ち三昧境に入つた所に、初めて眞の味ひを探り出すことが出來るのであると思ふ。（明治四十四年三月）

私の好きな文章

近頃では特別な興味を繋いで書を讀むといふ事もないから、愛讀の書又は文章といふやうなものはない。從つて、好きな書を求むるとなれば勢ひ過去の記憶の中から探出して來なければならぬ。過去に讀んだ書物の中、今でも最も明白に記憶して居るのは、次ぎに掲げた西鶴の文章などである。此等は一時頗る受讀したもので、今でもその名文たることは疑はない。

世にわりなきは情の道を源氏にも書き殘せし、爰に石山寺の開帳とて都人袖をつらね、東山の櫻は捨物になして、行もかへるも是れや此の關越て見しに、大かたは今風のせ出立、どれがひとり後世わきまへて參詣けるとはみえざりき。皆衣裝くらべの姿自慢、此の心ざし觀音樣もをかしかるべし。此の頃おさんも茂右衞門つれて御寺にまゐり、花は盛にたとへていふ散べきもさだめがたし、此の浦山を又見る事のしれざればけふのおもひ出にて、勢田より手くり舟をかりて、長橋の頼をかけても短は我々がたのしみと、浪は枕のとこの山、あらはるゝまでの亂髮物思ひせし貌ばせを、鏡の山も曇世に、鰐の御崎ののがれがたく堅田の舟よばひも若やは京よりの追手かと、心王もしづみてなからつて長柄山は我年の程も爰にたとへて、都の富士女にもたらずして、頓て消ゆべき雪ならばと、幾度袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく、龍灯のあがる時、白髭の宮所につきて神いのるにぞ、いとゞ身のうへはかなし。

西鶴の五人女の一節、おさん茂右衞門が情を通じてから後の條である。今の自然想の文章から見れば、已にクラシカルな

ものである。功緻に過ぎ、マンネリズムでもある。テニハ抜きもあるし、「行もかへるも是れや此の關越えて見しに」などは、古い終辭を使用して居る。けれど、これとても西鶴が自身韻文としての必要上から粉飾したものとして見れば、また止むを得ない事であらう。同じ韻文脉のものでも、平家物語や馬琴の諸作に比較すれば、厭味もなく、あか抜けもして居る。さすがは西鶴の老手である。また、西鶴の文調には一種のリズムをつけて行つては、また自身でそれを突崩して行くといふ事が行はれて居る。「……あらわるゝまでの亂髪、物思ひせし貌ばせ」の亂髪、貌ばせなどはその適例であらう。更に此の文の內容から檢べて見る。有ゆる人生の義理道德を擲つたおさん茂右衛門の兩人が、止めがたく慕る戀愛に惑溺してしまつた後、續いて來る心淋しさ、わりなさ、悲しさといふものが、何所となく巧みに表現されて居る。「都の富士女にもたらずして、頓て消ゆべき雪ならばと、幾度袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく」所謂快樂の後のペソス乃至センチメンタリズム——即ちかれ西鶴に特有なる情味は、この數句の內にシンミリと描出されて居る。而かもそれが説明でなしに、描かれて居る。猶ほ、始めの「東山の櫻は捨物になして」以外に於いては、實に西鶴のリアリズムの根柢をなして居る冷たい皮肉を遺憾なく看取する事が出來る。たとへ、世の中に佛があらうと、神があらうと、所詮人生は色慾二道に支配されるものではないか。「觀音樣もをかしかるべし」と輕くユモラスに笑つて言つた所に、かれの著しい面目も見え、その全人生觀が發現せられて居る。卽ち、これを外形よりすれば西鶴の韻文的技術、內容よりすればその人生觀並びに情がそれぐに見本となつて現れて居る。短文ながら、全西鶴の縮圖ともいふべき名文である。（明治四十三年十月）

秦の天下

支那の歴史を繙いて、二千年の古に溯るとせよ。六王の事休して、老實なる漢の天下未だ起こらず、中間二三十年の際、最も風雲變化の態を極め、濤浪起伏の妙を盡くせるものは、秦の世なり。始皇四海を統べてより、三代十五年、年處の短きを以てすれば、歴史の上によく幾許の紙幅をも塞ぐべからずと雖も、其の十五年の事業は優に以て千歳の後を蔽ふべし。萬里の長城は、今猶ほ東亞の一角を限りて、儼として存するにあらずや。焚書坑儒の慘禍、狂妄はすなはち狂妄なりといへども、支那の文學之れが爲めに歩趨を轉じて、記錄の上に秦の名を不滅ならしめたり。太く短くといふの俗諺は、最もよく秦の天下を說明したるもの、嬴政また一個の快男兒たるを失はず。若し我が朝にありて、元龜天正の世を戰國と稱し得べくんば、德川の幕府は漢の天下なるべし。中間の織田氏は楚か、秦はまさに豐臣氏に比ぶべし。他はしばらく措く、豐臣氏の霸政と秦の天下とは、之れを較ぶるに於いて必らず不當ならざるべきを信ず。秦は三世十五年、豐臣氏はまた三世十八年、共に戰國亂離の後を受けて、眞の統一の天下、漢家と德川氏との爲めに先驅をなす。之れより先き、周家の鼎全く其の重きを失へるは、恰もわが足利氏の軍職其の威を失へるに異ならず。天下久しく泰平を想望して、而して此の望みに應ふるものは將さに興らんとする漢の朝廷なり、德川の幕府なり。然れども、人事の遷轉は多く直角的ならず、飛躍的ならず。極端に亂れたる戰國の世は、直ちに一躍して他の極端に趣く能はず。此に於てか、中間に備へとなりて地盤を舗くの一小齣を挿まんとす。秦の天下と豐臣氏の霸政とに、正に漢家と德川氏との爲めに地盤を舗くの任にあたれるものなり。歴史の過渡をして婉曲ならしめたるものなり。

戰國といひ亂世といふもの、要するに自我亢進の時代なり。獨立といひ、自尊といふが如き諸德、皆其の平準を失ひて、偏に自我の競爭に資するの時代なり。故に活氣は是れあるべし、風敎は蕩然として地を拂へり。斯くの如きの際に處して、最も早く成功するものは、最も時勢に適するものならざるべからず。而して時勢未だ轉ぜず。天下は遂に自我思想の權化たる秦に歸し了れり。秦の風氣、一面に於いては雄大、一面に於いては狂暴、其の源實に自我の强烈なるにあり。此の意に於いて秦は一個の驕兒なり。六合の表裏たゞ我れ獨り尊しとせるなり。彼れが猛烈なる中央集權の政治、彼れが急激なる郡縣制度の施設、固より時代の弊に鑑みしものなるべしといへども、動機の中心は此にあり。始皇の人物最もよく秦の天下を代表せり。眼中に古人なく、自ら三皇五帝を兼ねたりと稱するものは、彼れにあらずや。函を宮として、帝王萬世の業に誇るものは、彼れにあらずや。長城を修築して、幾千里の國境に障壁をめぐらさんとするものは彼れにあらずや。自家の功業を石に讚しを萬年に傳へんとするものは彼れにあらずや。海中に不死の藥を求めしめたるものも、天下の詩書禮樂を火にして顧みざるものも、皆彼れにあらずや。傳に言ふ、始皇湘水を渡るとき風に遭へり、湘君は堯の女なりと聞き、大いに怒りて刑徒三千を發し湘の山を赭にせりと。想ひ起こすは、秀吉が大佛に向かひて震災の餘憤を漏せりといふの說なり。また聚落の豪華は、阿房宮の壯觀といづれなりしぞ、所謂桃山期の豪放雄大は、必らずや秦の天下に其の對を求め得べからん。

それ斯くの如き秦の天下が、命數僅かに十五年にして亡びたるものは何ぞや。賈氏の過秦論は斷じて曰はく、仁義施さずして、攻守の勢異なれば也と。吾人おもへらく、秦の天下は戰國に勝つべきの天下にして、泰平に勝つべきの天下に非ず。差別に處すべく現實に處すべきの天下にして、平等理想の旨を缺けり。而して其の由來實に周の三大思潮の一にあり。

周の社會の亂るゝや之れを救はんとして起こりたる雜多の思想系あり。中に就いて亂次にこれを言へば、道家と儒家と法

家どを其の尤なるものとす。此等の三家、其の發足點は皆亂れたる現下の社會を救はんとするにありたれども、其の標的を定むるに於て、其の方法を擇ぶに於いて、遂に殊なる潮流を成すに至れり。儒家は曰はく、堯舜の代、治はすなはち治なりと雖も、周家の更に進步し成熟せる文明に如くことなし、我が標的はこれにありと。道家はおもへらく、今日の頽風實に周の文明に胚胎す。知巧あり、聖人あり、仁義あり、禮業あるが故に斯くの如く亂れたるなり。如かず、堯舜無爲の治に還らんにはと、一は進步を是認するの思想に立ち、他は進步を否定するの思想に立つ、しかも此の二潮流は、共に當時の社會よりは迂遠視せられ、實に利益なしとせられたり。而して此の缺を補ふものは、彼の法家の思想なりとす。彼等は、眼中たゞ現實の外なし。如何にして自家を最上權の地に置き得るか、如何にせば能く現實を基礎として、統一の實を舉げ得べきか。現實以上、自家以外には彼等の則るべき標的なし。法を嚴にし、信賞必罰を以て天下を博すべしといふ。唯これのみ、理想の以て差別平等を調ぜんとするものなし。而して今若し儒家の思想を以て周に擬し、道家の思想を以て楚に擬せば、法家の思想は、主として、秦、齊、趙等、周に對する外樣大名の國に萠せり。而して所謂覇者は常に此の思想に伸びて興り、轉傳して、悉く秦に流れ入れり。商鞅も秦に之き、韓必も秦に之き、法家の著しきものは、多く　に走りて其の主張を伸ばさんとせり。

また之れを容れて、周に於ける法家思潮の淵となり、隱然楚の道家、周の儒家に對して、秦の法家といふが如き地位を保てり。而して此の、最も現實的なる、隨つてまた最も當時の社會に適切なりし法家は遂に成功して、秦の天下を成せり。天下既に成る。風氣はおのづから一變せざるを得ず。前に最も時勢に適切なりしものは、今や最も時勢に適せざるものとなりて、卽ち亡びたり。要するに秦の天下は、法家成功の紀念なる哉。（明治三十二年二月）

過去の早稻田文學

私は二十七年に早稻田の文科を出たが、其の頃の級仲間や先生方に就いて話して見ませう。

同じ級仲間の仲で、文壇に關係すべく豫期せられて居たものゝ中で特色のあつたの規、第一、本校を出た翌年、ピストルで自殺を遂げた藤野古白といふ人である。その人は故正岡子規子の親類で、虛子君などとも矢張り四國の人で、一緒に俳句をやつて居た。級中でも最も飄逸な、天才的な人で、その人の自殺したのは、北村透谷が自殺した後であつたから、自然兩者相並べていろ〳〵研究された。今の元良勇次郎氏などもそれに注意して、その死因を聞きたいと言つて寄越され、當時からして既に靑年の自殺といふことを心理的に研究して居られたのは敬服の至りだ。今から考へて見ると後年藤村操などの厭世自殺の煩悶と相連つて、その先驅をなして居たのだ。

此の人は我々仲間の一番詩人肌の秀才で、今まで生きて居たなら隨分面白いものが書けたのだらうと思ふ。總てものを考へず、無意識に拵へて了ふといふ傾向があつて、卒業論文を書くにしても、二三日敎場で逢はないと思つて居ると、その後で二百枚もある草稿を持つて來て見せる。哲學上、心理學上、堂々たる議論をして居るけれども、さういふ風な人であるから論理が徹底して居ない處もある。それでもそんなところを指摘してやると、さうかなアと言つて首を傾げて歸る。そして二三日すると、また百五十枚もあるものを書いて來て見せる、と言つた風で、少なからず我々を驚かした。語學なども上手な方で、殊に會話など、ちよつと稽古したばかりで不思議なほどよく出來る。それが考へてやるのでなくて無意識的に出て來るやうであつた。その調子だから、いつも湧き出るやうな想を持つて居る人で、創作なども奇想天外的のものをやつた。卒業

後『築島由來』といふ脚本を書いて其の頃の早稻田文學に載せたが、今から考へて見ると、落想形式其の他不思議に北村透谷と似た點が多かつた。この人が先づ級中唯一の詩人。

それから、後藤宙外君なども大に特色があつた。體のあの通り小さい人であつたが、何となく精悍な趣があつて教場に出る時、いつも手織の着物の上に角帶のよごれたのをチョッコリト締め、羽織をも着ず、袴も穿かず出て來た。何となく奴姿を連想させたものだ。エナージィの強い勉強家で、眞面目な人であつた。

いま一人、伴無得といふ人が居た。此人は非常の俊才で、且つ容貌風采の秀麗な美男子。山口縣の人で、何處か國木田君（獨歩）と似た面ざしであつたかと思ふがもつと美しかつた。文章の立派なことは級中の第一であつたが惜しいことには國へ歸つて肺病で死んだ。

その外に、今、天津の師範學堂に居る中島半次郎君。此の人は非常な勉强家で、溫厚な君子人として昔からなづまれる質の人であつた。其の頃から教育學方面に熱心で、中島力造氏の知を得て勉強して居た。級中第一の教育學者であつた。その人の袴と私のとが、級中で一番穢かつたので、薇袴先生といふ綽名を得た。

先づさういふ人が私の最も親しくした人で、後藤の精悍、藤野の飄逸、伴の俊敏、中島の溫厚、それらがよく級中に目立つて居た。其の外今第四尋中の教諭の大久保常正君が雜中で英話の名人。亡くなつた奥泰輔君と言つて、坪内先生の玄關に居た人が、今日でいふ文士劇の先達、同じ玄關に居た畠山愼吾君が今臺灣に居るが國學院大學長畠山健氏の令弟で、餅は餅家だけに國學の大家であつた。そして學校を出てからも、皆それ〴〵にその特色を發揮して居る。

當時の文科は、開けて漸く第二期の、所謂創草の際であつたから、萬事甚だロマンチックで、活氣があつて、隨分亂暴者

も居て、教師などを何とも思はず、ストライキを喰はせたり、惡戲をやつたりしたものである。其の頃の英文學の講師には、磯野德太郎といふ理學士があつた。理學士で英文學に精通して居るといふのだから、なか〳〵の變つたところがある。今、京都に居る藤代禎輔氏なども學校の出たてもゞあつたが、獨逸文學科の出であるけれども、矢張り英文學を敎へて居た。それからロイド氏も來た、夏目氏も來た、井上十吉氏も來た。坪內氏のセーキスピアが當時から評判であつたのは言ふまでも無い。國文學の方では、關根正直氏が、三上參次氏の『日本文學史』を敎科書に持たして置いて、その材料の出所を指摘したり、缺點を罵倒したりして、變つた講義をやつて居た。それから畠山健氏の萬葉集講義、饗庭篁村氏の近世講義、三島中洲翁の漢文學など何れも振つたもので、要するに、講義を聽く方もやる方も一種自由奔放の氣に充ちて、亂世の天下は切り取り勝手といふ趣が溢れて居た。夢のやうなロマンチックな時代であつた。(明治四十一年十月)

再興した頃の「早稻田文學」

上

「早稻田文學」は再興してから十二三年になるが、其の以前は丁度七年々々で變動したことになつてゐる。卽ち初めて………二十四年かに、坪内氏がこれを興されてから七年で一旦休刊する事になつた。で、休刊の間が矢張り七年續いて、それから再興せられたわけである。

この「早稻田文學」が興つたり、止まつたりした時代が、一方には自らその頃の文壇の氣運の盛衰に相伴つて居た。その初期の「早稻田文學」は、初め坪内氏が專ら自分の宅に置かれた書生さんを使用して、殆んど獨自に經營して居られたものである。

さういふ狀態で二三年續く内に私共が入つて編輯に携はる事となつた。今は故人の奥泰輔といふ人――この人は矢張り早稻田の文科へも入つて居たが、常に芝居が好きなんで聲色なぞも中々上手だつた。それから今一人は死んだ國文學者畠山健氏の弟で、畠山愼吾といふ人、(この人は今官途か何かに就いて居るといふ事であるが打ち絕えて逢はない)この兩人が當時の坪内氏の玄關に居つたもので、兩人して專ら編輯の實務に當り、坪内氏がそれを指揮して居られた。

そして初めの「早稻田文學」は半ば講義錄體であつたからして、坪内氏の西洋物の外に畠氏だの森槐南氏だの、關根正直氏、大西祝氏だのといふ面々の講義風のものが載せられて所謂和漢洋三文學の調和といふ旗標が揭げられたのである。

又松井松葉氏などが中々奇抜な原稿を寄書して居た。それ等の編輯の中へ初めて早稻田文科の者として這入つたのが金子筑水君、水谷不倒君、紀星峰君等で。中にも金子君が最も力を入れて居た。

私が編輯に携はつた初めは明治二十七年頃に早稻田の文科を卒業した歲で、學校を出る迄は、私は個人的には餘り多く坪内氏に接近して居なかつた。其の點では寧ろ私と同級であつた後藤宙外君などが屢々坪内氏のお宅へも伺つて所謂文學上の敎へを受けて居た。私は學校を出る時に今から思へば甚だ空漠なものであるが、兎に角美學上の大議論を書かうといふやうな抱負で、卒業論文に「美覺の要件」といふやうな長い美學論を書いた。その頃早稻田の文科の美學の先生は、今の帝大の大塚保治氏で、大塚氏と故人の大西祝とがこの論文を哲學的立場から觀られ坪内氏が文學的立場から觀られたやうであつた。その論文が動機となつて、丁度卒業式のある四五日前に、右の畠山愼吾君が、坪内氏の使者として私の處へやつて來て早稻田文學入社の事を定められた。これは私の坪内氏に接近して敎を受けるやうになつた始めである。

中

その頃の「早稻田文學」の財政といふものは、可成苦しいもので、二千部も賣れゝば大した事であつた。從つて恐らく坪内氏は自ら持ち出しで行つて居られたであらうと察する。私が其の時貰つて居た報酬は一ヶ月十五圓で、當時にあつては學校の駈出しで、而も雜誌から受ける報酬としては、決して僅少ではない方であつたと思ふ。

そんな風にして學校側では重に金子氏と私とが編輯に當つて居たが、金子氏が段々學校關係が忙しくなるに連れて、雜誌の方は私が獨りで行るやうになり、奥氏、畠山氏等が種々の事情で次第に居なくなつて仕舞つた。同時に外から「早稻田文學」の編輯に這入つて來た人が、今の「都新聞」に居る伊原青々園氏である。それから、これも亡くなつた綱島梁川氏及び坪内氏の親戚である坪内銑藏が同じく同家の玄關に居て、編輯を手傳つたものである。恐らくあの頃の「早稻田文學」の編輯

局は、一番賑やかな時代であつたらうと思ふ。今の早稻田の五十嵐力君等も、矢張り編輯の手傳ひに來て居た。

あの頃の文壇は、例の「早稻田文學」に對してゐた「柵草紙」の沒理想論の後を受けて、文壇特に評論壇に評論的傾向が可成盛んに與つて居た。

私等が早稻田の文科で哲學と文學の交叉點に立ちたい…………と言ふやうな漠然たる事を宣言して騒いで居たのもつまりこの文壇的傾向の反影に外ならなかつた。そして當時のこの方面の研究、即ち美學的乃至修辭學的研究といふものは、今日に比較れば極めて形式的概念的なものであつた事は言ふを待たないか。やうにして當時の評論壇で我々が目標として暗に對陣して居た森鷗外氏と私達若い連中は、案外直接戈を交へるといふ機會が少なかつた間に、丁度明治二十八年頃であつたか、亡くなつた高山樗牛、其の外大町桂月、佐々醒雪、登張竹風、上田敏其の當時の赤門文士の若い連中が前後して其の根城にしたところの、例の「帝國文學」が眞紅な表紙の雜誌として現はれた。そして盛んに「早稻田文學」に向つて挑戰したものであつた。

我々若い連中ではこゝに於いてか、假裝敵を「帝國文學」の方に立て、反つてこの方面と論戰を盛んにするやうになつた。

一方創作壇では、樋口一葉なぞと言ふ異分子が彗星のやうに現はれたにも係はらず、中心は依然として「硯友社」にあつた。けれども、我々が創作上の影響を受けたとすれば、それは「硯友社」よりも反つて二葉亭四迷であつた。それからある程度まで露伴の系統であつたらうと思ふ。露伴にはあの理想的若若くは概念的なところ、二葉亭にはあの寫實的な處が當時の早稻田の若い連中には近附易かつたのであらう。紅葉の方は通人的な氣分が反つて早稻田と食違つたものであつた。

下

私の同級生の中で最も早く創作に這入つたのは後藤宙外氏で、本來ならば私と相並んで「早稻田文學」の編輯に携はる可きであつたであらうが、今言つた文壇の理論的、哲學的傾向に應ずる爲めには、後藤氏よりも私の方が一層その專門に近いと認められたものか、私がその任に當る事となり、後藤氏は一寸不遇の狀態にあつた。そこで專ら創作に熱中し「暗の現」「ありのさすび」等いふ長篇を書いて、紅葉氏に認められ、且つ學校に居る頃から「紅葉論」なぞを書いて居た爲めに、自然、紅葉氏と接近する機會が出來て當時の「硯友社」連とも盛んに交はり、創作家として一番く早稻田から打つて出たのである。

學校に居る頃は、例によつて、「友垣草紙」といふ回覽雜誌等を作り、後藤氏の外に何れも死んだ藤野太白、伴武經等といふ連中が何れも文學者の玉子を以て任じて居たのである。中にも藤野は正岡子規の親戚で早くから子規と同じ道に進む一種狂的な天才を持つた人であつたが、學校を出ると間も無くピストル自殺をして死んで仕舞つた。

元の「早稻田文學」の標榜は、所謂「記實」といふ事で最も公平な文壇の烏瞰圖を作るにあつた。從つてその「彙報欄」が非常な權威を持つたものであつた。我々が主として編輯するのは、この「彙報欄」であつて、一ケ月かゝつて文壇の各方面の現象を、新聞雜誌新刊書に亙り、取り集めるし切拔帳を作つて貼り込んで置く、それが隨分活潑なもので、他分その一部は記念の爲めに今でも早稻田の圖書館に保存してあると思ふが、扨てその苦勞して集めた材料を、二日三日亙つて、坪内氏の宅に集つた我々が、片端から檢査して行く。そしてその中に一貫する傾向とか題目とか言ふものを歸納し、分類する、坪内氏がそれに綿密な注意を與へられ、私が專ら文學の方をやれば、伊原君が芝居の方を行るといふ樣なわけで、二晩位徹夜

する事もあつた。「東報」丈けで五十枚、百枚といふ原稿を作り上げる。それが當時の「早稻田文學」の生命である、今日にまで猶ほ眞面影を傳へて居る精神であつた。（大正七年七月談話筆記）

樂屋で會つたヘンリー・アービング

私が外國に行つたのは千九百二年――明治三十五年であつた。そして私が、最初に會つた有名な藝術家は亡なつた英吉利の名優ヘンリー・アービングであつた。

恰度、私が外國に行つた其の年のことである。倫敦のドルーリイレーン座で、當時の英吉利の名優が大一座をして慈善興行をした。外題はシエークスピヤーの「ベエニスの商人」で、エレンテリーがポーシヤを務め、アービングはシャイロックを遣つた。シャイロックはアービングの十八番ものである。

其の芝居の時、私は友人に樂屋に連れて行かれて、紹介をして貰つた。元より長い間相對して居たわけでもなければ、又、多く言葉を交したわけでもない。唯、「How do you do」と云つて、握手をしただけである。私は名もない唯一留學生に過ぎぬに、向うは世界一流の名優であるから、てんで釣合の取れない會見である。ほんの、會つたと云ふだけのことに過ぎない。

私をアービングに紹介してくれた人は、私が倫敦で世話になつて居た、或るユニテリアンの牧師の子息であつた。其の子息と云ふのが旅廻りの役者になつて居て細君は女優であつた。謂はゞ夫婦共稼ぎの人たちである。其の人の親父さんの家に、私は下宿して居たのである。其の關係から彼れは私をアービングに紹介の勞を取つてくれたのだ。

しかし、先きにも云ふ通りそれは私が外國に行つた初めての年で、殆んど何が何んだか分らない中に會つたのであるから、今日になつては最う明白な印象は何も殘つて居ない。が、今、過ぎ去つた朧ろ氣な記憶を呼び起こして考へて見ると、アービングは當時最う可也の老年で、幾歳であつたか記憶しないが、年よりも遙かに老けて居ると思つた。何らかと言へば寧ろ無

愛想な方で、一方のビヤボンッツリーなどに比べると、お世辭つ氣のない人であつた。學者と云ふやうな型でもなくさうかと云つて商人と云ふ樣子の人でもなし、極く生面眞目な役者らしくない一老紳士と云ふ位な印象しか殘つて居ない。

其の後アーヴィングの舞臺はダンテなどを初めとして、四つ五つも見たが、其の中に彼れは死んで了つた。其の舞臺などゝ聯想して今考へて見ると、俗つぽいところのない、眞面目な、堅氣なんであつたことが分る。恐らく日本の役者ならば、元の團十郎などゝ通ずるところのあつた人であらう。（大正五年六月）

故綱島梁川君

綱島君は篤實溫厚の君子でした。自分よりは一期後明治二十八年早稻田の文學科第三期の卒業で、現にエール大學敎授である朝河貫一氏などゝ同學期でした。朝河君が首席を占め、綱島君は二席で出られたのです。曾つて缺席したことがなかつたさうです。

在學中金子筑水君、中桐確太郎君、紀淑雄君、中島半次郎君其の他同志七八名で哲學會といふ研究會を組織した事がある。その中での篤學な會員は綱島君でありました。綱島君が病を獲たのは二十八年の暮で、獨逸語を習ひに行つた歸途、金子君と自分とが一緒でした。咯血したのが始まりで、その日は又非常に寒い日であつたので、氏の顏色は全く土の如くになつたのですが、病は遂に癒えずして、十幾年の長い間病褥に居られることになつたのです。それでも氣分の好い時には、市中の彼方此方を車で見物したこともありますが、どんな氣分が惡くても、讀書と喫書とを廢したことはありませんでした。

氏の始め研究したのは倫理學で、卒業論文も倫[illegible]に關したものであつた。自分は氏として倫理の研究は面白い、氏なれば世上所謂倫理學者とは違つて、感情を無視した道德論を立てるが如き偏見をする氣づかひはないから屹度立派な研究をされるだらうと豫期して居ました。氏が宗敎に[illegible]たのは學校卒業後であつたらう。氏は鄕里では熱心な基督信者で、ピユリタン流の考へをもつてゐたのだが、早稻田在學中哲學を研究した爲めに信仰が崩れて遂に亡くなるまで基督敎へには還らなかつたで氏獨自の新宗敎、耶佛儒は勿論、あらゆる宗敎を打して一丸となしたものを信仰して居られた。

氏の性格が極めて、眞面目で、善良で篤實で理知感情二つながら備つて居て、而かも勤勉無比であつた事は前にもお話した

やうですが、私が歐洲に居た時、三十五年頃だつたと思ひます、一時熱心にスピノーザの哲學を研究して大にその學說に私淑して居られて、私の所へも一書を飛ばして、スピノーザに關する新著を見たいと言つて寄越しました。自分はスピノーザ哲學と氏とに就いて非常におもしろいと思ひました。氏が欽慕して居られたのは坪内博士と故大西博士とで、兩博士の影響を受けたのは非常でした。

其の後氏の倫理學上に於ける感情は、道德論を通りこし宗教に入つたものです。氏の思想は哲學上、兎に角一種の梁川熱、見神熱を起こさしむるに至つたのは敬服の外ありません。氏の平素を知らぬものは、氏の學說を見て、世を詐くものだとの口吻を洩らした人もないではありませんが、それは大變な間違ひであつて、氏は決してそんな心のあつたのではない。唯思ふまゝを思ふまゝに、感じた事を感じたまゝに言ひ表はしたにすぎないので、一點衒氣や厭味のあつたのではない。溫厚篤實であつたのです。

全國に崇拜者も非常に多く、常に見ず知らずの人達から見舞が絕えた事がない。又態々見舞に來た人も、話しを聞きに來た人もある有樣で、一面狹い範圍のお祖師樣のやうであつたのです。氏の著者は倫理と宗教との二方面に涉つてゐて、倫理學史、快樂派の倫理、病間錄、囘光錄などであるが、中にも洛陽の紙價を高からしめたのは病間錄であつたのです。殊に見神の實驗の如きは、當時の問題となつて宗教家のみならず、學者も等しく競うて論評したものです。

これを要するに氏の生涯は三期に分かれてゐる。第一期は在學三年間の當時から、卒業前後、專ら倫理研究に身を委ねて、傍ら早稻田文學の編輯に從事されてゐた純文學者的の時代で、第二期は西洋倫理學史、快樂派の倫理を公にされた道德學者の時代で、施て病氣と感情とが進んで病間錄、囘光錄等となつて宗教時代の第三期に入られたのです。氏の文章は早稻田文

學時代から練て來て、此の頃では技巧の妙を盡くして修練の結果になるものと思はれるのです。氏の平素は品行方正、寡言温良で、快活な人でした。常には沈默を守つて居られるが時に熱烈な議論をされた事もあります。

私が歐洲から歸つて來て、一番に氏を尋ねたのは、理智と感情とは相容れないものではあるが、君の理想感情の相融和するといふ所の具體的說明を聞きたいものだといひましたが、それはいづれ發表する時があらうと言はれました。回光錄などにはいくらかその傾向が見えて居ますから、その方向に筆をつけたる者でせう。氏の信仰に對しては一方非常な崇拜者があると共は、一方批難者の數も決して少なくはなからうと思はれる。が氏の信仰の永遠に生命の存するのは、この兩方面の常に相觸れるからです。氏の體軀は死しても、精神は永遠不滅であると思ひます。（明治四十年十月）

故梁川君の柩に捧ぐる辭

謹みて綱島榮一郎君の靈に告ぐ。君が生前の知友等茲に相會して、君の亡骸を送らんとす。生等同人また柩に侍して君の傍にあり、しばらく最後の別れを惜ましめ玉へ。此の日たま〳〵淅瀝の雨そゝいで止まず、死に行く人を思ふの淋しさ、そぞろに切なるを覺ゆ。

理情矛盾の間に齟齬たるの生等は、今に於いて、君が晩年の安立を羨む。君が世に遺せし感想に對しては、長へに批議するものと讃美するものとを絶たざるべし。君の精神は斯くの如くして不滅なるを得ん。

君はまた十年病蓐にありて、慈母の愛、舊師の恩、弟妹の情味をつぶさに嘗めたり。三十六年の短生涯も、君に於いて遺憾なかるべし。

君の友人等は、君が遺藁を集めて、散逸せしめざるべしと信ず。

君の弟妹みな君と孝慈の質を同ぢくせらる。加ふるに一世の君が死を悼むこと肉親の如きもの多し。君の身後は憂ふるに足らざるべし。

生等こゝに君と永久の別れを惜しむ。是れより更に君の遺骸を送りて、大地に還さんとす。幽明世を隔つるの人、こひねがはくは安らかに眠り給へ。（明治四十年九月）

確か「二六」にも云つてあつたかと思ひますが、あの歷史畫論は綱島君の大批評文です。高山君の急所を衝いて、敵をして大にたぢろかした形勢があつた。併し二勇士の名が綱島君のよりもより大であつたが爲めに注目を惹かなかつたのは如何にも殘念な事でした。

綱島君が元の早稻田文學で時文評を書いたのに行々子として書いたのに行々子として書いたものです。今も出して見れば幾らもあります。今日から振り返つて見るとこれが晩年の綱島君と同じ人かと思はれる程です。當時はなか〳〵盛んに書いたもので、時文評論若の武者の面影が見えてゐるものもあります。

文章の事を云つて見ると、僕が前の早稻田文學を坪内先生の主宰の下にやつてゐた時から、綱島君はあすこの玄關にゐて手傳をしてゐられたので、二人のものが同じやうに雜誌に出ました。其の頃の僕の文章と綱島君の文章にはよく似た。丁度兄弟のやうなものでした。

少なくとも其の一つの理由は坪内さんの文章が作用してゐた。僕も綱島君も硬い方の漢文の基礎の上から出立した文章で其の上に坪内先生の婉轉自在な文脈を加へて坪内式十三歲文式と云ふ樣な同じ型の文章が出來たのであらうと思ふんです。

綱島君の文章は技巧でつき上げたものでアートの極に達した文章と云つてよいでしよう、それに一種の感情とよく合體してあの人一流の文章をなすに至つたのを始めて知つたのは、西洋に行つてゐた時分確か新小說に出て居た「秋の力」とか云ふのを見た折でした。其の時綱島君一流の文章が愈々出來上つたなと思つたのでした。

之れは後年修養のために讀んだ宗教書、特に碧巖錄などの中の法語がはいつてより淡泊より華麗に進んで華麗の極があゝ云ふものになつたのです。

さうです、元は近松の評などもしました。つまり始めは文學的生活を送つた人で、漸次學者の生活に入り宗教家に轉じた人です。（明治四十年十月）

大西祝氏の追憶

早稲田で三年級まで續けてお世話になつたので、特に私などは色々なことを伺つたりなどして多く敎を受けた方と思ひます。先生の人相ですか、先生一言で言へば完全な人格といふに歸するでせふ。知識も彼の通り、論緒を見出すといはうか、論脈を辿るといはうか、兎に角論陣の布置には最も明敏な頭を有つて居られた。同時に才氣も縱橫であり、それに感情方面の事まで十分に理解が出來て居られた。それ故歌なども或る程度までには作られた。品行の點を言つても彼の通り、義務は堅く守り責任は深く重ぜられ、勉學には力を籠められる、殆んど間然する點を見出さない。後に高等師範の方へ奪はれて其處から洋行される樣になつた時には、早稲田の人々は痛く失望の體であつたが、その間に早稲田に殘された感化といふものは大きかつた、否、今と雖も猶ほその感化は殘つて居る。無論早稲田の文科には坪内先生が中心となつて文科の勢力をなして居られることは十目の證するところであるが、次ぎに副として立たれた大西さんの感化力も亦大なるものであつた。此の意味に於いて大西さんは猶ほ早稲田に於いて長へに生きて居られる人である。

其の學說に對しては私は別に深く研究しては居りませぬ、行く〳〵はミツシリと相廣の批評家を得て判定を下すべきであるが、私の今言はんと欲するところではないから止すとして、要するに一通り十分に高遠な處に頭腦を振り立ながら、常に常識の方面を忘れないで實際と理想とを併せ行かれた點が一の特色である。平素よく聽かされたことで今でも猶ほ耳朶に殘つて居るのは、活動主義及び相對理想主義といふ語である。相對理想主といふ事の意味は、理想は固より絕對最高のところに無ければならぬけれども、單に絕對最高のところに在るのみでは實際と何等の交涉がない、それ故絕對理想をば暫く相對理想

に引き下げる、而して之れに向つて精進せねばならぬ、その引き下げた相對理想に轢て近づくに從つて、更に之れに對して一歩進んだ理想を立てる、吾人は常に相對理想を追うて進歩せねばならぬといふのだ。大西さんが敎場に現はれて講義をされる時には何時とはなしに熱誠が加はる、ホンノリと顏が赤くなる、哲學の中にも感情が燃えて來るのであらう。例へば論理學の如きは誰れが聞いても面倒臭い、手數のかゝるいやな學科の一つである。それにも拘らず大西さんの論理だけは皆が興味を以て默つて聽いたものだ。熱誠があらゆる學科を捉へて生命なるものとならしめた事の一證でなる。

氏の和歌は桂園一派の流れを追ふて中心は哲學風の思想の潛んだ面白いものもあつた。又文學に於ける鑑賞力であつた。小說なども能く評され、六合雜誌などに載せられたが、當時の水平線上に立つて、專門の批評家に對しても遜色が無かつたのだ。

之れを要するに大西氏は知識と感情、理想と現實との調和點に立だんとされた、又たしかに立ち得られた人と思ふのが私の考へである。（明治四十年十二月談話筆記）

國木田獨歩の靈に捧ぐる辭

文壇の畏友國木田獨歩君の靈に告げまつる君と予とは同學の緣もありながら生前に相語る機會なく今日却つて此の齋場に弔辭を捧げる身となつた人間の離合ほど測り難いものは無い君の最後を聞くに君は死を思はずして生を思ふの人であつたと云ふ生きて飽くまでも人間悲哀の源を究めるのが君の天職であつたと見える身を殺いで骨に及ぶの悲哀と眞の爲めに瘦せたる姿とは君の文學である生の人眞の人悲哀の人此の意味に於いて君が近時の我が文壇に於ける地位は日月の如く明らかである思ふに君の志は靈熱になつて今後の人に感傳するであらう予はむしろ君を知ること遲かりしものゝ一人として茲に滿腔の悼意を捧げるといふ。(明治四十一年六月某日青山齋場にての弔詞)

夏目漱石氏の追憶

(初めから固定して居た人)

私は個人的に漱石氏と會つたことは二度か三度だから、直接人としての漱石氏は知らない。またその作品にも、特に最近のものは餘り讀んでゐない。だから最近どんな風に作品なり思想なりが變化したか私としては分らないのである。

私の知つてゐる範圍に於いて考へて見ると、漱石氏の味ひは云ふまでもなくロシアでもなく、ドイツでもなく、亦恐らくフランスでもないのである。やはり純イギリス若しくば一歩を踏み出してアイルランドの味はひに違ひない。

あの人のものは、創作を讀んでも評論を讀んでも殆んど同じ味はひである。所謂低徊趣味といふ話しもあつたが、それよりかあの人が多くの創作なり評論なりに依つて、豐富にクリエートして與へて異れるものはあのパラドキシカル、ヴユーである……丁度かごんで股の間から景色を見るやうな具合に、尋常のものを逆樣に見るところに出て來る。そんな風にして出てゐる知識なり感情なりの味はひが人の注意を索いたものであると思ふ。

あの人の人生觀の如何なるものであつたかは私は知らないから、それは差しおいて、どうもあの人は最初から腰の据つた人生の觀方をしてゐた人ではなかつたかと思ふ。前にも言つた通り晩年の作品を讀まないから分らないけれども、恐らく餘り變化をしない作者ではなかつたか、人間に於いても創作に於いても。

世間には動搖する者と、固定したものとの二者である。一個人の生活にしてからが、初めから終りまで動搖してゐる人と、初めから終りまで固定してすます人と、概して若いうちに動搖して年齢の加はると共に固定して行く人などがある。西洋に

は固定した生活をしながらも徹底する人があり、また初めから終りまで動搖を續けながらに徹底した生活をする人もあること言ふまでもないが、日本ではさうは言はれない。これは日本の社會狀態の結果や日本人の生理作用の結果が然らしめるところであらうが、概して言へば、日本人は固定すれば徹底し、動搖をつゞければ徹底しないのである。隨つて、青年と老年とが、かつきり區別が附く。つまり動搖した生活は若い者の特有であり、年を取るに從つてだん〴〵固定して來るやうなわけである。

日本現代の作者を見ても、この二色がはつきり目立つて別れてゐる。そして動搖生活から固定生活に移らんとしつゝある中間の人も見られるのである。

漱石氏の如きは恐らく初めから固定した人生觀に腰をすゑた人ではなかつたらうか。尤も氏が文壇は出られたのは比較的年を取つてからだから、動搖はそれ以前に通過したのかも知れない。（大正六年一月談話筆記）

近代文藝は婦人を如何に觀るか

近代文藝、殊に小說とか劇とか云ふものは、殆んど婦人の硏究が中心となり、婦人問題を提げて居ると云つてよい位である。さうして其の主たるものは、大抵男子の手に成つて居るものであるから、云はゞこれ等の文藝は、男子が自分の運命に、最も重大なる關係を持つて居る女性に對して、古來未だ解釋せられない疑ひや硏究を發表したものと云つてよいのである。

近代文藝は、斯樣な性質を持つて居るものであるから、種々の意味で、婦人は必ずこれ等の文藝を讀む必要があり、且つまた特別の興味がなくてはならぬ譯である。

廣く社會の全體から見ても、此の種の文藝が世間の所謂婦人問題を刺戟したことは明白である。婦人問題と云へば、偏狹固陋な一部の思想界では、其れ自ら何か不穩な事柄でもあるかのやうに恐れて居るのであるが、そんな馬鹿なことはある譯はない。また一方に於て、思想が二十年三十年の昔に立ち歸らんとして居る日本に於ては、凡ての方面に新問題の提出せられると云ふことを恐れるやうな愚劣な傾向のあるのは、困つたことである。問題の解釋の上に間違つて居るものがあるなら

ば、それを論究助成するも差支へないが、問題其のものは、飽くまでも盛んに提供せられなければならぬ。

此の意味に於て、婦人問題は、何處までも研究せられなければならぬ。さうして其の婦人問題の刺戟となれる最も有力なるものは、とりも直さず近代の文藝である。日本に於ても、現に基督教方面の廢娼運動と關聯せる最近の婦人運動が、ノラ劇やマグダ劇で非常な刺戟を受けて居るのは明白な事實である。内ケ崎作三郎君や安部磯雄君等の人々が、此の方面の活動ぶりを見ても、此の事實は解る。

一般世間に於ての必要が、啻に斯樣であるのみならず、婦人が一個人としての自分を知り、併せて自分の運命と離るべからざる關係を持つて居る男子が、如何に自分を見て居るかと云ふことを知る必要上、近代の文藝に最も力ある參考書を求める必要がある。

或る場合には、隨分皮肉に、女を始末にをへぬ、いたづら者、所謂女子と小人とは養ひ難し的のものと觀たやうな文藝もそれが近代の文藝の中に表はれて來ると、如何にも、尤もらしく、且つ女の急所を抉つたものゝ如く出來て居る。これが果して當つて居るか何うかは、婦人自ら顧みて辯解すべき問題である。例へば先達死んだストリンドベルヒの「友達」と題する劇であるとか、また同人の「父」と題する劇などは、其の好例である。「友達」は楠山正雄君が飜譯された。あれを讀んでも中々面白い。問題が已に婦人自らの前に提出されて居る譯であるが、斯やうなものに對しても、日本の知識ある階級の婦人は、何と答へるか、聞きたいものである。

また寧ろ婦人の味方として、提出せられたものは、例のイブセンの幾つかの劇である。其の最も著しいのは、「人形の家」である。あの中には、所謂婦人の獨立とか解放とか言ふことに關する問題もあれば、また昔より男子の間に横はれる婦人の

疑問、即ち一歩立ち入つて見れば、女は男には謎であると云ふ彼の問題が出て居る。男が女を謎だと云ふ此の思想は、文藝上にも遠く昔から今に及んで、其の實例が澤山ある。それが殊に男女間の最も重大なる問題である戀愛に關係することには、著しく表はれて來る。女からは餘り男を謎の如く解らぬものとは見ないやうであるが、男からは、戀愛問題などが複雜な深い所に觸れて來れば來るほど、女は實に解らぬものだ、謎だ、と云ふ感を深くする傾きがある。

これ等に對して婦人は、默つて笑つて見て居るか、それとも、何とか自分の本性を見せてやるか、兎に角何れにしても、婦人にとりては、興味ある事柄でないか。

其の外、婦人の理性問題、婦人の直覺問題等に關しても、男は直反對に異なれる意見を樣々に持つて居る。云はゞ婦人の本性と云ふ一問題が、已に男性にとつては未解決の大事件である。それが近代の文藝に樣々の形に表はれて居る。これを婦人が何と見るか。善い解釋につけ、惡い解釋につけ、必ず其處には、婦人にとつても、非常な利益と興味とがあるものと信ずるのである。（大正元年九月）

思ひより

近年の我が小說壇で、所謂寫實の漸く饜かれんとするに當つては、一時天下騷然といふ氣味であつた。それが近來やゝ再び裁定の形勢を示しかけたと見える。從來の寫實が、言はゞ表面的な寫實であつたのに對して、今度は內面的な寫實が之れに代らうとしてゐる。內面的といつても、單に心理的といふのとは違ふ。經驗的とも名づけ得やう。譬へば初め、眼で見、耳で聞いたまゝを寫實したものが、今は一歩を進めて、眼の象、耳の音をずつと心の奧まで引き寄せて、しんみりと內的に見聞し、さて之れを寫實するといふのである。成るべくしつくりと內的經驗に接近した寫實をやらうといふのである。十分に作者の心の香ひに浸つて、しかもそれが忠實な寫實であるやうにといふのである。是れやがて眞の自然派の精神ではないか。

而して斯くの如き自然派的傾向の傍に相接して存し得べきものは、哲學的、乃至神秘的感味といふ意味に於いてのローマンチシズムではないか。我等は素直なる自然派の興隆を喜ぶと共に、之れに右の如きローマンチシズムの配色明かなるものを喜ぶ。ツルゲネフたりモーパツサンたると、は、イプセンたりハウプトマンたると、我が文壇が眞に之れに感化せられるに於いて些かも新舊優劣の差別は無い。

所謂罵評、乃至思つた事は前後左右に關せずして言つて了ふといふ　言評は、すつきりとして善い氣持に讀まれるものだ。併し若し之れに個人的の愛憎取捨が這入つて來ると、直反對に醜惡なものとなる。あらゆる方面に無頓着である所が此の種の批評の生命でなくてはならぬ。

二月の雜誌類に出た小説中では、『趣味』にある正宗白鳥氏のものが最もすぐれてゐたやうに思ふ。『塵埃』は如何にも落ちついて重みのある短篇である。落想は西洋の近世ものに比べて左して珍とするにも當たるまいが、我が作界にあつては、蓋し此の一二月にわたつての佳品である。續いては本誌に出た水野葉舟氏の作などが二月作界の傑出であらう。

閨秀作家といへば今のところ楠緒・八千代の兩女史を中心とするやうであるが、兩者ともむしろ一種の批評眼を具へてゐる點が注目に値する。後者の劇評は人の知る通りであるが、前者は之れを其の方へ向けたら鋭利な一箇の小説批評家となるべき作家ではないか。

漱石氏の『野分』に、玄關の屛風の繪を叙して、三條小鍛冶が勅の刀を「丁と打ち丁と打つ」といふ技巧を用ひ、ローマンスの響を聞かせてゐる。之れは此の作者の慣用手段らしい。我等は此の響の奥に作者が大なるローマンチツク・センチメントを持つてゐるのではないかと想像する。隨つて之れに應ずるやうな作品を見せてもらひたいと思ふ。

夜雨といふ詩人、雨情といふ詩人、前者は一縷哀怨の情に於いて、後者は其の聲調の工風に於いて、共に我等の眼を惹くやうに覺える。（四十年三月）

『人形の家』の作者ヘンリック、イブセン（Henrik Ibsen）は西暦千八百二十八年三月二十日、ノールウェーのシーンといふ小都會に生まれ、千九百六年五月二十三日、七十九歳で同國の首府クリスチアニアに死んだ。彼れの生存中三十七歳から六十三歳まで、人生の最盛期二十七年間は、本國に意を得ないでドイツ、イタリア等に飄泊の生活を送り、『ブランド』以下『ヘッダガブレル』に至る十餘篇の劇をそのあひだに作つた。彼れの著作目録は

『カチリーナ』（Catilina—1850）
『勇士の墓』（Kjaempehojem＝The Warrior's Tomb—1851）
『ノルマ、又は政治家の戀』（Norma eller en Politikers Kjaerlighed＝Norma or a Politician's Love—1851）
『聖ジョンの夜』（Sancthansnatten＝St. John's Night—1853）
『オエストラアトのインゲル夫人』（Fru Inger til Öestraat＝Lady Inger of Öestraat—1857）
『ソルハウグの饗宴』（Gildet paa Solhaug＝The Feast at Solhaug—1857）
『オラフ、リリエクランス』（Olaf Liljekrans—1857）
『ヘルゲランドの海豪』（Haermaendene paa Helgeland＝The Vikings at Helge-land—1858）
『戀の喜劇』（Kjaerlighedens Komedie＝Love's Comedy—1862）
『希望者』（Kongsemnerne—The Pretenders—1864）
『ブランド』（Brand—1866）

「ペエル、ギュント」(Peer Gynt—1867)

「青年同盟」(De Unges Forbunp=The League of Youth—1869)

「皇帝とガリリア人」(Kejser og Galiloeer=Emperor and Galilean—1873)

「社會の柱」(Samfundets Stotter=The Pillars of Society—1877.)

「人形の家」(Et Dukkehjem=A Doll's House—1879)

「幽靈」(Gengangere=Ghosts—1881)

「人民の敵」(En Folkefiende=An Enemy of the People—1882)

「鴨」(Vildanden=The Wild Duck—1884)

「ロスメルスホルム」(Rosmersholm—1886)

「海の夫人」(Fruen fra Havet=The Lahy from the Sea—1888)

「ヘッダ、ガブレル」(Hedda Gabler—1890)

「建築師」(Bygmester Solness=The Master Builder—1892)

「幼きエイヨルフ」(Lille Eyolf=Little Eyolf—1894)

「ジョン、ガブリエル、ボルクマン」(John Gabriel Borkman—1897)

「我等死者の醒むる時」(Nar Vi Dode Vagner=When We Dead Awaken—1899)

「詩集」(Digte—Poems—1870)

イブセン詩集

イブセン書簡集
イブセン演説及新書簡集
イブセン草稿集

此等の作の中でも、殊にその現代の社會を描いた劇に於て、イブセンは近代劇の父となり王となつたのである。

二

『人形の家』と言へば、誰れでもすぐ婦人問題といふ事を想ひ出す。イブセンの社會劇は多く問題劇で、『人形の家』はすなはち婦人問題を材料にした劇であるといふ。そして問題を藝術にするのが善いとか惡いとかいふ論爭がそれに伴ふ。けれども要するに此論爭は無用である。すべての劇が問題劇でなくてはならないといふ理由もなければ、一つの劇が問題劇であつてならないといふ理由もない。劇が藝術としての目的は我々の生命を衝き動かす所にある。それさへあれば、その方法となり材料となるものが社會問題であると否とは問ふところでない。『人形の家』には婦人問題が材料として用ひられてゐる、婦人の解放、婦人の獨立、婦人の自覺、男女對當の個人としての結婚、戀愛を基礎とした結婚、といふやうな問題が含まれてゐるその爲め此の劇が單なる藝術の力以外に廣く世間を刺戟したことは否まれない。エドマンド、ゴッス氏がその『イブセン傳』("Ibsen"—Edmund Gosse) の中で

『人形の家』はイブセンが始めての無條件的成功の作である。啻に世間一般の議論を惹き起した最初の作であるのみならず、その仕組及び描寫法に於て、イブセンが撓まざる現實的作家としての新理想を發揮した點で、その以前の作よりも遙に進んでゐる。アーサー、シモンズ(Arthur Symons) 君が『人形の家はイブセンの劇中傀儡をあやつる針金の用ひられなく

なつた第一の作である』と言つたのは當つてゐる。一歩を進めては、此の針金の用ひられなくなつた第一の近代劇であるとも言へる。固よりまだその後の作の如く完全の描寫法とは言へない。事件の湊合せられる距離が恐ろしく短かく、始めの幕の邊では、巧みに面白く出來てはゐるが、まだ餘程實人生の不可避性と遠ざかつてゐる。併し驚くべき最後の幕に於て、ノラが出て行く支度をして寢室から立ち出で、ヘルマーと見物とを驚倒せしめる所、悶へてゐる夫婦が卓を圍み面と向つて對決する邊に來ると、人をして始めて、劇壇に新しきもの生れたりといふ感を起こさせる。同時に所謂「うまく作つた芝居」は、俄然としてアン女王の死のやうに死んで了つた。悽愴なまでに生の力の強烈に見はれてゐることは、此最後の幕に於いて驚くばかりである。昔のめでたい終局は始めて全然拋棄せられ、人生の矛盾が少しの容赦もなく出て來た。」人形の家』が非凡の演劇であつたことをあんなに突然認められたのは珍らしい事である。ノラの『獨立宣言』は全スカンヂナヴィアに響き渡つた。人々は毎夜々々興奮して顏蒼ざめ、議論をしたり、喧嘩をしたり、喰つてかゝつたりしながら劇場を出た。

と言つてゐるのは、以て、此の劇がはじめてイブセンの本國で演ぜられた時、世間の問題を刺戟したことの如何に激烈であつたかを想見するに足る。啻にスカンヂナヴィアのみならず、歐洲の諸國にわたつて、近代の婦人問題を刺戟した最も有力なものゝ一は此の劇である。問題劇としての効果はこれで遺憾が無いと言つてよい。

けれども、唯それだけでは藝術としての特權がない。その問題なり思想なりの奥から放射してゐるものがなくては、之れと似た効果を生ずる一場の運動演說と何の區別もないことになる。藝術の力はもつと根柢から發するものでなくてはならない。そもそもそれがあればこそ、一篇の『人形の家』もあれ程の刺戟力を有し得たのである。

藝術の奥から放射してゐるものは生命の光りであり、生命の熱である。藝術は生命の沸騰そのものである。

生命の沸騰はその個人の全人格に震動を與へて、そこに思想感情の深い覺醒を生ずる。殆ど思想であるか感情であるか分からないほど深奥の心持を經驗する。假りに之れを說明して言へば「人生を如何にすべき」「我が生を如何にすべき」といふやうな、もだ／＼しい心持である。此の心持の中には、社會問題でなく、人生問題が包まれてゐる。人生觀の思想が暗示せられてゐる。すべての近代藝術は、此の意味に於いて思想藝術であり、問題藝術である。『人形の家』も先づ此の意味に於いて問題劇でなくてはならない。イブセンが千八百九十五年五月二十六日クリスチアニアのノールウェー女權同盟の祝賀會で爲た演說に

『私は女權同盟の會員ではありません。私の書いたものには一として主張を廣めるためと意識して書いたものはありません私は世間の人が一般に信じやうとしてゐるより多く詩人で、より少く社會哲學者であります。皆さんの祝杯に對しては感謝いたしますが、ことさらに女權運動のために働いたものとしての名譽をば辭退するほかございません。私は一體女權運動のいかなるものであるかをすら、實際十分に明かにして居りません。私は之れを廣く人間の問題であると見ました。注意して私の著述をお讀み下すつたら、この意味が分かるだらうと思ひます。固より女權問題も、他の諸問題と同じく、之れが解決は望ましいことでありますが、併しそれが目的の全部ではありません。私の仕事は「人間の描寫」といふことでありました。勿論、斯ういふ描寫が合理的に眞實だと思はれると、讀者は自分の感情や氣持をその詩人の作中に挿入してそれ等がみんな詩人のものであつた事になりますが、併しそれは間違ひです。すべて讀者は皆てんでんの人格に從つて、その作を非常に美しい、綺麗なものに作りかへて了ひます。啻に作者ばかりでなく、讀者もまた詩人なのでありまして、彼等は作家の助手であり、時としては詩人みづからよりも一層詩的なのであります。（下略）』

と言つたのは、その「人間の描寫」といふことで、人生問題を暗示する意味を述べたものと見られる。けれどもそれと同時

に、婦人問題を婦人問題として材料に用ふることも、初めからのイブセンの計畫であつたことは明かである。千八百七十九年すなはち此の劇の出來る年の七月、ローマからゴッス氏に宛てて送つた手紙に

「小生は去る九月から家族と共に此地に居ります、そして大部分の時間は新に作りかけてゐる劇のことで塞いでゐます、もう間もなく出來上つて、十月には出版の運びになりませう。眞面目な劇で、近代の家庭狀態、殊に結婚とからんだ諸問題を取り扱ふ、本當の家庭劇です」

と書いてある。たゞこんな結婚問題、家庭問題、婦人問題を透して、その上に一段奥深い人生問題の氣持を加へたものと見ればよい。

この種の思想なり問題なりは、藝術の中の粘着性となり眞實性となつて殘留する。普通の娯樂的藝術には此の粘着性と眞實性とが無い。感興藝術、情緒の遊戯、感情發散機關、これらの意味を有する娯樂的藝術と眞の藝術との間には、踰ゆべからざる類の相違がある。

（三）

『人形の家』の骨子となつてゐる落想は、早く十年前すなはち千八百六十九年の彼れの作『青年同盟』に見はれてゐる。傳記家イェーゲル氏は更に之れをその前の作『ペール、ギュント』に求めて、ヘルマーがノラに對する利己的性質は、ペール、ギュントがアニトラの愛に對する心持と同じであるとしてゐる（"Henrik Ibsen"—Jaeger）が、併し中心人物たるノラの方から見た、婦人問題としての端緒はこゝに無い。やはり之れを『青年同盟』に尋ぬべきである。すなはちその第三幕の終りで、セルマが夫のエーリック及びその父と別れて家を出るところに

「ほんとうにまあ、私はあなたがたから殘酷な目にあつてゐました！あなたがみんな、――卑怯な！私はいつも貰ふことばかりで、――ついぞあげることがない。あなたがたの中にまじつた物貰ひのやうでした。私のところへ來て犧牲を出せとお求めなすつたことは一度もない。私は何をする事も出來ないものになつてゐました。私はあなたがたがいやになりました！あなたがたが憎くなりました！」

といふのはノラが「あなたは少しも私といふものを理解してゐらつしやらなかつたでせう？私は今まで大變不法な取扱を受けて居りました、第一は父からですし、その次はあなたからですよ」といふのと同じである。またゼルマが

「どんなにか私はあなたがたの苦勞や心配をたゞ一滴でもいゝから分けて貰ひたいと思つたでせう！けれどもそれを私が頼むと、あなたは笑つてお了ひなさる。私は人形のやうにくるみ上げて、兒供と遊ぶやうに私とお遊びなすつた。あゝ、私どんなにかあなたと苦勞を一緒にしたいと騷いたでせう！どんなにか此の世の廣い、高い、强い事もしたいと、一生懸命念がけたでせう！（下略）」

といふのはノラが『私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです。それから兒供がまた順に私の人形になりました。そして私が兒供と一緒に遊んでやれば喜ぶのと同じやうに、あなたが私と遊んで下されば面白かつたに違ひありません』といふ臺辭の前身と見るべく『人形の家』一篇の根原となつたものである。『青年同盟』の是等の句を讀んだブランデス（George Brandes）氏はイブセンにすゝめて、之れを展開すれば別に立派な大作が出來ると言つたと傳へられてゐる。併し直接此の作を刺戟した動機に關してゴッス氏の傳は斯ういつてゐる。

「一般に信ぜられてゐる所によると、千八百七十九年四月、イブセンはデンマルクの法廷におこつた一事件で、ジーランドの或る小さい町の、若い結婚した婦人がやつた事の話を聞かされた、それが彼れの心を新劇の計畫に引きつけたのである」

恐らくこの二つはどちらもあつたのであらう。

（四）

それから今一つはフランスの作家ヴィリエール、ド、リール、アダンが千八百七十年に作つた一幕劇で『謀叛』（"La Revolte" —Vijlers de L' Isle Adam）と題するものである。フェリックスとエリザベットと、夫婦きりの劇で、エリザベットは夫の打算的な性向に堪え得ずして、終に家を棄て去るが、併し間もなく歸つて來て、結末はめでたく收まる。その中に下のやうなエリザベットの臺詞がある。

「分らない人ね、私は生きたいのですよ。誰れだつて生を樂みたいと思ふのが當然だとは思ひませんか？私、玆にゐると息がつまるやうですよ、もつと眞劍な事がほしいのですよ、廣い天の空氣が吸ひたいのですよ？あなたのお札が墓場へ持つて行けますか？どのくらゐ私たちは生きられるものだとお思ひなすつて？（間を置いて、考へ込んで）生きる？——私、生きたいとさへ思ふか知ら？戀人！あなたさうおつしやつてね。お氣の毒さま、違ひます！戀人なんか私にはありませんこの後だつて決して持ちません。私は夫を愛するやうになつてゐました——御覽なさい——そして私が夫から求めたものは、ちらりとでもいゝから、人間の同情でして。それが今ではもう消えて了つて、愛の誇りなんか私の血管の中で氷りついてゐます。あなたは私が何も知らないで、氣を揉んでゐる間に、私の氣ちがひじみた嬉しさで永久にと思つて捧げるものを、塵芥のやうにひつたくつてお了ひなすつたのね。（下略）」

そして彼の女が義務として爲すべき事をした結果はどうかといふと、たゞ彼の女の若さは亡ぼされ、彼の女の美しさは消え貴い夕べは簿記帳によつて汚されたに過ぎない。彼の女はもう玆に殘つてその義務を果たす力を失つて了つた。是れから少

しの自由を樂まなくてはならない。廣い地平線を見なくてはならない。それが爲に彼の女はとう〳〵夫と子供を跡にして出て行つた。取り殘されたフェリックスは絶望して卒倒する。けれども次の場でエリザベットは夜明がたに歸つて來てゐる。

「もう遲かつた！――私にはもう氣力がなくなつてゐる。馬車の窓から夜の暗い中を覗いたとき、自由はいくら欲しくても私の心は沈んで了つて、漂泊者といふ冷い感じが身に泌みて來た。鉛の鎖で繋がれたやうな氣持（中略）何處へ行つていゝか分からなくなつて、冷たい朝の空氣に顫えて、私は歸つて來た（下略）」

といふとフェリックスは「御覽、私だつてつまりそんなに獸ではない」と言つて妻の手に接吻する。エリザベットはそれをじつと見おろして、悲しげに、「氣の毒な人？」といふのが終りである。妻が家を出る前後の樣子や、そのあとでの夫の樣子などまで『人形の家』のノラとヘルマーとの場合に、どこか似た所のあるのは事實である。けれどもイブセンが『人形の家』を書くとき『謀叛』を讀んでゐたか否かは知る由がないから、『人形の家』を『謀叛』から脱化し、若しくは『謀叛』に似せたものだとは言へない。證據のない限りは無關係なもの、暗合したものと見て置くのが至當である。イブセンが、つい十年前に出た他人の作の外形を模倣する人とも思へないし、落想はすでに『謀叛』よりも早い自作の『靑年同盟』に明かにその端緒を見せてゐるのである。且つ『謀叛』は劇としての價値も到底『人形の家』に及ばない。その滑かな饒舌の臭を帶びた臺詞も古いし、感情の誇張、粗大な所も古い。やはりイブセン以前の物といふ感じを免れない。劇の結末は兩者全く相違してゐるのは言ふまでもないが、『謀叛』の結末は、『人形の家』のノラが家を出たきりでその後何うなるであらうかといふ問題をあとに殘してゐるのに比して、答を與へた趣がある。けれどもそれは、エリザベットが悟りが開いて滿足して歸つて來たのでなく、たゞ自分にはもう解決の氣力が無くなつたといつて悲しく歸つて來たのであるから、實は答でなくして、問題はそのまゝ殘つてゐるのである。

（五）

それに比べれば、イブセンが通俗趣味に強要せられて結末を變更した、有名な改作の『人形の家』では、親子の愛といふもので解決を與へて、問題を問題としないうちに揉み消して了つた。今その改作された結末を譯載すると、本書二三六頁の四行目以下が次のやうに變はる。

ノラ　二人の仲が本當の結婚にならなくてはなりません。左樣なら！

ヘルマー　しかたがない——行け！（ノラの手を把つて）併しその前に子供にあつて暇乞をしなくちやいけない！

ノア　放して下さい！私、子供にはあひませんよ！つらくてあへないのですもの。

ヘルマー　（左手の戸の方にノラを押しやり）あはなくちやいけない！（戸を明けて靜かに云ふ）あれを御覽、子供等は何も知らないで、すや〳〵眠つてゐる。明日目をさまして、母の跡を慕ふ、その時はもう——母なし子。

ノ　ラ　（顫へながら）母なし子！

ヘルマー　ちやうどお前もさうであつた。

ノ　ラ　母なし子！（堪えかねて旅行鞄を落とし）あゝ、私、自分にはすまないけれど、このまゝ振りすてゝは行かれない（戸の前に半ば體を沈める）

ヘルマー　（喜ぶ、優しい聲で）ノラ！

斯ういふ改作が原文の精神を破壞して淺薄なものにして了ふことは云ふまでもない。であるから、イブセンは已むを得ずして書いた此の改作に關し、次のやうな手紙をヴィンの一劇場監督者ハインリヒ、ラウベ（Heinrich Laube）に送つた。

千八百八十年二月十八日、ミュンヘンにて

拜啓――小生の近作『人形の家』が令名ある貴下の監督の下に「ヴィイン市劇場」にて開演せられ候由承り大悅罷在り候貴下はこの劇がその結末の彼れが如くなる故を以て正當に所謂「劇」の法則に合ひたるものに非ずとの御意見の由、併しながら、貴下は眞に法則といふが如きものに多くの價値を置かれ候哉。小生の考にては、劇の法則は如何やうにも變せられ得べく、法則をして文藝上の事實にこそ從はしむべけれど、逆に文藝をして法則に從はしむべきものに非ずと信じ候。此の劇が現在のまゝの結末にてストックホルムに於いても、クリスチアニアに於いても、コーペンヘーゲンに於いても、殆ど空前の成功を收めたるに徴して、此の理は明かと存じ候。結末を變更したる作は、小生が之れを必要と認めたるがためには無之、たゞ北ドイツの一劇場監督者と、同地方の巡廻興行にてノラに扮する一女優との求めに由りたるものに候。右改作の寫し一部こゝに御送附申上候。御覽の上、かゝるものを用ふるは徒らにこの作の効果を弱むるに過ぎざることを御了知下されたく、希望の至に御座候。小生は貴下が必ずこの劇を原形のまゝにて御演出下され候ことと信じて疑はず候。

頓首。

尙こんな改作をせざるを得なかつた事情に就いては、デンマルクの『ナチヨナール、チデンデ』紙に寄せた、次のやうな書簡がある。

千八百八十年二月十七日、ミュンヘンにて

記者足下――尊敬する貴紙第千三百六十號に於て拜見せしフレンスブルグよりの一書面によれば、『人形の家』(ドイツにては『ノラ』)は彼の地にて劇の結末を變更して演ぜられ、その變更は明に小生の言ひつけにて爲されたるものと有之候。此の末文は事實に無之候。『ノラ』の發行せられて間もなく、之れが飜譯者にしてまた北ドイツの諸劇場に對する小生の事務

監督者たるベルリンのヴォルヘルム、ランゲ（Wilhelm Lange）氏より書面まゐり、それによれば、此の劇の結末を變更したる一翻案が發行せらるゝの恐れあり、されば、北ドイツの諸劇場中には多分その方を選びて興行するものあるに至るべしとの事に候ひき。

斯かる出來事を防がんため、小生は絶對的に必要なる場合を慮り、結末の場を變更したるものをランゲ氏まで送附いたし候。即ちノラは家を去らずして、無理にヘルマーに連れられ、子供等の室の前に來たり、ちよつとしたる臺詞ありて、戸のところにくづおるゝ、幕下る、といふ場面に御座候。

此の變更は、小生みづから、翻譯者まで書面にて申遣はし候通り、この劇に對する『野蠻なる暴行』として呪ひ居り候。この改作の場面を用ふるは全然小生の意志に背きたるものに御座候。ドイツ劇場の多くは之れを用ひざるべしと信じ候。ドイツとスカンジネヴィアとの間に文學上の便宜の存せざる限り、我々スカンヂネヴィアの作家は當國の法律の保護を受くる能はず、ドイツの作家のスカンヂネヴィアに於けるも亦た同樣に御座候。從つて小生等の劇は、ドイツに於いては、翻譯者、劇場支配人、舞臺監督者及び小劇場の俳優等が暴行に委せられ居り候。小生の作が此の危險に瀕する場合には、小生は經驗の教ゆる所により、暴行を小生みづから行ひて、以て一層注意未熟なる人々の手に取扱はれ翻案せらるゝことを避け申候。頓首。

當時ドイツでは一般にノラが家を去るのを批難してゐた爲に斯やうな事が起こつたのである。

（六）

『人形の家』の結末に對する世間の批難は、多く「いくら自分の教育の爲だつて、妻が夫を棄てゝ家を出る法はない、殊に子

供を棄てゝ出られるものではない、出た後のノラはどうするのだらう」といふのであつた。そこで、イブセンみづからの右の改竄をはじめとし、世間にも此の通俗的な要求を充たすために種々の作が『人形の家』を種にして現はれた。『後の人形の家』ともいふべき種類のものである。その一は千八百九十年の『英國繪入雜誌』("English Illustrated Magazine")に出たウォルター、ビザントの『人形の家――及其後』(,,The Doll's House—and After"—Sir Walter Besant)で、それによるとノラの娘とクログスタッドの伜とが大きくなつて結婚約束をする。ヘルマーはノラの去つた後亂酒漢になつて了ふ。クログスタッドは伜のこの結婚が不賛成で、ノラの娘の兄弟が書いた僞證で娘を恐喝し、娘はその爲に水に身を投げる。

またアメリカのイドナ、ダウ、チーニー夫人といふ女子参政權論者の女作家は、少しおくれて『ノラの歸參、ヘンリック、イブセンの人形の家の後日談』("Nora's Rete.urne: a sequela to The Doll's House' of Henrik Ibsen"—Mrs. Edna Dow Cheney)と題する小冊子を著はした。之れでは、ノラは、家を出た後看護婦として教育せられ、コレラの流行に際してヘルマーがそれに罹つたのを看護するため、身分を隱して昔の自分の家に雇はれ、再び彼れの命を救つてやる。病氣が恢復しかけたとき、ヘルマーは看護婦姿のノラをそれと心づき、こゝにめでたく仲なほりして夫婦元どほりになるといふ筋であるといふ。

その他『人形の家』を滑稽の材料にしたパロデーの類では、千八百九十三年に出來た『ポンチ氏の袖珍イブセン』("MR Punch's Pocket Ibsen"—F. Anstey)が最も有名で『人形の家』のほかに『ロスメルスホルム』『ヘッダ、ガブレル』『鴨』『建築師』等の作りかへをも加へてある。

(七)

是等は要するに眞面目に論ずべきものでないが、「妻として夫や子供を棄てる法はない」といふ批難に對して、イブセンが作

の上で一種の答辯を與へたものと評せられるのは、『人形の家』に續いて出た『幽靈』である。『幽靈』ではアルヴィング夫人が、放埒な夫を棄て子供を棄てゝ家を出やうとしたが、思ひ直して家に留り、家庭の罪惡を子供にも世間にも知らせないやうに一身を犧牲にして之を糊塗してゐた。けれども最後になつて、愛子オスワルドは父の放蕩の報ひを受けて無殘の死を遂げ、一家悲慘の運命に終る。ノラもあの時決心を飜して家に留まつたとしても、それが決して幸福を齎らす所以ではない。といふ意味を此作に求めやうとするのである。

またノラとヘルマーと、對當の自覺ある個人として結婚したのでないやうな場合に、結局どうすればよいか。この問題に、イブセンが一の解釋を與へたものと言はれる作は、『海の夫人』である。此の劇では、エリーダが同じく不當の結婚を自覺しそれから脫して自由な神秘な海の情人の方へ引つけられやうとする。已むを得ずして、夫ワングルは、それでは自由にしてやるから、一切の責任をエリーダ一人で負うて進退を決せよといふ。自己を許され、責任を負はされて見ると、はじめて夫の家を去るのが自分の本望でないことが分かり、獨立した一個人として改めて夫や先妻の子供等と愛を誓ふ。先づ獨立した自由な一個人になる、その上で本とうの愛が成りたつたら、そこに本とうの結婚も成り立つ、といふのがその解釋である。

こんな風に、婦人の自覺問題、解放問題、結婚問題として殆ど論文を讀むやうな態度で此等の作に對するのがイブセンの本意でないことは前に言つた通りであるが、それと同時に、その奧から放射してゐる人間の光り、生命の熱ともいふべき力が此等の問題と切り放ち難い關係を持つてゐることも明かである。此の點からいへば、『人形の家』『幽靈』『海の夫人』の三作は、相通じて一の哲學を成すとも見られる。

（八）

イプセンの死後、千九百九年に彼れの作の草稿が公にせられた。その中に『人形の家』もある。今その最後の草稿と思はれるものと完成した『人形の家』とを比較して見ると、種々の點に興味がある。その草稿は『近代悲劇稿』と題し、千八百七十八年十月十九日、ローマにてとして、まづ下のやうな着想が書いてある。

精神上の法則に二種ある、二種の良心である、一は男子に、他の全く異なつた一は女子に。男子と女子とは互に理解しないで實際の生活では、女子は男子の法則で判定せられる、恰も女でなくて男でゞもあるやうに。

この劇中の妻君は何が正で何が邪であるかの觀念を有しないで終る。一方には自然の感情、一方には權威に對する信念が、全然彼の女を歸趨に迷はしめる。今日の社會では女子は女子たることが出來ない、今日の社會は全然男性の社會で、法律は男が……、男性の見地から女性の行爲を判定する裁判組織になつてゐる。

彼の女は僞署をした、そしてそれを誇りとしてゐる。夫に對する愛から、夫の生命を救ふためにした事だからである。所がこの夫は平凡な名譽主義から法律と同じ立場に立つて、男性の眼からこの問題を取扱ふ。

精神上の葛藤。權威に對する信念に壓せられ眩惑せられて、彼の女は子供を養育する道德上の權利と能力との確信を失ふ。苦惱。近代の社會では母は或種の昆蟲のやうに、種の繁殖の義務を果たすと、去つて死んで了ふ。生の愛、家庭の愛、夫や子供や家族の愛。そこゝに女らしい思想の破綻。心配と恐怖の突然の回歸。すべてそれを彼の女ひとりで持ちこたへなくてはならない。大破裂が必然、不可避的に近づいて來る。絶望、煩悶及び破壞。

大體これだけの着想から。漸次それに具體的な形を與へて行つたものと見える。この着想の次には人物を列記して

シュテンボルグ。書記官。

ノラ。その妻。

リンド嬢(夫人)。(未亡人)。
辯護士クログスタッド。
カレン。シュテンボルグ家の乳母。
シュテンボルグ家の女中一人
使の男一人
シュテンボルグ家の三人の子供
醫師ハンク

これで見ると主人公のヘルマーといふ名はまだこの腹案には出てゐない。却つて領事の名が主人公の名になつてゐる。筋書及草案のそれが第三幕からヘルマーといふ名に變つてゐる、リンデン夫人もリンドといふ名で、夫人だか、未亡人だか、娘だかまだ定まつてゐない。醫師ランクは醫師ハンクとなつてゐて、草案の第二幕からランクとなつてゐる。そこで此の人名の次に三幕に分けた略筋があり、それから本文の草案になつてゐるのであるが、略筋によると、第一幕では、重大な色どりになる醫師ランクがまだ出て來ないで、第二幕から出て來る。草案ではもう第一幕から現はれる。またノラがパン菓子を喰ふことは略筋にも草案にも無い。從つて此の劇の第一幕で最も輕快な味のある場面、ノラがリンデン夫人とランクを相手に『ランク先生、パン菓子を召し上りませんか』とその口に菓子を入れてやる邊から、『馬鹿つ！と言つたらどんなにいゝ氣持でせう？』の所などが草案にはまだ全く缺けてゐる。

また『人形の家』の色彩の中心になつてゐるタランテラ踊（タランテラ踊はイタリアの毒蜘蛛タランチュラに刺されたものが、筋肉の痙攣を起こして舞踏するやうな樣子をして苦しむところから、その形に似た踊の名となつたものだと言ひ傳へられてゐる）のことは、略筋にも草案にも全く出てゐない。完成本に始めて現はれて來る。從つて第二幕の如きは、殆どすべて完成本で見るやうな面白い場面を逸してゐる。結末、ノラが狂亂的にタランテラを踊つてヘルマーを引とめる所は、その代りに、ピアノをひいて『ペール、ギュント』の中にあるアニトラの歌を唄つたり踊つたりするが、ランクとの對話でノラが踊りの衣裳を見せたり、絹の靴下でランクを打つたりする微妙な所はあり得ない。のみならずランクがノラに對して自分の心を打明ける前後から、ノラが『私にさう言つて下すつたのが惡いんです。おつしやる必要は無かつたのでせう？』といふ臺詞の邊、此の劇の挿話として最も趣味の深い一節が草案ではまだ殆ど出來てゐない。

第三幕は草案と完成本と甚しく違つてゐない。こゝはノラをして婦人の自覺、解放を說かしめる所であるから、問題劇としては一篇の骨子にあたり、イブセンも恐く初から動かすべからざる腹案を持つてゐて書いたのであらうと思はれる。それでも所々肝要のところに、草案から完成本へと改善せられて行つた跡が見える。領事シュテンボルグの假裝舞踏會といふのもなくタランテラ踊もないから、ノラは夜會服を着た丈けで、夫婦は子供の會へ行く。あのじみな家の中に花やかな踊子姿をしたノラが出て來てこそ、後の大破裂の場面との色どりもおもしろいのであるが、草案ではまだその考がついてゐなかつたまた。ランクが『此の次の假裝會には、見えないものにならうと思ふ』といふやうなよい場面も出來てゐない。

愈最後にノラとヘルマーとが對決するところ以下は、上にも言つた如く大體に於いて草案と完成本と同一であるが、例へばノラが『お許し下すつてありがたうございます』と言つて別室に這入り『人形の衣裳をぬぐのですよ』といふ所は、その『人形の衣裳をぬぐ』といふ事に全篇の意味と響應する象徴的な味があるのを、草案ではまだ『氣を落ちつけなくちやなりませ

ん、ちよつとの間』と極めて無意味に言はせてある。またヘルマーが『幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犧牲には供しない』といふのに對して『それを何百萬といふ女は犧牲に供してゐます』といふノラの言葉は、男子の爲に犧牲となることを甘んじてゐた古今幾百萬の婦人に代つて發した、女子の公憤の叫びだと稱せられたるが、草案ではたゞヘルマーが『おゝ、ノラ、ノラ！』といふとノラが『それでどうなつたかといふと、お禮一つおつしやるぢやなし、愛の言葉一つ聞くぢやなし私を救つて下さる考なんか糸すぢほどもありはしない。たゞ叱り廻して――私の父まで嘲弄して――ちいほけな事にびく〳〵して犧牲になつてどうすることも出來ないでゐるものを、むごたらしく罵り立てゝ』と正面から喧嘩口調で述べてゐる。之れを完成本の言葉に比べて、品位、含蓄の上に非常な差のあることは言を須たない。

斯んな風にして、着想から略筋、略筋から草案、それから完成した今日の『人形の家』と漸次精練せられたのが、草稿に見えた千八百七十八年十月といふ日附からでも一年の餘で、いよ〳〵書物となつて始めて現はれたのは翌千八百七十九年十二月四日、コーペーヘーゲンでである。

（十）

『人形の家』が初めて演ぜられたのは、デンマルクのコーペンヘーゲンにある皇室座で、千八百七十九年十二月二十一日のことである。ノラを勤めたのがベッチー、ヘンニングス(Fru Betty Hennings)といふ女優で、之れが世界に於ける、この有名なノラ役者の最初の人である。ヘルマーに扮したのはエミール、ポウルゼン (Herr Emil Poulsen)であつた。スキーデンのストックホルムでは翌千八百八十年一月八日戯曲座で開演し、ノールウェーのクリスチアニアでは同月二十日クリスチアニア座で開演した。スカンヂネヴィア以外では、ドイツのフレンスブルグで千八百八十年二月に初めて演ぜられ、ミュンヘンでは同年三

月三日レシデンツ座で演ぜられた。此のミュンヘンの興行に、初めてイブセンみづからも行つて見て二幕目の終りで幕外に立つて喝采を受けたが、三幕目の終りでは見物の方から烈しい反對論が起こつたといふ。またこの興行の際、イブセンは殆ど稽古毎に出席し、公演の後すべての俳優に温情を以て感謝したから、屹度申分のない演出だと思つたのであらうと信じてゐると、後日イブセンが知人に語つた所はさうでなかつた。俳優の或者は充分その役柄を理解してゐない、部屋の壁紙の色が望み通りの氣分を出してゐなかつた、ノラの手が適當な形をしてゐなかつたといふやうな不滿足な點を擧げてゐたといふ。尙同年中にドイツのハムブルヒ、ドレスデン、ハノーヴェル、ベルリン等でこの劇か演ぜられ、それでノラを演じたヘドヴィヒニーマン、ラアベ (Frau Hedwig Niemann-Raabe)は、ベルリンのドイツ座にゐたアグネス、ゾルマ(Frau Agnes Sorma)に先だつて、ドイツに於ける最代表的なノラの女優となつた。

ヴィインでは千八百八十一年九月はじめて演ぜられた。ロシアでは有名な女優モッヂェスカ(Madame Modjeska)に依て千八百八十一年十一月ペテルスブルグで、又翌年ポーランドのウォルソウで初めて演ぜられた。バンガリーのブダペストは千八百八十九年初演、オランダのアムステルダムでも同年初演、ベルギーのブリュッセルでも同年初演、但しこれがフランス語で演ぜられた最初で、結末はめでたい方に變更せられてゐた。パリーで『人形の家』が公演せられたのは、ずつと後れて千八百九十四年四月二十日、ジムナーズで、女優レジャーン (Mme. Réjane) のノラのときが初めてゞある。イタリアでは女優デューゼ(Eleonora Duse)が之れを演ずるやうになつた前、千八百八十九年チューリン市で初めて演ぜられ、セルヴィアでも同年にベルグレード市で初めて演ぜられた。

イギリスでは千八百八十四年三月三日ロンドンの王子座ではじめて『人形の家』の飜案が演ぜられた。是れは『蝶潰し』と題する三幕もので、かの有名な喜劇作者ジョーンスと、ハーマンといふ物語作者との合作であつた ("Breaking a Butterfly" by

Henry A. Jones and H. Herman, founded on Ibsen's 'Norah'')であつた。その、つまらないものであつたことは言ふまでもない。その次が翌千八百八十五年三月、ロンドンの一素人劇クラブの催しで、初めて原作のまゝを私演したが、併し之れはあまり眞面目なものでも、注意するほどのものでもなかつたといふ。イギリスに於ける眞の『人形の家』の初演は、ずつとおくれて千八百八十九年、アーチャー（W.lliam Archer）氏の飜譯が出來てからである。

アメリカの方はイギリスよりも早く、千八百八十三年十二月、かの女優モッヂェスカによつて、ケンタッキー州ルイズヴォルで始めてノラをトラ（"Thora"）といふ題に變へて演じた。その結末はめでたく收まるやうに出來てゐたと傳へられるが、ドイツで用ひたものに基いたのか、それとも別の脚色を加へたのかは、明かでない。

『人形の家』の英語に譯せられた初めは、原作の出た翌千八百八十年で、コーペンヘーゲンのヴェーベル（T. Weber）といふ人によつて『ノラ』と題して飜譯せられた。併し此の譯者は英語の力の足りない人であつたため、頗るまづいものであつたといふ。次に出た飜譯は千八百八十二年イギリスのロード（Miss H. F. Lord）といふ婦人が同じく『ノラ』といふ題で譯したものである。イブセンを大膽なる女權論者として見た序文がついてゐる。次はモッヂェスカがアメリカの興行に用ひたもので、女優の夫や書記や其他の人々相寄つて譯したものであるといふ。

アーチャー氏の典據的な飜譯が出たのは千八百八十九年で、同年六月七日から二十九日までロンドンの新奇座で女優エチャーチの一座で演じた、その臺本の紀念出版である。このとき初めて英語で『エ、ドールス、ハウス』即ち『人形の家』と題せられた。併しもつと原名に忠實にするためには『エ、ドール、ホーム』（"A Doll Home"）即ち『人形家庭』とすべきであつたと『イブセン演說及新書簡集』の編者キルドール（Arne Kildal）氏は言つてゐる。とにかく此の譯で『人形の家』の定本が出來たと共に、舞臺に演ぜられた者としても、初てイブセン劇の完全に近い者がイギリスに見られることゝなつた。此興行の重

なる役割は下の如くであつた。

ヘルマー……………ハーバート・ウェヤリング (Herbert Waring)
ノラ……………ジェネット・エチャーチ (Miss Janet Achurch)
ランク……………チャールス、チャーリントン (Charles Charrington)
クログスタッド……ロイス、カールトン (Royce Carlton)
リンデン夫人……………ジャートルード、ウォーデン (Mrs. Gertrude Warden)

此の劇の第一夜で、イブセンは初めて眞にイギリスにその文名を樹てたと稱せられる。エチャーチはシェークスピア劇を演じても有名な女優であつた。而してこの一座は、この興行を打上げると、すぐオーストラリアに航することゝなつて、オーストラリア、ニウジーランド、印度、エジプトと『人形の家』を演じて回つた。

以上の順序で、出版後十年前後のあひだに『人形の家』は歐米全土に廣まつて以て今日に及んだ。日本では明治三十四年高安月郊氏がはじめて之れを譯した。今玆に公にする譯本は、一旦明治四十三年一月の『早稻田文學』に掲げられたものに小訂正を加へたのである。此の譯はアーチャー氏の英譯とランゲ氏の獨譯とを基とした。

隨筆

對墓庵漫筆

個人の寂寞、勝利の悲哀

我が評論壇に個人主義、本能主義が喧傳せられてから、もう幾年かになる。其の間にいはゆる宗教的傾向も現はれて來た。而して綱島梁川氏の見神の說、伊藤證信氏の無我愛の教などは此の傾向の一頂點に戴いた冠の如きものであつた。いかにも見神の說や無我愛の教には、一種寂しいながらも溫かな、光明、平和の氣が含まれてゐる。理は說くを須ゐない、たゞ此の氣脈手障りが我等をしてやがて宗教的といふ味を感ぜしむる所以である。併しながら、一般の思想界、少なくとも個人主義、本能主義に今さらの如く胸を騷がした社會から言へば、其の個人主義、本能主義といふ理由からして直ちに宗教的感味に醉ひ到らんことは、餘りに飛躍に過ぎてゐる。

思ふに、今の宗教的傾向が直ちに前の個人主義、本能主義から連續若しくは反動せられて起こつた現象であると見るのは、僻論である。よし少數の此の如き事例はあり得るとするも、それが大勢では無いと察せられる。今の宗教的傾向には、

もつと違つた、恐らく本能主義、個人主義よりも古い、廣い源因が我が邦に存してゐたのであらう。

個人主義、本能主義の要求が、道德といふものゝ存立してゐる限り、現在の社會に饜飽せらるべきものでないとすれば、そこに煩悶が起こる。此の如き煩悶の內容は不平、怨嗟、破壞である。

また或る程度に於いては、一時的、一局部的に個人本位、本能滿足の要求が折伏なくして成就せられるとすれば、そこには征服の喜び、勝利の誇り、自大の意識に伴ふ快感があり得る。

以上二面の現象の如きは、最も著明なる個人主義、本能主義の次の階段として起こり來たる結果である。併し吾人が茲に說かんとする題目は更に其の次の階段の出來事である。極端なる個人主義が動搖して終に宗敎的結果に到達する前には、更に一段の曲折を要すること、多數者の上に見るべき心理的事實と信ずる。

斯くの如くして個人的傾向と宗敎的向傾との中間には尙ほ複雜なる過程を要する。此の過程を眞に踏み了へた後でなければ、前者の傾向と、後者の傾向とは確乎として相接し相移るものではあるまい。而して吾人は實に此の中間の過程に盡きざる文藝の源を見出だすと考へるものである。

個人主義、本能主義の結果は或は怨嗟不平の煩悶となり、或は征服自大の喜びとなる。されども斯やうな境地にある社會が、一躍して眞に光明平和を想望すべき宗敎的境地に突入し得べしと思ふのは、餘りに粗大の考である。怨嗟不平の煩悶、征服自大の喜び、其の孰れかに脚を立てゝゐる今の社會が、進んで宗敎的光明に接せんとする前には、是非とも一たび闇黑の水を潛らざるを得ない。闇黑の水とは實に、怨嗟、不平、征服、自大の情を恣にするの底より、寂然として湧き上るべき一道の悲哀感の謂である。此の悲哀の泉に掘り到つたものにして、始めて個人主義、本能主義の之く所を極めたものではない

か、眞に精神上より此等の思想を閲歴したものではあるまいか。

吾人が文藝の不盡の源といつたのは、此の悲哀の泉に汲むの意である。此の點から言へば、個人主義、本能主義の如きは、人世ある限り、窮極のものに非ずして發足のものである。結果成就の眼を以て見るべきものではない。之れを現當至極の主義の如く唱說するの徒は、事物を時間的に見ることの出來ないものであらう。

個人主義、本能主義の核心には悲哀、寂寞、荒涼の調を藏すること斯くの如しとすれば、純なる宗教の力は此の點から働き始めるのである。我等は此點に達して、始めて仰いで宗教に賴らんとするの情を發する。此の悲哀、寂寞、荒涼を轉じて平和となし、光明となすものは、宗教と名づくる一團の現象の外にあり得まいと思はれる。

文藝は却つて此の悲哀、寂寞、荒涼を誘ふものである、光明平和を生命とせずして、悲哀、寂寞を生命とするものである。我等が本能自然の途を追うて往くとき、人生の如何に悲哀、寂寞なるかを感ぜしめるのが文藝の壇場ではないか。個人主義に根ざした近代の文藝が、其の裡に一種の黑く底光りのする、冷たい手障りを有して、解脱感を人に與へるよりも、寧ろ益々人生を心細いものにして見せるといふ氣味であることなど、前段の理を證するものと見られやう。

之れを要するに、今は既に個人主義、本能主義の歡喜を說くべき時でないと共に、之れが解脫を說くのも容易の業ではあるまい、今はむしろ之が悲哀、寂寞を說くべき時ではないか。而して是れ正に一代の思想が最も文藝に利するの秋ではないか。

先頃德富蘆花氏の『黑潮』と題する雜誌に、「勝利の悲哀」といふことを論じてあつた。捉らへ得て好題目といふべきであらう。吾人は前述の理由からして、此の語に甚深の意味あることを覺える。論者が同じく年末に出した著書『順禮紀行』よ

りも。此の一文、若しくは此の一句に遙に多くの感味があると思ふ。たゞ論者は之れを宗教家、經世家の態度から言つた。吾人は之れを文藝と相關せしめて其の妙を見る。

又蘆花氏は之れを日露戰爭の後と相聯せしめて論じた。戰勝の誇りに歡喜してゐるものをして、其の底の悲哀を感ぜしめんといふ。古くは熊谷蓮生坊の昔から、近くは兒玉源太郎の逸話に及ぶまで、げにも戰勝の血に塗れた手を解いて悲哀の珠數をつまぐる自然の人情には、眞理がある。併しながら吾人は寧ろ根本に於いて異なる意見を持してゐる。日露戰後、戰勝の歡喜に眩惑して宗教的理想の境と益々相遠ざからんとするが如き人々は、初めから戰勝の悲哀といふが如き精神的福音に耳を傾け得るものとも覺えぬ。また國家といふ傳來の生存形式を保持するを以て任務とする彼等に取つては、是の如きは、聽て難きを人に強ゆるものとも思はれやう。

然らば現代の精神文明と浮沈を共にし得る階級の人々に向つて之れを唱へるものとせんか。斯やうなる階級の人々は、恐らく論者の考ふるが如く甚しく日露戰爭の結果によつて其精神を支配せられてはゐまいと思はれる。此の政治史上の大變事に對する、我が精神界、思想界の感覺はむしろ遲鈍に過ぐるほどではなかつたか。精神物質兩界の交渉の疎濶なると、我が現時の如きは、蓋し多く例のない所であらう。詮ずるに喜んで蘆花氏の福音に聽かんとするが如き社會は、戰勝の悲哀を說くを要するほど痛切に戰勝の歡喜に魅せられてはゐないのである。此の意に於いて、吾人は蘆花氏の說教の、勞多くして用少なからんを恐るゝものである。

獨り之れを日露戰爭以外、個人主義、本能主義等と相牽聯して生じたる精神界の現象について言ふ時は、個人の寂寞、勝利の悲哀といふ語は、生命となつて流動する。個人の戰に勝ちたるものをして、其の奥に横はるの悲哀に觸れしめよ。此の如き

意味に於いて始めて「勝利の悲哀」の生きたる福音を見る。

文藝以內と以外

長谷川天溪氏の幻滅時代といふ說・之れを文藝以內に於いていへば、單に內容と相應じて最も多く自然なる形式に還れといふに歸するであらう。はたまた其の內容は最も多く人生最後の眞理に接近せよといふのであらう。けれども、若し更に進んで、文藝の中から材の空想と、結果の快樂とを拔き捨つるの意をも含むとすれば、玆に文藝は文藝としての存在を休止するに至る。卽ち問題は轉じて文藝と文藝以外の社會現象との關係となる。一言以て掩へば非文藝時代といふに約まる。文藝は夢幻の如きものといふの意で、段々に其の裝飾の衣を脫ぎすて行つた結果、赤裸々に近い身とはなつたが同時に文藝の閾を通り越して宗教の門に立つてゐたといふのは今の蘆花君などの地位ではないか、詮ずるに眞實自然の文藝を要すといふと、文藝を見すてゝ宗教に之くといふと、何れが天溪氏のいはゆる幻滅時代の十九世紀であらう。

倫敦スケッチ

ロツテン、ローの方からハイド・パークの横を威勢よく駈けぬけた二頭立の馬車が一臺、しばらくして復一臺つゞいた。折しも外は一ぱいの雪の夜で早や十二時に間もあるまい。中には夜會歸りの若い男と女とが各一組づゝ乘つてゐる。

（前の馬車）

『ジョージさん、あなた何う思つて？リリーは餘程變ねえ。』

「變とは？」

「あら、とぼけてはいけませんよ。」

「困りましたな。わたしの見たところでは、リリーさんとロバートとは全くむつまじさうで、別に變と思ふ事もなかつたやうですが……。」

「それがですよ、リリーは實際ロバートさんを愛しては居ないのですから、變でせう？」

「まあちよつと御覽なさい、ひどい雪だ。」

「馬は嘸寒いでせうねえ。」

「あなたも寒いでせう？わたしの此の外套をおかけなさい。」

「いゝえ、ありがたう。それには及ばなくてよ。」

「あなたさえお厭でなくば、どうか着て下さい、リーナさん。」

「わたし、ちつとも寒くは無いのですよ、却つて暑いくらゐ。」

「あゝ、息(いき)か詰んだからだ、ぢやあ其の窓を明けませう。」

「およしなさい。それぢや世間がうるさいでせう？」

「世間が？」

「こゝは斯うして二人(ふたり)つきりの世界ぢやありませんか。ほゝゝ。」

「リーナさん。」

「御覧なさい、硝子にあんなに露が溜つて。ねえジョージさん。あなたはリリーが本氣でロバートさんを愛してゐるとお考へなすつて?」

「わたしにはさうしとか見えません。あれで本氣でなければ、婦人といふものは罪なことをするものです。や、これはリリーナさんの前で失禮。」

「婦人を皆そんなものとおつしやるのは、それはあなたの論理の誤りですけれど、リリーは實際そんな癖があるのですよ。とろけるやうな眼つきで、男の方と話をするたびに伏目になつて、さもさも思ひついやうな振をする。男をぢやらすのですよ。リリーは男をぢやらすやうに生まれついたのですから、たまりませんわ。此のあひだも新聞に女子戀愛術研究會といふものを發起して、男子をたらしたり、ちやらしたりする技術を專門に研究して見たら面白ふらうなんて、廣告してゐたものがありましたが、そんな會でも起こらうものなら、リリーなんさ、さしづめ其の會長ですね。」

「まさか、そんな事はありますまい。」

「あら、本當ですよ。姉妹ですもの、リリーの事はわたしより能く知つてるものは無い筈です。」

「さういへば、そんなものですけれど……」

「さうでせうか。」

「全くですよ。」

「ですから、ロバートさんだつて本氣ぢやあるまいと、わたしは思ひますよ。」

「さうか知ら。」

「わたしさう信じますわ。あなたは？」

「わたしはどうも本氣だらうと思ひます。ロバートは大分熱心にお相手をしてゐたやうですよ。」

「本氣でリリーを愛してるといふのですか。」

「さうだらうと思ひますね。まだ聞いては見ないが。」

「…………」

「それでリリーさんの方が本氣でなかつた日にはロバートはみじめな目を見るわけですね。」

「さんざぢやらされて、感情を弄ばれてね。」

「だん〳〵シャンペンの氣は拔けてしまうし、馬鹿に冷えて來たぢやありませんか。どう、お見せなさい、つめたい手だこと。」

「おゝいた、あなたの握力は隨分とつよいことねえ。わたし、斯うして手隱しさえ掛けてゐれば、つめたくは感じませんよ。あなたこそつめたいでせう？何なら此の中へ半分づゝ手を入れて見ませうか、ほゝ、此方側へおかけなさいな。」

「かけてもいゝのですか。」

「おやもう來たやうですね。あの明りがギクトリアのステーションでせう？お立ちなすつた次手に、ちよつと窓を明けて見て下さいな、ジョージさん。」

「もうそんなに來たか知ら。」

「でせう？ね、そら曲りかけました。ぢや、わたしは是れで失禮いたしますよ。御親切にお送り下すつてね、ありがたう。」

「お待ちなさい、今戸を明けます。まだ動いてるぢやありませんか。併しリーナさん、ぢやらされて、弄ばれるロバートはかわいさうですね。」

「ほんとにかわいさうねえ。」

「あなたがリリーさんだつたら、わたしはどうしませう。」

「…………」

「さあ止まりました。悪い路だ。肩につかまつてゐらつしやい。」

「いゝえ、大丈夫。さやうなら、ジョージさん。」

「さやうなら、リーナさん。お休みなさい。」

其のとき瓦斯街燈の影で、二頭の馬は言ひ合はせたやうにブル／＼と鬣の雪を振りおとした。

（後の馬車）

凡そ十四五分も後れて、同じ門口についた馬車の中には、リリーとロバートとが肱を交はして腰かけてゐた。

「あー。」

「疲れちやつたでせう。」

「いゝえ、あれ位の會で疲れちや大變だわ。」

「でも溜息なんかして。」

「あれは快樂に飽きたいといふ溜息よ。」

「驚いたね、もう飽きちやつたのですか。」

「飽きはしないわ、たゞありまり一杯だもんだから……」

「何がさ。」

「快樂がですよ。ほら御覧なさい。わたしの眼が其の證據だから。感情が一杯溢れてるでせう。是れがわたしの有りつたけの感情よ。姉さんはよくわたしが色眼遣ひの亂用をするといふけれど、それはわたしの知らない間に自然とさうなるのだから仕方がない。けれど今夜のわたしの眼は別よ。わたしの持つてるだけの感情はみんな出てゐるから、見て下さい、ようく見て下さい、ね。僞りの感情は一つもないでせう?みんな眞實で、みんな愛の快樂で踊つてゐやうでせう?眼は感情の窓!ちよつと其の窓を明けて頂戴な。寒かなくてよ。いゝ氣持。おや、もう半分以上來たやうだ。今夜の馬車の早いこと馬丁!馬丁!もつとゆつくりおやり。さあ閉めて頂戴、此の小さな三尺四方の天國も、もうちつとの間で無くなつてしまふのだから。ガタリと馬車が止まるまで、何うか外の事は何も思はないでゐたいのね。快樂を黄金の鉢に山盛りにして、頽れないやうにそうつと捧げ持つてるやうな氣持ね。」

「ジョージはリーナさんに附き添つて歸つたが、もう疾くに家へ着いてるだらうな。」

「ジョージさんは本當にリーナを愛してるでせうか。」

「さあ、どうでせう。リーナさんはどうかしら。」

「リーナは愛してゐなくてよ。ジョージさんに對する愛は全く無いのよ。」

「さうかねえ。」

「だから二人の愛は成り立ちつこなし。」

「絶望の愛か。」

言つて二人は心地よげに笑つた。そして顏を見合はせた。其のとき馬車が止まつたのである。（四十年二月）

○

◎近頃の家庭の讀物の中で、一寸目につく現象は『都新聞』の「相談の相談」『二六』の家庭ページの中の某婦人の述懷談などいふものが喜ばれることである。これが一方から言ふと一壇のコンフエツション式な傾向と相通ずる、意味のある傾向とも見られる。就中既に家庭を作つた婦人が、色々な關係から動き行く周圍の社會に刺戟せられ、娘の時とは違つた悶々を胸に懷いて來る。併しながら現代の此の種の婦人の悶々は、昔風な戀物語や、『不如歸』程度の家庭悲劇では既に業に甘すぎて之を慰めることが出來ない。もつとしんみりした、もつと複雜な現代社會の矛盾の影が細かに映じて來ねば、自分にひしとは觸れない此の細かい婦人の胸中を漏らして吳れるものは何だらうと見廻はしてゐる所へ、極めて現實的に似たやうな懺悔錄や不平錄や相談錄を示されて、彼等は渴したものゝ水に就くやうに之れに赴く。自分に似た境遇の人の身の上話しをしんみりと聞かされる。之れが恐らく此の種の婦人の最も慰藉とし、樂みとする所であらう。而して右に言つたやうな讀物は此の坪にはまつてゐるのである。自分の胸に最も多く思ひあたるものに外ならない而して此の種の讀物の中には記者が机上で製造したらしいものも見えるが、其の製造のしかたにも巧拙があつて、見るから空虛な、感所の違つたものは矢張り讀者にも直覺的に分かつて了ふ。一方は一生懸命、之れを實の事として取扱ふのであるから、一毫のたるみも許されない。密接に

胸中の現實と吻合しなければ承知せぬ。固より微細な境遇や事情迄一致するものではないから、從つて事件全體が同一とは行かなからうが、それは構はない。言はゞ部分々々の構成元素が生きた身につまされゝばよい。それだけでちやんと嘘事と本事とは見分けられる。要するに事實ではなくとも、最も眞實な此の種の記事が最も多く讀者を焚きつける。玆まで觀察して來ると、我等は文壇の近事と切に思ひ合はす所あるを禁じ得ない。複雜な家庭的諸關係に揉まれる婦人の胸懷を打ち明けたいといふ類の記事が、恐らく今後しばらくの婦人界の讀物の重要な一つとなるであらう。

◎本誌の前號に出た南山氏の氣分の說は再讀に値する研究である。今の讀書界の一部があれ位の理說をすら、理智に疲れたと稱して咀嚼し得ないのは惜しむべきだと思ふ。

◎自分の特色をいやといふ程自意識させられながら、調子に乘つてそれのマンネリズムに陷らない人が本當に自己に眞實なのであらう。正宗白鳥君などが、此の危險の最も少ない人である。

◎本能熱のロマンチシズム時代、而して見神熱の宗教的傾向時代、而して自己靜觀のネチユラリズム時代、此の遷移を今になつても認め得ない人があるとは何うしたものだ。

◎日本の劇壇は丸で別な所から出立しなければ駄目だといふ觀察に異存を挿む餘地は無いと信ずるが、小山內薰氏は『讀賣』で今の俳優でも或者は其のまゝ連れて行けると述べられた。僕は固より今のプロフエツシヨナル俳優を氏ほどに知らないから違つてと言ひ張る譯には行かないが、併し何うか、今までの僕等の觀察では、西洋のプロフエシヨナルと日本のプロフエツシヨナルとば丸で質が違ふやうに思ふが。

◎坪內逍遙氏が本誌及『歌舞伎』で一種の試演劇場の急要を說かれ、小山內君亦同樣の意見があるらしく『新潮』の眞山青

果君なども一方に似たやうな行方を考へてゐられるらしいが、僕等の關係してゐる文藝協會が一二年來宿題としてゐる所も矢張りそれに外ならない。行かうとしては行き止り、行かうとしては行き止り、今以て左抵右抵に悶えてゐるのは此の難關である勿論協會には協會の行方もあらうが、劇を全く別な所から出立させて見たいといふ一念は同じである。せめて一萬五千乃至五萬の金をそつと積んで置くだけの腹中の人が藝術宗信者になれば、此の意味多い新試業がやつて見られるのだが、惜しい事だ。(四十一年十二月)

○

抄譯が出る筈で出ず仕舞になつたやうだが、四月かのコンテンポラリーに出てゐたフランス文學の現狀を論じた一文は、たしかに注目すべきものであつた。といふのは、其の觀方が深い新しいといふのではないが、それだけ公平穩健で、フランス文學の正直な現狀を報告したものとしておもしろかつた。始の細かい邊は忘れたが、結局何れを支配的傾向といふことも出來ず、歸趨に迷つてゐる中でも、強いて概括すれば人生の眞を寫しまことの感情を寫さうとする努力、是れが全般に亙つた事實で、つまり自然主義の續きなのである。是れに對して言葉で中身を飾らうとしたり、感情を誇張したりするやり方はロマンチシズムの餘流として重んぜられない。中身たる人生を其のまゝさながらに出さうとするのだ。ブールゼー等のやり口は要するに細工の綺麗事たるに過ぎぬ。一代を支配する傾向とは距たつてゐる。といふやうな趣意や言葉であつたと記憶する。恐らく是れが正直な野心の無い觀察で、事實、さもあるべしと察せられる。

近年の雜誌界で成功した事業家といへば『實業の日本』『婦人世界』の主幹者增田義一氏であるさうだ。而して其の雜誌の編

輯法が今正に賣れる雜誌としての秘訣のキーノートを打つてゐるといふ。文學雜誌でいふと諸家の中年の戀の說を集めたり、新婚の感を集めたり、美人觀を集めたり、又如何にして詩人となりしか、如何なる小說を最も好むかなどの設題をする編輯法が、凡て『實業の日本』式といふ中に一括せられるのであらう。雜誌編輯法の上に一期を劃したものといつてよい。

『讀賣』の日曜附錄に連載せられる德田秋江氏の『無駄話』は、論旨の同意不同意は別として、其の書きぶり、感情の匂ひの出具合など、天下一品と言つてよい。外に類の無いものだ。(本誌の編輯と早稻田王國の元老政治といふやうな事は少々書き過ぎだが、それと共に思ひ出すのは小川未明氏の隨筆である。氏も屹度おもしろい隨筆の書ける人かと思ふ。又方面は違ふが、淸少納言などの昔を想ひ比べても、閨秀作家の面々に存分印象的な隨筆を書いて見せて貰つたら面白からうと考へる。

新體詩壇に於ける口語體の試みはたしかに快擧である。門外からの注文をいへば、歌ふ感想の上にも、在來の人事、むしろ思想や感情を主なる題目とするもの以外に、純自然をも少し歌ひ試みたら何うだらう。芭蕉の行つた所、ワーヅワースの行つた所にも永久に新しい意味がある。(四一年八月)

○

現實主義の根本は造花翁萬能主義に外ならない。人間が造つたものといふ臭味を嫌ふのだ。人間臭厭惡主義、人間不信用主義である。造化が造つたもの、我が手細工でないものといふ一點の判斷に何ものも勝さることの出來ない値打がある。我れの滿足といふやうな充實した事實ですら、造花が造りつけて呉れた我れの滿足でなくては駄目だ。手造りの我れと感づいた瞬間からは、其部分に血の巡りが止まつて了ふ。眞だ、現實だ、理想だといふものも、つまりは此の造化翁の手と人間

と頭とのけじめ争ひに過ぎない。造化人間優劣論だ。而して人間の信用が更に一たび地に墮ちて了つて此狀態なのだ。

此の頃坪内氏はシェークスピーヤの『メジュア、フォア、メジュア』を以て彼れが當時のイギリスの社會に向けた皮肉の一臂を寓するもとして、裏面のイギリス、裏面のシェークスピーヤが其の中に讀まれる、一種格別のもの、飛び離れて近代的な味のものといふ論を立てられた。斯う聞くと直ぐアイヤランドのバーナード、ショー氏を思ひ出す。ショー氏は有名なシェークスピーヤ反對家であるが、表裏矛盾のイギリスを極めて皮肉に冷かに穿つ其の作の味が、幾分たりともシェークスピーヤのロマンチシズムの中に見出だされるといふのは、面白い對照である。

雜誌の傳へる所によると、ショー氏の聲名は本國イギリスに嫌はれ蔽はれてある間に、先づドイツに暢びアメリカに廣まつて今はフランスの評判となつてゐるらしい。イギリスを大陸に代表してゐる殆ど唯一の壯年作家と見える。我が國にも今にショー研究の聲が起こるであらう。フランスの評論家はショー氏を「新モリエール」と稱へたといふ。其の趣意を聞くに、悲劇的な中に滑稽諧謔の味があつて、仕組みや見せ場を斥ける所などが似通つてゐる、一言以て掩へばフランス的だといふ。モリエールの類似は別としても、本來がケルトの派に屬する人であれば、フランス的な所もあるだらし、仕組や見せ場を斥ける近代的な行き方の上に、此の論者も言つてゐる如く、深くてそれで人を破顔させる所のある觀方、また逞しい寫實の筆力に加へて冷かな皮肉な一種の革命的精神、あらゆる權威壓力を批評し蛇蝎視する精神の流れ出た作風は、何うしても大陸的たらざるを得ないのであらう。やはり「藝術家にして思想家」といふ評を受くべき作家なのである。千九百二年に始めてヴインで譯され、千九百三年にはベルリンで上場せられる作があるに至つた以後の數年間に、ショーの名は遂に世界的となつた。

上司小劍氏の處女作『灰燼』を讀んだ。此の作者と十年前相會つた頃は、しきりに朝鮮に行きたいとの事であつた。其の頃の朝鮮は今日のやうな統監政治などいふむつかしい時代でなく、世界で最も呑氣な國のやうにも考へられてゐた。小劍氏はこの呑氣な太古の民に歸りたいといふ感慨であんな事を言つてゐたらしい。それがフランス文學の研究者となり、クロポトキンの愛讀者となり、簡易生活の主唱者となり、而して終に此の作を書いた。統一が無いやうでおのづから統一せられてゐる。作者の思想史そのものがまた一部の近代小説ともいへやう。此の上この作者に要するものは粘り氣であらう。『灰燼』の上にも此の缺點は見はれてゐる、暗い材料の割に暗くない。篇中で一番よく書けてゐるのは平五郎の家であるが、それが今一息と思ふ。最も目につくのは寺田といふ書生を中心にして理學士や令孃やらが寄せ集まる一系の思想である。近代人といふよりも、寧ろ近代思想そのもの丶一邊を寓せんとした作と評してよからう。初作で長篇の爲でもあらうが、作り過ぎた所がある。初の平五郎一家がてん／＼に不平を述べるあたりなども、並べ過ぎた。會話の活動力が足りない。要するに次の長篇にはもつと眞實の度を加へて欲しい。同じ作者の短篇『神主』が寸金の光を放つのも眞實だからであらう。（四十一年十月）

覺がき

上

此の十一月上旬に、例の校友會で千葉へ演説に引き出された。稻毛の海氣館の前から千葉の町まで一里足らずの間をあるいて行く。同勢五六人の內、私とS君とは街道の右側を磯づたひにぶら〳〵やつて行つた。二人とも洋服であるが、小春日和の正午に近い日光が黃色に照りつけて來て、外套が荷厄介になる程の暖かさだ。一方は松林の丘が土手のやうに續いて、風を防いでゐる。鈍色に光つた海は、おつとりとして、音一つ立てない、房州の岬が灰色雲のやうに浮んで、空は桔梗色に澄んでゐた。今朝汽車の中での寒さに縮み上つた筋肉が、よい心持にたるんで來て、うと〳〵と夢心地にでもなりさうに、二人とも唯默つて足並を揃へて行くと、ざく〳〵と砂の割れる音が耳につく。押々ぷんと磯の臭ひ香がして、眠けかけた神經を覺させる。

「君此の香を嗅ぐと西洋へ行つた時の船の事を想ひ出しはしないか」と話しかけても、元來無口なS君は「ああ」と言つて一

寸愛嬌笑ひを見せたまゝ復た押しだまつて了ふ。私とても餘り話のある方でないから、また暫く無言が續く。行手の海面には家鴨の子が何十羽か頸を揃へて長閑に浮いてゐる。

「歸つてからちつとは芝居でも見るかね」と話しかけても、答はやつぱり簡短で「いゝや、餘んまり、さう見ない」と言つた切り口をつぐむ。S君と私とは法學と文學と專門は丸で違ふけれどもベルリンで一年餘り同じ學校の留學生といふ關係から親しくしたのが始まりで、今も早稻田の講師室で會へば寄つて話すといふ仲なのだが、君の無口といつたら、絶對的無口と言つてよい位である。いつも獨り深く沈潛してゐて、それで憂鬱といふぢやない。心の中には一種の滿足を持つてゐる、自分で何も彼も仕末をつけてゐるといふ容子だ。何時も溫乎たる應對振りで、小さい底力のある聲で、ぽつ〳〵と用事だけ話す。此の人が西洋から歸つて、もう二年にもならう、其の間に博士にもなつた。それが此の節何となく淋しさうに見えてゐる。今は獨身で下宿して居ると聞いた。

「でも音樂會に位は行くんだらう」

「いゝや餘んまり行かん」

「よく、それで淋しくないね」

「うゝ」

「獨逸では、よくオペラや芝居に行つたけね」

「あゝ、行たねえ」

「ベルリンから近頃變つた便でもないか」

「何もない、近頃新聞もあんまり見ないもんだから」

是れでまた暫く話が切れた。向ふの方では他の連中が日向ぼつこに出た蛇を見つけて殺したとやらで、ステッキの先に引つかけて騒いでゐる。其の蛇の死骸の蒼白い腹が日を受けてぎら〳〵と光つて見えた。

「グリユネヴルトへＫ君なぞと一緒に寫眞を取りに行つたのは丁度こんな天氣だつたと思ふが、君もこの時は一緒だつたか知らん」

「あゝ、一緒に行つた」

「あの時の寫眞を君にも上げたかねえ、それ、あの、大きな幹ばかり寫つた森の中に皆んなが立つて居て、其の邊の小供に機械を押させたやつ」

「あゝ、貰つた〳〵、あれはいゝ寫眞だね」

と言つたＳ君はしばらく考へ込んでゐたが、今度は稍勢づいて、

「あの頃の寫眞はみんな保存して居るよ。あれは君、消えるかねえ」

「消えるかも知れないよ。素人のは藥の具合が怪しいからね」

「寫眞を見ると、一番あの時分の事を想ひ出す」

「想ひ出すだらう？　生活を豐富にして行くといふ點ぢや、何といつても西洋の方が意味が多いからね。印象が強く跡に殘る。オペラもビールも無い生活は淋しい譯ぢやないか」

「さう」

「寒い晩遲くオペラから歸りがけに、よくアッシンガーへ寄つて腸詰の立喰ひをしたが、覺えて居るかね」

「うゝ、熱いやつを二本づゝ皿に盛つて貰つてねえ、人の少ない隅つこの方の、臺の前で吹き吹き喰つたが、うまかつたねえ」

「そして冷たいビールをぐうつとやると、いゝ加減に暖になつてね」

「あゝ」

「うちへ歸ると、いつも十二時を過ぎて居たらう」

「さうだ」

「あのフリードリヒの通りがまた、馬鹿に明るい所と暗い所とある通りだつたな」

「さうだつたかねえ」

「オペラの、盛んな音樂や強い色彩がまだ頭に殘つて居て消えない所へ、ビールの氣がまじるんだから、何だか夢のやうな心持になつてねえ、明るい所へ出れば何とも言へない華やかな空想が起こるし、暗い所へ出ると、秘密といふものが無限に斯う、人生をうつて來るやうな氣がして、あの歸り途の趣きは今でも忘れられんね」

『日本の芝居では到底あんな事はあるまい。』

「我々には駄目だけれどね」

「僕ねえ、此頃折々俗曲を聽きに行くが、一寸おもしろいよ。何時かも寄席で水戸藝者の唄ふのを聞いた』

「あゝ、さうか、それは面白いが、何ういふ點が氣に入つた」

「なに、たゞ、自然に我々の同感出くる感情を唄ふのだから、それに節がおもしろい。」
言つて君はちつと考へて、
「けれども到底西洋のやうなものは無い」
「二十文で腸詰の立喰ひだけでも、も一度西洋に行く値打があるね」
「うゝ」
何時か千葉の町が烟つたやうに見えて來た。ごた〳〵とした屋根が面白く日光を反射してゐる。物の十分も默つて足を急がせてゐると。S君は、思ひ出したやうに
「日本にも早く西洋のやうなオペラやカフエーが出くるといゝだがねえ」
と言つて淋しく笑つた。

下

◎懷疑と告白といふに就ては、色々な面白い評論がある。敬すべきものもあるが笑ふべきものもある。告白といふ事を宗教上の懺悔と同じやうに考へて、一切過去の罪業を自白し且つ悔ひ改める事か何ぞのやうに騷ぐのは可笑しい。信ずる事、欲する事を言ふよりも、先づ行つてゐる事を言へ。是れが告白の精神である。
◎權威の無い者が權威あるものゝ口眞似をすると誰れかゞ言つたが、實際、人には其の人みづからの權威の充實する限度がある。其の限度以内に於ては、各個人が皆自家の權威を有する譯だ。其の限度とは事實といふ事、實行といふ事に外ならな

い。殊に人生觀上の問題などに關しては、自ら行つてゐない言說を千萬言積み重ねても、何の役に立つべきか。

◎個々の告白、事々の告白すべて誠實であればそれでよろしい。既に告白した告白と、未だ告白せざる告白とに論なく、一切個々の事實、自己心內の實行を結合しやうとする時に、始めて人生觀上の努力が生ずる。人生觀とは統一觀といふことに外ならぬ。而して統一觀がさう手輕に成り立つ譯のものではない。お手輕料理の統一觀なんぞ、我々の前に何程の値打があるものか。

◎懷疑がまだるつこいとか時代後れだとかいふものがある。滑稽では無いか。まだるつこければ一足飛びに解決なり理想なりに行くがよい。我等は安値な解決理想つ多きに苦んでゐる。懷疑は幾ら微細のものでもそれが眞實である限り、貴い。解決理想は、それが眞實であり得るかゞ先づ疑問である。

◎傳襲の奴隷以外、眞に他人の理想や解決に由準して動かない人生觀を形づくつてゐる新代の人が、今の日本に幾人居るか數へて見よ。

◎懷疑には、少なくとも自省によつて自他を眞實にする力がある。安値なる信仰談や解決談は、一時の賑やかし以外に何の實質を跡に殘してゐるか。

◎前人の說を信じないのは、猿が人間の心を疑ふやうなものだと言つた者がある。私と前人との間には猿と人ほどの差があると考へたと見える。それで當人は人間の組だと考へ居るのだらうか。（四十二年十二月）

松と按摩

『やい〳〵もつと力を出せい、ずつと肩を入れて。屁つぴり腰をするない。今からそんな意氣地の無い眞似を爲やあがつて。」
「待つて呉んねえよ。待つて呉んねえよ。おゝ痛てえ。棒の間に肩が挾まりやあがつたんだよ。」
「やい〳〵、ちつとも上らねぢやあ無いか。定公、房さん、もつとやつて呉んねえよ、仕事を爲て呉んねえよ、仕事を。」
「やつてるだよ。お前の方が持ち上がらねえで無えか。何してるんだ。可けね〳〵。後から押つかふさつて何うするだ。」
「待つた、〳〵。心が折れる。其の枝を延しちやあ可けねえ。友、その繩を持つて來い。よし來た。丸太を尙一本根に入れう。それ、肩を貸して呉んねえ。そうだ。うんとしよう。」

「お座敷の外が大變な騷ぎですな。植木屋が庭樹を入れてゐるのでせうか。』
『植木屋ですけどね、前に植つてゐた樹を、、他へ持つて行くのですよ。」
「あゝさうでございますか。此のお屋敷の前には、大きな松があつたやうに聞きますが、其の木でも他へ賣れましたかな。」
「さうなのですよ。大屋さんが何處とかの別莊へ賣つたのださうですよ。』
「賣りましたか、さうですか。其の側にたしか柊の大木もございませう。」
「按摩さん、よく御存じね。元から此の家を知つてたのですか。」
「いや、家は存じませんか、そんなやうに聞いて居りました。此の家は古い家でしてね、本柱なども大分煤けて居りませうな。藁屋根だといひますから、軒が低くて、暗くはございませんか。」
「どうしてもね、百姓家だと、別莊建の家なんかのやうには行きませんよ。それに柱だつて、帶戸だつて眞つ黒に拭き込ん

であるのですから、暗いは暗いけれど、何處か落ちついてゐますよ。南の一方明きで、後の帶戸を明けると、暗い廊下があつたりなんかして、初のうちは何だか氣味が惡いやうでしたけど、馴れて了へば氣にもならなくなりますのよ。たゞ神棚の多い家ですことねえ。」何の間にも、何の間にも、神樣の祭つてない部屋は無いんだから、私達のやうな、神樣も佛樣も居ない家に住みつけたものには、變でねえ。」

「はゝ、それは何でせう、此の家の元の主人が船乘でしたから、多分それで餘計に擔いだのでせう。先年伊豆の沖で亡くなりましてな。上さんは今たしか電車の通りで小間物を商つて居りませう。」

「さうです、中田といふ後家さんでね。」

「はあ、〳〵………」

「待つた〳〵〳〵。そうつと卸して呉れ。しめたそこまで上がれやもう大丈夫。一服やらう。」

「ほら、〳〵。姉さん、ハイカラ髷が枝い引つ懸らあ。氣を付けて行きねえ。そんなに大股に跨ぐと、引つさばけるぜ、おい。」

「大きにお世話だよ。」

「いやにぷん〳〵香はせて行きやがるな。あゝ、善い匂ひだ。何所の女中だい。」

「その武田さまに手傳に來てゐる、幸町の魚屋の娘だあな。十四くれえからお前、男をこさやあがつて、手におへねえ女よ。」

「だがちよつと好い女だなあ。」

「生意氣言ふない。友公、手前なんざ、そこいらの溝で目高でもすくつて居ろい。」
「今日の風はいやに生溫つこいなあ。もつとも、もう追つつけ櫻が咲かうてんだから、暖になつて善い譯だなあ。」
「浪が隨分高けえな、そら見ねえ、浪頭があの小松の丁邊(てつぺん)を越して見えらあ。また當分不漁(しけ)かな。厭になつちまふ。鰤(ぶり)でもいゝから、刺身の赤いやつで一杯やりたいもんだ。嚙むと冷つと奧齒に卷きつくやうな奴でなあ。」
「時に親方あの樹はあれで、何の位でお屋敷に入るんだね。」
「それやお前、あれ位の木になると、五兩と十兩ぢや中々手に這入らねえや。」
「さうだらうなあ。大した木だ。是れで餘つぽどの年數だらう。」
「さうよなあ……。だが是れで此の木も浮ばれるといふものよ。天縣といやあお前、天子樣を除けちやあ日本一の人だ。其の人に見られやうてんだから、今までのやうに汐風の吹き曝らしで、玆いらの……、何たあ違はあな。立身だあな。」
「違へねえ。玆の家にや元武田さまが居たんだな。それあの、今向ふへ越してる華族よ。」
「華族?、華族がこんな家にやあ居めえ。」
「なあにほんの二月ばか居て引つ越したんだがな、何でも子爵だと言ふぜ。」
「子爵? へん、それぢや、公爵たあ比べ物にならねいや。」
「違へねえ。どら、暗くならない内に濱まで出しとかうぜ。」

「はゝゝ、天縣さまの別莊へ行くのと見えますが、何うですかな、松が立身して喜んでますかな。」

「此の家は、あの松がないと却つて、明るくつていゝでせうよ。」

「さやうですね。明るくはなりませうな。その代り夏はお困りでせう。あれだけの樹が一本お座敷の前に立つてゐますと、ずつともう、御門の入口あたりから空氣の感じが違ひます。それに第一、あれ位の松ですと、自然に風を呼びますからな。」

「そんなものですかねえ。按摩さんの方が却つて朝夕見てゐる者よりも精しいのね。樹の恰好なぞも、大體察しがつきますか。」

「えゝえ、分りますとも。同じ風を受けましても木によつて皆その音が違ひます。大きい木、小さい木、葉のつき具合、枝のさし具合で、音が違ひます。たゞ大きい音ばかり聞いてるらつしやるとざあ／＼言ふばかりで何の藝もありませんが、是れで夜世間が靜まつてから、よく／＼聞いて御覽遊ばすと、同んなじ松風のおとでも、風の動く具合で色々な細かい音を出します。私どもは何時も世間が夜ですから、そんな風にしてでも聞き覺えませんと、物の色合が分かりません。」

「成程ねえ。」

「はゝゝ。」

時事

自己と Wili tn Iiue 現實と InevitnBiity といふやうな題意で論文を書きかけたが、頭の具合で何うも根が續かない。此の方は次へ延すことにして、さて何か隨筆でもと思ふ。

此の頃の自然主義非自然主義の論は、何だか口先ばかりの看板爭のやうになつて厭だ。二三年も前に通過した所を、今一

度繰返さなくちやならない。手數な話である。もつとずん／＼先の方へ行つて、中身に深く突き込んだ論をするやうに、殊にも新しい人々は心がくべきだ。非難者の側が取りわけさうである。文藝革新會の人々などが疾くの昔に言つた事を今さら人を替へて繰り返す必要はない、名義なぞは何うでもいゝから、實質を新しくしたいものだ。

右の一連には、故なくして無闇と相手に野卑な罵詈を加へることがはやるやうだ。愚な話だ。よく世間には、年を取つて不遇になると、無闇にやけ酒を彼つたりなぞして、空氣焔を吐いて自ら慰むるやうになるものがある。末路憐むべしの感はあるが、餘り立派な事ぢやない。今の評壇にはこんな連想を呼び起す現象が多い。そんなガラ／＼した頭で文藝を褒めたつて誹つたつて、文藝に一毫の輕重をも加へはしまい。若い者は、死に身になつてたゞ自分の行くべき道を開拓することだ。

片山孤村君は、『朝日』で死寫眞の外にネチユラリズムは無いと言はれたが、そんな事は無い。ネチユラリズムが死寫眞から脱して生きた現實、生きた自然に接近しやうとする動機を含んで生れたものであることは、フオルケルト、シユタイン其の他私が『近代文藝之研究』の中に引いたヨーロツパの諸解釋者に徴しても明白である。では現實自然を通り抜けて了つて生命ばかりのものにならうとする理想主義(?)と區別がなくなるといふ。是れは大きな間違である。現實自然を通り抜けなければこそ、ネチユラリズムの特殊な立場が存在する。一見矛盾したやうな内部生命と外部現實とを卽せしめやうとするのが此の傾向の本來である。だから若し二元に分けて論ずる場合には、假りに「生命ある現實」といふ語を作つて、一方之れを死寫實から脫せしめる爲には前半の「生命」に力點を附し、理想主義空想主義等から異ならしめるためには後半の「現實」に力點を附する。當然の議論であると信ずる。

實社會にあつては、生命といふ語をことさらに附加する必要は無い。何ぜなれば造化が與へた實自然は初から盡く生命を具してゐるからである。而して哲學宗教の如き、此の生命を感受し解釋しやうとする活動の起つた時之れを理とするか意とするか佛とするか魔とするか乃至物とするか心とするかゞ分かれるのである。

藝術にあつては此の生命を味はうとする。生命を味ふといふことが藝術のエッセンスである。隨つて生命の源である所の實社會實自然は、之れに對する者の主觀狀態がよく之れを味ふに堪え得る限り、言ふまでもなく最上の藝術である。けれども斯やうな主觀狀態を保留することは、必ずしも容易でない爲に、人の作つた藝術が生じて、此の缺を補ふたのである。

而して人の作つたものは、實自然の外形を模する限り、何所まで行つても手段材料の違つた模寫であるから、それのみで實自然の全意義には徹底されない。つまり生命ある自然にならないからである。生きて來ないからである。生きると言つても、何も別に靈魂が二元となつて宿泊するといふのでは勿論ない。眞の自然そのものにならないのである、徹底した自然にならないのである。例へば繪に於いて、如何に細寫の手段を盡したからと言つて、一枚の寫眞以上自然に肖ることは出來ない。此に於てか細寫の手段は變じてもよい、何等かの方法で自然の形態と生命との即した全圖を作ればよいといふ事になる。徹底とは手段上の事でなくして目的上の事である。固より作家の風格はさまぐ〵であるから、さまぐ〵の度合に於いて、より多く印象的なものもあればより多く寫實的なものもあるが何れも決して死寫實でよいといふものは無い。自然そのまゝの全意義に徹底しやうとする精神に於いては變らないのである。

元來自然の全意義とは何んなことか。此の問題以上が評論者の解釋となり哲學となる所以である。私は之を生命（靈機、第一義）と外的實現との相即した境だと言つた。そして日常の實行界では概して其の外的現實に執着して、意識がそこまで

しか明瞭になつて居ない、之れに對して哲學、宗教、藝術等の諸活動になると、生命の側まで併せ（併せといふ）意識しやうとする。茲に藝術存在の理由が横はると考へる。之れが私の今の場合に取つてゐる藝術觀である。

少し舊くなるが一月の小説の中では、やつぱり中央公論に出た『浴醫の家』が一番よい物であると思ふ。淡く整つたあの味は、有馬の湯の香と共にゆかしいものである。ホトヽギスの『小猫』もよい。やはりあゝいふ道へ掘り込んで行つて、始めて眞味の水が湧く。あの作で思ひ出すのは、文章世界の投書家の作を集めた『二十二篇』といふ短篇集の中にある『溶の家』である。あれも傑れた作である。無名の年少作者であゝいふものが底が干ないで書ければ注目に値する。短いだけに『小猫』よりも引締つた味あがる。

此の四月の小説では、本誌に出た『別れたる妻に送る手紙』が、未完ながらしんみりとして佳い作である。此の後何う發展するか知らないがあれ丈では殊に前半がよい。作者の坪にぴつたり嵌つたものだ。ついでながら、官能の人、センチメンタリズムの人、此の二元素が此の作者の中にはいつも戰つてゐる。（四十三年五月）

○

近頃の評論は、一部に於いて再び創作壇の中心と沒交渉のものになりかけた。其の言ふところは一層常識に近づき、平穏に近づき、淺明に近づいた。是れなら極端の弊に入つたり、海澁朦朧の非難を蒙つたりする虞れは先づない。それと同時に文藝とは交渉の薄いものになつて了つた。理由を説明するまでもなく、是れが現在の事實でまた何時の代にも存する現象で

つて居る。

ある。常識、平穏、淺明と文藝とは、寧ろ背行しても一致しないのが一般の事實である。近頃の評論壇はまた此處へ來かゝ

紛々たる評論の背後に、默して流れて居る創作の主潮は、疑ひもなく此數年來の同じ水脈である。無論此等のものも刻々にそれみづからの展開を遂げやうとしてゐる。たゞ其の展開は、それみづからの自然の展開である。漢から呉に移るといふ革命的のものではない。而して此の主潮は今の殘近平明と調和せんとする評論に對しては、全く沒交渉のやうに見受ける。現在に於いて何等此の種の評論から印象せられた變化の跡も認められなければ、將來に於ても、同じ形勢である限り、其の評論から著しい影響を受けやうとは豫期せられない。それでは是れは創作の方が時代の流れに遠ざかつて行くのであらうか。さう考へる人もあるといふ。併し我々は其の反對だと信ずる。今の創作壇の主潮が默々として流れてゐる、あれが矢張り文壇の大道であるに違ひない。眞の時代は此の中からおのづと生まれ出なければならぬ。縱し次の時代を豫言し指示するものがあるとしても、それは決してあんな態度で現在の主潮と背離するものゝ爲し能ふ所でない。豫言者指示者の行く道は、もつと突入的でなくてはならぬ。

凡ての思想界には、何時でも二義的評論と一義的評論との二面がある。淺明、通俗、實用、常識、無難、乃至此等のものと調和を保つた程度に於いての評論を假に玆で二義的評論と名づければ、之れに對する一義的評論には直觀的突入的の分子が多分に這入つて來て、晦澁にも矛盾にも極端にもなり得やう。之れを論理的に整理する所に新哲學が成立する。

近時の評論壇の一部は、此の二義的評論に戻らうとして居る。或は之れを以て、數年來文壇に蔓つて居た一義的評論の反動だといふ。或はさうかも知れない。近年の一義的評論に濫弊の件つて居たことも事實である。けれ共兎に角一部の、而も

新しい評論壇に二義的傾向の著しいのは否むべくもあらぬ。文壇の主潮と沒交渉になるのは概して此の方面の評論である。
今の所謂實業雜誌、婦人雜誌、乃至大多數を相手にする新聞紙の大部分には、常識、實用、無難を標榜した二義的評論が必要かも知れぬ。此の目的に向つて之れを用ふる者には、少しも非難はない。
此の意味に於て今日は修養談ばかりの時代である。而してそれはまた、新聞紙實業雜誌に於いて最も處を得たものであらう。丁稚小僧の修養をも眼中に置く場合、これらはむしろ當然の事である。けれども文壇の思想を動かす爲には、丁稚小僧の修養談は無益である。
近時の文藝思潮の評論の一部には、此の修養談の臭が多分にする、惡い意味での道學者流の臭が多分にして來た。青年の讀物の中にも近頃、巾を利かして居るものは修養談であるといふ。而して其の多くは實業雜誌の丁稚小僧に於けると同じ筆法であるといふ。流行といへば是非もないが、相當の年齡にまで達した現代の青年が、よくあんな所で精神欲を滿足させて居るものだと不思議に思はれる。之れは長く續くべき現象とも覺えない。
修養談はよい、たゞそれは修養談と名のつかない修養法でなくてはならぬ、丁稚小僧の修養談は現代青年の精神欲を涸らすものである。(四十三年十一月)

僕のページ

○

◎この頃ひまがあつて久しぶりに東京の歌舞伎芝居を落ついて見た、が相變らず異なつた興味も起こらない、世間には、文壇などにも、大分歌舞伎芝居でなくてはならないやうな說も見えるやうだが、私にはさうは思へない、時日が之を何と證明するか見ものである、文學に於て修辭批評と內容批評とが顚倒してゐた時代の批評と今の劇評壇の一部とが丁度相通じてゐる。

◎勿論我々は文章に於ても修辭を修辭として鑑賞することが出來る、一時自然主義の極端に達した時は、文學から故意にあらゆる修辭を斥けようとした、併し修辭は本來內容と即しても、また內容と距離を保つても、修辭みつからとして趣味鑑賞の對象たる價値を失ふものではない、是れは今の日本人には歐文に於て得られない、別種の趣味である、長い傳統によつて培はれた、言はゞ音樂と同じ系統の味識である、一朝一夕に改めることの出來ない趣味判斷である、故に我々はシエークス

ピヤを讀んでも、オスカー、ワイルドを讀んでも得られない一種の趣味を、謡曲にも、平家にも、樂天の詩にも、近松西鶴の文章にも乃至紅葉の文章にも感ずることを禁じ得ない、是等は殆ど全く內容の上に思想や情脈の詮議を須ひないでもよい趣味である、たゞ卽座の感覺がすべての生命であり、實在である場合の趣味である、歌舞伎芝居にも此の趣味が無いとは言はない。歌舞伎のみならず、すべての磨かれたる藝術にはみな此趣味が發生する、併し是れを以て藝術趣味の本部とし大部とし全部とすることは許されない、すべて趣味とは生活の統一せられる瞬間の意識であるが、此種の趣味は生活意識の上つ面を撫でゝ置く趣味である、深く攪亂しないで置く、イージー、ゴーイングの趣味である、鎭靜的睡眠的である、此の回避的隱遁的な傾向に對して、我々にはまた攪動し突進せずには居られない、已むに已まれぬ傾向をも生活意識の中に持つてゐる、複雜な動的覺醒的な趣味は是れから生まれる、內容的と呼んでゐる趣味が卽ちそれである、之れに對して、前者はすなはち古人のいはゆる純形式的趣味である、それをシンボライズするものは音樂である、文章修辭の感興歌舞伎芝居の美しい形や色や運動や音律の感興、それらはみな音樂の一つに最高歸納を持つてゐる趣味である、生活の節奏そのものである、單なる色、線、運動、音響の節奏そのものは歸納せられる趣味である。

◎斯やうな二つの趣味のいづれが文學の主座を占むべきか客座を占むべきかといふことについては、文壇にかなり長いそして激しい爭鬪を經て遂に今日の狀態に到達した、然るに劇壇の趣味は今日まだ此過程を經過してゐない、私は此點に於て劇と文學と必ず歸趨を一にするものであると信ずる。

◎古い形式に則つた歌舞伎劇には、今日のところ新作は殆ど無用である、現代人の作る作には、いやでもおうでも其複雜な思想の勝つた生活が影をさゝずには置かない、內容がそれ相應に這入つて來る、內容の目にさはる程度の歌舞伎劇は無意味

である、歌舞伎の面白味は其純形式的なところにある、よく言へば虚靈趣味、わるく言へば荒唐無稽趣味にある、成るべく內容に觸らないやうに、生きた生活意識を攪動しないやうに、時としてはわざと大とぼけにとぼけていはゆる江戸式のフアンやウヰツトバツトルで思想の理に落ちる手がゝりをまいて了はなければつまらない、そして其煙にまかれて居る見物をいやおうなしに色と線と運動と音響との節奏形式の中に包み上げて了ふだけが歌伎舞劇である、歌舞伎劇を見てゐる間は、必ず生活意識の眼をさましてはならない、現代人の作者にこゝまでとぼけることが出來ない、だから作らない方がいゝ。

啻に斯作のみでなく、舊作の中にも、內容に觸れるものは概してありがたくない。此節出すものは大抵其內容も幾分は現代に同意のできる理路を持つものに限られてゐるやうだが、それですら、多くは情脈が陳腐で事件がツリヴヰアルで我々には我慢してゐられない、伊賀越がどんなであらうと太功記がどんなであらうと、要するにくだらないものである、あれを眞劍になつて見てゐる見物の顏を見廻しては、いつも失笑を禁じ得ない、たゞ其の中のところ〲に例の音樂的結晶點があるだけに、沙漠でオアシスに出會つたほどの清爽な氣持でほつとして救はれる、是れは誰れしも同じ經驗であらう、其結晶點すら、なまなか筋の通つたものであればあるほど少なくなつて來る、其上に役者までが筋の上の人情か何かにくだらぬ力瘤を入れて、此大事な結晶點を手薄に演じて了ふ、そこへ行くと上手でも下手でも、戻橋がいゝ矢の根がいゝ、助六も道成寺も勸進帳もいゝ、それも出來るだけ節奏を純粋にして結晶させるだけいゝ、此ころ見た新作改作の歌舞伎劇、たとへば玉藻の前とか葵の上とかいふたぐひのものは、ところ〲無意識的(?)に虚靈的な要素をつかつて、現代生活の手がゝりを無くしようと試みた所もあり、形式の上にも階段をあしらつた玉藻の前の動作などで純形式を覘つた箇所がまじつてゐるに拘らず、面白くない、要するに現代人では舊式の歌舞伎劇はもう作れないのだ、人が違つて來たのだから仕方がない、藝術は

やつぱり人である。

◎現代生活若しくは現代解釋を內容に持つた芝居はやつぱり新樣式の芝居に落ちつかねばならない。それにしても其新樣式を探求し創建することを本意とする新劇に對して、世間の興味のいたづらに冷却し行かうとするのは何故か、私はそこに細かい幾多の理由があると思ふ、波はうねつても、屆くところまでは必ず屆く、現代人の作る芝居がいつか一度は新劇の道に落ちつくべきであることは、丁度今日の小說が今日のところに落ちついたのと同じ道理である、未來は必ずこゝにある。

◎今日の我が藝術の世界では、何といつても小說は進んでゐる、他の姉妹藝術に比して年代を劃すること幾十年と言ひたい。それは主として一つの大きな溝を越してゐるとゐないとの距離だからである、今日の日本の藝術には、すべてにわたつて一つの大き實際問題が橫はつてゐる。それは言ふまでもなく新內容に應ずる新樣式の創建である。若しくは其新樣式の大體方角の見當である、今の小說には此の見當が立つて來た、これが大した仕事である。然るに繪畫にはまだそれが立たない。日本傳統の舊樣式と西洋傳統の新樣式とどちらが眞の新樣式の基礎になるのか、調和か、征服か、新創か、大體の暗示すら立つてゐないのが繪畫音樂などの現勢である、そして此卑近で而も重大な實際問題は、芝居に於て最もよく現はれてゐる。新劇はどちらかと言へば西洋傳統を基礎にしてゐる、併し俳優自己の身にはやり日本傳統の何ものか流れてゐる、そこで多少の濁りと混亂とを生ずる、けれども此方はまだ出發點が單純なだけに新創を目ざして進む道筋が明白である、劇界の前途の光は必ず彼れに非ずして此れにあることを想はしめる。たゞ新創は欲して得られるものでないがために確實に其標本を握り得るまでに達してゐない、これか近眼者流に輕侮せられる理由である。

◎舊劇の中に現はれる混亂は一層甚しい、純粹な舊傳統の中に立籠らうとする能のやうな藝術ですら動々とすれば其役者の

身内から滲み出る現代生活の臭ひに侵されるといふではないか、そして一層自由な歌舞伎劇が、いかに舊い型物をやつても其隨所に俳優の身から發散する新生活の斷片を混ずるの已むを得ない結果になるのは、異しむに足らない、これを咎めるのは咎める方が間違である、藝術は畢竟するに人である、其藝術が眞劍になればなるほど人が出て來る、斯うして舊いものにも濁りがさす、併し此等の大多分は俳優みづからも知らずにやつてゐるであらう、見物の多數も心づかずに過ぎるのであらう、たゞ少數敏感の人々のみがそれに感觸するのであらう、これに反して一方には明かに意識して此新樣式の萠芽を加へようとしてゐるものもある、菊五郎左團治等の藝の中にはそれが見える、これがそこだけ見ればほつとして面白い、砂中に金を拾ひ得たやうな氣のすることもある、併し時としてはそれが爲に却つて他の舊い磨きの部分に疵をつけるやうな結果にもなる。舊いものと言つてゐる中から、これを演ずる人の、抑へんとして抑へ切れない現代味が影を添へる、斯うして舊きものゝ崩れ行く徵候は、歷々として指顧することが出來る。

◎さらに舊いものゝ頹廢する一徵は、殊に下位の舊俳優の人々が、其技藝の意味を解しないのにも認められる、此等の人々が不用意に用ふる臺詞廻しとそれに應ずる動作表情の拙劣さとは型であるべき所が型にならず、實であるべき所が實にならず、舊いものが舊い藝にならず、新しいものが新しい藝にならず、全く藝以下の零位に墜落する場合が多い、これは殊に新物に於てさうである、此等の人々が相寄つて舊いものを壞して行くのである。

◎純形式の歌舞伎は、なるべく之を完全な寶庫に納めて保存しに貰ひたい、友人伊原青々園氏は嘗て今の歌舞伎の面白くない一理由は其下廻りの荒んでゐるに由ると言つた、斯道の內情に通じた大家の言だから、恐らく實情を穿つた說であらう。

◎概して歌舞伎役者には臺詞廻しの下手なのか多い、役者でありながらどうしてあゝかと思はれる、舊劇を見ながら少しく

エロキューションの耳を欹てゝ批評的に聞いてゐると、片つぱしから原理のいろはを破つたものが多い、勿論型になつたメリハリの中には原理を超越して原理を成したものもあるが、それすら下級原理を破つて高級原理を作つてゐるから聞いてゐて感興が乘る、けれども多數のはまだ下級原理のいろはにも達してゐない、ポーズの原則も抑揚長短の心理もめちやくちやなのが多い、これも殊に新物に於てさうである。立派な地位の俳優まで此病にかゝる。隨〻細かい事にまで眼のとゞく人々があれを大目に見すごすのはをかしい、あれらは理解に訴へた修養で除くことの出來る病である。

◎去年の暮、雪のシベリアの一端でも見たいと見つて、ウラジホストックに行つた時、こんど日本へ來るといふ小ロシヤの歌劇團と一座して、プーシユキン座で藝術座の「剃刀」と「嘲笑」とを演じさせた、其時の彼の地の新聞に出た劇評を、友人昇曙夢氏を煩はして露字から翻譯して貰つたのが下の一文である、外人で而も日本語や日本の政治、文藝を研究してゐるものゝまじつた人々が、いかに純粹な日本の現代劇を見るかの一端がうかゞはれる。

プーシユキン劇場

抱月島村氏の指導の下に日本俳優團によつてプーシユキン座に演ぜられた日本劇は我等歐羅巴人の眼に獨特の美を以て輝いた。

一般には言葉は勿論、脚本の梗概さへ解らなかつたとはいへ、兎に角演伎は俳優等の表情が活躍して居つたゞけに、日本語を解しない者に取つても興味を失はなかつた。

觀客の眼前には、獨特の美に滿たされた『日出國』住民の實生活が展げられた。この劇が彼等日本人の氣分に全く適應して

居つたことは明かである。それは多くの多くのレプリックが、劇場に集まつた日本居留民の數多い代表者の間に歡喜の絶叫を喚び起したのを見ても解る。

演出された脚本は『剃刀』と『嘲笑』の二種であつた。『剃刀』は一幕物のドラマで、中村氏の作、『嘲笑』は二幕物の喜劇で、矢張同じ人の作、そして二種共日本語で綴られたものである、慾には簡單な筋書なりとプログラムに附して呉れたらよかつたに、興行者が此の事に氣附かなかつたのは何より惜しかつた。

劇は二種共非常に面白かつたが、特に最初の『剃刀』は觀客の興味を集中した。で、茲には『剃刀』の荒筋を紹介しておく、こゝに一人の理髪師玉吉なるものがあつて、ひどく生活に苦しめられ、運命の打撃を少からず受けて居る。彼は輕薄な浮氣女と結婚した。女は夫を欺かうとして絶えず其の機會を求めて居る。すると玉吉の少年時代の友人で、今は榮華を誇つて居る男が不圖現はれたので、豫て女の求めてゐた機會が到來した。是れを見た夫の堪忍袋は裂けざるを得なかつた。仗度其の友人の髯を剃つて居る時である、玉吉は友人から『あゝいふ細君は到底君には支配出來まい』と言はれて、辱められたので、彼は遂々堪へ切れず、侮辱者の喉笛を、持つてゐた剃刀でグツとやつたといふ筋である。

殺害とそれに續く後悔の舞臺とは最も巧みに立派に演ぜられた。俳優は各自の役割を完全に仕了ふせた。

『嘲笑』も極めて流暢に、適切に、秩序よく演せられた。

女優等には自然花の花籠が献げられた、終りに華美な衣裳を着けた小ロシヤ歌劇團によつてダウイドーフスキイの『バンドウラ』が演ぜられ、非常な拍手喝采を博した。

演劇が終つたから日本俳優團と小ロシヤ歌劇團の寫眞が國民的服裝を着けたまゝに撮された。（大正五年六月）

○

一

先達て本郷座にかゝつたロシアの小ロシア歌劇團の一行は、其興行法がまづかつだのと、團員が事情に通じないで全然彼等の本領を棄てゝかゝつたのとで、あまりよい印象を殘さないのみか、經濟上にも失敗して歸つたようである、あれはもと〳〵ロシアの田舍を重に打つてゐる劇團であるから、たいしたものでないのは勿論であらうが、たゞ彼等の本領としてゐる小歌劇には、所謂ロシア舞踊の源と思はれるものが基礎となつてゐる、先ごろ帝劇で演じたスミルノワの舞踊乃至進んではアンナ、パフロワの舞踊などといふものゝ、未だ精練せられず、都會化されず、若しくは藝術化せられない形に於て、最も多くロシアの地方色を帶びた特殊の舞踊が彼等の技藝の上に認められる、それが面白いと思つた、ロシア舞踊の原始的系統が其の中に認められるのである、國產藝術の系統といふことを考へる上の好資料である。

二

日本の各地に亙つて、今日の我々に最も多く原始的旋律の感じを與へる唄は追分系統のものである。これはもとより音樂的にも歷史的にも研究した譯ではないが、こゝに漠然追分系統と呼んで置く。その底に共通して流れてゐる一種のメロデキーは、最も廣く日本民族の原始感情に觸着するものと思はれる。支那人が形容して哀音切々といふ、その感じもあり、また支那人が亡國の音といふ、其感じもあるが、併し單なる哀音でもなければ單なる亡國音でもない、(藝術の上に非難の意味で

哀音とか亡國の音とかいふ事の無意義であることは言ふまでもない）所謂哀音といふ程悲哀一方でなくそこに一味の悠久があり永遠があり、所謂亡國音といふ程感傷一方、溺惑一方、纎弱一方でなくそこに一味の男性的なタッチがあり幅がある、言はゞ永遠と生とを表面にして裏に戀と死とを忍ばせたやうな感情である、もつともこんな感情味は必ずしも日本民族にも限らなければ追分唄のみにも限らない、他の多くの民族、多くの藝術にも重要な成分として存在してゐることは勿論である、併し私は之を以て日本の民謠又は俗謠の最も原始的本體的なものであると見たい。

三

追分の唄そのものは、さう古いものでもあるまいが、其起原を想像して見ると、馬子唄と舟唄との二系統に想ひ到らざるを得ない、追分節といふ名の考證は、今手元に參考物がないから知るを得ないが、假りに之をかの「右は追分、左は關所」の唄に本づくものとすれば、之は馬子唄系のものでなくてはならぬ、山越峠越の高原の道を、馬子が馬の鈴に合はせて、はる〲と行くかたこしかたを望み見ながら唄ふ唄でなくてはならぬ、山から野原から、松風から、草のざわめきから生れたメロデキーでなくてはならぬ、又假りに此節を今日普く唄ふところの「おしよろたか島」に本家のあるものとすれば、之は香ふまでもなく舟唄乃至北海の波の上を櫓櫂一挺で渡るものゝ音律でなくてはならぬ、遠い青海原、波濤の韻律といふやうなものから生れたメロデキーである、「船頭かはいや」の舟唄などと同系脈のものである、要するに追分節に貫流してゐるあの一種のメロデキーは海の子の韻律か山の子の韻律かといふ問題に歸する。

追分に限らず、博多節、米山甚句、安來節などいふたぐひ下つては磯節のやうな急調なものに至るまで、其どこかに右の原始的な韻律が潛んでゐて、それが日本民謠の生命部になつてゐる。啻に民謠のみならず、淨瑠璃系統のものにも、それが戲曲的、語り物的の性質以外、歌謠的になればなる程同じく此要素がところ〲に影を現はして來る、昔の上方や江戸に發生した端唄類にも、同じ感情は潛んでゐるに違ひないと思ふが、之等は多分に都會的技巧を帶びたものたるを免れまい、地方の民謠にはまた、此基本的韻律の外に其地方の特性を加へたものが多いやうである、弘前地方の與三郎唄、鶴岡地方のおば子唄などの話を聞いて見てもそれが想像せられる、もつとも各地とも、其土地の名所名物などを讀み込んだ後世の唄の類にはくだらないものが多いから、之は論外である。（大正五年九月）

○

四

滿洲の大連はよい所である。私が藝術座の一行と共に大連に行つたのは去年の十一月ごろであつた、永く住んだのではないから、氣候につれて變化する衣食住の具合までは分からないが、多くの設備が西洋風であるから、恐らく住心地のわるいものでは無からう、併し何よりも私にうれしかつたのは、此土地の氣風が一種の自由郷であるといふ點である。日本の勢力範圍にも、こんな都會があるかといふ感がした。歐米に行く機會の無い人は、せめて大連に行つて其世界的な氣分の幾分をでも味つて來る價値がある、或は今後幾年か立つ内には、いつとなく亦日本的な窮屈と規律と干渉とが行きわたつて、あのの

び〴〵とした世界的氣分は無くなつて了ふかも知れない、滿洲の富の咽喉地として、人種上生活上ヨーロッパと支那と日本との會衝點として、種々の點に世界的豐富があるのみならず、統治上の制度其物に大きなところがある、聞けば都督政治と領事政治と滿鐵政治との三頭がどうとかよく其の道の人がいふ、なるほど三權が衝突するやうでは困るであらう、が少なくとも大連に於ては、我々旅のものが直接に感ずる統治力は滿鐵の權力である、從つてそれにはまた內部に積弊があるとか無いとか人は言ふけれども、事實先方に住んでゐるものに取つては、そんな事は直接の問題では無いらしい、我々が半月一月ゐた眼から見ても、滿鐵の統治はむしろ有りがたいもので、決して嫌なものではない、都督なんてものは、宜しく軍隊の世話だけさせて置くがよい、都督政治などいふことは、名からしてすでに、サーベルの音がしさうで、個人を苦役囚扱ひにするものゝやうに想像せられる、斯やうなものゝ手にかゝる人生は必ず苛却せられ冷却せられ荒却せられて霜柱の立つた土地のやうになる。

滿鐵政治、我々はこの名に滿腔の敬慕をさゝげる、この名が持ち來たす色彩の中には、自由と豐富と平民とが最も重要な影を作つてゐる、滿鐵の權勢者には概して若々しい所がある、彼等の多くは其態度に於ても自然半官半民的であろ、この半民的なところがたまらなく心地よい、滿鐵政治の一切にわたる特色、なつかしみの根本はこゝにある。

比較的貧乏人が少ない、人間が若い、生活が潤澤である、衣食が世界的である、必要品も贅澤品も外國から來る優良品が却つて安い、つまり制限的禁壓的な課税などがないからであらう、要するにあらゆるものを無制限に包容して、そこに生ずる生活の渦卷の自然の歸結を見るといふ一種のユートピアを大連に想像する、勿論こんなユートピアは實際どこにも在りはしない、たゞこの心持が或程度まで是認せられて、人生を豐富にする、この心持、この程度がさま〴〵なのである、此點に

於て西洋の社會が十位なら、日本の社會は零位である、其零位の上に若干を加へた大連の生活を私は切なものに思ふ、せめて此町一つだけでも日本に取つては一つのユートピアとしても保護して置きたいやうな氣がする。

臺灣と朝鮮と滿洲とを比べて見ると、臺灣と滿洲には通じた所がある、それは兩つながら產業力が豐富なからでもあらうが、氣風がすべて自由で、生活が豐かである、何かにつけてアバンダントといふ感じがする、そして臺灣滿洲共に此のアバンダンスの底に一つの大きな足跡が印せられてゐる、それは今の內務大臣後藤新平氏の足跡である、實際臺灣に行くと時の政府の何派たるに拘らず、とにかく後藤氏の餘業といふやうなことが、感謝の意を以て、あらゆる階級の人からさゝやかれる、また滿洲に於ても、滿鐵氣分の底に同じく後藤氏のにほひがおびたゞしくする、つまり臺灣滿洲は後藤氏の息で温められてゐる趣がある、後藤氏はやつぱりえらいといふ感じがする、此の點から我々、直接に政治を語らないものも、後藤氏の內政といふことには一種の興味と期待とを喚られる。

朝鮮は土地も痩せて居るが生活も枯痩である、險苛である。もつとも京城だけはさすがに植民地的な豐富さを持つてゐないでもないが、それが何となく內密的で、頭上に何か一枚憚るものを被つてゐるやうな感じである、山水風俗としては、傳來の朝鮮は純然たる王朝以前の日本を二十世紀につぎ合したものである、貧乏公家や落魄した大宮人が田を耕したり商賣をしたりしてゐる、山水は穩かで眠るが如くである、動々もすると、禁欲宗の人たちが隱居するに適するやうな國になりさうである、國家が何のために生じ、個人が何のために生きてゐるかを本當に考へることの出來ない人の手になる政治が、こゝに

も我等の生命を涸渇せしめやうとしてゐる、朝鮮にも滿鐵氣分の注入が必要である。（大正五年十一月）

○

今の東京に劇團として社會的存立の基礎を持つてゐるものがいくつあるか、舊劇にあつては歌舞伎座の歌右衛門仁左衛門羽左衛門等を中心にした三衛門一座若しくは歌舞伎劇團と呼ぶべきものがある、また帝劇に梅幸、幸四郎等を中心にした帝劇々團と呼ぶべきものがある、また市村座に菊吉一座の市村劇團があり、遊軍に左團次を中心にした左團次劇團がある、まづ此四劇團が東京に於ける舊劇の代表者であると共に、殆ど其すべてである。

新派劇では、今日たゞ伊井河合喜多村等を中心とする一劇團が存立してゐるのは人の知る通りである、新劇では事實上藝術座劇團が存立基礎を有してゐる唯一の代表者である、斯う數へて來ると、中央劇團の存立狀態は此の六團體の消息によつて見られる譯である、而して團體の數に於ては、天下を六分した其四が舊劇で其一が新派劇其一が新劇であるが觀劇者の數は打日と入りの鹽梅から見て一團體一回の興行に舊劇が新劇の三倍乃至五倍の割である。今假りに新劇（藝術座を標準にして）一回興行の收容人員を一萬人と概算すれば、舊劇は約三萬人から五萬人を收容する譯になる、新派も一興行としては舊劇に近い人數を集め得ないでもない、更に此數字に團體の數を加乘して見ると、結局舊劇を見る人は十五六萬前後新派は三四萬、新劇は一萬前後といふのが一回興行の比例である、此上に更に一ヶ年の興行回數を乘じたら此差はます〳〵甚しくなるであらう、勿論之は普通に入りのよい場合を標準にしたのであるから、不入の時と例外の大入とは別である。

見物人の種類に於ても舊劇、新派劇、新劇みなそれ〴〵の特色を持つてゐることは言ふまでもない、取りわけ新劇と舊劇

とは格段の相違である、舊劇にあつては、例の通り花柳界を中心にして、見物の大多分が女である、而も中年から老年にかげた女も相應に多く、男女とも町家、商人職人などの階級に屬するものが多い、所謂知識階級とか若い人とかいふ部類とは緣の遠い色彩が其特徵である、新劇の見物はちやうど其反對の色彩を持つてゐる。

新舊劇對照の上に現はれてゐる此數と色とは將來の劇界に於て如何に變化するであらうか。

舊劇團中では、今の帝劇々團や歌舞伎劇團が、より古きものを代表し、市村劇團や左團次劇團がより新しきものを代表して何年かの後に新陳代謝するであらうか、故の團十郎菊五郎等が死ぬ前には世間は今の歌右衛門、幸四郎、梅幸以下を以て舊劇のおのづからにして格を崩し新味を滲透させて行く第一階段と想像し、古格の威權は團菊の衰亡と共に一段落をなすものと考へた、成程細かい點に於ては今の帝劇々團や歌舞伎劇團は團菊よりも善い意味に於ても惡い意味に於ても格の崩れたものであらう、併し大體に於ては此等の劇團がやはり第二の團菊となつて歌舞伎劇の古典的威嚴を保持してゐることは事實である、團菊ほど選り出された偶像となつてゐないまでも、世間は舊歌舞伎の古典的權威をこゝに求めてゐる、新しきものゝ最初の歩みかと思はれたものが、今ではやはり古きものゝ最後の歩みと見られて、いとほしまれてゐる、そしてこの歌舞伎の古典的權威に對する叛逆者は市村劇團左團次劇團でなくてはならぬと思つてゐる、數理上何年かの後に先へ衰亡するものは今の歌舞伎劇團帝劇々團であらうが、それに代つて舊劇界を支配すべき左團次劇團市村劇團が、其頃は又第二の歌舞伎劇團帝劇々團となつて古格の擁護者、補修者となり古きものゝ最後の歩みとなるか、それとも今度こそは古格の破壞者、新しき者の最初の歩みと見られて終るか、とにかく舊劇界の將來の問題は此方面にある、一方はもはや問題を通過したものである。

新派はたしかに今の二三の人と共に亡びるであらう、そしてあとには大したものを遺さないであらう、何となれば彼等は亡ぶべき悪いものを所有してゐる外、善いものはすべて新劇に於て一層よくはぐまれつゝあるからである、それは自然といふことである、眞實といふことである、此點に於ては新派劇は新劇の面前には存在の理由の無いものである。

新劇の將來は如何、多少よくなつた――少くとも俳優の人的價値の多少よくなつた――從つて藝に多少の良心と自然性と眞實性とを增した――第二の新派劇となつて世間的に在來の新派劇に取つて代はるものが一つと、其以上に拔け出やうともがきつゞけて行くものが幾階段かとに、依然として分かれて行くであらう、さして世間の受納性の上に確實な領域を造つて社會的基礎を廣げた上でなくては、まことの新劇の王國は建たないであらう。（大正六年三月）

○

法文

今の社會現象に對して、芳賀氏が提議せられた法科萬能を排す云々の說は、最有意義なものゝ一たるを失はない。但し此說には深く廣い背景がなくてはならない。法科萬能を排する思想は直にまた文科萬能をも排しなくてはならない。要するに今の我が社會のあまりに各科無交涉に分立し過ぎた弊を矯めやうとするのが此思想の根本である。特殊專門の技能は技能として、裏面に其技術者が人として廣い背景を有してゐないのを概する說である。

であるから、文部省の仕事には果たして文科の人が適してゐるやら、大藏省の仕事には商科の人が適してゐるやら、そんな專門技術の問題はこゝで我々の興味を惹くものではない。法科出身の官職者に文科的修養の背景が必要であるなら、文科

出身の官職者には法科的修養の背景が必要である。

併し本當の問題は文科的背景とか法科的背景とかいふことでもない。各科の官職者に人生の理解といふ背景があるか否かといふ事か問題なのである。今の日本の社會に於ける根本の弊害、文運進歩の阻害となつてゐるのは此一點である、各科相互の間に理解が無い。其中の法科方面が國家の權勢部に立つ。即ち日本の國政方面には人生に對する文科的理解がまるで缺けて來る。文科の人を官職に擧げようといふ說も、畢竟は國政の中に此文科的人生觀を交へようといふ意味であらう。

今のいはゆる法科的官職の人の多數は、いはゆる道德習慣の鑄型に對する理解はある、併し眞の意味に於ける人生そのものに對する理解が無い。いはゞそれは依然として人生に對する法科的理解であつて、文科的理解ではないのである。今の社會現象には事每に此の影がさしてゐる。我々は初め之を年齢の上から考へて、今に若い者の時代になつたら變るだらうと期待してゐた。所が今日では却つて若い法科出の人などに舊い人以上に偏執固陋の氣に滿ちた人、他科に對する理解と同情との缺けた人が續出する觀がある。人を造る制度の根本に潛んでゐた病弊が其實のりを見せて來たのであらう。

概括した言ひ方ではあるが、人生に對する法科的理解は、一切を現在にかけて、現狀維持の靜的狀態を主眼とし、文科的理解は之を未來にかけて現狀打破の動的狀態を主眼とする。舊人生を守るものと新人生を作るものとの間には根本の相違がある。而して此二面が如何に相交涉するのが人生の極致であるかは別としても、少なくとも現在の社會に於ける此二大矛盾原理の交涉は、たゞ妥協にある。相互の讓步、相互の寬大より他に途は無い。そして此讓步と寬大とを容れ得るの道は、各分科の專門者が相互の理解を有するに至るの外はない。

日本人はあまりに急燥に專門分科の方角へ走りすぎた。西洋人には、其日常茶飯の水の中、空氣の中に人生理解の修養素

が分賦せられてゐた。專門の智識は持つてゐないまでも、西洋の法政關係者などには何となく文科的人生的氣分の背景を領會してゐる者が多い。多年の自由な傳統と環境の相違が然らしめるのであらう。之に反して日本の社會は此背景的準備を拔きにして、たゞ前景のみが西洋の蹤を追うて專門的に成立して了つた。

文科の問題は要するに今の我が政法機關に人生的統一を要求する聲なのであらう。

教師と生徒

教育といふ事は、極一般的に見れば、殆ど一人として教育家でないものはない、それと同時に之を特殊の事業として見れば、甚しく之に適するものと適しないものとがある。

教育には凡そ三つの興味がある、一は其結果を豫想しないで、たゞ之を一の精神交通として見る時の興味である、此境地に立てば、教師も生徒もなく、たゞ同等の友人同志の神精交換があるのみである。

二は其結果が廣い意味で教師自身の自己擴張になることの興味である。道德的とでも名づけやうか、教育者みづからの感化が被教育者に及ぶ所に生ずる興味である。——興味といへば嫌はれるかも知れないが、要するに目的の達せられる所に興味の伴ふのは事實である。吾々は人生のあらゆる仕事を興味の對象として取扱つて、聊かも不都合はない、人生の事は、澁面つくつてのみ之を行ふべきものではない、教育者の感化と言つても、偏狹な道德的形式を押しつけるのでなくもつと自由な意味で自己に似たもの、若しくは自己の氣に入るやうな人間の出來るのを喜ぶのか此興味である。

三は審美的といつてもよい、教育者を離れて被教育者が自々個々の發展をして來る所に生ずる興味である、樹木を自然に

育てるやうに、色々の個性が己が自々其特長を發揮して來るのに對して感ずる喜びである、つまり個々物を創作する興味である。

此三つの興味中、第二第三の何れかの興味で仕事をする者が、仕事としての眞の教育であらう、而して此ういふ興味を持ち得る者は限られた人々である、例へば私等のやうな性癖のものには、どうも此興味が起つて來ない、私などが教育の仕事に携はると、いつの間にか第一に戻つてたゞの精神交換事業になつて了ふ、教師と生徒との隔てが無くなつて、教室は一の懇談會席のやうになつて了ふ。たゞ僅にそれを支へて呉れるものは、教師が一段高い所にゐて生徒がづらりと低い所に並んでゐるといふ形式の力と、話す事に多少たりとも教師と生徒と知識の深淺があるといふことゝ、今一つは年配地位が違ふといふことだけである、中心から教育者と被教育者、感化する者と感化せられる者、作る者と作られる者といふやうな區別は感ぜられなくなつて了ふ。

教育者みづからが此區別を意識することが困難であると共に、それを實形に現はすことは愈々困難である。言ひ換へれば教育者の威嚴といふやうなものを支持することが困難なのである。斯ういへば、威嚴の保てないやうなものは教育者でないと言ふかも知れぬ。問題はそこである。

小中學程度の教育にあつては教師と生徒との形式上、知識上、年配地位上の差が甚しいために、自然と一種の威嚴は生じて來る。けれどもそれと同時に、精神交換が、たゞ一種の慈愛の情といふやうなものゝ外は成立しない、兩者があまりに懸絶してゐるからである。此意味で眞の教育らしい教育は却つて此範圍に存するのであるが、私どもには、それだけで滿足することが出來ない、やつてやれない事は無いとしても、それをやる興味が生じない。そこで精神交換の出來る範圍の教育、

すなはち大學程度の教育がまだしもの興味になる。上に言つた威嚴の問題も、實は此範圍に於て問題となるのである。

大學教授の職務といふものは在來の形に於ては實に下らないものである。空虚なものである。勿論之を一の職業として見れば、教壇に立つて學生に未知の智識を分賦する、農夫が肥料を取つて草の根に肥料を注ぐのと少しも異なる所のない歴とした必要事業である。けれども、之を教授者みづからの心の問題として取扱ふとき、第一に其唯一の武器たる智識の所藏といふことに矛盾が生ずる、學問は年々に改變して行つても、教授者のそれに應ずる智識は、必ずしもそれ程に改變せられない場合が多い。自己一身の修養としては不斷の研究を忘れない學者でも、之を展開して學生に授與するにはさう〳〵早く準備が行屆かない、蓋し自ら修めることゝ他人に授けることゝは全然別の事だからである。其結果、如何なる博大の學者でも一週何時間と時間を定めて年々歳々倦まず學生に教授する智識には制限が生じて來る。其制限を見せまいとする所に無理の努力が必要となる。或時はごまかし、僞りの分子をすら交へて來る。此時に平然としてそれに堪え得るものは教授界の强の者である。併し少しく魂のデリケ―トなるものに取つては、馬脚を露はさねば露はさぬだけ其心內の矛盾虚僞の分子が苦痛となる。

更に教授者の苦痛はそのいはゆる威嚴問題に存する、少數の相許すに足る者が膝を交へて歡語する場合は、たとひ其間に何等の人巧的威儀を挿まずとも、智識に於て、人格に於て、優者はおのづから優越の地に立つて周圍を追隨せしめることが出來る。けれども多人數を一堂に集めて、一段高い所から之に臨む場合は、學生の方でも一種の群衆心理で虚榮的誇示的な威嚴を教師其ものに豫想し要求する。教師の方でもそれに應ぜざるを得ないやうな氣持になる。赤裸々の自己、若しくは虚飾なき眞の自己、若しくは自然のまゝの自己といふやうなものは露出してはならぬ事になる。如何なる程度に於てか自己の表

面を誇耀し、巧僞の氣を挿んで威儀をつくろふ事になる。馬鹿にされてはならぬといふ樣な修飾の氣が伴ふ。これが眞率な魂には不快でたまらない。教師と學生と、さして違はない人格のものをさも〳〵偉大な人格が小さい人格に臨んでゐるかの如く見せてゐない限り、所謂教育者の威嚴が保たれぬとなつたら、顧みて自己の人格の學生等と同じ凡人であることを思ふとき、忸怩として逡巡せざるを得ない氣かする。それを押し切つて肩肱いかめしく空虛の威福を張り通すものは之亦教授界の強の者である。或者はむしろ退いてそんな僞善の苦しみから逃れ、裃を取つてくつろいだ赤裸々の精神交換に教育者の僞を笑はうとする。

本當を言へば、人を感化するのも、人を作るのも、此世界に於ける自然の結果でなくてはならない。（大正六年十一月）

○

私はこの春から初夏にかけての三四ケ月を九州地方で過ごした。ちやうど其のあひだに九州には例の瀆職事件といふものが起こつて、私も自然、直接間接にそれと關係ある人々と接觸する機會を持つた。そして新聞の記事や裁判の記錄、辯護士の辯論などを見聞するにつけ、所謂「人が人をさばく」事の容易でない事を今さらのやうに思はざるを得なかつた。

法治國の裁判にはたゞ法文がある。併しながら、法文がいかに微に入り細を穿つて蜘蛛の巣のやうな纖維を張つても、人間の心の現れである人事行爲の、複雜極まりないシェーヅに對しては其の萬分一をも盡くし得るものでない事は言ふまでもない、而して人事行爲の價値は殆ど主として此のシェーヅの如何によつて定まるものではないか。此に於てか、法文はどこまで行つても、依然として空なる包裝たるに止まる。之れをピツタリと人事行爲に貼合せしめる瞬間、やはり其の執法者の

生きた心が凡てゞなくてはならない。裁判は法文ではない、やはり、人の人に對しる心だけである、

普通一般の鈍角な裁判事件は別としても、今回の瀆職事件などには、鋭角な全い心の含まれた場合がいくらもあるらしい所謂「みづからさばき。みづから報ふ」に足る心の人も少なくはない。それらに對する執法者の心は、たゞ寛弘博大であるべく、人情の徑路に對する明察であるべくして、決して單なる法文であつてはならない。

外間から之れを見ると、今度の事件には漠然ながらも善惡の兩端がある。道德判斷から言へば反對の價値を附せらるべき兩元素が混合してゐる。その區別が恐らくは法律家としては困難な仕事なのであらう、玆に一人金品の贈與を受けて其の者に法規以外の特殊な便宜を與へた官吏があるとする、此の場合の重大事件は其の贈與者に便宜を與ふるがために周圍に事實上の損害を被らせたか否かに存する。また多少の損害は被らせても其の爲に更にそれを償うて餘りある利益が此の國家的共同生活の形式の上に生ずるか否かに存する。法文は固よりそんな個々の事實問題を超越して、之れを原則に歸納した所に立つといふであらう。他者を害したか否かでなくして、寧ろ他者を害すべきもの、害する恐れあるもの、乃至それによつて來たる賠償を豫算しないものを總括した概念名稱に刑罰を附するのだといふであらう。けれども裁判の生きた心は、この概念的名稱を離れて、個々の生きた事實を明察する所に存しなくてはならない。少なくとも此の自覺と努力の加はらない裁判は死法の亡軀である。

あの瀆職事件の中には、明かに他人の損害、國家の損害を無視した惡の分子とも存在するであらう。が、それと同時に他人乃至國家には何等の損害もなく、また之れ無しと信じて、また多少は之れ有るも更に一層大なる効益あるべしと信じて、法規以外の便宜を或る私人に與へたものもあるといふ、この場合に、何ゆゑ其の官吏が私人から寄附を受けたか、また特に

寄贈を受けたものに其の便宜を與へたかといふ事は、唯人情によつてのみ判斷することが出來る。「未知の正しき人を愛するよりも、共に一個の果物を分から食ひし正しからざる人を愛す」といふのは、現實の社會に提唱し難いことであるとしても少なくとも正不正の表面的評價を離れた場合に最も廣く行はれる眞理である。近きより始めて遠きに及ぶのが人情の自然である、人生の事は、大多分、正不正よりも、はた眞不眞よりも、善不善よりも、この近きと遠きとの區別によつて最後の去就を決せられる。いはゆる人情である、人生の最後の決定力、從つて歷史の、現實社會の最後の回轉力は人情である。他に損害を與へざる限り、贈るものと贈らざるものとの區別、一脈の溫情の相通ずるものと通ぜざるものとの區別は一層公然と法律の前にも是認せられて善いわけである。

この人情の一脈を導き入れた後の問題は、それに對して與へられた所謂法規以外の便宜、すなはち法規を破るといふことの價値如何に存する。若し其の法規が絕對價値のものであれば知らず、法規には必ず其硬固性から生ずる弊害がある。之れを緩和するのは善である。世間でいふところの繁文褥禮、もしくは官僚的究屈、壓制の氣分を緩和して、せめて半官半民のくつろいだ自由な空氣を注入する道は、この法規以外の特殊の便宜に存する。卽ち却て法規を破るところに眞の法規の精神の行はれる場合がある。如何なる場合に於ても、團體的生活には法規が必要である。それと同時に法規の中には自由を注加するの必要がある。官府と民間との關係に於ける『法規以外の特殊の便宜』は實に自由を注加する瓣である。（大正七年八月）

○

去年早稻田の學校に騷ぎがあつてからちやうど一年月だといふので、此のころ又私などにもあの問題の話を持ちかけるも

のが多い。私の今の身分は全く學校といふ事や早稻田といふ事から超越してゐる積りであるが、それでも問ひつめられると多少の關心事にはならざるを得ない。

あの問題の裏に潛んだ個人的黨派的情實的の紛紜はどうあらうとも、たゞ一つ今日に至つて明白た契點は、根本的、徹底的な開放主義、選擧主義の要求といふ事である。專制政治に非ず、寡頭政治に非ず、秘密政治に非ざる學校行政を要求する心持ちが、あの騷ぎのすべてを一貫する眞の動機でなくてはならない。そして此の動機のみが眞であり善であり、之れに逆行し若しくは之を緩和しやうとするものが、僞であり、惡であらねばならない。

現在の狀態は、要するに此の解決に達する途すがらの中間狀態であること、ちやうど日本の政治狀態と同じである。早稻田の學校政治が、今やつと日本の國政と似た階段に到達したのである。併し國の政治は大規模であり復雜であるだけに、目下のやうなたど〳〵しい順序と年月とを經ざるを得ない理由もそこに存在するが早稻田の學校政治などはそれこそ學者もゐれば、理想家もゐる。選擧民衆はすべて知識階級であるといふのだから、もつと〳〵明快な、自由な、大膽な足取りで單刀直入に行きつく所へ行着かなければ嘘である。之が第三者から見た早稻田に對する不滿足である。大體の精神に於ても施設に於ても、却つてこの明快なるべく自由なるべく大膽なるべき早稻田が左顧右眄、因循姑息の間に臆病な足取りで動いて行く。（之は一面には所謂私學の繼子的、日蔭者的、お慈悲的事精から來た已むを得ざる態度でもあり、それが習ひ性となつた病弊でもある）之れに反して帝大あたりの精神や施設に早稻田などのかけても及ばないやうな、思ひ切つた革新が芽ぐんで來る。此等は一種の皮肉であり、悲慘である。

第三者としての希望を言へば、此の際出來るだけ早く中間狀態をやめるがよい。車を坂の中途に止めてゐるやうな地位は

いつまで立つても動揺不安の元である。而して中間狀態をやめる最善の方法は、理想的には、早稻田の一切の狀態を今一度如何なる犧牲を拂つても騷動以前、出來るなら第一期の原形に戻す事である。言ひかへれば所謂三頭政治の圓滿であつた時代に戻して、彼等三頭をして全く虛心坦懷、最徹底と信ずる形の選擧基礎を造らしめ、其の選ばれたるものに一切の政權を讓り渡す事である。中間狀態、折衷狀態、過渡狀態を立てずして三頭の情理兼ね至つた專制政治から、一躍して徹底的な選擧政治、衆議政治に滑かな交代をすることである。學校團體なればこそ斯うした理想的拔本的な改革も行はれ得るし、また行なつて誇りとするに足るのでもある。だら〳〵と幾つも〳〵中間の過渡的階級をつけて、それを寸進尺退でおづ〳〵と渡つて行くのでは、理想家のする仕事といふ面影はなくなる。あまりに俗務的なものになつて了ふ。一般衆俗を相手にする社會的の仕事と違つて、學校といふものこそ、上から下まで徹底した所謂「選ばれたる多衆」のかたまりである。其の政治にはもつと〳〵理想的な徹底的な動きがついて來なくてはならない。當局者は此の事實を忘れすぎてゐる。

圓滿な三頭政治の回復は永續することを要しない。三頭みづから學校政治を行ふ必要もない程である、彼等はたゞ新しきものを生むために暫時みづからの心に感激の火を點ずればよいのである。協力して最善の制度を作つて、その制度が生んだ人々に後事を托して退けばよいのである。唯其あひだ丈、三頭者の胸に今一度學校を思ふ熱愛からすべてのものを容れ、すべてものと和する大聖の心が働けばそれで結構である。

三頭によつて作られる制度の目的は、言ふまでもなく選擧基礎の確立である。そして學校政治に對する選擧民衆は校友である。校友から最も徹底的な方法で評議員乃至維持員を選出することにさへなれば此の方面の問題は比較的容易に解決せらる。要はたゞ從來の終身議員や天降り議員を撤廢すればよいのである。

雖關はむしろ校友團體に對する教授團體の立場にある。教授團體は校友團體と對立する一つの選擧民衆であるか如何。若し之れが選擧民衆でないから、解決は簡單であるが、恐らくそれは許されない事であらう。教授團體が選擧民衆であるとすれば、其民衆の因つて生まれる任命權の所在が問題になる譯である。けれども此等の問題すら、專門的に立ち入つて考究すれば、結論は出て來る。要するに制度そのものは、それが徹底選擧主義で論理の合つたものでさへあればよいのであるからさほどむづかしい事でもない。

必要なのは其の制度が立つ第一步に要する人格の力である。情理圓滿で、海のやうに博大、天のやうに公平な人の力が欲しい。それは、すべての制度といふものゝ行はれる第一步には、必ず何れかの點に制度を超越した力、生む力、授ける力がなくてはならないからである。第一の發動力は天降つたものでなくてはならないからである。此の第一の力を生むものは、海の如く博く、天の如く平かでなくてはならない。大聖の域から發するものでなくてはない。これは今の早稻田の何れに求めても得られるものではない。たゞ夫の三頭の情意が、兎も角も或程度まで美しく調和してゐた時代に其の面影を求める外はない。三頭の圓滿な調和點に一個の人格を求めよ。そしてそれに全く新しきものを生ましめよ。それはたゞ生むまでの三位一體であつてもよい。

併しながら之も今となつては私の夢たるに過ぎないのか。（大正七年十月）

題言

眞我

人間は自ら飾り僞る動物である。眞我に達するの困難は、必ずしも無我に達する困難に劣るものでない。切に眞我の人を想望する。

冷氣ある個人、溫氣ある個人、熱氣ある個人、要するに夫が眞實でさへあれは、何れでもよい。困難は其の冷を冷とし、溫を溫とし、熱を熱として傳へる點にある。熱を以て冷を議し、冷を以て熱を議する謂れは無い。

今日の如き時世にあつては、百人寄れば百個格別の世界である共通同感の賴みは如何にも果敢ない。各人はたゞ默々として其の行かんとする所に行く外はない。

我等が思議言說の底には、たゞ默の一字があるのみだ。それをお互に斯うして口を動かし筆を動かすといふのは、多分に外から强ひられる結果である。苦しいながらに絞り出す叫聲に外ならない。

植木屋

植木屋といふものはよく煙草を吹かして休むものだ。庭でも造らうとすると、二三十分もそこらの石や木をいぢくつて居るかと思ふと、軒先に腰を卸して、啣へ煙管をしながら、ぼかんとして庭を眺めてゐる。半時間でも一時間でも眺めて居る。併しあれが庭造りの人生である。石を動かしたり土を返したりして居る忙しい間が彼等の實行の世界で、啣煙管でさも閑さうに見える間の頭の中が彼等の宗教であり。哲學であり、文藝である。玆に人生の縮圖があると見れば、面白いではないか。

眞の生活

次の一年のあひだ、私は如何なる瞬間に於いて、眞の生活を經驗する機會に出會ふであらうか。一毫の見えも無い、僞りも無い、恐れも、遠慮も、無理な緊張も、だらけた單調も無い、大地から生えぬいたやうな生活に、大膽な滿足を味ふ機會がせめて瞬間たりとも幾たびあり得るであらうか。我々は之に渇して居る。

生命

眞と妄、美と醜は、共にたゞ有と無、生と死、の別名である。

生命のシムボルは美となり、死のシムボルは醜となる。

生命を味はんとする心が、美の要求である。

對句哲學

理想を視てゐる心は宗教である。
理想を尋ねてゐる心は藝術である。
彼れは夢幻であり、
此れは事實である。
攝取せられた滿足と感謝とから宗教が生まれ、
求めて得ざる不滿と絕叫とから藝術が生まれる。
昔の藝術は宗教の下風に立ち。
今の宗教は藝術の下風に立つ。

藝術の底には常に眞理の認識が一粒のダイヤモンドの如く埋んでゐる。
之れを感情に求めれば、唯はつと思ふ驚きである。
之れを智識に求めれば、終に窮極する所を知らない。
畢竟千古不塡の深淵を認めたのである。
相手が犠牲になつて聽いてゐると思へば、話すのがいやになる。

自分が犧牲になつても、合槌を打たねはならぬ對話は侚いやである。
犧牲を拂はせても、犧牲を拂つても、何とも感じないやうに神經を馴らすのが世渡りの道である。

即興

『人形の家』開演の第一日には招待客が多かつた。ノラとヘルマーとの對決以後になつて笑ふ人は殆ど無かつた。

第二日からは大多數が普通の會員であつた。其の中には又傳手の勸誘を受けて義理に入會したやうな見物も可なりあつたらう。踊りのお淩へを見に行く心持で來たものも勿論あつたらう。ノラがヘルマーに對して、話したい事が澤山あるから坐つて下さい、といへばげら〱と笑ふ。私はあなたの前で藝當をしてゐたのですよと、言へばげら〱と笑ふ。何よりも第一に私は人間です、と言へばげら〱と笑ふ。斯ういふ見物が二三分はあつた。さうかと思ふと、すぐ其隣席では、若い奥さん連で、急所々々にそつと涙をふくのも見られた。年をとつた婦人では、あんな女が本當に居るでせうか、とさゝやいて居るのもあつた。

デューゼ及サラ、ベルナールのマグダ

ズーダーマンみづからも、デューゼのマグダを見なかつたら、自分がどんな風に書いたのだか知らなかつたかも知れない。デューゼのマグダを見たら、前に見たサラ、ベルナールのは記憶から消え失せて了つた。もつとも貴婦人訪問の場と始めて牧師と話して大笑する場とはサラの方がよかつた。

今一つ印象を殘してゐるのは、ケラーを戸外へ逐ひ出さうとする場で、齒を喰ひしばり虎のやうな唸り聲をする得意の藝である。併しデューゼはそれに比べて如何に單純に、如何にいき／＼と、如何に意味深く、あの言ふべからざる侮蔑心の閃きを唯一句に現はし得たことよ。此第三幕の終りに於ける時ほど英國の見物が魂を奪はれて了つた例は甞て見たことが無い。

（ウヰリアム、アーチャー氏）

沈默の藝

あらゆる存在の原始と終極とは沈默である。それが展開して動作となり、更に展開して言葉となる。言葉は表現の頂點を示すものであると共に、最も多く深奧な根本存在と遠ざかつてゐる。

俳優の技藝を見るに、言葉の表情は第一歩である。動作の表情は第二歩である。沈默の表情は第三歩である。完全な沈默の表情に達した瞬間は最も深い意義を發揮して來る。

チェスタトンとショー

十一月二十二日、夜半ペンを握つたまゝ呻吟してゐる、題言など、書けさうな氣分は湧いて來ない。頭の底が微溫を帶びた鉛の板で張りつめられたやうである。

チエスタトン氏はロンドン兒を以て誇りとしてゐる人である。其のユーモアもたしかにコクニー式だ。廣く言へば英國式だ。「成功術の書は書物を書くことにすら成功し得ない手合によつて書かれる。第一世の中に成功なぞといふ事はない筈だ。

成功とは唯有るといふ事に過ぎない。富豪は富豪であるのが成功だし、驢馬は驢馬であるのが成功だ。生きてる人は生きるに成功し、死人は自殺すれば成功する」などゝ言ふ所はとぼけてゐて、それでおとなしい所がある。其のチェスタトン氏が別の書物でショー氏を評すると「トルストイもショーも戰爭と戀愛が嫌ひだが、トルストイはそれ等が實際であるのを嫌ひショーはそれが理想であるのを嫌ふ。ショーは戰爭は構はないが戰爭にあこがれるのが反對だ、彼れは戀は厭はないが、戀を戀することに反對だ。トルストイは一切戰爭を斷て、戀より遁よと叫ぶ。ショーは、戰爭はよいが戰爭を讃美する歌はいけない、戀はよいが戀に魅せられるなと叫ぶ」といふ意味の事を言ふ。チェスタトン氏がショー氏を解する。其配偶がおもしろい。ショー氏が英國人を罵るのを聞くと「彼れは何をするにも主義を擔ぎ出す。愛國主義で君等と戰ひ事業主義で君等のものを盜み、帝國主義で君等を奴隷にし、男兒主義で君等に亂暴をする、彼は忠臣主義で國王を扶け共和主義で國王の頭を刎ねる」是れはアイヤランド人たるショー氏の滑稽である。

四十歳

二十歳が所有してゐるすべては Love である。

三十歳にはまだ其の色香は殘つてゐる。併し肉の方がまじつて來る。最も花やかなのは功名の心である。

四十歳にはもう love は無い。たゞ其の追憶がある、羨望がある、悔恨がある。功名の心にも、最早空想の花は咲かない。不安の影がさす。

love と ambition の殘軀！ 四十歳のすべてには臆病な打算の心が息をしてゐる。

四十歳に至つて、無邪氣を暗示する顔の筋肉が全く隠れて了ふ表情の何處かにふてぐ〵しい、物凄い線が浮び出て來る。呪ふべき四十歳よ。

二途

言葉は最も具體的なものか最も抽象的なものかゞ最もおもしろい。中間のものは總てだれる。
藝術はこの二つの言葉の何れかを求めやうとしてゐる。
眞理は最も個々的なものか最も統一的なものかゞ最も正しい。
哲學はこの二様の眞理の何れかを假定して立たうとする。

田舎の友人

――君、田舎に老い行く寂しさはもつとものの事ながら、せめて斯う思ひ直して見給へ。我等都會に住むものは、却つて都會の眞の生活を味ふことの出來ないものである。それに對する感受神經が鈍くなつてゐる。また家庭がそこにあり、職業がそこにあつて見ると、それらの周圍が到底自由な夢の世界に這入ることを許さない。また旅の心で人生を味はふ、あの甘淋しさは都會の常住者には得られない。また、卽いてゐては都會も散文的になつて了ふ。離れて理想化してゐればこそ、詩的である。
身は田舎にゐて都會にあこがれる心を失はない人、そんな人が年に一度か二度づゝ都會に出て、其の渇いた心と新鮮な感

受性とで、心ゆくまで、都會生活の杯を吸ひ乾してゆく。家と職業との散文から去つて、都會の旅の詩に這入る。田舍にゐる君等こそ、まことは都會の生活を餓ゑたるもの﹅如く味ひ得る幸福な人である。

初冬茶話

文藝作品に於ける個性の發揮と云ふ事は、よく考へないと飛んでもないはきちがひを惹起す、何でも作家は自己の箇性を發揮しなければならぬと云ふので、殊更に其の方面を狙つても秀れた作が出來るものではない、否、寧ろ其樣な態度は愼まねばならぬ。虛心平氣でゐて猶ほ且つ自己の箇性の現はれたものこそ尊ぶべきである。

ツルゲネーフの作品など一面から見ると無特色のやうであるが、よく味はふと、矢張り優しい懷かしい作者自身の俤を偲ぶ事が出來る。其所に作者の偉大なる箇性を伺ふ事が出來る、卽ち一見して無特色のやうに思はれたのは、取材の範圍が廣く、あらゆる社會階級の生活が萬遍なく描かれてゐる爲に、一時目をくらまされたに過ぎない。作者には何人を模すべからざる特色が嶄然として存してゐる、箇性の發揮も斯うなくてはならぬ。

近來『自然派の小說は賣行が惡い、もう自然主義も下火だ。』とか「紅葉や漱石のものは何時までも賣行が止まらぬのに、自然派の作物は思はしく賣れない。之れ畢竟自然派の小說の大したものでない事を證據立つるものだ。』とか云ふやうな事を耳にする。

然し之れは云ふまでもなく誤れる見解である。賣れるとか賣れぬとか云ふ事は、決して文藝の價値を上下する標準にはならぬ。紅葉や漱石の小說のよく賣れるのは、之れを辯護して云へば作者がよく人生を觀察してゐるからだとか、或は描寫が眞に迫つてゐるからだとか、其他いろ〳〵の理窟はつく。之れと等しく自然派の小說の賣れ行きの惡いのは、まだ一般の頭がそれを味ふほどに進んでゐないからだと辯護することが出來る。然も其れは要するに水掛論である。

けれども玆に一言すべきは、文藝には利用功生を目的とするものと、單なる娛樂を目的とするものと、人間の內部生活を披瀝して自覺を促すものとの凡そ三種類あつて、其中娛樂を主とするものは多く讀まれ、自覺を促す目的のものは餘り讀まれないと云ふのが、現今社會の大勢であると云ふ事だ。

利用功生を目的とするものとは、假令ば尊德主義を仕組むとか、或は忠臣義士の傳記を骨子とするとかしたもので、云はゞ直接世を益し社會を利する爲めに文藝に應用されたものである。娛樂を目的とするものとは、云ふまでもなく人を樂ましむれば其れでよいのである。此れまでは多く此種の文藝が行はれた。卽ち小說とさへ云へば面白いもの、氣散じに讀むものときまつてゐた。

ところが其他に外部の生活のみならず內部をも描寫し自覺を促し內省を迫る種類の文藝がある。自然主義文藝などは卽ちそれに屬する。だから讀んで考へさせられ、苦しい辛い事はあつても、唯だ單なる氣散じや面白味を得ることは六ケ敷い。

世人は多くまだ小說は面白いもの娛樂的のものと云ふ考しか有つてゐない。其所へ突然趣きを異にした小說、卽ち苦しい小說、考へさせる小說、氣をつまらせる小說を押しつけられる、容易に其れを味はふ譯はないのである。無論今の我が自然主義の小說にはまだ滿足すべき作品は少い。が、假令滿足すべき作品が現はれたにしても、面白味、氣散じを目的とする讀者

には迎へられそうにもない。之れを要するに賣れる小說、賣れぬ小說は一般の讀者が何の位の程度の頭を有するかを檢する標準にはなるが、以て文藝の價値を云々する事は出來ない。

嘗て、二葉亭氏が『お伽文學の題材は、犬とか猿とか云つたやうな動物に取るが可い。』と云ふ意味の事を云つてゐるのを何かの雜誌で見て、至極面白いと思つた。私も實は其樣な考をもつてゐたのである。幼年の頃の心理は動物と少しもかはらない。だから動物の爲る事、思ふ事が幼年の者には一々成る程と合點が行く。此の意味に於て二葉亭氏の『平凡』中に描かれた犬などは、立派なお伽文學である。かの在來のフエヤリー、テールスの如きはお伽文學として決して上乘なものではない。確かに改良の餘地があると思ふ。

英國から歸つた當時は、日本の繪畫展覽會を見ても、彼我の相違が著しく目についたが、今日ではそうまで感じない。此れは彼國でのインプレツションが薄くなつた勢もあらうが、一つは我國昨今の繪畫が非常に進步したと云ふ事も爭はれぬ事實だ。

今秋の文部省の繪畫展覽會も一寸覗いて見たが、西洋畵にも日本畵にも新しい試みが澤山あつた。彼の評判になつた『落葉』の如き、日本畫であるから、一體ならば線條に重きを置いて、描かれてゐさうなものたが、そうではない。落葉の線條には力や勢を一切拔きにして、色彩と線との調和を西洋畵式に試みてある。

此れは一例に過ぎぬが、其他種々日本畫と西洋畫との折衷、調和を試みたものも澤山あつた。研究の題目になるものが多かつた。（明治四十二年十二月談話筆記）

予の道樂

道樂と言つて取立て言ふ程の事はないが、私は寫眞に深い興味を持つて居る。私なぞのは本當の道樂なんだ。六七年も前歐洲へ行つてゐた折に、後の紀念になるから、私もふと思ひ付いてロンドンで機械を買つたのが病み着きである。始めの中は專ら書物に就いて稽古をした。歸朝の節は矢張りロンドンでその頃流行の型の新しい、疊み込みの手提げを買つたが、三四年も經つた頃は最早最新形とは言へなかつた。機械の方面の進步の急速なことは驚くの外はない。

私が寫眞を面白いと思ふのは、あゝして理窟の合つた、何處までも機械的のものだけれども、私一人の感じか知らないが不思議でならない事がある。それは彌々撮る間際に、ゴムを把むなり絲を引つぱるたりして、シヤツターを開ける、その瞬間の氣持ちが、現々と寫眞の上に出てくる事だ。私には是れが有り得る筈だといふやうな氣がする。そこが非常に面白い。殊に早撮りになると、全く一瞬間の業だから物などを考へる隙はない譯だが、それすら玉を把む刹那の氣持が、いくらかグズ〳〵したやうな躊躇の氣味のあつた場合には、寫眞に撮れた物象が分明してゐない。スツキリした心持になり、決斷力の働きで把むと、寫眞の繪は何となく銳く出て來る。

丁度字を書き、繪畫の筆を執つてその時の氣分とか、その人の性質とかゞ現はれるやうに、シヤツターを把む瞬間に指頭を通じて、撮る人の氣分、性質が出てくるのだと思ふ。最も機械的なものであるだけ、それだけ、手際の上に鮮かに人の精神を傳へ得るのである。

自分でやつて一番興味のあるのは、撮る時よりも撮つた後でに現象する時の方が趣きが更に深い。暗室へ入つて赤いランプの前で藥液の中へ寫眞の種板を浸けて待つてゐると、軈て少し宛繪が浮き出して來る。如何な風に出るかと思つて視詰てゐる時の氣持は何とも言へない。撮るだけは自分がやつて後は寫眞屋に賴む人があるが、あれでは寫眞の興味は淺いと思ふ撮る時とか後で燒きつける時とかは面白味はゴク薄いので、何と言つても藥の中に浸して現象する時が、興味の中心になるやうである。

私の知つてゐる範圍で好い機械を購つて歸朝した人では、今の監獄局長の法學博士小山溫氏がある。一緒に獨逸に在た折小山君がベルリンで購つた機械だが、金が懸つてゐるから物は好い。同君も歸朝後は忙しいから餘り撮らないだらう。

それから今一人、越後の長岡に病院長をしてゐる醫學博士の谷田吉太郎氏、此人にも西洋から知己になつたのだが、谷田君は好い機械を矢張り獨逸で買つた。歸る折には船で一緒になつて競爭して寫した者である。下手同志がやる事ではあるけれども、何うしても機械の好い方は寫眞も鮮明に出來上る、寫眞機で一番大切な所はレンズで、金の懸るのも其處だ。二十圓か三十圓程のレンズと百圓乃至二百圓もかけたレンズとは、自から映つた寫眞の繪に甚しい相違があるので知れる。

言ふまでもなく、寫眞の技術は最も微妙を極めたものである。何故かと言ふと光線を相手にして些細な出來不出來を爭ふものだからだ。機械的だけれども意味の深い微妙なところがある。手に取る事の出來ぬ光線を利用する者で、寫眞ほど精巧

を極めたものはあるまい。

私は稽古した處が西洋なんだから、その時の心持をその儘日本に持つてくることが出來ない、と言ふのは、早い話がそれ〴〵國に據つて空氣が違つてゐる。隨つて光線にも相違がある。更にその光線を反射して見せる自然、家の形とか、その顔の色とかも異つてゐる。天氣工合も決して一樣でないから雲の象も變つてゐる。然ういふ工合に稽古をしてゐた時の對象となるものが、日本に歸つてくると凡て標準が違ふから、再び稽古をやり直さねばならぬ事になる。

又寫す人の手心で、光りにさらしてゐる時の長短といふ事が重大である。向ふの丘を何かの背景にするのに、その物の距離といふ事を考へるのも、又重大な條件だ。それから光線の分量によつて、シヤツターを開ける時の穴の廣さに加減の要ることも重大だ。斯ういふ工合に七ツ八ツも重大な條件が揃つた上でなければ最も完全な寫眞を撮ることは出來ない。

その上に繪心といふ者がなければダメである。寫す物の位置とか配列とかいふ事を見繕つて、扨て初めてシヤツターを把むのだから始めの中は仲々やりにくいものだ。私なぞも西洋から歸つた當分は、何うも手心が違つてゐるので思はしくなかつた。唯時々子供を連れて其の邊へ出て見るに過ぎない。私の道樂はまあ寫眞ぐらゐなものだらう。（明治四十三年二月談話筆記）

此頃の事

劇の事

久しぶりで歌舞伎座に這入つた。序幕の鵺退治、一番目の佐倉義民傳、斯んなものでも、以前は大劇場の人いきれ、床の淨瑠璃、場内の燈火、色彩等で我々を醉はせて一種の夢幻境に引き込れ得たこともあつた。併し今日の我々はもう駄目だ、そんな事は昔の夢であつたとつくづく感ずる。

團藏の宗五、松助の甚兵衞、たゞあれ丈けのものとして見たら枯れても居やうが、枯れたばかりが我等の求める藝術ではない。昔の人はあれ位の事をするにも何十年といふ舞臺功を積んで始めて至り得たかも知れないが、今の人なら、あんな事なぞは、舞臺度胸さへ一通り極まれば、何でもなく出來る。藝術などゝいふべきものでは無いと思つた。又作そのものが元來貧弱淺俗を極めてゐるのだから、藝をすればする程、小細工で見物の涙を無理に取らうとする惡刺戟の外に何ものも無くなる。自分等も何所かで一寸泣かされた。併しそれは決して藝術の涙ではない。

中幕から二番目にわたつて、始めて藝術的な刺戟な受け、歌舞伎座に來ただけの滿足を得て歸つた。伊原氏の『出雲阿國』高安氏の『櫻しぐれ』二つとも固よりロマンチツクな歌舞伎劇であるから、自由劇場や新社會劇とは全く別な趣味であるが、舊劇としては流石に義民傳や鵜退治とは品の違つたものである。櫻しぐれは脚本として阿國よりも甘いもの淺いものであるが、それだけ俳優によく嵌つて、且つ一つは既に手馴れて、作者が覗つたらうと思はれる所まで演じ了せてゐる。從つてしつとりした味が出かゝつて居る。廓生活の波瀾の裏に、上方趣味の淡い茶味禪味の魂を配合した作意と見えるが、我々の趣味から言へば、人間の富貴を盡した千金の茶碗を、松風の音に聞きほれてばたりと取り落しながら、淡然として心の耳を澄す、と言ふ樣な所まで、せめて行つて欲しかつた、それを折角の所で武士が女の首を切りに來たり雨宿りが親子の奇遇であつたりの大芝居にして、好い心持の夢を破つて了ふのは、作者とても本意でやつた事ではあるまい。

出雲の阿國はずつと深さを持つて來てゐる。それと共に演技の方がまだ脚本の隅々まで充實して居ない。ほんの輪廓だけが舞臺の上に動いて居る。從つて大走りの筋語りを聞かされるといふ感じの所がある。感所が十分に利いて居ない。それにも拘らず面白い、近頃での美い歌舞伎を見たといふ氣がした。梅幸の淀君に一段の高貴性が加はり、仁左衛門の山三に一段の熱情が加はり、門之助の阿國に一段の活達が加はつたら、性格も立派に出て來たであらう。武士を棄て大手を振つて天下の藝道を濶歩する浪人のデカダン心理が劇の精神になつてゐるのが最もおもしろい。在來の舊劇と品質を異にしてゐる所以である。脚本の細い難を言へば、此の新觀察を鋭く言ひ現さんとして、知らず〳〵新樣になり過ぎたと思はれる言葉の二三ケ所不調和に聞えるのや、捨丸が月をおもちやに欲しいといふ所、大事の所ながら作者の思ひつきが稍不用意に出すぎで、わざとらしく聞えたのなどが其の例であらう。月のくだりは、其の前に一寸でも月の事があつて、そしてあの白に移れば無難

であつたかも知れぬ。兎に角此の芝居は、もつと舞臺の上に熟させて、且つ所々脚本を違へた後に不自然となつた點などを改めさせて、しつとりしたものにすれば、優に新歌舞伎の十八番物となる價値がある。

畫の事

神田の琅玕洞に正宗得三郎君の油繪展覽會を見に行つて、印象派色彩派のモネー等が流れを酌んだ同君の新畫風を愉快に感じた。白馬會にも一つ出て居るやうであるが、　洞のやうに二十幾面を一所に並べて見ると、始めて其特殊な感じが明白に味はれる。今のところ此青年畫家には、柔かな蕩けるやうな色調は無いが、强い、堅い、紫がゝつた、一味の調子が如何にも心地よく、我等を刺戟する。例へば黑田氏の小幅などに、ふわりとした、優雅な、デリケートな氣持の漂つてゐるのとは、餘程樣子が違つてゐるが、色彩そのもので人を魅する所は共に色彩派である。

たゞ黑田氏の此の種の作には、描かれた自然そのものゝ感じが色彩そのものゝ感じと調和して出て來る。正宗氏のになると、更に一步を色彩の方に進め、殆ど色彩そのものゝ爲に畫中の自然の意義が蔽はれんとしてゐる。(自然の意義といつても決して形似をいふのではない、只感じをいふのである。)從つて更に多く裝飾的にならうとしてゐる其丈此の作家は天地をたゞ色彩のみで見たいと心がけて、自ら意識して之れをやつてゐるとの事であるから、行くところ迄行つて見るのは面白からうが、我々から言へば、自然の感じの方が少し足りな過ぎるのを不滿足に覺える。色彩に全力の興味を集めて、色彩のために色彩を用ひたやうな感じの交じる恐がある、同時に所謂色彩の合奏などいふ味は如何にも鮮かに出て來る。結局同じ畫幅でも人物よりは景色、景色よりは靜物といふ風に、自然の意義の少ないものだけ、其の感じの出易いせいか、よく調和して

一種俊鋭な色調の畫幅を成してゐる。例へば琅玕洞にかゝつてゐる林檎の圖などが其の標本だと思ふ。兎に角斯ういふ強い色彩派の前途に少なからぬ興味を覺える。

竹久夢二君と宮崎よへい君との漫畫は、此のごろ女學校の娘連などの間に評判であるといふ。宮崎氏のは多く見ないが、竹久氏の畫は前から見てゐる。殆ど素人から這入つて一風を廣めた所が其の力である。女の眼、女の肩、其の線、其の想が特色といふよりは寧ろ癖、癖といふよりは偏狂に近い。挿畫界のセンチメンタリズムといつてよい。時としては其の畫面の線條が全く散じてしまつて、マンネリズムに陷つて淺俗の嫌を生ずることのあるのが、其の弊であらう。動いて居る人間よりも、じつとして居る人間、その中でも特に或る限られたる情態のみが最も的確に君の筆に入つて生かされる。此のリミツトを成るべく廣げると共に、技術の上に一層のみがきをかけて、當世詩畫の一流を完成することを此の畫家に望む。

宗教の事

綱島梁川、近角常觀、伊藤證信等の諸君が種々の方面から一種の宗教運動を起したのも、もう數年前の事になつた。其の中の伊藤證信氏は此頃再び『我我活』と題する三四頁の小雜誌を出して、信仰の變動を公にしてゐる。所謂無我愛の教義を一の獨斷であつたとして放棄し、新に自己の研究から出立しやうといふのである。而して其の手段として自己告白の方法を採つてゐる。而して落ちつく先をば略ぼ豫想して、周圍の恩惠、自己の發揮、といふ兩面の交錯點に愛といふ結論を見てゐる。

氏の無我愛の思想は、精しく知る機會が無かつたが、其の名によつて察すると、日常自然の生活に何等かの努力的變更を

加へて、此の理想に到達せんとするものであらう。それが「我生活」に於いては、日常自然のまゝで眞に愛を成就するといふのであるから、そこに力行的と自然的との差を生ずる。併し一歩を進めて考へると、結局兩者は似たものになる。周圍は果たして必ず恩惠であらうか、自己の發揮は果して常に愛であらうか。其の反對の事實も存在するといふものがあつたら、「我生活」の立場から言へば、それはまだ力行の至らぬ生活であるから、努力して周圍を恩惠と見、自己の發揮を愛に合せしめる樣にする外はないであらう。卽ち天地を愛と見、自己を愛にせよといふ教義に外ならない。またさうなつてこそ宗教的衝動力が生ずるのである。

要するに斯くして氏の無我愛教に歸ると共に「周圍は壓迫なり、自己の發揮は呑噬なり」と觀る者に對する根本的解決の力が亡びて了ふ。併しながら、是れは伊藤氏一人の問題ではない、今の凡ての宗教が衝突すべき根本の事實である。「我生活」も恐らく此の問題に向つて、先づ立ち直らうとするのが趣意であらう。讀物としても、平凡微賤な生活の告白が却つておもしろい。告白といふものが元來絕對的眞實の告白になるかならぬかなどゝいふことは問題ではない。たゞそれをする瞬間の動機が眞實でさへあればよい。告白はたゞ自己正面の僞善の皮を一枚々々に剝ぎ棄てゝ、暗いことの出來ないやうに、それを白日の下に曝す、言はゞ自家修養の手段である。

無愛我といへば、嘗て伊藤氏の無我教と云ふのに悟道の緣を得て、早稻田中學校の國語教育の職を抛ち、妻子を殘して入山した宮坂晚華(また芙蓉と號す)君は、其入山の前一ケ月ばかりで會つた時は、熱心に無我愛力行の希望を語つてゐた。然るに病を得て歸京した後「早稻田文學」で發表した文によると、君は宗教を專ら感味の方面から說いてゐる。其の感味といふ中には固より宗教的日常の超越的意義も含まれてゐるやうであるが、兎に角、自家主觀の心の味にまで引き寄せて來たのは

面白いと思つた。其の人も今は亡くなつた。

心の味としての宗教は自分等としても持つてゐる。同時に其の宗教は人によつて様々であり得なくてはならぬ。然るに宗教家は之れを許さないて此の以上の或物を要求する。我々の所有してゐない宗教を説く。斯ういふ意味では自分等の生活は無宗教の生活である。此に至つて何時も思ふのは、彼の宗教を有すと稱する人々の生活と、無宗教的な自分等の生活と、果たして何ちらが高價であるかといふ疑問である。（明治四十三年六月）

廿四時間と僕の生き方

一

私も書物に遠ざかつてから、もう三年まぢかになる。其頃の私は、毎日必ず少くとも一度づゝは書齋に閉ぢ籠つて何某教授の何哲學の系統といふやうな嚴めしい洋書を引くりかへすのが職業であつた。どちらを向いても削り落としたやうな岩石の谷底に石子責になつた心地で論理神經を痛めながら其間を拾つて歩く。可なり强かつた私の知識慾も後には疲れ切つて了つた。私がまだ學校にゐた頃は、此等先哲の蹤を慕ふて、宇宙を包括するやうな高大な哲學系統を、自分の手で建てゝ見たり、壞して見たりして、其事に衷心の敬慕を捧げることが出來た。あの頃の心持も今から考へて憎いものではない。併し私は、段々其『系統（システム）』といふものに不快を感ずることを禁じ得なくなつた。學者が最も苦心し努力した所は其『系統』をもとめた點にある。けれどもその結果は決して凡人の到り難いものでも何でもない、刻明に年月を累ねて統理してさへ行けば、私にでも出來る。機織女が、細い絲目を並べて尺を成し丈を成すのと大した相違は無い。私等が先哲の大著を讀んで、一ケ所でも

二ケ所でもハッと魂に驚きを覺えるやうな尊いものは、其『系統』の中に往々矛盾して散在するものである。漱石のあちらこちらに點綴して在する寶玉のやうなものである。それを學者が骨を折つて一つ『系統』に結び付けやうとする。そこに無理が生じて、强辯になり、牽强附會になる、手細工で揑つち上げたものになる。是れが多くの『系統』である。手細工の揑ね比べなら、私がもつと上手にやると思ふ場合がある。斯うして私は殊に系統的哲學といふものに對する敬慕の心を薄げて了つた。『系統』から遁れて、自由に而も矛盾した事を心ゆくまゝに想ひたい。『系統』から無系統の『思想の廣野』へ。之が私の最初の要求であつた。

けれども私の地位は一方に於て學問の講義をする職業であつた。講義をする學問には『系統』が無くては不便である。そのために私は、自分の思想にも、先人の思想にも殆ど惰性的に『系統』を求め、强ひて矛盾したもの獨立したものを調和せしめ統一せしむることに齷齪した。そして其不本意な努力から生ずる空虚な氣分の壓迫に苦んでゐた。

それがたま〳〵、私の身の上の變化に出逢つて、運命の手は私を否應なく其方面から、引離して了つた。今の私は『系統』から遁れて、自由に、矛盾的に、思ひのまゝに想ふ事の出來る身分である。私は一方に於て時々此恩惠を復なく尊く思ふ事がある。

二

二十四時といふ課題にこんな事を書いてゐては、いつまでたつても本文に這入りさうにない。併し私の今のあはたゞしい生活の中にも、時々斯んな事を想ふ時間が無いではない。前からの習慣で、夜寢床に這入つてから寢つくまでの一時間か三

十分、過去、現在、未來の仕切をうち拔いた樣な氣持の中に、さま〴〵の事を想ふ。それがやつぱり私の二十四時間の生活の一部である、けれ共、近來はそれも段々度數を減じて來た。殊に旅にでも出てゐると、寢るのは大體夜の一時二時になる。身心ともに疲れて了つて、何事を想ふ暇もなく眠つて了ふことが多い。そして睡眠中、夢を見ることも少なくなつた。夜寢つかれぬ人や夢を多く見る人は、それだけ多く靈魂の底の目ざめてゐる人として、尊いもの丶やうに思ひならはした私には、横になるとすぐ夢もなく眠り通すことの多い此頃の自分を心細く思ふこともある。私も思ひ切つて物質的になつたのかなと思ふ。

旅宿の枕時計が八時か九時を打つころに眼をさますと、頭の具合でふと右のやうな事に思ひ耽る朝がある。朝といふものは面白いものである。夢の世界と現實の世界と、空虚と實在と、過去と現在との繼がり目であるに拘らずすべての事に影がなく執著が無い、思ひ切りよく次の幕へ移つて行くことの出來るものである。私は今日これから訪問しなくては義理の缺ける人がある、斯うしてはゐられないと思ふと、追ひ立てられるやうに床を離れて、手水をつかひ身仕度をする。朝食の濟むころはもう十一時近くになつて、先方から先へたづねて來る人がある。夫から四軒か五軒の訪問を果たして來ると、三時四時にはなる。晝食をして、雜用を辨じて、灯のともる頃から劇場に行く。劇場の私の生活は舞臺裏よりも樂屋よりも寧ろ多く見物席の後にある。こ丶で私はさま〴〵の事を考へながらさま〴〵のものを見る。

私が二年の間に一夜、二夜、三夜を通りすぎた劇場の數は可なり多い、土地で言つても、東京以外、大阪、京都、神戸は勿論、名古屋、岐阜、福井、金澤、富山、高田、長野、須坂、上田、諏訪、飯田、伊那、甲府、秋田、山形、仙臺、函館、小樽、札幌、旭川、釧路、高松、岡山、吳、廣島、下關、博多、熊本、長崎、鹿兒島、佐世保、久留米、佐賀、臺北、新竹

嘉義、臺中、臺南、打狗、基隆、京城、仁川、平壤、安東縣、撫順、大連、奉天、長春、哈爾賓、浦鹽斯德と五十餘ケ所に及んでゐる。中には二度行つた所もある、そして其たび毎に個人的にまたは劇場を通じて接した人々の數は幾万人であらう、それがみな通り一遍の挨拶で別れた人々ではない。個人的交誼に於てなり劇を通じてなり、或程度までの精神的印象を交換して別れた人々である。私はこれだけの場所で、これだけの人々と交通した我等の生命の結果が、先方の上にも、私等の上にも無意味に消え去るものとは信じ得ない、善かれ惡かれそれが如何なる結果を持ち來たすかを私等は少くとも自分等の生活なり仕事なりの上に見たいと期待してゐる。

三

この頃私は、先方から求めて來る人に會ふ機會が尠くなつたと共に、こちらから求めて行く人に會ふ機會が多くなつた。『求めて來る人』と『求めて行く人』との對照が世の中である。

この頃私は、前よりも一層人なつこい氣持になつた。それでゐて餘り人に會ひたくない。

前に言つた夥しい人數の中で、個人的に會つた人々は、大抵みなよい人である。渡りくらべて世の中に敵はないといふ氣がする。併し其多くはこちらから求めて會つた人である。先方から求めて來る位の人は、勿論私を敵にする譯はない。それと共にこちらから求めて行く人も、求めてさへ行けば決してこちらを敵にするものではない。人の好意は求める所に存する敵は概して求めない所に潜んでゐる。地方などをあるゐても、思ひがけない物蔭から黑裝束の覆面か何かで切りかけて來るのは大抵嘗て一面識もない人である。けれどもたまには面識のある敵もある。會つた時にはあれ程心と心で話しをし合つた

つもりであつたに、あの人がくるりと後を向くとあんな事を云ふのかと思ふと、今さらのやうに人の誠といふものが疑はれて、幾たびか其人の其時の面貌を心に描いては驚異する。こんな事が度重なると自分で諦めをつけて、寛大な氣持になつて見る。恩怨水の如く哀樂共に空しだ、世の中は面白いものだといふやうな高踏的氣分をも作つて見る。

併しまことの求めては『同感』である。私も初め、幼年の生活と其後の修養とで作つて來た人格の當然の結果として、早くから自分の生活を成るべく調和的に平穩に行はしめる癖をつけて了つた。それが中途で其單調と妥協とに堪えられなくなつて、矛盾ある生活を想望するやになつた。そこへ運命の手が譯もなく私を引さらつてしまつた。其後の私の生活は、はじめて人生の矛盾から滲み出る苦い汁、甘い汁のすべてを私の胸の底深く浸徹せしめねば已まなかつた。全人生のために說いて之が果して幸か不幸か、善か惡かは私は知らないけれども、少くとも今の私に取つては、この矛盾ある生活にも、矛盾ある思想と同じく、一種の恩寵を感ぜずにはゐられない。『生きたる人』の喜びと苦しみとはこゝにはじめて蘇生する。

生きたる人の苦しみから、はじめて眞に生きたる救ひを求めて來る。救ひとは何ぞや。『同感』である。『無條件の同感』である。

四

人生の矛盾が、自分の內生活に血となつて傳はる時、苦樂善惡に拘らず、人はそこに辛辣な一種の痛快味をおぼへる。そこに靈魂の光耀が起つて、大なる世界の暗示が洞然として其背後に開けて來る。この時、藝術の世界と實生活とが一つになるのであらう。けれども此光耀世界の底に實質的に殘留するものは、矛盾生活の悲哀である。そして矛盾の旅に迷ひ入つた

苦しさから心細さを感じて何等かの救ひを求める。救ひは即ち矛盾の統一である。何とかしてこの矛盾ある生活のすべてを認容し統一するやうな力が欲しい。而してこの統一力の救ひを自分の中に求めやうとするのが現代人の必然の傾向であると共に必然の惱みである。我等はそれを求めて未だ得ないでゐる。こゝから、奇蹟を求めるものは「神」に行くのであらう。私の今の心には奇蹟はまだ想像であつて信仰にはならない、默して孤獨を守つて、じつと自分の中に救ひの力の醱酵し來たるのを待ちながら死ぬるか、然らずんば手近な「外圍の人」に向つて之を求めるかの外はない。併し其力が果して何時かは自己の中乃至「外圍の人」の中に現はれて來るか、それもはかない頼みである。はかないながらも、我々はたゞそれを頼む外はない。

斯うして私の自己の扉から出るとき接近して行く者は「外圍の人」である、そしてそれに救ひを求める形式は「同感」でなくてはならない。私が是れまでに接觸して來た多數の人々に對しては、私は外形上のさま〴〵の事を依頼すると共に、知らず〳〵この精神上の「同感」を求めてゐた。そしてみなそれ〴〵にそれを得たと思つた。今でも其の志をありがたいものに思ふのが多い、たゞ其中にだしぬけに、または徐ろに鉾をめぐらして敵となつた人々にだけには、今から思ふとそれを求めなかつたか、求めて得なかつたかである。

併しながら、それ程多くの同感者もありながら、私の煩悶は救はれない。私はこの上にまだ何ものをか求めてゐる、恐らく其最上のものは、永久に得られない、求めであるかも知れない。けれども私は手近に今一歩を踏み出すことが出來る。此等多くの「同感」が、實を言へばまだ條件附、期限附の「同感」でありはしないか、といふ不安が私の心の底に潛んでゐる、從つて其上に「無條件の同感」を求める心が蟠つてゐる。今私の生活に「無條件の同感」を寄與して呉れるものがあつたら、それ

が私の眞の救ひであらう。斯やうにして私の求めるは、「外國の人」の「同感」から更に一歩を出て其「無條件の同感」に行く。千百人の內唯一人でも、眞に「無條件の同感」を與へて呉れるものがあつたら、其刹那に感激の淚が流れるであらうと思ふ。而して又之は私一箇の事實ではなからうと信ずる。我等の矛盾ある生活は常に社會に向つて、「無條件の同感」を求めてゐる。現代人が求める神と宗教も、要するに玆にある。（大正五年二月）

序文及公開狀

監修者の序

ヨーロッパ近代文藝の作物を飜譯紹介する事業が、此の一二年非常な勢を以て我が文壇に勃興し來つた事は、わが國文明進展の上に誠に喜ぶべき現象であると云はなくてはならぬ。狹くは日本文藝界の爲めに、廣くは日本人そのものゝ生活全體の爲めに、該事業が如何ばかり重大な意義を有するかは今更説明するまでもない事であつて、吾等が殆んど無條件的にその隆盛を希望する所以も亦くだくだしく述べるまでもない事である。

如上の理由から吾等は今回わが早稻田大學出版部が、その新事業の一つとして着手した歐洲近代文藝の代表的作物の飜譯出版に對して心からの贊意を表するに躊躇しないものである。而して吾等は更に從來常にわが讀書界に向つて最も權威ある成績を示し來つた早稻田大學出版部が、今回の此の新事業に於ても他の企及し難き好成績を擧げ得べき事を豫め信じて疑はないのである。

既にわが文壇に譯出されたヨーロッパ近代文藝の作品は數へるに遑ない。けれども彼の土に於て最高位を占めるものと目されて居るほどの大著名作には、未だあまり著手されて居らぬ、かくの如き方面こそ實に早稻田大學出版部の如き大機關の

爲めに殘された開拓地なのである。トルストイの『アンナ・カレニナ』を手初めにフローベルの『ボヷリー夫人』、ゴーリキーの『その三人』等相次いで本出版部より出版さるべき大作巨篇——これらこそ眞にわが飜譯界の權威たるべきである。これら諸篇の出づるに及んで、初めてヨーロッパ近代文藝の眞味が本當にわが思想界文藝界に浸潤するを得るのである。

吾等は此の責任あり、權威ある事業の廣くわが讀書界の歡び迎へるところとならん事を希望して止まない。（大正二年十月相馬御風譯「アンナ・カレニナ」

序に代へて

俳優となるには、言ふまでもなく聲がよくなくてはならない、肉體の釣合がよくなくてはならない、顏の造作がよくなくてはならない、記憶がよくて、表情が强くて、練習が積んでゐなくてはならない、併しそれらは要するに俳優の外的要件である、內的條件は其の心意狀態に存する、所謂氣の散る人は俳優になれない、遲疑する人は俳優になれない、眼前の路を一直線に前進する人でなくては駄目である、例へば舞臺に立つて科白を言ふ間に他の事を思ふと、科白の中の思想感情が中絕する、言葉を胴忘れしたり、動作に間隙を生じたりするのは其の爲である、舞臺に穴が明いて、演技の緊張性が缺けて來る、之れを救ふ唯一の道は、其の與へられた思想感情を純一なまゝに捧げ持つて、崩さず惑はずに進行する工風である、それは情熱の力によることもある、信念の力によることもある、同化の力によることもある、けれども要するに俳優に取つては、之れが何よりも大事な心理條件でなくてはならない、言はゞ俳優といふ肉體藝術家の靈魂が有する描寫力の永續であり、表現力の永續であり、創造熱の永續である、女優としての須磨子女史が有する最大の强味はこれだと思ふ。

それと同時に、斯ういふ心理狀態に慣れたものは、不斷の常識の世界にはあまり歡迎せられない事が多い、直情徑行の癖

がつく、理性を忘れて感情にばかり走ると目せられる、心を二重にも三重にもして應對に表裏をつけ、圓滑に他人と跋を合せて行くといふやうな世渡りが下手になる、傍からは淺はかな、無反省な、我まゝものゝやうに誹られる。

個人として、殊に女性としての須磨子女史が世間の一部から孤立してゐる最大の理由はこゝにある。

斯うして藝術の上に女史を有利ならしめる條件は、直ちに世間の人としての女史を不利の地に立たしめる、藝術座を離れて今の須磨子女史もあるまいが、須磨子女史を離れて今の藝術座もない、其の藝術座の舞臺が個人としての君の神經をますく〳〵デリケートにして世渡りに不利な方角に向ける、言ひかへれば、君が藝術に深入りすればする程、世間と和し難い人になつて行く、歴史上の幾多の弱い藝術家と同じ運命を荷つた不幸な女性である、其の上に更に複雜な動機が加はつて、君はいつも藝術座が受ける世間の敵から其の射擊標とせらる、それを引き受けて忍んでゐる君の態度はヒロイツクである。

藝術を捨てゝ世間を取るか、世間を捨てゝ藝術を取るか、女史も亦た此の二つの生活の岐路に惱んでゐるかよわい女性である、『藝術卽世間』か『世間卽藝術』かの生活にまで行きつくには、まだ多くの忍耐と征服とが其の前に橫たはつてゐる、それを通過するものは强者でなくてはならない、そして若し君に前途を征服して行く力があるなら、それは君が藝術の力である、君はたゞ其の身に創造せられる藝術の力で、すべてのものから生き殘るべきである、藝術の力は强大である。

須磨子女史の身に作られる藝術は、女史の靈魂の剛直性、力張性の反映である、そして剛直性力張性は男性の象徵であると共に、其の藝術は自然に男性的色彩を帶びて來る、之れに對して、女史が技巧の力で鏤彫して作る色彩は女性の婉曲性である、而して自然は常に技巧の上に立つてゐる。

男性的と言つても、それは勿論たゞ女性の上に現はれる男性的色彩たるに過ぎない、君が自然の中に備はる日本女性の色

彩は、それが爲に消えるものではない、君がはじめて『人形の家』のノラの稽古をした時は、其の差し伸べる腕がまだどうしても永く直線を描いてゐるに堪へなかつた、それを見事な直線にするまでには可なり長い練習を要したやうである。また其の舞臺聲が所謂ピィ〳〵聲でなくなつたり、笑ひがお壺口笑ひでなくなるまでにも、相應の年月がいつたに違ひない、やはり日本女性の柔和性は一方に殘つてゐる、それが自身の藝術に對する狂熱的愛着で力張せられてゐるのである。

男性的力張の素描に女性的婉柔の陰をつけたのが女史の藝術である、其の長所も短所もこゝから生ずる。

舞臺の上に漲らす熱力と其の鮮明にして強烈な表情とは、今の日本の女性が達し得る限域を越えてゐる。

けれども緩く動き靜に轉ずる生活は、まだ怜悧な日本の女性といふ範圍に於いてしか現はれてゐない、女史が修養の前途は此の方面にあると思ふ。（大正三年六月、松井須磨子著「牡丹刷毛」）

序

私は此の集に收められた「剃刀」を以て、近年我が劇壇に見はれた一幕物の創作劇中、最も傑れたものゝ一であると信ずる。若し理想を言へば、讀んで面白い劇は必ず舞臺に上しても面白い筈であるが、我等凡夫の仕事のなさけなさ、今日までの多くの事實は必ずしもさうでない。其結果、舞臺藝術としての脚本の價値は、舞臺に上し了へた上でなくては定められないのが今日の實狀である。此の方式から見て「剃刀」は近年の我が脚本界に最も傑れた作であると私は信ずる。

此の作者の作には、往々醇な所と、雜な所との混合してゐる場合がある。それを作者みづから舞臺監督として演出せしめながら精磨して行くところに舞臺上の完成品が生ずる。

和かなメーテルリンク風の味よりも、むしろがつしりとしたイブセン風の味が此の作者の本來であるかと思ふが、同時に此の作者には、イブセンに乏しかつた喜劇的シチュエーションの自然と構成せられる妙味がある。それかと言つてショー風の警句的諷刺が其作の生命でもない。言はゞイブセンの一樹に喜劇の味を加へたやうな作風である。そして其の捉らへる問題は當然イブセンよりも一層現代的である。

一幕物に見えた作者の此の味が、三幕物五幕物に如何に展開するか變化するかを私は見たいと思つてゐる。（大正四年四月

中村吉藏著「新社會劇」）

伊原青々園氏へ

歌舞伎發祥地の爲に

上

伊原青々園兄――兄の生國出雲と私の石見とは隣同志でありながら、私は故郷を出る前曾て一度も出雲地方に行つたことがありませんでした。故郷も、もう二十幾年歸りません、それが今度の旅行で、ついした機みから山陰鐵道を殆ど其終點まで、突破することになりました。山陰線の何十といふ小トンネルを出つ入りつするのはうるさいが、併し沿線海岸の風景は美しいものですね。太平洋岸の茫洋とした大きさと、瀬戸内海のこま〳〵した穩かさとを調和した中に、どこかすつきりとした冷たさ暗さが潛んでゐます、荒事、和事、實惡取りまぜた大自然の藝は見事なものです。

いはゆる大和朝と、出雲朝と、日本の古代史とを二分してゐる出雲地方の人事風俗は、今日ではたゞ地名や遺跡の外に大した特徴を認めないやうであるが、併し其言葉（あの濁つた訛と東北辯との關係は別として）の細かい節々や器具風俗の上

などに、微に上古を繹ねさせる或物が殘つてゐることを感じます。其方面の學者に取つては最も研究材料の饒な地方だと信じます。御承知の如く我々日本人ほど祖先の歴史について知り得る便宜の少い民族は多くありません。我々の祖先史はあまりに詩であり、宗教であり、神話であり過ぎます。科學と眞理の前には今少しく大膽であることを許されてゐる筈です。

出雲の誇りは何と言つても其史的價値にあるのでせう。全體わが島根縣は首都から離れてゐたゞけに歴史上の誇りを多く持つて居ます。隱岐が日本に於ける第一の配流地として皇室の痛ましい跡を殘し、石見が古代の鑛山として石見銀山や日本刀の生命たる石見鋼の本場であり、降つては柿本人麿、倂雪舟等の消し難い文藝の跡を留め、出雲には何といつても大社といふものがあり、國造家と云ふものがある。山陰線貫通の曉には、此地方は歴史的巡遊地として、日本の第一位に立ち得る資格があります。殊に文藝に緣の深い地として表彰すべき場所に富んで居ます。何は措いても、石見では人麿の遺跡を、吉田東伍氏の『地名辭書』以上に研究し表彰するのが斯道に志ある此の地方の人士の務めです。

下

それと相并んで出雲には大社や國造家の外に、今日の日本人が國技として熱狂してゐる相撲の元祖もこゝに居るではありませんか。けれども私はこゝで相撲と姉妹分たる歌舞伎の元祖お國のことを言ひたいのです。相撲と歌舞伎の元祖を并有する出雲は光榮です。お國の遺跡といへば、恐らく彼女が放浪生活の結果、何處を一定地といふ見當もつきますまいが、京阪よりは矢張出雲の方がそれと定め易く妥當であらうと思はれます。お國の事は君も笹川臨風氏も書かれ、他にも考證家がありませうが、末裔だといふ中村某の家が大社の町にあり、其の家に文書は無いが額看板が一つあつて、何等かの由緒を思は

せないでもないといふ事、其墓といふもの丶疑はしい事、お國が平生白綸子の斎物に練絹の色模様の帶を前でだらりとしめ頸に珊瑚珠の長い珠子をかけてゐたといふ家の口碑などは、今度彼の地で「松陽新報」の飯島氏から聞きました。連歌寺の跡をも訪はうと思つて果てしませんでした。飯島氏は今も尚熱心に研究をつゞけてゐて、其日ちやうどお國の眞の菩提所と思はるゝ方の寺の過去帳を調べに行く筈でした。

右のやうな經過ですから、一は貴兄などが發起して、お國の遺跡調査をはかどらせると共に、何等かの形で其表彰方法を彼の地に企てゝは如何です。幸に歌舞伎全盛の今日、事業は案外容易かも知れません、日本にも、もつと文藝上の名所が出來なければ、之から先の巡遊子は索寞に堪へません。一書を裁して日本演劇史の權威たる君の机右に呈します。（大正六年九月）

中村吉藏氏に

一

中村兄――長い滿韓の旅行も去月十三日でめでたく終結しました。途中の事どもはいづれ歸京してからゆつくり話しませう。近信のうちでは、何よりも先づ君の健康が恢復しかけて來た事を嬉しく思ひます。三月ぶりの病髯を剃つて、轉地の準備をしてゐるといふ山室君の報告を、馬關の棧橋で聞きました。八月末までには私も東京に歸つてゐるでせう、途中を山陰道に寄つて行きます。

君の病中に起つた出來事のうち、藝術座の自家防衞として、玆に一つ書いて置かなくてはならない事が生じました。それは御存じの例の大阪の某新聞が、例によつて君の病氣を種に藝術座の中傷記事を作り、私を的にして滑稽極まる毒罵を試みた事です。私一個の身上で完結する世上の紛々は、今の私に取つてはどうでもよい、たゞそれが藝術座といふ仕事に對する妨害である限り、或る場合に私はそれと鬪はざるを得ません。くだらない事だと思ふが仕方がない。

某新聞の記事といふのは斯うです、「君が病氣になつた、金に窮して藝術座へ其旨を申込んだ、それを藝術座が拒絶した、大阪の君の友人が憤慨した、こんな不人情な奴を葬つて了へ」といふのです。馬鹿々々しい嘘をついたものではありませんか、それから更に別の中傷記事を作つて、「右の攻撃のために藝術座は折角志して來た大阪興行をなし得ないで、滿韓へ落ちて行つた」といふ意味の事を書きました。こゝまではよかつたが、最近の切拔を見ると、東京の某夕刊新聞までが、更に右の記事を蒸しかへして、「大阪の諸新聞の記者が聯合して松竹へ藝術座を入れるなと正式交渉をした結果、大阪で打てなかつたのだ」と誠しやかに書きました。こゝまで公の名を僞れば、世間が本當にしまいものでもない、私が此書信を書く氣になつたのは、右の記事を見てからの事です。

御承知のやうに、大阪には前掲某紙の外に「朝日」「毎日」「時事」「關日」「新報」「朝報」等新聞紙の數はかなり多い、其演藝記者諸君とは、私にしろ、君にしろ、面識の間柄である。それらの人々の平生から見ても、また所屬新聞紙の責任から考へても、そんな誣妄を本にしてそんな無法な事を松竹會社へ申込まう筈が無い。之は當の松竹會社なり記者團なりへ問合せて、責任ある回答さへ得れば眞僞は立どころに明白となる話である。それをたゞ人前を僞るために、何ものかゞ虛構した讒誣たるに過ぎない。

それのみならず、第一藝術座が今度大阪興行を豫定してゐたといふこと、又それを中止したといふことからして、すでに外間の臆測たるに過ぎない。藝術座は初めから何も中止しはしない。尤も之は君と私と事務のものとで協議した事柄であるのだから、何もこゝで君に對して報告する必要はないのであるが、此公開書が敵者に對する辯妄である性質上、こゝにあの時の事を掲錄します。

二

藝術座が新富座打ち上げ後の興行計畫は、從來の例によると先づ其新物を京阪神に持ち行くのが順序である。けれども今春の新物としては例の「お艶と新助」が不評で、到底之を京阪へは持つて行けまいといふ事になつた。するとあとの「ボーラ」と「エヂポス王」だけでは不足でもあり、且つ日本物も無くなるといふので、京阪神だけは春一回抜くより他はないといいふ事になつた。それと同時に、名古屋は「お葉」がまだ出してないから之に「ボーラ」を加へて出すといふことで談がきまつた。また一方にはこの春京阪へ行かぬとすれば、其の埋め合せに豫ての計畫たる滿鮮再遊を繰上げて、名古屋興行のつゞきにしようといふ相談がまとまり、直に私は大連と京城と平壤と釜山との新聞社及知人に其旨の書信を發し、其の準備を依頼したそして順路は四月中旬の名古屋興行を中心にして甲信路からはじめ、名古屋ののち、九州を打つて、門司から船に乘るか、伊勢路を打つて神戸から船に乘るかの二途を取つて、九州路が幸四郎一座や菊五郎一座と衝突する恐れのある所から、伊勢路を經て奈良に打ち止めに、神戸から五月十四日大連に直行したのである。そして一座が此長期旅行の途に上つた四月六日の後、兩三日ならずして君が病氣になる、それを種々妨害する者があつた。其の爲に京阪興行が流れた、其の爲に滿鮮に行つた、さう手つとり早く簡單に無準備にこれ程の旅行興行が出來ると思つてゐるものゝ迂愚は憫むべきである、要するに藝術座は別に外間の妨害で大阪興行を中止したおぼえはない。それとも我々の計畫とは沒交渉に別な所だけでそんな妨害運動があつたとでもいふのなら、それは將來にもかゝはる問題であるから、私はむしろ之を機會に其の事實を知りたいと思ふ。今のところ、私はそんな馬鹿氣た事の不可有を信じ且つ斷言する。現に敵者等のいはゆる中村君の親友も私も辱知たる大阪

のY氏は同じく大阪に於ける有力な演藝記者の一人である。其Y氏へは念の爲私から手紙を出して此事件の根本に闘する返事を得てゐる。若し夫れ君と私とが金錢で云々といふやうな事は、私等二人が鼻の先でフヽンと言ひ合つて置けばそれでも濟むやうなものである。其のいはゆる中村君の友人といふのは誰れの事だか知らないが、大阪には吉田笠雨氏と小林政治氏とが最も親しい人として知られてゐる。小林氏はちやうど君が發病の當時折よく在京して、私が旅行中のために代つて種々世話をせられた人である。藝術座が君に贈る見舞金額の相談にまで與つて與れられた人である。私はたゞ此れらの人々と君とに對し、公衆を誓ひにして、「そんな馬鹿な事があるものか、ねえ君」と言へばそれでよい。そして君等がそれに對して明快な一黠頭を與へられゝば、それで問題は朝日の前の霜のやうに消えて了ふ。

新聞紙は、言ふまでもなく現代に於て最も有力な天下の公器である。それが紙面そのものとして藝術座といふ他人の一事業を妨害しようとするからには、藝術座も亦た無智無告の奴隷が殘虐の下に、伏死するやうな醜態を演じてはならない。或者は、此際宜しくその某新聞に對して誹毀の訴を起こせと勸告する。併し私にはまだ其の決心がない。其の新聞の社主は吉弘氏である。吉弘氏と私とは相識である。大阪に於て名古屋に於て、同氏の主宰する他の新聞紙から、藝術座は特殊の好意を受けてゐる、其の吉弘氏を代表者とする某新聞に對して藝術座が敵對行爲を取るといふ事は濟まない事でもあり、不利益の事でもあると私には感ぜられる。從つて私はあの新聞紙そのものを敵と見るよりも、公器の蔭に隱れて、一私の感情により他人を撲倒せんとするものゝ奸曲を惜む。

三

某紙に責任を持つ記者として、私は上總天香といふ名を記憶する。私が始めて藝術座を率ゐて大阪に行つた時、私の旅宿を尋ねて、「藝術座女優志願者渡瀨淳子と己れとの仲が宇治の一泊によりて云々せらるゝは云々の筋道にて事實に非ず」と云ふやうな僞善的辯解を諄々として陳じ去つた人である。其後も一二度某紙の演藝記者として會つた事があるが、其都度私は立派な新聞記者であると信じて敬意を拂ふことを忘れなかつた。然るに彼れは、右の渡瀨といふ婦人が藝術座を退く頃から藝術座を惡ざまに書き出した。少くとも自分が責任を持つて書かせ出した。そしてとうとう今度の事件にまで及んだものと見える。同時に一方藝術座を脫退した右の渡瀨等と結合した一劇團が京阪に來たるといふ、恰も其紹介を壯にせんとするかの如き態度で、藝術座は罵られ、其の劇團は吹聽せられた。それが天下の公器であつた。すると調子に乘つた其の劇團のものまでが、しきりに己を紹介せんとして、先づ藝術座を誣ひ、世人をして藝術座はもはや存在の力を失ひたるものなるかの如く信ぜしむるを以て、己等の事業の第一歩とするが如き態度を、公然發表して愧ぢなかつた。そんな事はどうでもよいが、若い人の仕事はそんなものではない筈だ。人は各々自分の仕事をすればそれでよい。先づ他人の仕事を傷けてからでなくては出來ないやうな仕事は、若い者のする仕事ではない。そんなはかない仕事が何になるか。

上總といふ人は文學の人であるといふ噂も聞いた。若しさうなら、なぜもつと文壇的良心と作法とを守る個人として敵對して來ないか。文壇的個人として作法を守る以上、其言ふところが人身攻擊であらうが、理論攻擊であらうが、受けるべき非難は默つて受ける。然るにあの荒暴な態度は何であるか、あんな淺はかな、愚劣にして滑稽な、頭隱して尻かくさずの曲筆舞文で、世間の有識者の幾人を何時まで瞞過し得るものと思つてゐるか。

中村君、私はこんな談を君の病後の耳に入れざるを得ない事を悲しみます。（大正六年八月）

坪内士行氏へ

私は今旅にゐます。旅といつても、一所不住の今の私に取つては、旅宿の二階も宅の書齋も同じことですが、其の京都の旅宿で、あなたが愈々舞臺に立たれるといふ直接のおたよりを受取りました。そして一種の感慨に打たれることを禁じ得ませんでした。

私はあなたがまだズック鞄を背負つて小學校に通つてゐる頃からの成長を見て來た一人です。幼い頃からの踊りの稽古にもしばしば立會ひました、それから中學、大學と私の手におかゝんなさる機會が多かつた。けれども其の間、私は何一つあなたの心性に大事なものを植つけ得たとも思ひません。たゞ私とあなたには、本來心性上似た一點があつた、それはシンセリチーといふ事です。あなたの心性も所謂デリケート、ネチュアです。眞面目でそして情負けをして、物を徹底せしむるに忍びない人間です。これは恐らくあなたの一家に傳はつてゐる血であらうと察します。此の點で私はあなたを自分の弟のやうに思つてゐました。

今の若い人々には、輕薄といふ事が其自己性の要素となつてゐるものも隨分あります。現代人の聰明と利己とは多くの場

合それに輕薄といふ事を伴つて來る。（私はこゝで輕薄といふ事に善惡の評價はつけない）過去六年の私の生涯のあひだ、私は可なり多くの事を見て來ました。其のあひだにあつて、しばしば受けたあなたからの便りは、最も渝らない誠意の交りの一つです。自他の境遇にあつて態度を變へない人の心は尊いと思ひます。

私は今、あなたの新しい前途に對して何を餞けしませう？京都の冬は御承知のやうに晴れたかと思ふと曇ります。薄日のさしてゐる傍から黑い雲がひろがつて來て、冷たい風が比叡あたりからちらちらと雪を吹いて來ます。宿の三坪ばかりの庭に一杯植はつてゐる木々の梢に、今しがたまでざはついてゐた風が消えたかと思ふと、あとはしばらくの間、泣き出しさうな陰氣な空に枯枝が鳴りを靜めてそゝり立つてゐる。じつとそれを見つめてゐますと恐ろしいほどの靜けさです。私は斯うした寂しい氣持の中で、あなたの此のたびの事を考へてゐます。從つて、差しあたりあなたの前途を祝福するといふやうな花やかな何物をも持つてゐません。

あなたは或は教壇の人では無いかも知れない。教壇に立つには、あまりに其心性がデリケートである。せめて今少し年でも取つて、魂に一重二重硬い皮でもかゝつてからの事かも知れません。其の以外のあなたの仕事、例へば小說家たらんとし、脚本家たらんとし、舞臺監督たらんとし、而して今また俳優たらんとする、これらは皆まだあなたに取つては試みの程度である。果して其のいづれに於て完成せらるゝかは神さまでなくては分かりますまい。私はたゞ自己の新しい道を求め試みつゝあるあなたの、其の胸に波うつ動悸を想ひ見て、一日も早く歡びの日の來らんことを望む外はありません。です脚本家として乃至舞臺監督としての經驗を有するあなたには氣のついてゐる事でせうが之から俳優として專門の責任を負はるゝあなたの爲にいとほしむ第一の困難は劇壇の二元の途に相違ありません。藝術に之いて徹底しやうか、職業に之いて徹底

しやうか、藝術に徹底すれば存在に亡び、職業に徹底すれば藝術に亡びる。徹底は滅亡であり、更生でなくてはならない。之れは何れの方面にもあることだと言ひますが決してそうでありません。劇壇に於けるが如く此の問題の重大な所は他に多くありません。之が劇壇、殊に今の劇壇の怪しき運命の一つです。傍觀の人としては、こんな事は簡單な問題かも知れないが、實地の衝に當つて、第一命を制せられるのは此の矛盾です。之れを閑却して置いて今の劇壇を論ずるのは、要するに空談たり、滑稽たるに過ぎません。省察の光の屆かない範圍で、みづから、藝術に徹底して尚生存を併有し、若しくは職業に徹底して尚藝術を併有するが如く號して片付けてゐるものも無いではないが、私たちはそこまで自分の心を暗くするに忍びません。二元の相矛盾する影を見ぬふりで過ごすに堪えません、そこでやつぱり中間の途を辿ることになります。上にも下にも徹底し得ないで、上下の間に觀望し彷徨してゐる。私はこれが人間の最も誠意ある、最も正直な途だと信じてゐます。簡單に徹底したり片付いたりするのはみんな僞りだとしか見えません。談何ぞ容易なるやといふ感を止めることが出來ません。

併しながら此の中間の途は、やがて、二元の矛盾に、責めさいなまるゝ姿であるから、悲しく苦しい途たることは言ふまでもありません。私は、あなたが矢張り此の苦しい途に這入るべき運命の人のやうに思はれて窃にあなたの前途の爲にいとはしむの情に堪えません。

新らしきあなたの道の平安ならんことを祈る。（大正七年二月）

書

簡

（左の六十七通は、伊原青々園氏への私信、註は同氏の手に成れるものである）

——明治廿九年、大久保余丁町四十一より——

昨夜は失禮

色々相談致し候處矢張り各門略々中心となる人を定めて其人より書き出さねば體裁整ふまじとの事にて由來、影響の所を貴兄に御願申し性格を今後は坪内氏に、意匠、修辭を篁村氏又は小生に、梗概を後藤氏にとさつと相定め申候。就ては坪内氏の原稿送り申候間之れを貴兄のに書き改めて御考をも加へ急御回附被下度、此方より相廻し可申との事に御座候字引の事は後日御談申すべく候當用のみ早々頓首

九月二日　　　　瀧

伊原詞兄座下

狂言作者傳統御都合よくば御起稿願上候

（「早稻田文學」に「近松研究」を掲載する時）

——明治廿九年——

舌代

本日上野行之件、後藤子小說のあと二日にて書き上度との事就ては兩三日延して明後日と致し候方然るべくかと存候が如何哉、小生も實は講義錄未了に付其方好都合に御座候尙御存意もや

後刻拜眉盡委曲可申上候

十一月十二日

（上野行とは「早稻田文學」の新年初刊に明治数學年表を附錄するにつき其の材料を集むる爲め圖書館へ行く事をいふ。）

——明治廿九年——

後藤君は一日繰り上げの事承知の筈に御座候、併し原稿は未だ參らず多分明朝となるべしと存候、可成は今晩中に小說欄終までなりとも附郵致置度候先は當用而已

瀧　拜

伊原詞兄座下

拜啓、此仁は林田春潮君に御座候何卒御會被下度、實は當人萬朝に入社の志望にて先日後藤君より內藤湖南へ賴み又堺枯川より久津見へ賴み貴兄より當の正太夫へ賴み貰ひては如何との案を與へ、貴兄の御宅へ兩三度も參られ候由、然れどもかけ違ひ御目にかゝるを得ず甚だ殘念の由にて、本日は御社へ推參の積とかにて貴兄へ尙手紙にて賴み吳れよとの事に御座候、御迷惑嘸とは存候へども正太夫氏へ御紹介御賴入被下譯には參り申まじくや、內藤久津見の方は已に纏り候由にてたゞ正太夫さへ同意せば事成ることに相運居候趣に付よろしく御傳信願上度、聞けば時文と美術と二人入社せしむる積りにて時文は緖方流水に定まり候由にて美術の方が卽ち春潮にしたき目論見に御座候、申迄もなき義に候へども正太夫が僕等をはじめ推薦せん(と)して吳れられしは僕等の德とし居る所とやうの意も御序の節御傳へ被下候て、うまく當人の感情御和げ御盡力被下候はゞ千万難有存可申候、昨夜例會の報知差上候所御番地不詳の爲或は遲着致すやも計られず、廿五日の午後三時よりと致候、何れ其席にて御目にかゝり可申、又角田の現宿所御存じに候はゞ御一報被下候はゞ難有存可申候以上

取急亂文御免

二月廿三日　　瀧　太　郎

伊原大兄座下

牛込納戸町廿七番地へ轉居
右御報申上候也
八月廿二日　　島村瀧太郎
（此時飯田町より轉居せしなり）

――明治三十三年――

明後廿四日午後四時より坪内氏宅にて金子佐藤兩君送別の小宴相開度、連中は舊早稻田文學社員と哲學會員と位の見込、御繰合御出席被下度會費一圓、御來否共明晩までに御一報被下度願上候早々　八月廿二日
（金子馬治君洋行の時なるべし）

――明治卅三年八月――

啓上、明日の會の時刻都合により少々繰上げ、正三時よりと致候に付同刻までに御揃被下度此義追て申上候早々　廿三日

――明治卅三年十二月廿三日牛込納戸町廿七より――

拜復、御歸京の事初て承り申候御令閨樣御病氣の由御心配察入申候、其內參上可致候へ共柴田君の事丁酉文社と申しても已に離散致居候事故此際は個人として弔禮相すめ置、あとで或は追悼會なり何なりに盡力致す事にしては如何、後藤君とは

今日あはず候へども小生は右の通りに相斷申候、就ては小生は本日一寸一圓の香奠を包みて參可申。明日は丁度大西氏追悼會にて會葬不出來殘念に候
其内妻も參上致やう申居候

――明治三十四年納戸町廿七より――

昨日は出違失禮致申候、明七日の御會午前は學校の時間ありて參上致兼候へ共午後ならば拜趨致度、時間伺漏し候に付御知らせ被上度願下候万縷拜眉

五月六日

――明治卅四年十月十八日、納戸町廿七より――

拜啓、過日は御留守中にて殘念致候
水谷君の歡迎會至極結構と存じ坪内氏へも序有之話し置候、哲學會員（中桐、紀、中島、五十嵐）と小生等と小杉君などにてよろしからんか、場所は神樂坂か何所かの西洋料理にでも致すべくや、同君着次第万事案内狀等取計可申に付御一報被下度其内拜眉の期あるべしと存候以上

（「大阪每日」に記者たりし水谷不倒氏が上京せんとせし時）

——明治卅四年十月、納戸町廿七より——

拜啓、先日は失禮致候、例の會一日延して明二十二日午後正四時より神樂坂郵便局下西洋料理明進軒と致すことに相定め昨夜慥に他の葉書と同じく貴兄宛にも差出候ば行違にや又は未着紛失等にやそれとも小生の思違にや、兎に角今日は無駄足させて失禮申候、右の次第故明日刻限迄に御參會被下度、會費は一圓半以内の見積りに候早々　二十一日

——明治卅四年十一月十一日、納戸町二十七より——

拜啓、先日は失禮、御宅より差圖被下候由にて新宿の薪屋より下女を世話致呉れ至てよき下女のやうにて一安心致申候、厚く御禮申上候、と家内より奧樣宛申出候

例の「歌舞伎」今回は未着、尙飯田町宛に郵送越候まゝ途中の紛失かと存候に付今後尙頂戴候義ならば納戸町宛に願候やう御取計置被下度、小生近日御宅へ參り度と存居候

——明治卅四年十一、納戸町廿七より——

拜復、仰越の件先達てまで函館に居りし永持德一と申仁至極適任かと存じ只今先方へ申送り候に付早速御宅へ伺はせ可申、小生も明日午後あたり參上色々御話申度存居候右まで　二十五日

——明治三十四年——

拜啓、先日は罷出御厄介に相成申候、さて歌舞伎社の御會至極面白さうに有之、可成繰合せて參會致度存申候、郵船圖繪長々難有最早一覧了へ候に付不取敢御返し申上候、御落手被下度御問合被下候件難有、尙小生昨日轉居致候御家内皆樣へよろしく

十二月五日　　牛込甲良町四十一番地

——明治三十四年、甲良町四十一より——

拜啓、本日の會は音樂學校の方とかち合ひ、先方ことわり兼候まゝ御會の方不參と致申候、殘念に候大阪每日の後藤のもの水谷君より送りくれ昨日一見困つたものに候　十二月八日

——明治三十四年、甲良町より——

拜啓、來十七日火曜の午後四時半より牛込燒餅坂西洋料理中村樓に忘年會相開度、連中は先日の水谷君の會の少し廣きもの位に有之候、御差支なくば御出席被下度、會費八十錢御來否折返し御返事奉待候、書外拜眉早々

十二月十五日

——明治三十五年、甲良町より——

拜啓、昨夜は御近火の樣子如何に候や定めし御騷ぎの事と奉存候、尙先日は小兒頂戴物致し奥樣わざ／＼御越にて難有奉存候小生去十日歸京、多忙にて引籠り居候、何れ近日參上御目にかゝり御禮可申述候早々　一月十八日

——明治三十五年二月十四日、甲良町より——

拜啓、種々御厚意難有奉謝、明日は正に參上可致尙例の講義錄に演劇史揭載の件は坪内氏へ申入れ、承諾を經候に付何時にても御起稿被下度、原稿紙等御送附万端は拜眉可申上候

——明治卅五年、倫敦より——

過る七日午前無事當地に乘込申候、今日にて三日に候へば未だ何の感じ所では無之、只々赤毛布の本色を維持致居り候のみに候、今の下宿は British Museum の近傍にて (58, Jorrington Square) に候へど又々轉宅のつもり故書面は左の如く御宛を願候追々手紙認むべくも不取敢安着御報迄、奥樣へ千万よろしく願上候　　五月九日

T. Shimamura

c/o Japanese Legation.

No. 4. Grosvenor Gardens, London.

卽、公使館宛に有之候

——明治卅五年八月(?)、倫敦より——

拜復、御懇書有難、御老母樣御死去、奥樣御弱り、嘸御心痛と存候、歌舞伎每々難有存候、面白く始より尾まで通讀致候、近

松論至極御尤も、願はくは實地の上の効果を見たく、伊井のやり口一見したき心地致候、先達て Lyciom 座にアーギングのファウストといふおつなるものを見物致候其内之れについては何か新小説に書き申度存居候へば玆には省き可申、又目下評判の Boyal Opera をも一訪致候、書割に科學を利用したる妙は CPera の方一層面白く、芝居の方はやゝ遜色あるやうに見受け候 Lyelum 座にての當夜の書割は日本のと甚しくは違はず、但他座及び他興行の書割を見ねば一般の論は立てられず候小生は書割に科學の智識を利用するは、どうせ書割を使ふ以上、結構の事と存候か如何や、Olen にて埃及ナイル河畔月明の夜の景色など例の電燈の利用と光線學の應用とても全く眞景に異ならざりしが、併し必ずしもパノラマを見る如く其の方に興味を奪はれて見せ物になるといふことはなく、本筋の悲想の芝居がこれがための幾層の感を深らせしやうに存じ候、併し之等尙專門家の論あるべく Opera に就ては何れ其内愚案御目にかける時あるべしと存候、日本にては大分 Opera 崇拜論が行はれ候由研究ものと存候、藝苑に御盡力との由結構と存候、行ける所までやつて見給ふも一興と存候、文藝界は如何、御注文の書物 "The Bomance of L n" は早速探して郵便にて御送り申上ぐべく候、其他御注文の者も行々心がけ申すべく、目下はただ土地になれるためと Summer Vacation の積りと、言語文章の稽古とにて唯ブラ〳〵致し暮し居り、讀むものは多く Novel や Poetry のみに有之至て氣樂に致居り候、夫れがため身體も段々强壯となり日本に居る頃よりは太りたる心地致候御安神被下度御仰越の畫、小包にて御送り被下候へば無事と存候御厚意難有、拙著御覽の上は御注意の點御教示得度、貴着の進行速ならんを祈り候、無論講義錄に出し居給ふ事と存候が左樣にや、後藤君の新著も出しやうなれど見るを得ず、此地にては晩翠君、嘲風君も居る由なれど會はず、小生此節は寫眞機械を求め、船中にて習ひたると書物によりての自習とにて寫眞を始め居り候追々面白きもの有之節は御送り申すべく候、機械は春陽堂より金を出させて毎回寫眞通信を試みんと申送り置候が承諾する

か否かは存ぜず、奥様へよろしく、又友人諸君にも御會ひの節はよろしく、兎角方々へ無沙汰勝に相成申候、申迄もなく此手紙は亂筆故私信と御見なし玉はり度、歌舞伎へは其内何かたより致さんと存居候へども未だ心に任せず候、小生居所を轉じ候間爾來は凡て此宛にて御通信下され度、秋よりは Oxford に參らんと存居候へど此家は至て手堅き素人屋故永く此家宛にて通信仰候、至て親切にて氣さくなる細君にて小生を子の如く世話し呉れ申候、宛名

T. Shimamura.
4. Durley Road
Stamford Hill
London N.
England

新聞の切拔御親切奉謝候

——明治卅五年、オックスフォルトより——

御狀拜見益御健勝何よりと存じ小生も至て頑健、去十月初より當地に罷在り候、明日が丁度當學期の終りに候へば休み中に一寸倫敦に出で度存居り候あとは當地に冬籠りの覺悟に候、此地講義は餘り感心致さず候へども土地が至て人の氣を落ちつかせ(惡く申候ものは Dull Oxford と申候へど)候爲め讀書に適し候と Bodleian Library の善きとにて暫く足を留むることに決心致候、先便斷りつきのまゝ雜誌に見はれ候て一驚を喫し申候、あれより後此地に參るまでに四五座見物致し候此休みに

はダン、リーノーのパントマイムを倫敦にてのぞかんと存じ居候、別紙同人のと例のアーギングとエレン、テリーのと、ありふれたるものなれど揃つて全面の寫眞葉書を見あたり候まゝ封入致し、候仰越の書面は一巻（幽靈談などの巻）だけ参り居り候へ共序文によれば今一巻史談等の巻ある様子故それを取り寄せ中に候へば着次第郵送致すべく、大小包はヴンクーヴー便のみ故書狀よりは後れ可申候歌舞伎の文覺合評面白く拜見致候、社中諸君へも宜敷、丁度今日、當オクスフォードの劇場にて晝興行にミスメリオン、テリンの一座が例のハンフレー、ワード女史のエレノアを脚本にしたものを演じ候に付一見いたし候、是は先達て倫敦にて初めて興行、不評の方なりしがワード女史は中々の元氣にて倘劇に手を延さん決心とか申候、元來右の作柄が精神の煩悶を主として動作の少なきもの故どちらかと申せば澁きものゝ方に候、そこで作者は是非之れをオクスフォードで一興行して此地の學者連に見て貰ひたいといふ意氣もありしかと存候、鹿島あたりより珍書の堀出しの由熱心の至りと存候先日倫敦の書市にてキーツの詩五千圓と申す事を聞き候が之れは勿論中身が珍書なるには無之、書冊の來歴により候事に候、小生へ御送り被下候との物あまり六かしく候はゞ御留め置被下候てよろしく、又あまり重からぬものならば親書とすれば安全かとも存候此書面御出し等の節は前便と同じく貴兄一存の御計らひにて出でし事に願上候、後藤君春陽堂への義理も有之候へば共邊御含み被下度候、奥樣御快方とのよし結構の事に候よろしく御傳言被下度亂筆御判讀を乞ふ

十二月十二日

島村瀧太郎

46, Southmoor Rd. Oxford

伊原大兄

――明治卅五年、オツクスフォルドより――

追啓御注文の書物前卷は品切れの由書冊の中に挿み置きし書面の如く申來り候に付左樣御承知被下度、其内にも古本など見あたり候はゞ買入れ申べく候　十二月十九日

小生取りつけの本屋にて倫敦を探させたるなれど一寸見あたらぬにて候

島村生

――明治卅六年、オツクスフォルドより――

御手紙幷に雜誌書册とも着難有存申候、團十郎傳至て面白く出來申候、食後に一二時間づゝ三日許りにて卒讀、團十郎の面目は申すに及ばず、著者みづからの近頃よくあらはれたる書と候、かゆい所に手の屆く筆法と存候、兩浦島一讀、涙の珠となるといふは如何にも詩なれど、日本の芝居見物の趣味には未だ詩とまで想像が進まずして可笑に落ちはせずやとの懸念あり如何なりしかと存候、小生の前便の手紙に「雜誌に出で、一驚云々」と書き候よりの御斷りと存候があれはそツくり雜誌に出るならんと存じて舞臺へ向いての申譯、貴兄へ申上げし次第には無之勿論驚いた譯にも無之候御懸念に及ばず候、此後とも必要の節は御利用可被下候、小生もわざに通信となればおツくうなれば、其の方が好都合に御座候、坪内氏の事、實は小生も何とかと存居候所に候、去暮の先生よりの手紙によるも段々氣はせかるゝ樣子なれど中學はあり倫理はあり時が無くてといふ氣味せめて舊作から舞臺にかゝるやうになればと存ずれど併し今となりてなま中二流俳優にもさせられず、先づ體を大事にして

今しばらく待たるゝより外なかるべきかと存候、鷗外のは到底はしりたるに過ぎず、あれだけでは新局面の先驅とは參らず、機會は尙前方に有之べくと存候が如何や、小生より送り候書物一冊着と存候、代價はたしか七十錢許りと存候へども端金にて面倒故御送附に及ばず、纒まりたるものゝ時には請求致すべく候。御遠慮なくあと御申越可被下候、畫帖の方は萬一は許られず候故御留置被下候方が安全と存候。當國にては先づ一流なる芝居雜誌試に數回引つゞき坪內氏へ送り居り候"Era"と申にて候御序の節は御一覽可被成候。滯歐文談へ此次には(此前小說の手引を書いたる故)倫の敦芝居の(俳優の)手引やうのものを書き、それより今年の芝居の二大立物たるアーピングのダンテとツリーのレサレクションとの見物記を歌舞伎流に書いて見んと存居り候。エロキユーションと申せば此頃は朗讀會とやらが早稻田に盛んの由貴兄は御干係なきや。演劇史は講義錄へも出しつゝ御ありにや。又は只書き溜めたまふのみにや書き溜めるのみにては大部ものは容易に進み申すまじ。折角御出精可被成候。オセロを水蔭君ではしやうがあるまじ。御一統へよろしく

二月廿四日　　　　瀧太郎

伊原大兄

――明治卅六年、オツクスフオルドより――

拜啓、當地の似顏繪雜誌一部見本として坪內氏への郵便物の中に封じ込置候間御貰ひの上取り揃へて御入用ならば御申越なさるべく坪內氏へは全部(十二冊の豫定、一部七片づゝ、今十一號まで出たれば間もなく完結)金子君の便に送るつもり故其つもりにて御返事たまはるべく御入用なくば別に御返事に及ばず候、或は日本に來て居るかも知らず候へど一寸右要事申上

候

三月五日　　抱月生

――明治卅六年――

本日より沙翁紀念日にて墓に花を捧ぐるの式等も有之。昨夜來當地に參り居候が紀念劇場にては例の沙翁劇一座のベンソン等が紀念芝居を打ち居り昨夜はマクベスを一見致候

四月廿三日　　ストラッフオード、オン、エヴンにて　　抱月生

――明治卅六年、倫敦より――

其後は如何御過しにや、書債を生じて失禮、雜誌毎々着、多謝、先便なりしか先々便なりしか櫻の花びらにたより寄せ玉ひしに對し此方よりも何かと思へば異國の花に心あたりなく其内と御見のがしたまはりたし坪内氏よりはつい近頃細々の書狀、不相變の意氣と讀まれたり、演劇史着々御進みにや、日本の新聞劇評といふものに在來のコンヹンショナリズムを蛻脫したる新生面を開く工風は無之ものにや、此夏は當地に下りて圖書館の隣りに陣取り晝は讀書と折々の畫堂訪問、夜は音樂と芝居とたまには俗樂俗謠などに見聞を耽らし居り、此十月中頃より今一度牛津に歸る豫定なり平田禿木、下村觀山の二君が尋ねられ二三度往來、禿木君は近々牛津へ引越す筈なり、小生が歸れば內田銀藏君と都合三人許り彼の地に話の合ふ連中が集まる譯なり、先日下村君の宅にて絹の端に水神の月夜の景の走書を見たり、之は新小說に寺崎君が水神の月といふを書くとの廣告を見

て繩張を荒されてはとの意氣から一氣呵成に筆に落としたるなりとの話、先々號芝居の報道は一般讀者へは多少の益ともなるべしと信ずれど兄等專門家に見するものに非ず、實のある所は其內纏めて御目にかけるか土產に持つて歸らんとは思ひ居れど當にならず、兎に角芝居は見たり其數已に百に上り、舞臺裏よりの見物も機會を得て試みたりせめて其內には兄等に材料でも供給して御役に立て申すべし貴兄みづから新作脚本を試み給ひては如何、最も適當の人は兄等なるべきに、後藤兄近來新作の大なるものありや、小きものを出すかはりに大作を無理にでもよし續發して當年の意氣を示して貰ひたしと御傳へ被下かし、此點にては小杉君のやり口はたしかに利口なり、ああして行く內に作家の眞光彩は發し來たるべし、自家の風格を以て一世を征服するの覺悟だにあらば寫實も理想もあつたものには非ずと僕は思ふが如何、水谷兄近來如何か知らず、鏡花も振はず風葉も振はず、春雨未だ自家の眞骨頭に打ちあてず、蘆花は知らず荷風といふ作家、何か持つてゐるやうにもあれど多く讀まねば知らず如何の前途にや、何でも何うかして嶄然世と違つたものを書く人が欲しき世なるかな、明治二十年前後の新著百種國民の友三十年前後の新著月刊といふ順序ならば次は四十年前後が其の期かも知れねど其前のものが此まま老ひ去つては大變なり、我黨の人々にも今一度大に創作風を吹かす御工風御相談たまはりたし、僕も其內こちらの男女を捉らへて頗るかはつたものを書いて見んと內々愚案中、併し之は餘暇の道樂なれば何時出來るか分からず、御令室御無事にや御尊父樣へもよろしく、僕頑健如舊、此兩三日雨あり風冷く流石に秋聲の都に滿つる心地、今年は田舍へは行かずじまひ也、僕の下宿に女小說家の卵といふやうな女が泊りゐて色々をかしきことあり、此春出京の節泊りし下宿の娘は女俳優の卵なりき、此所等がこちらの女の木地を見せて面白し、先達てすぐ近くにある日本料理へ平田下村の諸君に誘はれて始めて行き一食忽ち下痢を來し閉口せり、胃腸がハイカラ化しては歸朝後困りものなるべしと今より心がゝりなり、下らぬ事まで書いて失禮、諸君へもよろしく

九月十一日　瀧太郎

伊原大兄机下

此手紙勿論コンフヰデンシヤルと御覧をたまへ

――明治卅六年十二月九日、オックスフォルドより――

謹賀新年

御状拝見御達者にて何よりと存候、新聞小説の事御註文何れ其内御目にかけ申すべく候、但英國の新聞には概してあまり小説を載せず寧ろ近時家庭の讀物など申事から多少之を新に試むるもの有之有様に候、一般の通俗的小説に就ても其内何か書かんと存居、候芝居の事も大分書きつゞけ候に付此次は繪の事を書くつもりに候、金子君は已に歸朝別に胃痛など申様子も無之様に覺え候へば訛傳なるべく候、小生も病氣との噂有之候由に候へど全無病に候、紅葉氏の葬式場にて坪内氏卒倒云々の記事を見早速見舞は出し置候へど心がゝりに存候小杉君近來便りなく如何かと存居候貴兄目下は專ら新聞小說に御埋頭にや演劇史の進行賀上候之れ出でゝ貴兄が劇史學上の地歩益明となるべくと存候早稲田にて其內科外講義など試み給ひては如何小生歸り候上は此やうの方面に學校の門を開き度と存居候、奥様へよろしく御親父様へも、土肥君など團洲死後の梨園に大分計畫あるやに聞及び候が如何の模様にや劇作家の前途は如何の豫測に候や、貴兄の新方面とは作の事に候や或は研究の方にや、新小說なる文學史料餘程おもしろく覺え候、全體に早稲田出身の諸士近來あまり氣焔揚らさるやうには候はずや、尤貴兄は此

等の諸士とはあまり御知合もなかるべけれど長谷川・中島・林田などいふ諸君の近況外より評して如何に候や、千葉君は如何せられ候や近来文壇にはあまり氣焔が見えぬやうには候はずや、紅葉の死眞に悼むべく長田君は飛んだ事になり候もの哉

島村生

伊原大兄机下

——明治卅七年・オックスフォルドより——

御手紙拜見、演劇史も正に頂戴致候先に大半御片付被成候て目出度存候、あとをたゆまず遣つゞけ玉はんと希望に候ひまひまに讀み候が面白く存候、藤十郎傳の邊最精采あるやう也、疑說多き所は一々謙遜して疑を存し置き玉ふ用意はさる事ながら一々疑說を考證したまひし上は一そ思ひ切つて貴兄の肯定判斷を下し玉ふ方が一層世間によかるべきかと思はるゝ箇所あり尤貴兄の細心を以てしては之れをなすに忍びざる事情もあるべきが讀み／＼考へたる素人了見の一を無遠慮申上候也、綠雨君死せし由新聞にて見候、身のせいとは申せ可愛さうに才子一代を貧と病と僻みに果てたり、色と酒とはどうありしか新聞の廣告まで工風ものゝ由、婆婆氣のどこまでも勝ちし人哉と存、候桐一葉相應の成功の由にてうれしく存候兎も角も一度皮を切ればあとが見當がつきて作者のために結局宜敷と存候、作者みづからは例の通りの潔癖なれどたまには側から行つていやをう無しに濁りの中を一緒に泳がすがよし、淸濁併呑の意氣は我等若い方に領して置くとと存、候例の東儀君などの連中如何致候や山岸君は讀賣を出て新小說に入りしやうなるが何ぜ讀賣を出で候にや、二六、どんな事を書いたのかは知らぬが氣の毒のものに候氣の毒と申せば枯川君、飛んだ目に逢ひ候ものかな、秋濤君は露探といふものゝ元祖か本元のやうに新聞などでも高

櫓何某と並べて書くこととなり居るは全體どうした次第にやあまり跳ね廻はるからでは無きか兎に角物騷の世の中と存候事實露探といふもの丶恐れがあんな方面にあるものにや、仰越早稻田の猪尾がり氣風については僕もひそかに案じ居候なり、着實の風もしくは蘊蓄の風がます／＼失せて流行ばかり追ふ傾となると根底から改めねば仕方があるまじと存候が如何。歸朝の後大に工風して風を反したきものに候御考置願候此地戰爭の噂は恐らく日本に居ても是程にはあるまじと思はるゝ程に候日々の新聞の大見出しは殆ど是れにて占領せられ居り候。先日敷島吉野沈沒の報以來露西亞側は是れ幸ひと日々有らん限りの工風を凝らして日本の敗報惡報を佛國の新聞に吹聽させ居り候爲、世間が非常に悲觀的になり居り候、何か近き内に一大捷報ありて此の陰欝の人氣を一掃せざれば我等までも心落つかず候、御轉宅の由。御令室は御丈夫に候や御親父様も同樣にや、やはり日々社通ひに候や、歌舞伎毎々難有、其内何かと思ひ居り候へど不精にて御疎遠若し右雜誌一々君の迷惑となり居るやうの譯ならば面白きもの丶ありし時だけ御無心申す事に成し可被下、拜見するに越したるはなけれど毎號御迷惑をかけては多すぎ候。小生此所月早に渡獨の豫定に候、段々延び候、最早出國以來二年の餘になれど我ながら何をしたか分からぬくらゐ也歸つて見れば日本に居る人々の方が遙に仕事をしてゐ給ふといふ樣なるべしと存候、近來御體如何、小子頑健だけは仕合に候

五月廿四日　　　　抱月生

靑々園大兄

——明治卅七年、伯林より——

暫く御無沙汰如何御暮しにや、小生無事七月下旬此地に引移りたり、昨日新聞にて鋭雄君戰死の由を知り早稻田文學頃よりの事ども胸に浮んでいやな氣持に昨夜は臥床に上り候。今の模樣では戰爭はまだ〱納まるまい、此分では文學も尙しばらくだめなるべし、併し新聞社の方は定めて日々忙しき事ならんと察上候。今度の御新宅は如何の御心地にや。新聞抔にては表面立派に言つてあれど、內地一般の事情は定めて大疲弊の體ならん如何やと心がゝりに候。近來久しく後藤、小杉の諸君からも便りを聞かず皆相變らずと存候小杉君の魔風戀風といふもの大賣れの樣子、近來また何か大きなものでも書いてゐるのか、後藤君の魂のありかといふのは先頃新小說にて讀み如何にもしんみりした作柄と賞味したが今の若い讀書社會にあんなのは向くまじ、また分かるまじ、君は近來中心を何に置いてやつて居たまふや作の方も續け居らるゝや例の劇史のあとをも續け居たまふにや、あすこまでにては誠に口惜しき心地す、早く其後を出され度もの也、僕近來なまけて何も書かず其內と思ひ居り候。伯林に來ては矢張りビールを呑むことを覺え候、出國以來殆ど禁酒(心臟のため)の體でありしが、此方に來てはそれが却て不便故弱い酒ならばとやつて居り候。伯林の例の密賣淫といふ事評判なれどロンドンを經て來ては一向不思議とも思はず。日本にては近來女學生の惡評大分あるやうなれど實際は如何や、色氣の大すぎるといふ批難なら考へ物だ、今のは惡いとしても兎に角日本從來の女のやうに無味乾燥では到底活きた世は續かじ。今更めきて女子教育論でもなけれど女を昔の貞女式に仕立てる間は女といふものゝ理想は益々ねぢけた方へ向かふべし。知識教育と共に容貌教育も戀愛教育もやるがよし、色か戀かは知らぬが兎に角此の邊のものが矢張り女の女らしく又女といふものゝ世に出來た意味の中心なるべし、日本の從來の所謂黑人は此點の教育が發達しすぎて外が伴はぬ爲却つてフラツテリーが冷かな度にまで行き酷とも薄ともなりし。嫌な所があれど併し此酷薄を除けば味があるといふのは戀愛教育の成就してゐる爲であらう西、洋の女は此點からいへば皆日本の黑人

也、たゞ白人的に正直なるためフラッテリーが矢張りチヤームとなる譯、尤斯やうな講釋を君の前にて事新しげにするでもなけれど兎に角女から色氣を拔かんとする教育方は女子教育の本意に非ずと思ふが如何（僕が西洋の女にまゐつた譯でもなければ、どうかうといふ事情のあるでは勿論なし、是は客觀的の觀察論たる事固より也）。此地にては未だ日尚淺くして芝居なども多く見ずそろ〳〵冷くなれば仕事に取かゝらんと思ひ居り候。英國は萬事が平民主義たるに反し獨乙の役所主義、肩書主義はうるさき程也僕などもどうしたはずみか宿のものにドクトル〳〵と呼ばれてゐる、大學卒業生には皆ドクトルで通すからであるべし。川上はとう〳〵伊藤の幇間となり了したる樣子に候はずや。坪内氏新樂劇に工風を凝らし居らるゝ樣子、完成の日を待ち遠しく思ひ候。近來東都の劇况如何や新俳優の伊井高田あたりが合同するやうの噂新聞に見え候が其後如何。雜誌文學は不相變いがみ合が多い樣子には候はずや、中島、正宗などいふ諸君が誤譯とかで包圍攻擊に合ひ居るやうなるは如何なる事情によりてにや土肥、東儀などの諸君の芝居熱は如何相成候や。奥樣御健全にや御老父へもよろしく、前後不揃の亂筆御免其内また〳〵可申上候

九月十日　　　島村生

伊原大兄

August str 83 III
Berlin, N
D-utschland

——明治卅八年、伯林より——

しばらく御無沙汰御近況如何。小生いよ〳〵伯林は當月限り六月一杯に伊太利、佛蘭西を巡つて七月倫敦同、廿五日サウサンプトンより獨乙船ローマ號にて印度洋通りに歸朝と定め申候、横濱着は九月十日の筈、歡語の期も遠からずと樂しみ居り候米國通過は初志なりしも間際になつて見ると金が足りず、舊の道をお通りとは知慧のない話なれど詮方もなく候。此葉書の御手元に着くは六月末と存候へば御たより等一切發送はそれより御見合せたまはり度候、今年當地の二大出來事は先日のシラー百年祭と來月の皇太子婚儀式中々の騷ぎに候、小杉君の物もとう〳〵舞臺に上つた樣子出來榮如何なりしかと存居候、先般同君よりの來狀にては中々元氣の模樣先づ何よりに候、後藤君も大分作氣が催して來た樣子にて結構。貴兄は不相變多忙の事と察上候、戰爭が旨く止まねば文學はだめなるべし、芝居も新聞及貴兄の雜誌にて拜見すると近來飜案物の不思議なのが大分流行の趣。小生の考では西洋の大作を飜すやうなら矢張り眞の飜譯でやる勇氣がなくては駄目それも時代物よりも現代物を取つて人名なども日本の口調に和げる位の邊で我慢をしてやつて見るべしと存候が高見如何。新小説も大分無沙汰したれば歐羅巴を去る前にせめて伯林の劇壇現況とでも申ものだけなりとも送つて置かんと存居候、英吉利の雜誌へも日本文學の現勢といふやうなものを書く約束はしてゐながら歸るまでに書けるやらどうやら未定に候、坪内氏も近來元氣よき樣子にて何より結構に候、雜誌永々の御手數奉謝候あまり書いたものも差上げず不相濟何れ歸つて後の事と存居候

五月廿三日　　　島村生

伊原兄机下

——明治卅八年、ブタペストより——

去る七日伯林發足目下ホンガリーの都ブダペストに罷在候、明後日はアドリアチツク海岸より伊太利にわたり申すべく巴里着は來月差入りか今月極末と存候、先般は雜劇會よりの葉書面白く拜見、牧の方の成績聞き度存居候先は右まで

六月十七日　　島村生

——明治卅八年、羅馬より——

ローマより御たより申上候、流石に當地には感慨の料多く候、此れが即ち古のアンフヰシアターのルインに候、今昔の感如何や

六月廿六日

——明治三十八年九月廿九日——

其後は御無沙汰いたし候、小生一昨日左の如く轉居、いづれ其内拜眉と存候

牛込原町三丁目七十四番地

島村瀧太郎

――明治四十年二月、牛込區藥王寺前町廿より――

拜啓
今夕は態々御招きに預かり候ところ折あしく二三日來流行感冒にて臥床いたし居り失禮ながら不參仕るべく、右何とぞあしからず思召被成下度候　匆々頓首

――明治四十年五月、藥王寺前町より――

拜復、御稿有難く存申候、又先度は社員罷出御邪魔奉謝候双方とも今月のへ出し度存候何れ其内拜眉と存居候早々
十四日

――明治四十年五月廿八日、藥王寺前町より――

拜啓、今年は例の講習會をいよ／＼やる事と相成り坪内、丘、三宅、金子、小生が比較的纏まつたものをやる事に定め候就ては貴兄は科外講話の方に御連名置被下度、七月十一日より十日間午後六時より三時間宛といたし申候、細かき事は追て御定被下候てよろしく右兎に角御承認置願上候、何れ其内幹事會いたし可申候、今日一寸電話かけたれ共不通右要事而已申上候早々

瀧　太　郎

青々園大兄机下

（文藝協會の主催にて講習會を開く下相談なり）

――明治四十年――

拜啓、御原稿多謝土肥君のと並べて出す事にいたし候近日拜眉と存候へ共不取敢右申上度如此に御座候早々

六月廿日　島村生

尙貴兄の文藝講習會科外講演題御一報被下度廣告の都合有之候

（原稿とは本鄕座にて演ぜられし支那人の劇批評）

――明治四十年、藥王寺前町より――

拜復、御申越の旨承知しました、東儀君へ通じませう、其代り早稻田の方へ必ず願ひたいものです、尙何れ近日御目にかゝり度とは思つてゐますが協會の方澁澤の件が先日の話の模樣では先づうまく行きさうです、帝國座と不卽不離の干係が萬一他一に障りありてうまく行かねば少なくとも澁澤一個としても相談相手になるといふ所まで突きとめて來ました、存外此方の趣意もよく分つて至極贊成ゆゑ益田、西野などいふ面々にも一寸話して返事するといふことになりました、唯懸念は□□などゝいふ手合の態度であるが是とて澁澤があれ丈呑込んでゐれば大丈夫かと思ひます、尙支那人から君と土肥君に宛て先日の批評の長い手紙が來た、土肥君から君の方へ廻す筈です、都合によつたら右の手紙を雜誌に出さうかとも思つてゐる

繪葉書も添つてゐる何れ御目にかゝつて詳く申上げませう

七月十日　　瀧太郎

伊原大兄

（文藝協會へ富豪より出資を求むる件について報告なり）

――明治四十年、藥王寺前町より――

拜啓御申越の旨拜承論文何卒御書き被下度來る十四五日頃迄に願上候又東儀君より申來り候、幹事會の件、四日と申來り候が四日以後とは四日は差支との意に候や又は四日ならばよしとの儀に候や御知らせ被下度、東儀君は五日には再び逗子に歸ると申居候、又來三日に新富座見物連を募り候が貴兄は無論御出無き事と存候、坪内氏の發意にて秋のハムレツトの參考に專ら協會連に見て置いて貰ひたしとの事よりに候右要事のみ申上候

八月一日　　島村生

伊原大兄

――明治四十年九月一日藥王寺前町より――

拜啓例の協會の節附其他の件其後如何相成候やと坪内氏心配いたし居られ候、餘り後れては間に合はぬ恐は無之候べきかとの事に有之候急によろしく願上度、新聞によれば杵屋は大阪に行くとか其邊うまく參り居り候や其内東儀君歸らば會を開くべくと存居候

――明治四十年十月――

拜啓、廣告の件難有存申候會員の件は折衷案にて半減の所を三割減に變更し矢張り一圓席と五十錢席とに限ることに致し候、水口君よりは內見の方にとの事なりしまゝ折衷して案內いたしたる儀に候、書外拜眉

卅日　島村瀧太郎

（文藝協會の公演につき會員の席料を割引の事を通告し來りしなり）

――明治四十年、藥王寺前町より――

拜啓

兩三度電話をかけたれど其都度うまく話せずじまひに候、御申越の廣告は五日限りと申事にて御取計らひ被下度七圓の分（表紙の三）は富山房のにて間にあふ由に御座候へば其方は御心配下まじく、少し紙數で殖え候故告廣可成高くとり度と存候筋書は七日頃ならでは出來ぬ由に候故假に順序書のみ作りそれを間にあはせに先に配り置く事といたし候、それと切符とは

今日出來上る筈に候、本郷座の高田實等の合同事件の結果は此方に障らず候や其の影響は良否何れに候や心がゝりに存候右要件のみ申上候書外拜眉

十一月二日　　島村生

伊原大兄

—明治四十一年一月、藥王寺前町より—

拜啓、急の事にて恐入候が三木君に關する追憶文何んな方式にてもよろしく候が此二十日までに御執筆願はれまじく候や、又同君の寫眞一葉拜借出來申まじくや右一寸御願申上候、御返事玉はらば幸甚に候早々（書外拜眉）

十六日　　島村生

伊原大兄

—明治四十一年—

拜啓、去廿五日はわざ〳〵御招待に預り奉謝候參上のつもりに候所其日になりて急に病人生じ失禮いたし候、御評によると豐公餘り上出來でない樣子如何なりしか何れ其內一度是非見たく存居候、尙御社へよろしく右御斷り願上候書外拜眉

三月廿八日　　島村生

（都新聞の懸賞脚本にて島村氏も其の審査員とし醍醐の花見を上場せし時）

——明治四十一年——

拜啓、其後は御無音申上候さて先便御申越の件此頃出版部のものに掛合候所來年度は既に目錄は議定後にて如何とも致難く候へど事實必ずしも載せられざるには非ねば唯滯らぬやうの御仕組被下候はゞとの事にて全部を荒方まとめて御廻送被下候はゞ何とも致すべしとの事に候が、それが貴兄に都合つく事か如何かと申居候、尙貴兄より右係のもの（岡崎密果君）へ詳しく御申送下さらば形がつき可申候、右御返事延引ながら申上候其内拜眉と存居候早々不一

八月廿五〇　　島村生

伊原大兄

——明治四十一年——

拜啓、服部嘉香君今年英文出にて例の百科全書係の一人に有之候目下明治文學史の部執筆中に御座候、就ては昔の明治文學年表のあとの邊の材料御手元にあり候はゞ御貸被下度、又種々御氣付の點は話し願上候右要事而已如此に御座候匆々不一

九月六日

島村生

伊原大兄机下

——明治四十一年十一月藥王寺前町より——

拜啓、米國にある學生が卒業論文に日歐演劇發達史の事について書きたいが日本のを見るには何がよいかと聞いて來たと友人より又問を受けましたが貴兄の演劇史の後の所を見るには何が一番簡明穩當で又買求められる本でせうか、一寸急に御一報下さらば仕合ます

廿九日

島村瀧太郎

——明治四十二年　藥王寺前町より——

啓上、別包原稿八通（26…33）御返し申候、第二回目の八通は今少し預り置申べく候右當用のみ書外其內拜眉を期し候早々

九日

島村生

伊原大兄机下

――明治四十三年三月、小田原早川口みよし屋より――

御手紙並に旅中では何より用品ありがたく頂戴いたしました、去年の暮精養軒で會つて以來掛違つて御目にかゝらなかつた内に斯な事になつて了つたが併し大した事は無からうと思ひます、僕は心臓が悪いから正かの時はそれが來るのだらうと思つてゐた爲肋膜の隣は肺といふので初は心配もし學校や坪内先生あたりでも心配して呉れられた、が今の所では先づ大丈夫と思ひます、何だか體に隙があるやうな氣がしてしまつて居ないやうではあるが今少し靜にしてゐたら元の通りになるでせう、今まで病氣を馬鹿にし體を蠻的に持扱ひつけてゐた爲今度は少し勝手が違ふやうに思はれましたが、互に四十といふ聲がかゝつては精神は若いつもりだが肉體がそれに背いて來るのぢやないかと少々心細い、併し働くには飽まで若くなくては駄目だ、君なんかも精々年を取り給ふな、それにつけても土肥君など大に體で働く役の人が段々取る年波といふとひどく老の繰言めくが實際年を取つて行くのは困つたものだ、早く今の内に今の研究所のものだけでも何とか物にして目鼻をつけてやつて土肥君を座頭にして舞臺に突進する工風が必要だらう土、肥君もかあいさうだ、定めて當人もやきもきしてゐるだらうと思ふ、水口はもう到底だめだらうなあ。

此地氣候は東京よりも大分暖です小生あまり永びくやうな(ら)借間でもしやうかと思つてゐます、奥様は病氣沙汰の由初て承りました、君の家にも病人が絶えないで御心配でせう皆様へよろしく

廿三日　　瀧太郎

伊原大兄机下

——明治四十三年六月五日——

御葉書拜見、御招き多謝、明日は定刻迄に御指定の家へ參上の心組に候、書外拜眉

五日　　　島村生

——明治四十四年、藥王寺前町——

拜啓　別紙家庭の注文書、御紙のあの第一面の冒頭の欄にでも出して下さい、今度の家に瓦斯を引くにつけて何うも不便て困るからです、無論匿名で願ひます戸山の原續きへ又々家を建てかけたり、其內拜眉

四月廿七日

伊原大兄机下　　　瀧太郎

（瓦斯使用についての不平を都新聞の讀者と記者欄へ掲載すべく依賴の書面）

——明治四十四年——

其後は御無音申上候先日都宛に小生の家庭よりのもの一つ差出置候が御落手被下候や、或は長すぎたかとも存候、さて毎々ながら此状持參の中村長作君に御あひの程奉願候、同君は四十二年の早大國漢の出にて御社の遲塚山本諸君にもあひ貴兄にも逢ふやう言はれたれば小生より紹介呉れとの事に候、つまり御社に入り樣熱望の由にて經歴は目下は一年許り大阪新報の支局を支配し一切を一手に活動して成蹟よく、又學校に入る前數年間北海道に行き開墾などより鐵道驛夫、而して遂に驛長（小樽其他轉勤）まで勤めて學資を貯へさて學校に入りたる人の由、從つて人物も至つてねり居り記者として申分なき人のやうに候まゝ御引立玉はらば幸甚と存候、右用事のみ早々不一

五月七日　　島村生

伊原大兄机下

――明治四十四年、藥王寺前町より――

拜啓三十一日の夕方より坪内氏宅へ小生と貴兄と時間を打合せ來り呉れとの事に候が矢張り夕食後六時頃よりと致しては如何、右御差支なくば御返事に及ばず御差支あらば都合よき時間御知せ願上候早々

五月廿九日

――明治四十四年、藥王寺前町より――

拜啓、先日東儀君より大連の新聞社への事申來り候に付其候補者として今年英文出（但し父の病氣にて歸鄕し居り九月未濟試驗を受ける筈になり居り未だ正式には卒業せねど卒業はたしかの人）の村木清一郎君差出し申候、適材に御座候御會ひの上先方へ御紹介願候尙條件等も御話し聞かせ願上候

奧樣御病氣の由一寸承り候が如何の御樣子にや、日外の禁止問題に就き御心づきの材料あらば御示を乞ふ

六月廿六日　　　島村生

伊原老兄机下

（禁止問題とは文部省の文藝委員會にて小說及び脚本の發賣禁止につき島村氏が意見を吐くべく其の實例を余が手許にて蒐集する約束なりしをいふ）

——明治四十四（？）年、戶塚村諏訪六十五より——

拜啓、乍唐突多田鐵雄と申人推參いたし候御引見の榮を玉はり度、都にて三面の記者を要され候由とかにて貴兄へ推擧呉れとの事に御座候、此人は兩三年前早大の文科に一寸居り中途てやめて時事新報の文藝欄訪問記者及橫濱貿易新聞記者等を經驗し目下は再び早大の政治科に入り居る人にて御覽の如く世故に通じ、且文筆も立派にて早文にスケツチをも載せし事ある人、間に合ふ事は請合に候、都合つき候はゞ御引立願上度紹介迄如此に御座候匆々

十一月廿一日

伊原大兄　　　　島村生

——明治四十五年、戸塚村諏訪六十五より——

文藝委員會新聞の種になり居候が何かあのやうの事ある譯にや

拜復御、返事後れ申候例のマグダの飜譯にて大トチリ、やつと前半だけ今朝活版へ廻し申候、二月の早文への御談話輕卒の事ありし由にて申譯無之三月號によきやう正誤申附置候、今後は矢張り一度御目にかける方よろしと存居候、都新聞に協會の會計不始末云々の「日日」の記事轉載ありしとかにて協會連まごつき居り候、何れ其内何とか願ふ事と存候廿六日の幹事會にて拜眉の事と存居候早々不一

二月廿二日　　　　島村生

伊原大兄机下

——明治四十五年、余丁町文藝協會より——

拜啓、明日のアーチャー歡迎會には無論御出席の事と存候が、五時頃より坪内氏宅へ伴ひ來りてより六時開演までの間坪内氏二階にて茶菓を供し芝居の繪など見せて多少說明し聞かす筈に付其繪（解？）說を貴兄も御列席の上小生までして貰つて

それを通譯するといふ順序にしたしとの事に候よろしく願上候

六月一日　　　　島村生

伊原大兄机下

――大正元年、京都三本木信樂方より――

小生目下此地に居り候日外御願いたし候署名の紙、御出來に候はゞ折つて郵便にして戸塚村の拙宅宛に御發送被下まじく候や、それとも使をとりに御呼よせ被下候てもよろしく何れとも願上候

十一月十四日

（米國の某博士が日本に於ける著名なる人の自署を蒐集するにつき、余は島村氏より依賴せられ俳優の部を擔任せる時）

――大正二年五月十五日、早稻田大學より――

人形の家はもう疾くに貴兄あてに送り出させた筈でしたが未着か不着かと思ひます、早速送らせますからよろしく願ひます其内拜眉と思つてゐます

――大正四年（?）――

其後は御無音しました、さて演劇學校への御出講きまつた時間には御厄介でせうからお暇の日時を豫め前に御指定下すつ

て月に一回で二回でもよく何時間にても御便利な文づゝ日本劇史の要點々々を御講話下さらば有りがたいと思ひます、小生を昨日北海道より歸京明日また臺灣に立ちます

廿五日　　　島村生

伊原大兄

——○大正四年、臺南より——

臺灣も幸に盛況に御座候御健康を祈上候

十月廿五日　　　臺南にて島村生

（すま子）

——大正五年、群馬より——

表記のような面白い顏觸れの一團で今日伊香保から榛名へ駕籠で上つて湖畔亭で晝飯をたべました、跡から短い記文を送りますから見て下さい

九月二日

抱　月　生

九月二日榛名登山の紀念連名

ツルスケ　山田喜久次郎　常陸坊　瓢たん　島村抱月　小泉丑治　すま子　末子、豆鶴

一直てる子　三遊亭遊輔

——大正六年一月一日、横寺町藝術倶樂部より——

拜啓、先日は失禮いたし申候、さて其節一寸御話申上候淀君の脚本（出雲のお國）は兎も角も歌舞伎にて出し候ものにも有之何とかして別のものに御工風は無之や、二月三日より歌舞伎（いよ〳〵確定）に上し候脚本の選定に頭を痛め居り申候、三日より九日間の長興行（こちらには）にも有之諸方面に工風を加ふる必要有之候が場合により題材は同一のポイントにても面目と題が變ればよろしかるべく「孤城落月」の向ふを行くやう松井の熱烈性にはまりし華美艶濃の舞臺、可相成は一幕ものにて御急案は無之や御意向至急御漏し願上候　要件のみ取急申上候匆々不一

第一月一日　島　村　生

伊　原　雅　兄　机　下

——大正六年、伯耆國倉敷町東雲方より——

拜復、暑さの砌御變りもなく候や吳への御狀唯今拜見、小林興行部への云々、當方には少しも心當り無之全く何れの間違かと存じ候間乍御面倒其旨御通じ置願上候、目下山陽道でカチューシヤの初ての所を拾ひ〱して山陰道に入り、京都へ出て歸京いたし度と存候其途すがらに御座候下の關よりたゞ歸るも無駄なりと存ぜし計畫が存外日數をとりて八月末ならでは歸京出來まじと存居候、松江米子等幸に非常の好人氣にて迎へらるゝ樣子なりしが、松江の劇場が去月末失火して劇場變更等の手數を生じ居り不取敢之より米子に向ひ申候、小場所を拾つて行けば案外打場所のあるものと感心いたし候、山口、新川、福山、倉敷など打つて見れば皆相應の場所にて藝術座の水平興行地に入り申候、山陰は餘程よさそうに候其內拜眉萬述可致候匆々

八月十日　　島村生

伊原大兄

——大正六年八月、兵庫縣豐岡より——

松江は二日間興行で非常に盛でした、全體に山陰道は思つたよりも向上開發の機運が盛になつてゐます、雲州では[illegible]外、今市、大社、平田、木次を打ち其他石見の大田、又鳥取、米子、倉吉を打ち、豐岡より舞鶴、宮津を打つて東京に歸宅する豫定です、大社で松陽新報の飯島君といふのに會ひ色々お國の研究考證を聞きました、最近又大分おもしろい發見があるかも知れぬ樣子です、君と僕とそれから右の人々とで一つ大にお國の發祥地の表彰を計畫しやうではありませんか、何れ拜眉の上申上げませう

――大正七年――

熊本より御たより申上候

三月廿四日　　　　島村生

（すま子）

――大正七年、横寺町藝術倶樂部より――

拜啓、其後は御無音申上候さて今度の研究劇、小出氏に御頼みして四日に御繰合を願置候へど當日も他に有之候由にて不定の様子に候が可成御繰合せ玉はり度、万一不得已ば別の御出被下度、爲念入場券一枚封入致置候是非とも御覧奉得候書外拜眉を期し候匆々不一

十月一日　　　　島村生

伊原大兄机下

（これが余の受取った最後の書翰である。そうして書中の通り十月四日に藝術倶樂部へ見物に行つて歸りがけに事務所の暗い窓から抱月君の聲をかけたのが永久の別れであつた。）

——(年　月　不　詳)——

拜啓、御無沙汰勝に候、さて每々人のみ紹介し候が今回もまた〳〵其用にて此書を呈し候、持參者は武久夢二君と申す諷刺畫家志願の青年に候、物によつては中々うまく小さいコマエ體の寫生畫等も得意に候得ば讀賣の三面に雜報の助として挿むものなど機會あらば御書かせ玉はるまじくや、文章も一寸書け候へば事件を觀て文と畫と兩方書かすといふ場合など適當に御座候、嘗てヘナブリ雜誌を主宰し居り候人、早稻田實業學校の卒業に候、右當用のみ申上候當人に御會ひの程願上候早々

四月四日　　島　村　生

上司大兄机下

(年　月　不　詳)

拜啓、先度は平民新聞難有拜見、自然主義論は何にしても騷ぎとなり候今年は自然主義と非自然主義との喧嘩が榮えるならんと去年の暮に豫言して置いたのが(豫言もちと大層だが)事實となつて來さうなるは面白く候、行くところ迄行かして見たきものに候小生が自分の立場は矢張り此主義は文藝以内、更に限れば小說以内のものとする所になるやうに候、此點恐らく自分の貴兄とは合すまじけれど兎に角直卒な新運動は何でもよし又面白く拜見すべし、日本新聞の事誠に馬鹿々々しく候、人かと思つて拘りあつたのが例の通り小生の失策、今は人外と見て打ちすて置き候近來は大分佛ランスもの御讀の樣子何か

それについての感想なり論文なり批評なりあらば寄稿被下まじく候や、社會主義等の思想が實行界に伸び行かずして鬱屈して文藝の芽となり文藝の園を肥すべき運命のものなるべしとは小生の持論也如何

三月四日　　　　　　　　　　　　瀧太郎

上司兄机下

（明治四十三年）

先日はわざ／＼の御出に雨で殘念でした、此日曜には星湖君と學校のものが來たに之はまた珍しい雪で散々、例の吸入器は直りました、御送り下すつた品何よりと賞味いたします、まだちよつとは歸れさうにないから場合によつたら間借でもしやうかと思つてゐます、其内日記やうのものを送りますから（小正宗君が歸つたら畫入にでもしやうかと思ふ）少しつゞけて三四十行宛載せて下さい、先日見たのは城の裏門であの先を曲ると正門であつたのです、今少し大がゞりの所が見えたのでした、退屈まぎれに書物を取寄せて土地の歴史を調べて見ると少しは面白い所が出て來さうです

小田原早川口みよし屋にて
島村生

二十二日

上司延貴様

（大正六年）

拜啓、其後は御無音申上候さて小生來八月中旬には歸京、それより準備に加はり九月末までに藝術座か他の劇場かにて新しきものを演じそれより更に冬の旅行に取かゝり度豫定に御座候が脚本部の機關久しく留守にいたし居り候爲荒廢し、仲木君は例の新劇團の世話係に轉じたりとかにて中村君はあの通りの病氣に候まゝ此際貴兄及島村民藏君等（其他適當の人あらば加へ）に藝術座の脚本選定部を作つて貰ひ、差あたり小生歸京までに御心當りの大體の見當御つけ置願度今の所小生の考案中には創作物にて中村君のハツトピン、嫉妬、戀を知る頃、飜譯中にてトルストイの「生きた屍」其他フランチエスカ、フロレンスの悲劇、カルメン（何等かの方法で劇にして）等にて候へど何れも長し短しなり其他創作物にて如何なるものあるか、飜譯ものにて他によきものなきか廣く公平に御選擇願度、藝術座にて演ずるとすれば純藝術的小劇場的にてよろしく、最可能はそれを少くとも大阪へ持つて行きたければやはり大劇場向のものにて藝術的にもよきがあればそれが望ましく、普通劇場にてやるとすれば勿論大劇場向ならざるべからず、配合は日本物半、飜譯もの半分位の分量に出來れば手頃と存じ候、大劇場向のものは申迄もなくアクセントの強きものならざるべからずと存じ候、飜譯ものにてユーゲント、ヴエーラ、創作物にて若い人々のものなどに恰好のものは無之候哉、久しぶりにてイプセンものは如何、肩が張すぎると申べきか、寂しき人々の復演は如何、兎に角此際興行としても藝術としても藝術座に最も適當したる出し物は何なるべきか御研究御協定願度、尙此機關は今後とも藝術座の補佐機關として完成して貰へば結構と存じ右至急御願まで申上候匆々不一

坪内士行氏、秋田雨雀氏其他すべて實地に經驗ある人の意見御まとめを願へば一層たしかに候べきか

島村生

八月三日

本間大兄机下

（明治四十三年）

拜啓、今月の歌舞伎の御評ノラに關して御感じの通りを世間の思はくに遠慮なくすつきりと言つて下すつたのは嬉しい事です、自分等に干係ある事故、差控へては居れど公平に見てあれ丈の事は言つてよく又内心あれに似た感じは懷きながら種々の打算から生ぬるい事を言つてけちをつけてゐる者の多い中であります、經驗ある君なればこそ、あれ丈の細い點まで見ておやんなすつたとも思ひます、土肥東儀兩役に干しては土君は努力して進む人、東君は努力せずして進む人、そこに長所も短所もあるやうなれど小生が實演に加手したのは今回が始め故まだ何とも評されません、先度の出來にはまだたしかに不滿足な點がありました、其内早文へ何か書いて下さい、言ふまでもなく此んな手紙は公表して下さらないやうに願ひます

十一月七日　　島村生

川村兄

（大正六年）

拜啓、昨夜此地初日大入にて好評のやうに候御安心被下度候、神戸を經て大阪十二月十二日浪花座初日と定まり申候に就

ては御體の都合にて其一兩日前になりとも御下坂、御運動願上候今回は十二月の興行といひ新派が荒したる後といひ且種々の問題ありたる後に候へば一層の努力を要すべしと存じ大阪の宿等は未だ定め申さず候へど何れ其内相定可申と存じ、先は右申上度如此に御座候、小村君は近來如何いたし居り候や宿等失念貴兄より宜敷御傳へ被下度候匆々不一

十一月廿三日　　島　村　生

川　村　大　兄　机　下

（大　正　六　年）

拜復、二十一日一同無事歸京いたし申候、大阪は初日三四分の間、二日目五分、三日目八分、四日目八分強、五日目五分、六日目六分、七日目五分と申成績にて豫期程に來らざりしは殘念に存候、さて武田君の進退に關し頻りに紛々と蜚語を聞き候へど未だ貴兄乃至當人より小生へ何等の話をも承らず候へば無論蜚語たるに過ぎざるべしと存候武田君は病氣にて其後外出せざる由なれば未だ面會不致候へ共御序の節は貴兄よりも可然御傳置被下度病勢重大ならば見舞をでも遣はして樣子聞かせんかと存じ居候、小村君も病氣とか折角御自愛祈上候例の高久は卒去の由にて意外に存申候其内拜眉萬縷相盡し可申候匆々不一

十二月二十六日　　島　村　生

川　村　大　兄　机　下

小村君へよろしく御傳願上候

（大正七年）

拜啓、早文五月號未着のためやつと雜誌屋で一冊見つけて買ひ、沈鐘一讀しました、やはらかによく出來ましたステージテキストとしては尙多少の減削を要し可申、それらは目下小生も考案いたし居り候間何れ拜眉御相談申しませう、唄及せりふか牛ら唄につゞく邊大に工風を要すべく工風次第にては面白いものになり可申、全體としても深くも淺くもよい芝居になるべしと樂んでゐます、唄の事中山君御あひ申さば篤と御相談置下さい、節は何れもあまり凝つたものよりも極すなほな單純なものが無論調和いたし可申殊にせりふから唄になつたやうなゝらぬやうな鼻唄程度のものになるべきものはせりふ廻しの工風が工風ものです、小生が伯林で見たのは泉の怪の扮裝がおぼろげに頭に殘つてゐる位のものであとは全く忘れてゐます、寫眞や參考もの等貴兄の手で精々集めて置いて下さい、そして一行の歸京は六月になりさうですから六月といへば最早學校の試驗期で芝居はどうかと思ひます、さすれば一々演出は九月に廻して北海道行の約を其間に果たし且旅中せりふの稽古をさせ八月歸京本稽古にかゝらんかとも思つてゐます、それにしても歸京（六月初の豫定）次第一度座員に沈鐘の話、役所の性根氣分の話など聞かせて工風させて聞きたいと思ひますから其仕度をして置いて下さい、本讀みもざつと一度して置きたいと思ひます、要するに工風は唄がかつた點にあるのですから之をお考置下さい、半オペラチックに音樂も或方法程度で使つて見たいと思ひます、勿論これも工風ものです、六月開演か九月開演かは歸京までに定まる筈です

今別府で四日許り打たせて居ます、九州全土を表九州裏九州とも殆ど文字通りに踏破しました、非常に盛で殆ど不入の日と

いふ事なしに百十日餘りすでに打通しました、之は一は他に大物の競爭がなかつたせいもありませう又九州一體の盛んなのもありませう、最近鴈治郎が來たやうですが之とても一向に影響ありません、東京もあまり面白い芝居が無さゝうですね

十六日　　　　島村生

楠山大兄

知友諸君へよろしく

大正七年七月

大正五年

拜啓、其後は御無音申上候、さて卒爾の事に候が「上は梵天も照覽あれ」と申誓文を用ひし例古く有之候哉、又梵天の性質よりさやうに言つても差支無之哉一寸手元に參考書無之候が貴兄御しらべ御一報被下まじくや極簡單に、右の誓文が妥當を缺くとすれば「弓矢八幡」「八幡大菩薩」などでなく右に似たる誓文の句(佛にかけたる)一つ御示し願上候、急用のみ、

一月十九日　　　　島村生

五十嵐大兄机下

（大正五年九月）

拜啓、其後は御無音申上候・さて御迷惑ながら使にて爲持上候門札に御筆御ふるひ被下やう御願申上度字面は

藝術俱樂部
藝術座事務所

と願上候右押つけがましく候へど御願申上候匆々不一

九月十一日　　島村生

五十嵐大兄机下

御出來の節は御報願度、此方より使差出し可申候

（大正六年）

先頃は御面倒を願ひました、さて御庭に出入してゐる植木屋で正直で木を安く持つてゐるよいのはありますまいか、藝術座の庭に少し樹木を入れたいと思ふのですが、信頼せられる植木屋がまだ見つかりません右一寸御返事を願ひます

十月十三日　　牛込横寺町九

島村生

五十嵐力様

大正七年

拜啓、其後は御無音申上候さて御面倒の儀御願申上候が歴史物にて史劇の材料となるべきものゝ多く含まれたる野史、私史軍記、傳説集、逸聞叢話集等にてまとまりたる叢書物類集物は何が宜敷候哉一寸御調べ御一報仰上度、小生目下手元に何等の參考書も無之圖書館入りも臆劫に候まゝ右貴兄を煩はし申候、三鏡類其他物語類なども重なるものゝ名御摘記被下度それらの單行又は集刷にて手近に買入れ得らるゝものゝ發行所等併せて御報玉はらば幸甚に御座候、右漠たる御賴ながら宜敷願上申候匆々不一

七月十四日　　島村生

五十嵐大兄机下

（大正元年）

此二日ほど遠出してゐました、お手紙昨日拜見、僕も今度の旅行で眞に精神上の革命がやりたいと思つてゐましたが迚もだめです、それとも自分の知らない内に何か頭の中でゞも行はれてゐるのか知らないが分りません、自分ではだめだと思つてゐます、少くともまだ半年は日子がいりませう、まだ／＼僕なんかの生活は周圍の囚はれから何程も脫してゐないあはれなものです、もつと／＼激烈な矛盾にまで行かなければ眞實の生活革命は起りさうにない、或時は事情に引ずられ、或時は本能

に引ずられて行くぐづ／＼生活が依然としてやまない。やめようともがいても／＼それから脱しきられない、自分の弱いのに愛想がつきて、いつそこゝらで生活なんか絶つて了つて大隱遁か大靜寂にでも這入りたいとさへ思ふことである。卑屈の中にぐづ／＼に頽れ行く自分の生涯がみぢめだといふ氣がします。此旅行さへ何だか無主義であつたやうに思ふ。同時に今までの四十年の生活も無主義で滑稽であり。周圍の人々のしかつめらしい顏をした生活も無主義ぢやないかと思ふ事がある生活の形式をまるで一變して見たい氣もする。眞に自由なる價ある生活、こんなことばかり考へてゐる日が多い。僕の生活はまだ／＼此先に大破壞がなければだめかとも思ふ、兎に角今では自分で自分の體を投げ出してゐる形。それで他人の上には妙にセンチメンタルに涙つぽくなつてしやうがない、こんな氣分で一月のものも書けるかどうか心元ない。出來てもどうせ一時の場ふさげものです、歸宅も何時になるか一切未定。それかと言つてこちらにゐて思ふさま感情に耽つた生活をしやうかと思へば傍から色々の繫累が依然たる今までの僕の目をさまさせる、それでもう出發以來一ケ月以上たつたのだからしやうがありません。別封薄田君のもの一月の早文へ入れて下さい。雜誌の事よいやうに賴みます、中村君。田中君等へもよろしく、十二月八日は朝から照つたりしぐたれり。寒い窓の障子には霰と落葉とが一緒になつて打ちつけてゐます

十二月　日　　島村生

相馬君机下

（年代不詳）

啓上、此原稿乍御足勞活版へ御持の上伊原の次中村の前あたりへ御挿願上候、又本欄伊原の劇壇雜俎は間に合ひ候はゞ御省き被下度、而して此等の點目錄御訂正被下度、又金尾へ御立よりの上新聞廣告右の如く直し候やう間違ひなくと御命じ被下度、又後半の原稿あの晩に附郵せしに拘らず昨日金尾より催促越し候は如何か、原稿萬一不着等の事もあらんかと疑念罷在候間是亦御序に御聞合せ願上候

島村

相馬兄

（大正六年）

滿鮮三ケ月の旅行を了へて、之より內地に歸り申候、御近況如何や

七月十日

釜山にて島村生

（大正七年）

拜啓、御病人御卒去の由、愁傷の御儀と奉存候、遠隔の地に付乍失禮別包差出申候、御香料の內へ御加へ玉はり度、御悔みまで如此に御座候匆々不一

九月二日

相馬大兄　　島村生

松井よりも御悔み申出候

（大正二年）

拜啓、今朝の事情は事務の人より御聞取の事と存じ候、昨夜來他方にも似た問題あり、松井は到底今の藝術座の男優及一部の人々とは調和すべからざる性格の人と存じ候間別紙の如き根本策を講じ度、兎に角大事件につき大急幹事會を（集れるだけでよし技藝員を除いて）御開き御相談を乞ふ、金錢上の支出を此際御中止を乞ひ候、第一回上演の中止は已を得ざるべしと存じ候、右御願申上候

九月十日　　島村生

水谷大兄

一、松井と今の男優とを離す事

二、モンナヴンナを延期する事

三、幹事會を開く事而して下の項を議定する事

四、藝術座は解散しても繼續してもよし

五、島村は退いても其まゝ居てもよし

六、松井と男優とは一部二部として一方は全然松井を首腦と明言した新一座を作り二部並行せしめるか

七、それとも何れか一方を辭去させるか

八、松井が去れば島村は先方が背かない限り何所までも松井の前途を見てやる義理があるから松井のために新團體を作つてやると同時に希望ならば藝術座に殘る團體の世話もすべし、或は中村君に實地を見て貰つて島村はたゞ名義と間接の世話をしてもよし

九、松井が藝術座に殘れば無論島村は新たに男優を集めて新團體を作り直すべし

十、兎に角現在に於て同輩以上の男優と合せざる限り、松井と一座するものは其下風に立つに非ざれば共同は不可能と認めたり

十一、故に此際如何にしても松井と今の男優とを分離するが得策なり

（大正七年）

拜啓、先日は失禮致し候、さて突然の儀に候が當方の女優三好と申もの丶家より貴兄の御手筋よりうるさく入座を勸誘し來り當人の意志を動かさんとつとめ居られ、兩親としても甚だ義理のわるき事に相成るべくに付此方より貴方へ其旨傳へ吳れとの事、而して當人は當分靜養爲致度云々と申來り候、尤此事は前に仄聞いたし候事に有之候へどさる事もあるまじと存じ居候次第、此方を退座したるものにて其事情の單純なるものは別に異存も挿まず候へど、在座中より其交渉を受けたる曲折の

あるもの乃至契約書交換及金錢受授干係のあるものに對しては竟に貴方と當人との干係乃至此方と當人との干係のみならず貴方此方との交渉問題とも相成り悲しむべき結果と相成り申べく、勿論貴方乃至貴方の周圍(かとも存づれど)にて事に當る人が其御覺悟の上の事ならば致方も無之、此方も相當の考慮可致と存じ候へば兎に角一應貴意を得度右申上候、貴方の會の名前乃至當時一二の新聞記事等にて動もすれば世間の揣摩を生ぜんとするデリケートなる双方の立場に候へば不取敢此一書裁し置申候、土行氏へも此書面御一覧乞置玉わり度存候匆々不一

七月十五日

島村生

水谷大兄

(大正六年)

拜啓、次興行の繪看板下至急入用の由に御座候間御苦勞ながら御描き下され度、御病氣等の事あらば舞臺の方は休み玉うてもよく候

一月七日

島村生

今大兄

若し御出來了ならば此使に御わたしありたく候

（大正六年）

拜啓、生ける屍舞臺面の注文書差出し申候、大體はこんな注文なれど貴兄の手にて意匠を加へて改善し工風して下さい、必しも此通りでなくていゝのです、出這入りは大體こんな工風にして下さい、譯本も一部送ります讀んで氣分を知つて置いて下さい、勿論今度の芝居は組み立をかへてありますから場面は原作とは違ひます、大體の見當は原作に書入れて置いた通りの場取りです、又は手數ですが例の稽古用の平面圖（出入口の分る）を書いて來月六日頃までに御郵送願ひます、万一製作でそれに暇が無かつたら此川村君に書いた原圖を其日頃一寸郵送して下さい、信州路から其頃歸て稽古を初めます尤小生丈はもツと早く歸るかも知れませんから用があつたら問合せて下さい

島村生

今大兄

明朝立つて行きます

生ける屍

第一幕

三月の早い頃、露都

小じんまりした中産の家の食堂兼居間、上手を扉にし正面の入口はカーテンをかけたのが面白くはないか

ペチカを書込みか作り込みにしてつける、室内の氣分は平凡、むしろ外の殘雪中に漲る青春の氣に對して温味ある家庭的氣分の感じ

第二幕

同時、同所郊外、

ジプシイの大天幕の家、舞臺一面にテントの屋根を覗かせ左右はテントを張廻した形、正面は上手半分大貨車（臺でよし）の切出し、テントの裾を覆ひかけたる見切か何かにし下手半分の上手よりに出入口のカーテンを垂れ、あとはテント見切、そこに明り(?)下手のテントは斜に引下して奥よりに出入口、隣接したテント區域に通ずる心

右は大體案故如何様にも面白く奇抜に工風する事、

第三幕

四月春暖、露都、屋根裏の借部屋、質素な飾りつけ

舞臺を深く使つて左右を黒布で角形に包むかカーテン形にしぼるかして見物に見える程度にして極小さい部を作つて見たしか又は別*



* の工風巾三間かせい／＼四間位で眞四角な部にするなど（序幕の部屋も常式の（此形でなく第三幕と違つた案で小じんまりと飾る工あれば面白からん）

第四幕

夏、晴れた庭木の茂みの庭園、正面に母屋の書込見え夏の空かゞやく、カレーニン（侍従職）の家の庭、中央の大木を境に木より前面は日かげ、木より奥は花やかに明るく日輝き芝生、赤白咲き亂れた花壇ある光線のつかひ方、木蔭の方にベンチなど置き夜客あり

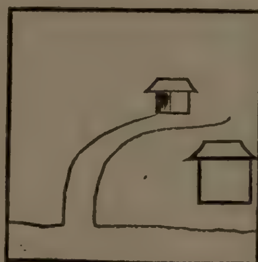
第五幕　第一場（第二場と廻しを用ふ）

秋の初め、木はまだ靑いが中に枯葉ちら〳〵とまじる頃、田舍の別莊地附近

上手半分居酒屋、奥より口淺く室を作り、庇下から日覆でも張り出してそこにテーブルなど置き、客は此張出しの下及或者は部屋の中にもゐる形、居酒屋の屋根は見せるに及ばず或は書込みにて見せてもよし。居酒屋の前を舞臺前面が通路の心持、又下手奥へも通路にてそれは正面書割に見える別莊（第二場に出る別莊の遠見）に通ずる路十字路の半分の心持、

第五幕（第二場）

同時、別莊、瀟洒な造り、少し下手よりに二重を用ひる飾りつけ、前に庭ありてそこに椅子テーブルある舞臺面、上手、木立、背景は丘か林、上手奥、白い庭木戸の出入口、下手植込の木立の心持、其間より出入あり、家はヱ＊



＊ランダ、欄干つき、正面中央に石段、側面は出入口、正面は上手よりの窓を大きくして中で影芝居あり、また明りを入れたり消したり、カーテンを引いたりする重要のもの、併し室内はたゞそれ丈の事故廣く一杯にする必要なし、

屋根などどうするか餘り手數のかゝるものにても困るべく、それかと言つて書込みも如何か、又欄干壁等に造花の蔦をからませる、

夕暮から月夜にかけての景に適するやう、

六年九月廿四日

島村瀧太郎

今純三様、

（大正五年）

拜啓、昨年は種々御厚誼を蒙り奉感謝候、さて今回また〳〵藝術座一行と共に御地に出で候事と相成り候、三月早々より別記の如きもの開演爲致度存居候、何れ時日確定の上は可申上候へ共御心添の程御願申上度、不取敢書中にて得貴意申候、尙昨年御配慮を得候方々の御名刺紛失いたし候向も有之、乍失禮宜敷御傳言の程仰上候匆々不一

二月十日　　島村生

醫科大學內

川邊様

西卷様

曾田様

他御中

出し物

第一中村吉藏作喜劇「輿論」一幕、第二同人作悲劇「眞人間」三幕第三、ワイルド作島村中村合作サロメ一幕

二の替り

第一チエホフ作仲木貞一譯「結婚申込」一幕、第二舞踊「お衆さらし」一場、第三中村吉藏作悲劇「飯」一幕、第四「サロメ」

（大正五年）

拜啓、過日は色々御厚誼被下御禮申上候、其後各地とも好成績にて明朝愈歸京の途に就き申候、西卷様昨夜拜眉の機を得ざりしは殘念に御座候、小倉の初日も幸滿員に有之、直方も初日は滿員二日目が八九分、大牟田は比較的に少なく初日八九分二日目七分位に有之候、併し通じて上々の成績に有之候、小倉は所謂賣興行に有之申候、尙博多の精算帳尻の書拔供貴覽申候、昨年松竹へ賣興行にせし六日分の收入と今回の四日間の興行と匹敵いたし申候御禮申上候、尙右の件は御序の節久保博士にも御話置仰上候、何れまた可申上候へ共不取敢右まで、松井よりも千万御禮申出候匆々不一

三月十九日

島村生

西卷雅臺
川邊雅臺

（大正七年）

精しき御たより難有御禮申上候、何れ其内係りのもの御伺はせ可申何れにか決定の上は重て可申上候間宜敷御願申上候、此地幸に連日大入に御座候久保博士にも明日御目にかゝり申候、先は不取敢右御禮まで

博多にて水野方
島村抱月

川邊治作様

（大正七年）

拜啓、其後は御無音申上候、さて藝術座九州廻りもやつと半分相すみ只今宮崎まで參り居り申候、各地とも盛況にて喜び居り申候、之より延岡を經て佐伯より順路御地に向ふ豫定にいたし五月一日より三日乃至四日間御地共樂館にて開演の事に相成申候、始め二日間を「生ける屍」「帽子ピン」「所作事京人形」といたし、あと一日を、或は二日を「復活」其他といたすつもりいたし、御地を三日にするか四日にするかは別府興行の如何によりて近日中に決定の事に相成居り申候、別府は小屋に株主とか申ものが日々二百人宛無代入場の事になり居るとかにてそれにては到底興行成立すまじとの話に御座候、何れ此解決如何によりて定まる儀と存居り尙新聞社は勿論其他の御指示被下候各方面へも松井より繪葉書にて豫め御願の文面差出させ置申候、何れ拜眉旁々御願申上度存居り宜敷願上候、尙今回の劇の寫眞は唯今手元に無之繪葉書だけ不取敢御目にかけ置申候、又松井の筆蹟別包御笑覧被下度、先は右御願まで如此に御座候匆々不一

四月十九日　　島村生

川邊雅臺机下

（大正七年）

佐伯への御懇書難有存申候。御示しの先きへも御願の葉書相差出置申候。昨日此地に來り二十日打上げ一日御地に乘り込み即日初日の豫定に御座候先は右御禮まで

二十八日

中津蓬萊觀にて

島村生

川邊治作様

（大正七年）

昨日いよ〳〵當地に入り申候。卽様開演至て好況のやうに御座候。御安神被下度御出張の由に候が何とかして明晩あたり御一遊被下譯には參り申まじくや。國香博士も御來遊被下候はゞ光榮と存可申サーシャにも御挨拶申上させ申度存候。明晩の出し物はカチューシャに御座候

十六日

別府見玉旅館別莊にて

島村生

川邊治作様

（大正七年）

先夜は失禮申上候、高田町も先は無事打上げ（二日目雨にて半分の入り、初日は大入）本日行橋に參り申候、別府の栗氏に停車場にて松井拜眉つい在府中拜趨の事を失念いたし何とも失禮申上候、貴下よりもよろしく御傳置願上度存じ候

廿日

行橋町梅の家方

島村生

川邊治作様

（大正七年）

九州旅行もいよ〳〵本日相終り申候、御暇乞申上候國香長へ御　仰上候

廿日

島村生

川邊治作様

啓、中山君の事は決して心配に及ばず、十分に靜養して全快の上出京あるやう御傳へ被下度此方よりも少し暇になれば手紙送り可申。餘りつまらぬ事を氣にせぬやう精神を休めて療治せねば一生の大事となりて取りかへしつかざるべしと御申傳可被下候。此方はどうで無人ついで故氣永く待つべしと申送りの程願度又女中も幸有之候へば此れ亦御安神あり度と御傳へを乞ふ先は右御たのみまで早々

十六日　　島村生

田中君

本日午後二時半無事着、車屋の車賃小錢なきため宅にて受取るやう申つかはし候、取りに行きたる事と存候。御拂被下度又金四十圓也急に爲替にて御送り被下度、今回は印形(認印)持參せし故爲替券はそのまゝにてよろしく候、又宅用も見はからひ御出し置被下度候。おばあさんに安着の旨御つたへ玉はるべく候

伊豆、熱海温泉、隱居玉屋にて

六日夜　　島村生

中山君

中山君への打合せ

妻が來るについての打合せ手續

一、此の手紙が十一日までに着いたら十二日の朝八時四十分國府津行止りの汽車で立つ事

一、十一時十八分に着けば小生そこに待受け居る事

一、朝は新橋まで君行つて世話をしてやつて呉れ玉へ

一、小生は其つもりで明十日の夕刻か明後十一日の朝の船でもう此地を引上げる

一、船は天候が惡いと出ないから天氣がよい中に出て置かぬと出られぬからだ

一、それも此前の送金の返事が明十日の晝頃(いつも郵便が晝ごろ來る)まで着かねば立たれない

一、だから小生がいよ／＼此地を引上げた證據にそちらが明朝立たうといふ前夜即十一日の夜までに小生から「アスタテ」といふ電報を打つ、それが万一前夜までに着かなかつたら小生が此地を引上げ得ないものと思つて十二日に立つのを見合せる事

一、又天候が万一明日あたりからでも荒れ出しては其れも小生が引上げられぬ理由になるから兎に角此方が出す電報を合圖にする事、仕度は前もつてして置く事

一、万一此手紙と行違ひにそちらから立つ日を極める手紙でも出て居れば又行違ひになると困るが、こちらできめた十二日より早くても小生が行かれないし、遲くては段々延びるから斷然十二日とした方がよい

一、又万一そちらに何うしても十二日に立てぬ事があつたら此方から「アスタテ」といふ電報の行つた時にすぐ其旨を返電す

るがよい、其時の此方の宛は熱海郵便局留置とするがよい、尤も向ふへ行つた都合で或は一晩位坪内氏がまだ居られれば露木といふのに泊らうか、さうすればそこから電報を出すから小生の名の上へ「ツユキ」とつける、それを見てそれへ宛て打電する事、又或は都合ではずつと伊豆山へ行つて見やうかとも思つてゐる、さうすれば相模屋といふのがよいさうだから「サガミヤ」とつけるから伊豆山相模屋にてと宛てゝ打つべし、此等の頭つけなき時は熱海留置の事

一、兎に角小生の「アスタテ」を相圖にして置く事を忘れぬやう、而して万々一此電報が行かなかつたら何か此方に金がつかぬか船が出ぬか故障があるのだから出發を見合せて此方から電報なり手紙なりの行くのを待つ事、さういふ場合にはたゞ日が延びたのなら「アスタテ」と延びても出すだらうからさうすれば其電報を見た翌日たつ事、右に述べた通りにすべし

一、出發の仕度は此前言つた通り新しい鞄か大信玄袋でも買つて妻等のものを入れて持たせて呉れ給へ

一、以上で万事打合せはすむと思ふが、万一之に漏れた不時の事があつたら學校なり何處なりから長距離電話をかければかゝる、然しこれは非常の場合だ

一、春の學校の事はどうなつたかよく注意してやつて呉れ玉へ

島村

中山君

拜啓

震也の件は今一人歸しても又々くぜつて困るだらうから今數日此まゝに保養させたく、就ては君、學校の受持教師に近々

あつて、（成るべく其宅を尋ねて）震也の事を精しく話し、又右の次第で轉地してゐる事も話し、學期始に休むことも斷つてそれから此後其教員の人に學校の時間後私宅で復習や教訓を少しづゝ、なるべく毎日して貰ふやうに出來ぬものか、一應、君から様子を聞いて見て呉れ玉へ、尤も之は正式に賴むのは小生からがよからうから話の續合ひでうまく聞いて見れゝばよし、それでなければ此の方だけは見合はして置いてもよし、兎に角震也の頭の事や此數日休むことなど精しく話してそれとなく、相談して置いて呉れたまへ、何れ小生が歸つてから其人に一度會つて話すつもりだから○藤作の件を先方へ强て賴むと言つても第一保證人たる責任を宅で負ふ限りは此先長い間の事だから、保證人を差し措いて勝手に無理賴をして後で迷惑の起るやうな事があつては困る、それに精しく事情を此方と相談もせず勝手に田舍へ行つて相談して、一存で極めて賴むといふ事は間違つてゐる、電車云々の事は親さへ承知なら强ても賴めやうが、御申越の手くせ等の事は責任が此方にあるのだから、餘程事情を確めた上でなくては此上引受ける事は考へ物かと思ふ、右の次第だから何も簞笥屋へ此方から無理に賴み込むには及ばず、むしろ斷然此際親元へ引取らす方がよからうと僕は思ふ、親元からでも此方へ何とか言つて來た上なら兎も角も、たゞミワが一人で親子話をして來ただけでは此方が責任を負ふだけの約束をした確認もない事故極めて不安神なり、要するに一に此際歸すやうに話した方がよくは無いかと思ふ、先方へ會ふにしても此方が何もかも引受けて强て賴むことはせぬがよい

一〇

中山君　　　　島村

舌代

藤作の件は別に申上げる事もないから小生等の歸るのを待つ必要はないから、先日言つてやつたやうに取捌いて呉れ玉へ、それに先方の主人の方でも其後大分日數もたつてゐる事だから何う考が變つてゐるかも知れず、兎に角餘り延ない内にきつぱり形をつけた方がよからうと思ふ。此の件について當方へ相談しなかつたと言つたのは君の所置が專斷であつたといふのではない、女中が強て自分と親とで決めても此方の保證は必ずしも立てる譯に行かぬといふ意味であつたのだ、從つて留守中の事を君が差支ない限り世話して呉れるのは少しも差支のない當然の事だ、

震也の件は市ケ谷へ變つても果たしてよい先生にかゝるか何うか分るまいし、變るとなれば他の子供も一所に變らせずばなるまいから其邊も何んなものかと考へてゐる、兎に角今の先生の方も都合がついたら聞いて置いて呉れ玉へ又少し後れても轉校出來るものか、又石原などでも轉じさせる樣子か又お君は轉校したい樣子か何うか此等の點を知らせて呉れ給へ又君の學校は何日から始まるか此地引上げの節の都合もあるからついでに知らせて置いてくれ玉へ

四月五日　　島村

中山君

震也の學校教師の件は先方でそんな風なら、先づしばらく其まゝにして置き給へ、

藤作の件はそんな具合なら尚の事、早く埒を明けた方がよいから早速田舍の方へ手紙をやつて親に來て貰つて、君が二度に先方から聞いた言分を精しく話して何うすることも出來ないから、一先づ此上は當方でも親の手元に引取る方がよからうと言つて親の人がタンスやに行つて藤作を田舍へ一先つれ歸るやう御取計らひありたし

小生等は此十五六日頃には歸京のつもりであるが、多分君に此地へ來て貰ふ必要はあるまいと思ふ、尚其手筈は愈立つ時日が決つた時に知らせる

四月七日　　島村

中山君

此月の拂がすんで現金が殘り過ぎてゐるやうなら無用心だから矢張り銀行へ入れて置いた方がいゝ（中山君へ）

おつかさんが言ひつけた手紙はどうしたか、早く出せ、又お前が名古屋へ出した手紙は名宛人不明で戻つて來た（お春へ）

通信簿と卒業證を送るよ（お君へ）

震也の通信簿に三月の缺席が八度もあるが、何うしたのか調べて置いて下さい、又ハムも着いた、氷豆腐ありがたう、君も及第して安心だ（中山君へ）

おばあさんによろしく

三月廿九日

震也、君、春等の新學期からの用品書物等を揃へて置いて呉れたまへ、震也のは歸るとすぐ學校に行けるやうに仕度をして置いて呉れたまへ（中山君へ）

（南座大入繪葉書に）

大阪八九分の大入つゞき、京都は三千人からはいる南座三日間滿員つゞき、カチユーシヤの歌大はやり蓄音機にまで入れました

廿七日

京都南座より

島村生

すま子

藝術座にて

中山晋平様

拜啓、今九州の櫻の名所隈府といふ所にゐます熊本から來たのです、此所を二日打つて順次途中を打つて四月三日鹿兒島

に入りますアルス書店へ唄の本を注文しても中々送つて來ないが本が賣切れてゞもゐるのですか、今度の旅で已に千五百部賣り盡して次の五百が來ないで困ります、又先日千部の代金を送つたが着いたとも着かぬともいくら聞いてやつても返事がない。あとが送れぬさうですそれこれの事御序に本屋へ一寸尋ねて下さい、此邊の本屋にあの唄を一枚〳〵に繪を入れてすつたものが繪葉書で出てゐるがあれは東京で出したものですか。日活で唄入りのフヰルムを作るさうですが、これは承認してやりました、カチユシーヤの通りで。

三月廿七日

九州隈府町菊榮館方にて

島村生

中山晋平様

拜啓、其後かはりもありませんか、此方九州巡演が意外に長びいて六日初に歸京の豫定です、就ては次興行の沈鐘の準備にすぐかゝらねばなりませんが之を六月末か七月初にするか、或は九月にするかは近日決定します、北海道行の都合と東京の學生試驗期の具合とでどちらにしてた方がいゝか今考案中です、そこで沈鐘にはあの通り唄が多いからあれが全部出せるかどうかは今臺本工風中ですが先づ全部歌ふものとして節の工案を又々御面倒して下さい、大體が今度はあまり凝つた節でなくすなほなメールヘン式童謡式なもので殆ど唄と臺詞との區別のつかない位のものが多く必要だらうと思ひます、それかと言つてあまり小學唱歌になつてもいけず、却つて面倒かと思ひます、すべて跳ねまはり歩きまはりながら半鼻唄式に唱へる節

が必要なるべく、じつと靜止して開き直つて唄ふものは不必要と思ひます、又同姫の唄にしても晴やかな小鳥のさへづりのやうな氣分のもの・や丶しめつて悲哀な淋しい氣分のもの、輕くどうけ氣味の氣分のもの等、又森の怪は若くするさうな魔でそれで道化てヒヨコ〱した所があり、泉の怪はふけて（森の怪三十、泉の怪四十以上と人間ならば年齢づける位の感じが）おんぢでむつちりとしてゐて、それで同じく可笑しい所のある氣分。魔女等は取とめのないフワリとした、氣味悪さといふ・やうな腹で節を工風して見て下さい、せりふからいつともなく唄になる所は（例へば2Pの上段「花がほしいなら」から「吸ふかい」までの間とか同じく「そうにくるぞ」から「ふはりふはり」までとか、20P上段「ブッケエホッケエ」から「戀の世界となりにける」までとか60P上段「さあ彈け」から「頸飾もよも及ぶまい」までとか、66P下段「ヘッつヘッつ」から「死んだぞ」までとか）節といふ種の節をつけてよいか、せりふが何の節のあるやうな調子づいたものに言ひ廻せること舊劇の或部分に於けるが如く（勿論感じは違ふものとしても）なるを得るものか、即ち節で工風するかせりふの言ひ廻しで工風するか、研究ものと思ひます。兎に角楠山君とも逢つて御相談の上御考へ置きを願ひます

五月十六日

別府温泉にて

島村生

中山大兄

（大正七年）

其後御病氣如何やと存じ候、京都は五日間通じて好成績にて大入も出で申候、岡山も初日は大入、あと八分七分九分七分と申成績にて當地に參り申候、當地は二十四日より二十八日までに御座候、先は右申上度何日頃御歸坂に候や

二十三日

廣島市小網町高德方

島村抱月

吉田孝太樣

(大正七年)

御病氣如何、おぎん君の家に君が住まれたといふ話を聞きました、田村氏よりの話は明日御報可申上候、折角御用心願上候

島村生

吉田孝太樣

(大正七年)

滿鮮二十ケ所各地とも盛況にていよ〳〵之より內地に入り申候、時下御自愛祈上候

釜山にて

七月十日

島村生

吉田孝太様

（大正七年）

拜啓、先日は折角の御入京に生憎草忙罷在りゆる〳〵御話申上候機會も無く殘念に存申候、御無事御歸坂何よりと存じ候、頃參上の節は萬々申上度先は右御挨拶まで如此に御座候、研究劇の方も幸に至て好都合に御座候匆々不一

十月十七日　島村生

吉田老臺机下

（大正四年）

拜啓、先達て中は罷出御厚誼を辱うし奉謝候、又六甲へまで罷出御馳走に預り難有存申候、神戸へ御越しの事と存じ居候拜眉の機を得ず殘念に存申候、神戸は先づ八九分の成績にて二の替りはあまり宜しからず、併し無難に引上げ申候、此地は貞奴との競爭にて昨日初日滿員人氣盛のやうに御座候御安神願上候、十五日より福井へ參り申候、先は不取敢御禮まで、御令室へよろしく鳳聲願上候匆々不一

六月十日　島村生

小林老臺机下

松井よりも千万加筆申出候

（名方屋市富澤町　小西屋）

（大正四年）

臺北十一日間打づゝけ臺中にて昨日より開演いたし申候、各地とも盛大に御座候、御安神被下度たゞ暑熱に苦み居り申候

十月十六日　　　島村生

小林政治様

（明治三十六年）

拝復、御壮健奉賀候、小生も御無沙汰勝失禮致候、正宗君へ同封致候賀狀は御入手の事と存候、小生の一身に關し種々御推奬の好意奉深謝候、男兒の一生を小説に抛ちてとの御決心さもあるべき事と存候、我等の前途は莊嚴也、今の時にあたり大勇猛の一急を呼吸せで何とか致さんや、御修養の事に關しては申迄もなけれど前便に一言致候如く情味の涵養を專一となされ度、實際家を持ち妻を娶り子を成すの境となりては出來ぬ事多く候、例へば旅行の如き此の上もなく必要のものにて而も單身自由の折ならでは到底之れを恣にするを得ざるの事情多し、兎も角も注意して今の時に限りて得らるゝ方面に情味の

涵養を御力めありたし、學校も最早濟み候べければ作家に此上の理論の研究は無益、往々にして有害ともなるべく候へば讀書は勿論泰西作家のものに如くなかるべく目下の御方針最上と存候、大陸作家にまぜて英の現時の作家も必ず御一瞥あるべく、それと共に大作に御工風必ず御懈怠あるべからず、神に近づくを覺ゆとの御示し、神ありと信ずる心頭の一念やがて神也との御説、精しくは知らねど小生の解するが如くんば、殆ど小生の目下の考と同一と存候、小生は不幸にして未だ神を客觀に信ずるの境に達せず候へども、人間の胸の奥には圓滿無缺即ち絶對を想像して之れを讃嘆し崇拜するの情に耽らんとする一種の慾あり、崇拜慾宗教慾など申ものに候べく、少なくとも此慾を滿たすの用としての宗教の地位は認めざるを得ず候、されど斯かる宗教の生命は必然單なるドグマにても不可也、單なる哲理にても不可也、はた單たる倫理にても不可也、最も近きものは詩なるべく候、宗教は詩のみにあらざるや勿論、さはれ宗教は又詩的ならざるべからず、種々の意味に於いて詩的ならざるべからずと存候が如何や（我れの耽り得る底のものならざるべからずと存候が如何や、而も此の情の亢じたる所遂に客觀の神を結晶し來たるや否やは小生の未だ解決し得ざる問題に候、否、情の亢ずる所に神を結晶し來たるは猶ほ春木の芽ざす所に花發くが如し或は必然なるを得べし、而も其の神が在來の宗教のいふ如き意味にての人格の神なるか、はた更に多く詩的のものなるかが小生の目下の疑ひに候、隨つて所謂宗教的信仰といふものゝ内容にも變動を豫想するを得べきこと勿論に候。併しながら我等が基礎ある上の信仰の境は已に議論にあらず、眞實にてだにあらば何れにても可也、信じ玉ふ所に眞正面に御精進願はしく候、小生は當國にありては劇と宗教との事が目下比較的に多く興を呼び居り（敢て興と申す）候、隨て宗教上の考は尙今後如何に發展し變化するか自分にも分からず候、渡英以來殆ど一も缺かさず日曜には何れかの教會に行き說教を聽き居り候、殊にオクスフオードにては說教者が皆大學附屬の學者連抔故興味多く候、併し未だ基督教に歸せりとは

申兼候、實驗的態度とも申すべきものに候、高山君の死、悼ましき事に候才子才に死すとも申すべくや、哀し、御序の節徳田君に御傳言被下度小生が書送り候原稿十二月の雜誌(早稻田學報)に出で候や、出で居り候はゞ其號學校より郵送させ玉はり度御傳へ被下度願上候、同人諸君へよろしく尚時々の御たより待上候

二月十三日　　　　島村生

中村吉藏殿

(大正二年)

拜啓、新聞にて御承知の協會第二期生分離後の活動につき、小生へも種々相談あり、行々は飛躍を試み度存居候が、差當り中央劇壇と申す名にて腕だめしいたし度との事に付、其舞臺監督の事貴兄に御願申度との事に有之、一肩御入れの程願上候、小生も何れ拜眉御相談申上げんと存居候へ共、不取敢團體のもの參上致候へば御あひ御聞き取願上候、匆々不一

五月二十四日　　　　島村生

中村大兄

(大正三年)

拜啓、小生六日夜九時の汽車にて松井と宮城とに出發可致候、御地の座不明の爲め浪花座と通信いたし置候、金の事は拜眉可申上、後は相馬君に留守を預け置申候、武田君のネリュドフ體のせいか未だにせりふ不たしかにて今日一日の稽古なれど甚だ心元なく今更如何とも致方なく心配いたし居り候、今夜立たせ申候へど御地にては運動のためといふ事なれど運動よりもせりふの暗誦が大事故、貴兄よりもそれとなく注告して外出運動よりも專心臺詞の暗誦にかゝるやう御申聞願上候、万一舞臺の上で行あたりバッタリの事をやつては劇も不評となり大阪を馬鹿にしたやうになつてもよくなしと存じ候、まだヒツカヽリ澤山の間違澤山の絕句澤山の臺詞にて今現に稽古中に候、此一事心がゝりに候

四月五日

島村

中村大兄

（大正三年）

拜復、大阪はラクの日八分、その前八九分その前は大入つゞきの事御承知の通りです、松竹からは滯在延引日數とか、切符の行違とかいふ事を一切言はず、二百、成功祝として差出すといふ條件にて結着し吉田君より二百圓受取申候、吉田君は初め二百五十圓と言つたのだが二百圓よとしたとの事併し極めて穩かに話がついたのは吉田君の骨折なり、好結果申分なし、吉田君へ貴兄よりもお禮言ひ遣り下さい、松竹の田村も大世辭で、此秋は是非來て吳れ、今度は手紙一本で話をつけるからといつてゐます、京都も昨夜初日千二三百以上の入り、南座は一杯で二千人近い定員ださうで其れに對しては半分でせうが、

浪花座の初日よりはずつとよし、今日明日は大入りだらうと思ひます、人氣は非常に立つてゐます、岡山福岡まだ何れともつかず・女優の折合に少しまづい事あり、日外の歌の幕切れのつゞきで、あの事を種に松井攻撃の文が商業新報とかいふ新聞に出てそれが村田か誰れかの内部より出た材料らしいので大悶着となり、神戸以西は行くにしても座員を變へねば駄目かとも思つてゐます、さうなると更に村田が波野をそゝのかしたとかでそこにも感情の行違ひが生じ居り、目下融和を計つてはゐますが結局如何と思つてゐます、よい女優の候補者をこしらえて置く必要があります・カユチーシヤの歌蓄音機にまで入れるといふ騷ぎで・人氣は何にしても大したものです・御地新劇團の景況知りたく存じます・此方の團體の事はどうにかなるでせうから御心配はなさるまじく神戸まではどんな事をしても打つて了ひます

四月二十五日

島村生

中村大兄机下

（京都三條小橋萬や方）

（大正三年）

拜啓、其後病氣は如何ですか、此方長野富山とも上々の景況・長野は松井の故郷といふのでマグダ以上の騷ぎ、富山は文藝團體と新聞社が一緒になつて殆ど官民合同の縣下中の騷ぎといふ景況でした、金澤は始め新聞がそれ程熱心でもなかつたが併し惡くはなかつたのが來澤以來至極好都合になつて四新聞總がゝりの評判ですから・此所も無論上成績と思ひます岐阜

も岐阜日々の匹田君が力を入れてやつてゐて之も十四日から四日間成功と信じられます。福井と名古屋を今交渉開始中です名古屋から今度は歸京しやうと思つてゐます、七月初めの研究劇は七月末にでも延す外はありますまい、横濱も六月廿五六日は迚も間に合ひません。此方は私からも斷つてやりますが、七月差入りにしたいものです、杉本事務員の作承知どんな事をしたのですか、御心配と察します。此方一同元氣です。大道具も案外うまく行きました

秋はやはりタンカレーだらうと思ひます。田中君に手傳はせて僕が譯して自由譯にしてと思つてゐます、さうなれば二番目の日本物を何にするか御考置下さい、之が大事です、仲木君其他によろしく

六月十日　　島村生

中村大兄机下

(金澤市上松原町　源圓方)

(大正三年)

拜復、人形の家の件差支ありません。此地好況で先日葉書差上候通り四日間大入袋を出させました。其内後の三日は殆ど滿員でした。復活も昨晩の初日八分の入り。好況のやうです。丸山の方松竹と確約の後ですから。小林君．吉田君の顏をつぶすのは惡いと思つて丸山の方をなだめて返しました。。尤も私は丸山へは強く出て叱つても置きました。それで來夏ハイデルベルヒで代償をしてやることにして置きました。

座員は成べく三日の卽夜立にして歸し、五日から稽古にかゝらせたいと思つてゐます私も其時か、遲くも四日朝急行で立つて四日の内に歸京することにします小林君も明晩上京ださうです

十二月二日　　島村

中村大兄

（大阪市南區日本橋北詰　岸澤や方）

（大正四年）

名古屋の宿は「停車場前、清駒方」に候

拜啓、岡山の方又々ぐらつき閉口いたし候、あれ程確かとしゐたるものが此の如く相成候には何か深き事情のあるには無之哉と存候、今後の事も可有之に付、田村の方へも又小林吉田兩兄の方へも事情御聞とりを依賴やり申候貴兄よりも御申傳へ御賴みやり願上度、又其間を遊ばせては一月中の興行日があまり少くなり候に付、やはり名古屋乃至其附近を運動して見んと存じ小生等三人は不取敢明朝名古屋へ出發、あとは一旦歸京爲致申候、電報次第にて御立たせ被下度候、尚訴訟の方、先方にて謝罪し今後無斷ではやらぬと誓へば訴訟費用だけで許してやるやう解決しては如何と存候如何や、建築の方も御監督願上候

一月十一月

島村生

中村大兄机下

(信州須坂町　桐屋方)

(大正四年)

拜啓、名古屋廿二日から三日間八百圓、内〇〇の口利料五十圓といふ事に定まりました、うまく行けば四日にして今二百圓出すとの事です。前景氣は非常です。此地は丁度今活動寫眞で例の歌が流行し出した潮先のやうです。たゞ劇場が御園末廣と行かず千歳になつたのは殘念ですが、金の方と日取の方とが迚も急の場合それより他にはまとまりません、跡から末廣座はなぜ自分にやらせて呉れぬかと苦情を持ち込むといふ始末、御園も一重役からそんな話、みな跡のまつりにて仕方なし、とにかく盛にやるつもりで幸五新聞とも肩を入れ、殊に新愛知と名古屋の兩大新聞の內部のものが全力を注いで紹介などして呉れ、松井が廻る先許りも五六十軒以上といふ盛況だから、必ずよからうと信じてゐます。博多へは中川君から通知のやうな時刻で立つゝもりですから其つもりで君も博多だけは是非行つて下さい。中川君リウマチスで困るから代りに波多でも呼ばせる事にしました。二三日して治らなかつたら代らせる他日はありません。脚本の方心配なり、「其前夜」を楠山に脚色させて見て下さい、そして、こちらの臺本にして置けば何時でもつかへます。どうも今度はやつぱり「ボウラ」かとも思ひますが兎に角今月中にそろへて見たいと思ひます。

訴訟の方どうなりましたか。私等が途中で呼び返されるやうな事はありませんか、先方があやまつて、誓つて訴訟費用を

出したらゆるしにやつてもいゝかと思ひますが反噬するやうなら仕方ありません

此地も寒くて困ります

一月十七日

島村生

中村兄机下

尙、此附近の件はもう時もたちましたし此方でも津を掛合つて見たが、小屋都合でだめでした。或は他日、津、靜岡、豐橋方面をまとめて誰れかに任してもよいかと思ひます。小林君の方の契約はどうなりましたか

（名古屋市停留場前　淸駒や）

（大正四年）

拜啓、別紙證文に調印お送りします、又委任狀は文言が分りませんから白紙委任狀にして送ります、地所の方ともかくも片づいて結構です。早速建築にとりかゝらせて下さい、地形に應じた變更圖、全體の計畫圖等送ります。白石氏の方へ廻して下さい。

小村君の身上の件。旅興行の五分云々といふ事は如何でせう。例へば二百圓（之がやはり標準です）なら百九十圓にしかならぬといふのはいけますまい、やはり月給を五十圓なら五十圓としてやらすか。或は月給を減ずるなら特に經營主任の本職以外小村君の手腕でやつた事業に對して分合なり賞與なりを出すといふことにしなくては成立しますまい。今の所旅興行は

二百圓で五十圓しか殘らないのに更に十圓減ずるといふことは考へものです、例へばクラブが建つて間貸以外、特に小村君の腕でやつた事業には分を與へるとか地方賣りでも特に小村君の君の特種關係で何かある場合に分を分つのはいゝでせう、今の所地方興行は藝術座の唯一の財源で之は必ずしも小村君の特技によつてといふでなくむしろ藝術座の力で出來るのですからそれを一々分を分つと他との釣合を失します、此點は餘程大事に考へて置いて下さい、また建物が出來るとすぐ法人にするといふ事も一寸考へものです、それには色々の事情もあります、一片ついて全計畫の貸屋まで出來た上で寄付金も集つてからにした方がいゝでせう、尙いづれ拜眉の上相談します、岡山は時期がむりであるため七八分の成績、最後の晩は五分通りの成績でした

三月廿二日　島村生

中村大兄机下

（大正五年）

拜啓、月末拂の件、今明日中に費目に應じて支拂金相送らせ可申、中川の豫算によれば九百圓許の由なれどまづ半分位支拂出來可申と存候、若松二日は好成績なれど、仙臺昨夜の初日は二百三十圓程の不成績、一つは土曜の前と申不利もありしなれどどうも藝術座の興行係は廣告運動が下手のやうに候、松竹の山森配下などの手腕に比ぶれば劣ること數段又秋興行は「アンナカレ ニナ」に腰をすえて一か八か警視廳へぶつかつて見るがよからんと存候、ついては至急松居松葉君に脚本を精々

おもしろくそして無難に通過するやう工風してこしらえて貰ふ御方針御とり下され度、金は百圓でも致方なかるべしと存候、勝見病氣氣遣との事にて歸し候、歸京後は何か留守の仕事をさせて呉れとの事なれど、之は兎も角も小生歸京の上ならでは決しがたく且已に仲木君も居る事なれば、むづかしと御斷り置被下度候、此方でも勝見の歸りしため非常の不便を蒙りたれば病氣とは云へ其責任は勝見にある事に候、仙臺後石の卷一日、郡山一日にて新潟に入り可申候

六月三日　　島村生

中村大兄机下

「アンナアレニナ」は七月下旬までにほしく八月にこしらへ上げ九月は地方へ出たく存居候「爆發」もよろしく存候

（仙臺市國分町　大泉旅館）

（大正五年）

（十六日より名古屋）（此手紙燒棄の事）

拜啓、別紙の如く高久の一件○○の說にては確實との事、尙それにも底の底あるかも知れ不申、不取敢貴兄一度○○氏を訪問、高久よりの○○に對する分金受取書等見せて貰ひては如何、○○は別紙の如く絕對に埋沒して呉れとの事なれど貴兄が○○の不在中に○○氏と先に一會され置かは便利ならん、○○は昨夜また此地へ尋ね來り、○○を伴ひ京阪に赴きたり、十六七日には出發歸京可致候へばそれより先に何も知らざりし事にして貴兄の一存にて○○より大阪にて聞きし右の件の實

否をつきとめに行かれし事にすれば差支無之候べく兎に角此點を明にしたる上ならでは高久を仲に立てゝよいか惡いか不明なるべく万事仕事が仕にくかるべく候。〇〇にも如何なる巧みあるやも計られず、今回も依然二十日乃至三十日打にて五千圓乃至七千五百圓と金をまとめたらばとか、他にも種々正月の申込ありて〇〇氏も迷ひ居れりとか、万事の顧問は自分なりとか種々申居り候へば淺草の問題も早くきめたる上他の方策に移らでは手後れとなり可申候。此方女優の手不足となる故一そ名古屋限り一旦歸京春の準備にかゝらんかとも存居候。伊勢路はベストにて山森の方うまく行かず、打てば岡崎一の宮等と濱松、靜岡等にて歸るか若し長く居るなら信州路へ入るなれど女優に歸るもの多きためまだ何れとも確定し得ず罷在候、名古屋はまた貞奴と前後しての由にて巳に新聞には競爭と吹聴し居り申候、大垣初日はまづ相應の入り今夜が如何と存居候神戸は盛況如例、たゞ初日が雨にて淋しかりし、貞奴一座大阪甚不入の由、名古屋も結局は此方が先故よろしからんと存居候

十一月十五日

(大垣町　新玉屋方)

(大正六年)

其後御病勢如何、案じ上候、此方興行各地とも好成績にて目下木浦に罷在。明日光州、明後日群山、其次が太田、それより大邱。釜山等を經て七月初旬内地に入り可申候。御安心玉はり度。別券〇〇圓の爲替封入いたし申候、折角御自愛專一になされ度。右のみ申上候匆々不一

六月廿八日　　　　　　島村生

中村大兄

奥　様

（木浦　三吉野）

（大正六年）

拜啓、其後の御樣子如何、山室より去月末までの樣子は承り候、今月分金〇〇圓也、例に依爲替にて御送り申上候、御入手の上は御一報玉はり度、例の大坂日々が毒筆を試み候以來、別紙の如きものまで出で候。將來の事もある故、時事に君にあてた文面にして事實だけは書いて置き申候、御氣分よき節御一覽又君からも何か談話にてもして置く方よかつたかと存候折角御自愛祈上候、四國海岸を八月一日打上げ、山陽の小場所を經て八月十、十一、十二が松江、それより米子、鳥取等を經て歸京は八月中旬と可相成と存候

先は右のみ

七月廿八日　　　　　　島村生

中村大兄机下

（讃州琴平町　敷島旅館方）

（大正六年）

拜啓、御病狀山室君より大體承り申候、折角御自愛祈上候、さて藝術座此秋の仕事、大阪よりの御話もあり旁是非東京にてと存じ、劇場交渉の結果明治座を十月の末、五日許りと申事に荒方見當つき明朝最後の決定をいたす筈に御座候、劇場定まれば出し物の件、先日も島村氏、土行氏など來て貰つて意見を聞き、また川村、小村の諸君も參り候が精々考案の末トルストイの「生ける屍」を緊縮するか、「沈鐘」を工風するか、「寂しき人々」を見たしとの希望多しとかにて此等が目下の重なる候補者となり居り他にズーデルマンの「名譽」ブリウの「壞れたる品」「椿姫」「カラマゾフ兄弟」「春の水」「煙」「テス」などの話も出で候が選定困難なり、又一幕物も日本物にては君の「帽子ピン」か、雨雀の「林檎園」か松葉の「堀川夜討」等手元にあり、西洋物にては「フロレンスの悲劇」「良人學校」等あり、他に殆ど適任者なく困り居り候、此兩三日中に決定準備の上一寸月末に十日余りも旅に出て稼がせ、本稽古は來月早々よりとし十一日は京都へと存居候、先日は吉田氏へ小生よりも手紙差出し置候へど尚貴兄よりも十一月初よりの見當にて御申入御依賴置願上候、御考御聞かせ下され度尤體にさはらぬ程度にて御考可被下候、先は右要件のみ申上候匆々不一

九月十四日　島村生

中村大兄机下

（大正六年）

送金急を要せば電報にて御申越あり度、宛は廿九、卅日は信州小諸町にて松井須磨子一行島村でよろしく、御手紙なら
ば十十一日、二日は信州松代にて同行にてよろしく候

拜啓　其後御病氣如何哉、さて藝術座秋季公演時所は先便申上候如く、愈明治座十月末と確定、松竹と分にて契約いたし候、出し物は「生ける屍」を川村君に手を入れさせ、小生も加筆して、それに君の「帽子ピン」を附け度存候。御承認承り度役割は今一度衣川をと存じ松井より手紙をやり居り、若し當人が出ればお竹を其方に廻すつもり、衣川出ざる場合は酒井をとも存じ居候、それもうまく行かずば座員中にて澤をでもお竹にして、松井が登美枝につき合つて見んかとも申居候、男の方は森を賴み候故、當人を堀田にし、諸岡を中井にし、學生を辻野かとも存居候、又森はひよつとすると京坂へは行けぬかも知れず（日の都合にもよれど）其場合は中井を堀田に廻し、諸岡を武田する方適味かと存居候、御意見の程御聞かせ下され度、稽古は十日頃よりかゝり可申御體の都合にて御立會玉はり度、さなくとも此方にて固め可申候、出られぬ節は御手紙にて御注文の條々御知らせ置願上候、次に今月の金は御手元の都合にて例月通り御届可申、若し脚本使用日立と申せば今月は月初四日、月末六日に有之、新舞鶴、宮津と今度の高崎、大屋、小諸に候へどそれにては金額不足なるべし、尤帽子ピンを使へばそれに對しては今度からは書卸しの節何がしかの金を拂ふ事となるべくや、又之は後の事なれど例の「お葉」を今後地方に持行く場合は題を替へ度存じ候、どうもお葉にては地方人に刺戟が薄く候、何か「未亡人の煩悶」とか「未亡人の罪」と申やうの刺戟的なる題を御考被下度願上候。此旅行は座員に稼がせる目的のものに付ほんの十日許りにて十月六七日

頃歸京の豫定に御座候、折角御自愛專祈候　早々不一

九月廿七日　　島村生

中村大兄机下

（信州大屋　神川館）

（大正六年）

拜啓　其後御病勢如何哉、さて帽子ピン（あれは讀音の都合で帽の下に子の字を加へ、ハツトピン又は帽子ピンを讀ます事にしました、御承認を乞ふ）の御主人公森があの役は氣が進まぬとて、とう〳〵辭退いたし候ためあとを中井にして武田を湯屋の主人にと存ぜしが之亦中井が固辭して受けぬため笹本にして湯屋を依然中井に据え置き（之は中井の役があれを取つてはあまりに輕くなり過ぎ武田の方へ偏重し過ぎるため）學生は宮島、お竹は松井、登美枝は澤（之も配役の都合上）主婦は吉野といふ事にいたし候、尙出來るならどれか一人位日本服を用ひさせたいのなれど小生彼地の事情を知らず如何のものにや、御工風あらば少しは無理でも舞臺面の都合上御指定ありたく、尤あまりに嘘となれば致方なく候

來る廿日夕五時より例の島根縣人會を伊豫紋にて相催し候事と相成候、御體の都合よくば一寸でも顏を出して貰ひ度候が如何哉、御一報願上候、先は當用のみ

十月十八日

中村大兄机下　　島村生

（大正六年）

拜啓　一昨夜旅先より小生一人大阪に參り申候て大阪名古屋の事及神戸の事の打合せと小林氏へ面會のつもりに候所、小林氏生憎京都行にて不在の爲漸く今朝面會いたし申候、而して色々此方の所存も申上、先方の感情も承り、ともかくも切符制度は今回からは成るべく省くやうにし其他に及ぶ限り從來通りの後援を與ふべしとの事に相成申候、御安神被下度、就ては貴兄よりも小林氏宛可然御書面にて御禮置被下度、尙小林氏よりも委曲御聞取の機を持たれ度願上候。事情許さば保養旁此地へ御一遊如何、若し其意あらば日取の凡そをお知らせ玉はるべく旅費を差上げ可申候、又小林氏に對する感情上の問題等もあれば、此際小村をとの御話しもありし由、小生が直接小林氏に接觸して万事を打明け置方却て宜からんと存じ、先着したる義なれば、或は來月に入りて後、（初日十二日の豫定）小村をも呼ばんかと存じ居候、今回は〇〇が先日來て大分藝術座の地盤を荒し居る樣子、且は種々の問題もありたる後なれば、大分事面倒と存じ切符の責任は假に解除せられとも矢張り出來るだけの運動はなし置かざるべからずと存居候、吉田君には不相變厄介をかけ居り、幸に事件好都合に運び居り申候、多分神戶を十二日初とし、大阪を共あとゝ申事に相成可申と存候、吉田氏はコツプにて膝の關節に硝子切の疵を負ひ、且風邪にて臥床中に有之、尤疵は大分よきやうなれど一週間許りは起居不自由なりし由、先は右御願まで申上候　匆々不一

十一月十九日

書簡

中村大兄机下　島村生

小生は明廿日名古屋へ引かへし廿五日まで同地に在り(末廣座)途中一二ヶ所を經て廿九日神戸(驛前、加藤旅館)に四五日の豫定に御座候

(大阪道頓堀　岸澤や方)

(大正六年)

爲替御入手の節折返し御一報願上候

拜啓　御近狀如何哉、小生も此旅行は病氣勝にて閉口いたし居候、名古屋以後神戸和歌山等盛況、大阪の初日二日目思はしからず、初日は三分の入り二日目は四分強の入り、三日目の今日は大入なるべく之より持直し行くべしとは存じ候へ共思へる程の結果になるか否か不明に候、和歌山までメて二十一日分(信州中込二日(剃刀)、丸子二日(剃刀)、名古屋四日(ピン)、津島二日(剃刀)、長濱(剃刀)二日、神戸四日(ピン)、明石二日(剃刀)、和歌山三日(剃刀))金〇〇〇圓也別券御送り申候、御査收玉はり度廿日には歸京、京都は出直して一月十二日初日の豫定に御座候、御自愛專一と存候、ピンの大阪受至てよろしく候、御安心被下度、生ける屍は東京程に受けぬやうに候、吉田君に大世話になり候

十二月十廿日　島村生

中村大兄机下
（大阪南區道頓堀　岸澤や方）

（大　正　六　年）

拜啓　其後御起居如何哉、此方一同去廿一、二日にわたつて歸京したした、大阪は初日四分、二日目五分弱、三日目八分四日目八分强、五日目五分、六日目五分强、七日目五分といふやうな成績でした、一つは年の暮、一つは新劇乃至藝術座に對する興味の減退、一つはやはり例の問題が多少とも人氣にさはつてゐたものと見えます。堀部氏は相變らずの好意であつたが、それでも年末のせいで切符七八十枚賣つて吳れられ、松井千係の手も皆例時よりは幾枚かづゝ減じてゐるやうです。總賣高七百枚許りのやうでした。小林氏は初日に十人許り誘つて來られ、樂屋へ遺物などせられました。個人としては此上もない好意です、吉田君は相變らずの氣風で出來るだけの世話をして吳れられました。感佩の至りです、京都はいよ〳〵十二日からと極めました、十日前後に出發しませう、そしてついでに九州へ行つて來ます、例により又々座員出入りの噂さはうるさい事です、武田も行々は獨立したいといふ事、やはり金が力で仕方もありません。京都は無論今のまゝです、たゞ問題は却つて笹本の方で相變らずのあの○○な性癖から又々何かぐらついてゐるやうです。新聞記事も當人の手から出したとかいふ風說がある位で、夫婦になつた木村時子（峰深雪）の方が主人表面は病氣といふので實は、同じやうな○○な性質と一つは夫婦ものは他から何となく疎遠になる結果、居づらくなつて、双方相まつて淺草へ出るとか出ないとか言つてゐます。大阪では澤田等から幟などよこしこちらから總見をする、先方からも總見をするといふやうな事がありました。芝居は言語

道斷なものゝやうですが、人氣は中々あるやうです。一種の活路でせう。金子〇〇圓取あへず大坂分として送つて置きます帽子ピンの結末舞臺で殺させて見てゐますが、それではあまりに急燥な事は事實です、同時に奥で殺させると殺したといふ白を待つまでもなく松井が男を引ずつて引込むと見物はもう舞臺は見てゐないで立つて了ふため。あとの中井等の白が全然持てず幕切が極めて散漫な無効果なものになります。まだ急燥な幕切の方が一般には幕切に拍手喝采の起るだけでも有効かと思ひます。奥で殺すのでは幕切に全く拍手が起りません。何とかよい工風はありますまいか。尙先便小林氏の感情問題の件金が大事か、人が大事か云々の説は僕としてはそれはたゞ概括的な言葉に過ぎないから。それだけのモツトーで判斷されては困ると思ひます。君を前に置いていふのも如何だがあの事件を判斷するには今少し双方の細かい心理の環境を描かした上でなくてはなるまいと思ひます。僕の方の事情と心持とは小林氏に言つて置いた積りです。機會があつたら君にも又話しませう

十二月廿八日　　島村生

中村大兄机下

（大正七年）

拜啓　其後御健康如何哉、さて別券〇〇圓也京都五日〇〇圓、あとは岡山五日、廣島五日にて〇〇圓の割にて差上候、御査收被下度、各地とも今回は好成績に候、廣島岡山とも從來はとかく難場なりしが今回は皆相應の好成績に参り候、下關も

昨夜の初日は大入りに候、折角御自愛第一と存候、福岡は十一日より六日間に候、先は右のみ匆々不一

二月二日　　島村生

中村大兄机下

（下関駅前　中谷や）

（大正七年）

御入手の上は久留米恵比須座宛御一報を乞ふ。

拝啓　二月分脚本料呉より長崎まで二十八日、（呉二、下関四、門司三、小倉三、博多六、佐賀三、唐津二、長崎五）分金〇〇〇圓別券御査收たまはり度、各地とも幸に盛に御座候、御健康御用心第一と存候

之より佐世保に向ひ申候

二月廿七日　　島村生

中村大兄机下

（長崎市船大工町　西田屋）

（大正七年）

拜啓　先日は失禮いたし候、さて今度早稻田文學の編輯方法を變更いたし候に付ては本間君が主任と相成り可申他に補助者數名乃貴兄と片上、相馬、中村の諸君を編輯顧問と申事に致度、委細は本間君參上御依賴申べく候、御承認願上候　書外拜眉

七月十一日　　島村生

中村大兄

（大正七年）

拜啓　例の松竹との件兎も角も調印相すみ申候、一ヶ年契約にて毎月割十五日分宛の保證付日立百二十圓と申事にいたし其以上の打日は年末精算と申事に致申候、九月一日より是非明けたしとの事にて小屋は歌舞伎と相成べく一座する臨時加入のものが困難にて河合の公衆劇團と連合して相方のものを出してはとの案が目下進行中に有之、併之も未定に御座候、內密との事に御座候、出し物も九月では沈鐘は如何と存じ候、之は十一月末よりと相定め申候、九月物若し河合と半々とすれば三四まくものがよろしく西洋ものにて何かあの座に向き候大もの御思付は無之哉、松葉君が先方の軍師らしく、先日も來ての節は色々出で候內まづカルメンならばと申候が、他によきものは無之かと目下頭を痛め居り申候。肉店も一讀面白しと存候間右の九月か十一二月のかに拜借致し度、其御つもりになし置玉はり度候、さて右の次第にて脚本の問題日を追うて切迫し來

り候まゝ脚本部と申すやうのものを當方にも作り申度、之は黒人白人いろ〳〵の流派の人を六七人も毎月何回か集まつて貰ひ度其方法人選等も之より定め度存候が貴兄もそれ位の程度ならば御差支無之と存候が御加入被下まじくや、他は目下川村、秋田、長田の三君に話置申候、右御承知被下候はゞ卅一日の夕方あたりよりとにかく一度此方にて晩餐にても差上げ御下相談願度存候が御都合折返し御一報願上候、別紙の如きもの各方面へ配り申候

七月廿九日

島村生

中村大兄机下

大正九年四月二十五日印刷
大正九年四月二十八日發行
（豫約出版）



著作者　故島村抱月
東京市小石川區諏訪町五番地
發行者　日岐久次郎
東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
印刷者　今井鐵次郎
東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地
印刷所　株式會社天佑社印刷部

發行所
東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
（電話番町㊁一一七九番）
（振替口座東京一〇一二八番）






巖南堂書店
TEL.(261)0396
東京・神田神保町二ノ二